

---

# 仮面ライダーアナザーディケイド ~ 青い瞳の破壊者 ~

矢部小路 X X

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

仮面ライダーアナザーディケイド 〈青い瞳の破壊者〉

### 【Nコード】

N3420P

### 【作者名】

矢部小路XX

### 【あらすじ】

オリジン・リイマジネーションとは別の、アナザー・ワールド新たな世界・裏世界。今、その世界に危機が迫る！！  
オリジン・リイマジネーション、両世界にまで影響を及ぼす裏世界の崩壊…。

その崩壊に完全と立ち向かうのは、仮面ライダーアナザーディケイド・シャイアン！！

もう1人のディケイド・泉 こなた、仮面ライダージョーカー・平野 唯、腐れ縁の仮面ライダーディスラッシュ・シャッフルと共に、

青い瞳は何を見つめ、そして何を感じるのか…。

## TOURO 兆し(前書き)

まずは、予告を兼ねた肩慣らしです。

初心者なので、もしよろしければ、御意見を宜しくお願いします。

## TOURO 兆し

かつて、世界の破壊者と呼ばれた男がいた。

その名は、デイケイド。彼は、9つの世界を渡り9人の「仮面ライダー」と呼ばれる戦士との絆を深め、難敵「大シヨツカー」を撃破し、異世界へと旅立っていった。

しかし、その数年後。

9つの世界に再び異変が起きつつあった。

最初は、水溜まり程度の歪み。それはやがて、沼サイズへと膨らみ、周囲の物を飲み込みはじめた。そして、沼サイズへと膨らみ、周囲の物を飲み込みはじめた。

もし、その歪みが地球を飲み込む規模に膨れ上がったら…。

9つの世界のライダー達は、デイケイドのデータを元に新たなベルトとカードを造り上げ、再び現れた銀の壁に放出、適合者を待つ事とした。

TOURO 兆し(後書き)

さて、次回から本編です。

仮面ライダーアナザーディケイド TOUR 1 ディケイド PART 1 (前書)

お待たせしました。第一話の投稿です。

閲覧注意！

- 1・グダグダ
- 2・駄文
- 3・話がメチャクチャ

それでも、おこな人はどうぞ。

この日、1人のヨーロッパ人が成田空港に降り立った。

彼の名は、シャイアン・ブルーローズ、21歳。ルクセンブルク人である。

「日本に来るなんて、何年ぶりだろう。」

彼は、思い切り背伸びをすると、ホテルを目指して歩き始めた。

ホテルでチェックインを済ませ、早速観光のため渋谷へと向かって歩を速めた。

渋谷の街並みを堪能し、ぶらぶらと歩いていると。

(…!!)

シャイアンの足は急に止まった。

向こうから、黒い異形の化け物が、人々を己の手にした武器で薙ぎ倒しているのを見たからである。

たまらず、近くの雑居ビルに避難し、様子を見るシャイアン。

異形は、鷲・山羊・鳥賊型の三体で、ひと暴れした後、いずこかへと去っていった。

「何だあれは…。」

ビルを出たシャイアンは、裏通りを走り抜けようと猛ダッシュで駆け抜けた。

だが、迫ってきた銀色の壁に突入すると、そこは荒野であった。辺りを見渡しても、何も無いこんな地に。

『お前の望みを言え。』

いきなり声がした。

シャイアンが振り向くと、そこにいたのは、砂で出来た異形が、空

中に下半身をぶら下げていた。

しばし呆然とするシャイアン。すると、シャイアンは右ストレートを異形の下半身へと浴びせた。

「な、なにをするっ!」

「これが答えだ!」残った上半身をローキックで潰すと、そそくさと立ち去っていった。

次に訪れたのは、オフィス街の一角であった。

だが、此処とて安全とは言えない。

何故なら、全長20メートルの異形がビルを薙ぎ倒し、しかも集団で現れたからだ。

「一体、どうなっているんだ。悪い夢でも見ているのか?」

すると、目の前に1人の少女が、瓦礫をものとせず、現れた。

歳は小学校位、膝まである青い髪に、アホ毛をなびかせ、高校の制服に身をつつんでいる。

「待つてました、デイケイドさん。」

「…は?」

少女はシャイアンに向き合うや、しれっとした態度で語りかけてきた。

「君は?」

「私の名は泉 こなた。あなたを探していたんだよ。」

そして、シャイアンの手を取ると、どこかに連れて行かれた。

こなたに連れてこられた先は、黒と朱のバイクの前だった。

バイクの上を見ると、バックルらしき物と一緒にケースの様な物がセットで置いてある。

「このバックルはクロノ・ドライバー、こちらのケースはライド・

クロニクル。…このセットをあなたに差し上げるよん。」

あげる、と言われても…シャイアンは戸惑った。

だが、あなたは強引にセットを手渡し、話を続ける。

「とにかく、今は現れた異形の者を退治して。話は、そこからでもいいでしょ？」

仕方ないな…。

シャイアンは、渋々クロノ・ドライバーとライド・クロニクルをこなたから受け取り、懐にしまった。

とりあえず、こなたをバイク…マシン・ヴァーミリオンの後ろに乗せ、シャイアンはバイクを走らせた。

「…ところで、何故私がデイケイドだと分かったんだ？」

「うーん、勘かな？女の勘って奴。」

「…おい、それじゃ答えになってないぞ。」

こなたは舌をペロツと出し、少し照れながら、

「うっそぴょーん。」

「じらじらじら。」

「でもね、勘なのは本当なの。なぜならね…。」

「私もデイケイドだから。」

「……は?!」

シャイアンは、急にバイクを止めた。

「…つわつと！急に止まらないですよ。」  
「ならば、事情を説明してもらおう。でないと、私も納得しないからな。」

こなたの話によると、こうである。

ライダーの世界には2つの種類があり、原典のライダーをオリジンと呼ぶのに対し、こなた達の世界のライダーをリイマジネーションと呼ぶそうである。

そして、双方の世界を救うべく現れたのがデイケイドなのだ。

デイケイドは、双方の世界のライダーと絆を結び、諸悪の根元・大シヨッカーを壊滅させ、異世界へと旅立っていった。

「…で、その世界っていくつあるんだ？」

「オリジンで十個、リイマジネーションで十個の、20個かな。」  
その膨大な数に、シャイアンは目眩すら感じた。

だが、数年後に再び歪みが両世界から発生し、異変を感じ取ったライダー達により、バックルとカードの開発が始まったそうである。

「…で、何故君なのか。」

「実はね、私はリイマジネーションのデイケイドで、偶然私のいた世界に紛れ込んだライダー達から頼まれたって訳。」

事情を全て聞いたシャイアンは、これから起こるであろう波乱と奇跡に目眩を覚えつつ、その重い使命に責任を感じた。

P  
A  
R  
T  
1

E  
N  
D

XX「ふーっ、やっと出来たぞ。長かったー。」

シャイアン

「…ところで、駄メガネ。」

XX「おいシャイアン、作者をつかまえて、そりゃないだろ。」

シャイアン

「そう言いたくもなるわ!!!この話、最初は原作に沿って書いたそうじゃないか。」

XX「ああ、そうだったんだ。…けれどね、書いていくうちに駄文に近くなってしまったな。それで、やむを得ず書き直したって事なんだ。」

シャイアン

「おかげで、こなたはすっかりふてくされてしまったぞ。しかも、戦闘シーンもなかったし、TOUR 0の文とまるっきり食い違った展開になってしまったし、どうする気だ!」

XX「食い違った点については、また番外編で補うし、次のPAR T2では戦闘シーンも書くから。」

シャイアン

「全く…。ま、とりあえずはここで引くとしよう。次は頼むよ。」

XX「ああ、分かった。約束しよう。」

今回は、シャイアンとこなたの変身&戦闘シーンがあります。

お楽しみー!!!

TOUR 1 デイケイドPART 2 (前書き)

すいません、今回は前にも増してグダグダです。  
行変更も失敗しました。  
では、駄文を晒します。

## TOUR 1 デイケイドPART 2

こなたを乗せバイクを走らせるシャイアン。

すると、前方に人影らしき影が2つこちらへ近づいてきた。

「…人か！有り難い！」

何せ、こなた以外に誰も会っていないため、随分久しく感じていた。だが、こなたは怪訝そうな顔をしていた。

「…どうした？」

「気をつけて。何かおかしいよ。」

「ああ。」

2人は、バイクを降りると迫ってくる人影へゆっくりと近づいていた。つた。

が、その人影は2人目掛けて走り出した。

しかも、かなり素早い。

「来たよ！早く変身して！」

シャイアンは、こなたに促されるまま、懐からクロノ・ドライバーを取り出し、腰にセットした。

そして、ライド・クロニクルから一枚のカードを取り出した。

カードには、黒と朱に彩られた戦士が写っている。

「早く、そのカードをドライバーにセットして！」

クロノ・ドライバーの左右にあるトリガーを引き、カードを手に叫ぶ。

「いくぞ…。マスカ・レイド！！」

カードをドライバーのスリットに入れ、トリガーを押し込める。  
以降、この行為をセットインと呼称)

【マスク・ライド デイケイド】

すると、シャイアンの左右に9つの幻影が現れ、彼と一体化した。そして、彼の真上に生成されたオーラカードがマスクに装填され、黒と朱のツートーンの戦士が姿を現す。左肩から右下にかけて走るXのライン。そして何より、戦士から放たれる神々しいオーラが、存在感をより一層引き立たせる。彼こそ、且つて世界の破壊者と言わしめたディケイドの後継者、アナザーディケイド（以降、AD）である。

目の前にいた人影は、素早い足並みを更に上げていく。

「…クロック・アップ?！」

こなたがその能力に気付いたが、ADはまだ気付いていない。

「…くっ、ちょこまかと蠅みたいに…。」

人影：ワームに対し、ADは一枚のカードを取り出した。

そのカードには、カブト虫をモチーフとしたライダーが写っている。

【マスク・ライド カブト】

ハニカム形の金属が全身を包み込み、細身のカブト型戦士が現れた。仮面ライダーカブト。

ZECTが開発した、対ワーム用外骨格アーマーである。

そして次に、一枚のカードを取り出し、セットインする。

【アタック・ライド クロック・アップ】

するとどうだろう。辺りの時間が緩やかになり、ワームのみがはつきりと見える。

A Dがワーム目指して走り出すや、ライド・クロニクルが斜めに傾き、粒子状になった剣の柄が現れ、それを手にする。  
そして、刀身が下の方から発生し、長剣を形作っていく。  
襲いかかってくるワームの一体をライド・クロニクル・セイバーで斬り払い、もう一体もミドルキックで牽制し、斬りつけた後。

【クロック・オーバー】

ワームは、緑色の炎を上げて消滅した。  
カードが排出され、A Dに戻る。

(だが、何故私はこのカードを使おうとしたのだろう…。)  
カードを手に思案するA D。

「おそらく、ドライバーの情報によるんじゃないかなあ。」  
こなたの言葉により、納得するA D。  
が、次の瞬間。

ポッ!!

何と、カブトのカードが燃え始めたのだ。

「:!!」

そして、カードは灰と化して、大地へ還っていった。

「カブトのカードが:。」

「仕方がないよ。燃えてしまった物は。」

落ち込むこなたを慰めるA D。

「次へいこう。こうしたって何の解決にもならないって。」  
こなたを再びバイクに乗せ、A Dは走り出した。

銀の壁を抜け、次に来たのは、駅のロータリーであった。

ここも損害は激しく、辺り一面に灰の山が堆く積もっている。  
が、こなたの表情はかなり険しい。

おそらく、灰を作り上げた者が近くにいたのであろう。

「待って、ここは私が。」

A Dがライド・クロニクルに手を伸ばそうとするのを、こなたが制止した。

こなたが目を瞑る。

まるで、修行者が瞑想するかの様に、精神を集中し、何かを念じる。

『先輩、私に用ツスか？』

『あ、ひよりん。ちよつと力を貸して。』

何という事だろう、こなたの横に1人の少女が立っていた。

しかも、半透明のためかよくわからないが、黒髪を膝まで伸ばした、こなたより少し大きめの少女である。

その少女とこなたの腰には、いつの間にかベルトが巻き付いており、手には携帯電話が握られている。

携帯電話を操作し、そして叫ぶ。

「変身!!!」

その携帯電話をベルトにセットし、押し倒す様にはめ込む。

ベルトから伸びる赤いラインが前進に巡り、銀と黒のボディカラーに金の単眼が印象的なライダー、555変身した。

「こなた、君って...」

流星のシャイアンも驚いた。

「いい、デイケイドさん。私の戦い方を、よく見ている。」

すると、555の姿に呼応して彫刻の様な異形…オルフェノクが3体、灰の山から現れた。

それだけではなく、別方面からは魔化魍が数十体現れ、A D目掛け

て殺到した。

「ちつ、しゃらくさい!!」

ADは、一枚のカードを取り出した。

そのカードには、紫色の鬼を模したライダーが写っている。

### 【マスク・ライド 響鬼】

カードをセットインすると、涼やかな音叉の音が響き、青白い炎に包まれるやそれらが弾け飛び、紫色の鬼型ライダーが現れた。仮面ライダー響鬼。魔化魍と戦う自然の化身。

「ちよ、何勝手に変身して…って、向こうからも?!」

「こちらからも敵さんが押し掛けて来たんでね。レクチャーなら、またいずれ受けるよ。」

2人は、それぞれ別れて敵を迎え撃つ形となり、ライダーの力を存分に振るっていった。

こなた555（以降K555）は、オルフェノクにパンチを立て続けに繰り出し、背後のオルフェノクにも対応してミドルキックを繰り出す。

この555、原典の555とは違いアクセル・フォームになる事は出来ない。

しかし、カイザやデルタの武装は使用出来る、言わば「こなたの世界の555」と言っても過言ではない。

そのK555は、3体のオルフェノクを一カ所に集めさせ、懐中電灯型のツール、ファイズ・ポインターを足のハードポイントにセットする。

そして、携帯を開くやENTERのキーを押す。

ジャンプしつつ足のファイズ・ポインターから円錐状のマーカを打ち出し、3体のオルフェノクに打ち込む。

555は、そのままキックの体制に入り、円錐状のマーカへと突

入っていった。

貫通し、3体の背後に着地した時には、3体は を浮かべて爆発、消滅していた。

「ふう、やれやれ。」

一方、AD響鬼と言えば、あまりの数にうんざりしたのか、一枚のカードを取り出し、セフトインした。

【アタック・ライド 音撃棒・烈火】

音声と共に、AD響鬼は腰にある音撃棒を手にし、先端から放たれた炎を魔化魍目掛けて放った。

炎は無数に分裂し、魔化魍に命中する。

爆音が轟き、消滅してゆく魔化魍。そして、全ての魔化魍は消し飛んだ。

（しかし、何故こんなに見知らぬライダーの力が使えるんだ？…まさか、私自身が本当にデイクイドだから、なのか？）

戦いを終え、排出された響鬼のカードを見て1人ごちるAD。

しかし、カードはやはりと言うか炎を上げて燃え尽き、灰と化してしまった。

「また、燃え尽きたの？」

「ああ。…にしても、何故燃え尽きてしまうのかさっぱり分からん。」

すると、こなたの背後にいた透明の存在がシャイアンに声をかけた。

『それはね、この世界…うっん、この裏世界そのものがライダーの介入を拒んでいるからなの。』

「誰だっ！」

『私の名は、柊 つかさ、仮面ライダーアギト。あなたの敵ではありません。』

背後から現れた少女は、薄紫のショートヘアーにカチューシャ風のリボンを付け、どこかとぼけた印象を感じる顔つきをしていた。そして、こなたと同じ制服に身を包んでいる。

『かつて、あなたの世界に、オリジン・リイマジネーションの両方が介入を試みたの。』

…でも、介入は全部失敗したのよ。

そこで、オリジンの皆さんがバツクルを、リイマジネーションの皆さんがカードを開発して、この世界に送り込んだの。』

「…なるほど、な。」

『私達の世界と同じ様に、あなたの世界にも9人のライダーがいて、物語があります。…あなたは、9つの世界を巡り、ライダーとの絆を繋げて裏に見え隠れしている悪の根源を倒して下さい。』

「絆を、繋ぐ…。」

『あなたのいる世界については、私と私達の仲間が守っていきます。』

』

つかさの話を聞いたシャイアンは、こなたに問いかけた。

「大体の事は分かった。…しかし、どうやって移動する？」

すると、

「あ、それなら簡単だよ。」「何、本当かつ！」

「うん、あの銀の壁に入るだけだよ。」

何て手軽な…。

シャイアンは、少し拍子抜けした。

三度こなたをバイクに乗せ、銀の壁に突入したシャイアンは、その

まま壁の中を走り出した。

目の前が開け、辺りを見ると、そこは女子校の校門前であった。

「ここは？」

こなたが学校の門に目をやる。

「桜ヶ丘高校：？」

丁度その頃、ショッピング・モールでは警官隊と謎の異形が死闘を繰り広げていた。

警官の中には、大怪我をして倒れる者もあり、混沌としている。

「あーもう、唯は何してるのっ！」

1人の女子校生が狼狽する。

「律、そんな事してる暇があるなら、あいつを止めなさいっ！」  
もう1人の女子校生も、ライフルを撃ちつつ応戦する。

「あ、あれは！」

背の低い女子校生が、何かに反応した。

「…唯ちゃん！！」

クリーム色の髪的女子校生も、マグナムを撃ちつつ仲間の名を叫んだ。

「律ちゃん、漣ちゃん、ムギちゃん、あずにゃん、おまたせっ！！」  
バイクに乗った女子校生が、仲間の元へ現れる。「唯、遅いっ！！」  
40代の刑事が吠える。

「お父さん、ごめんなさい！！」

…さあ、ここから私のターンだよっ！！」

少女は両手を差し出すと、ゆっくりと左右に広げ、腰に深緑のベルトを体現させる。

そして、両手を真上で交錯させ、叫ぶ。

「変身！！」

両手を一気に降ろすと、足元から深緑色の風が巻き起こり、少女の体を包んでいく。

そして現れたのは、深緑のクワガタをモチーフとしたライダーであった。

ライダーの名は『グランザム』。

少女の名は、平沢 唯。

T O U R 1 E N D

TOUR 1 デイケイドPART 2 (後書き)

次回 仮面ライダーアナザーデイケイド〜青い瞳の破壊者〜

「ここが、グランザムの世界…。」

「クリプトン文明の石碑って言うのが夢に現れて…。」

「よく見てるんだ、お父さんの戦いを…！」

「唯先輩って、何のために戦っているんですか？」

仮面ライダーグランザムの世界 けいおん! feat. 夢戦士ウ  
イングマン 石碑の戦士

悪意を破壊し、絆を繋げる！！

仮面ライダーグランザム編 くけいおん！feat 夢戦士ウィングマン く

XX

「行変更を直したから、見やすくなったぞ。もっと精進しなくては。」

」

ゴゴゴゴゴ。。

XX

「ん？かがみ？…どうしたの！？ライジング・アルティメットなんかになって！！」

かがみRU

「…成敗！！」

XX

「わ、や、やめ、自然発火能力は！！…やめてアツーーーー！！」

ポツ！！！！

プスプス…。（黒焦げ）

本編スタートです。  
冒頭に、こなたとかがみからの告知があります。

まず、本編突入前に

「あれ？かがみ、どしたの？」

「あの駄 メガネ、つかさに紅渡の真似をさせたから、ノシてきた。」

「あ、そんな事しなくてもいいのに。」

「えっ、何だよ。」

「あの後、書き直しがしたいって、駄 メガネが言ってたから。」

「本当に？」

「うん。それに、駄 メガネは今まで書いてたPART2は教訓として残すって言ってたし。」

「今度は、ちゃんと書けるといいけどね。」

「ま、駄 メガネも反省してる事だし。大目に見ようよ。」

…と言う訳で、つかさファンの皆様、本当にごめんなさい。  
グランザム編終了後に、PART2の加筆・修正版を書きます。

では、本編のスタートです。

クリプトン文明……。

かつて、4000年前の古代エーゲ海に忽然と現れた、呪術によって栄えた超古代文明である。

その最大の特徴は、呪術により誕生した生物兵器『フォビドゥン』（禁忌）の存在であろう。

彼らは、肉体を呪術で極限まで鍛え、更に生物と融合させる事により超人的な能力を得て、自らの文明を守り抜いてきたのである。

既に文明のあった島は地殻変動によって沈んだものの、近辺の島から出土した遺跡により、今も研究が進んでいる。

そのクリプトン文明最強の戦士こそ、グランザムである。

黒いスーツに包まれた肉体は、ギリシャ彫刻の様に写実的で、それらを守る装甲は深緑色の風を纏い、まるで生ける竜巻。

頭部のクワガタをモチーフとするマスクが更なる屈強さを強調し、摩く白いマフラーが印象を更に強くする。

グランザムは、目の前のフォビドゥン・バッファローフォビドゥンにパンチを2発喰らわせ、ミドルキックを浴びせた後、右ストリートを命中させ、バッファロー・フォビドゥンを吹き飛ばす。

だが、向こうも手にした短剣を振り回し、グランザムに迫る。

「唯、負けるなあー!!」

律がグランザムを投げナイフで牽制し、

「唯…!!」

澪がライフルを連射して援護し、

「唯ちゃん、負けないで!!」

紬がマグナムを撃ってフォビドゥンの足を止め、

「唯先輩!!」

梓がピストルで応戦する。

「負けるかあー!!」

グランザムは、右腕に纏う旋風<sup>かぜ</sup>を結束させ、それをまるでレーザーの様に放ち、相手の短剣を真っ二つにしてしまった。

これこそ、グランザムの別名「深緑の風の戦士」たる名の由来、ス

パイラル・デイバスターである。  
「その螺旋で破壊する者」の意味を持つ旋風の剣は、更に相手の角をも撃ち砕いた。

その頃、シャイアンとこなたは、桜ヶ丘高校の校門前にいた。

「ここが、グランザムの世界…。」  
シャイアンが辺りを見回していると。  
急に、すごい勢いでバンが横を過ぎていった。

「こなた、あのバンを追うぞ。」

「あのバンを？」

「ああ、何かありそうだ。」

現場にバンが到着し、1人の男と1人の女が降り立つ。  
男は、40代の細い体に長髪のヤサ男風で、女は、やはり40代の教授風のスーツを着こなした、学者であった。

「おお、北倉に松岡か!!」

「平沢、『例のアレ』が完成したぞ!!」

「そうか、よし!!」

男…北倉侑斗と女…松岡愛理は、バンからアタッシユケースを持ち

出し、ケースを開けた。  
中には、15センチ位の籠手の様なツールが入っており、刑事…平  
沢建太は、それを左腕に装着した。

グランザムとバッファロー・フォビドウンの戦いも佳境を迎えた。  
グランザムは脚部に旋風のエネルギーを溜め、ジャンプして空気中  
のイオン・エネルギーをつま先に集中させ、キックを放った。  
トルネード・デイバステイター。

「その竜巻で破壊する者」の異名を持つ一撃必殺のキックは、脚部  
にイオン・エネルギーと螺旋を描く旋風を纏い、威力を増してバッ  
ファロー・フォビドウンに命中し、そして爆発四散した。

「唯ー！」

「大丈夫か、唯！」

「唯ちゃん！」

「唯先輩！！！」

皆がグランザムへと駆け寄ろうとするが。

「待つて！！…まだいるよ！！！」

グランザムが4人を諫めた。

「そうだ、まだ油断するな！！！」

平沢刑事も、4人を引き止める。  
4人は、再び武器を構え、辺りを見回した。  
すると。

ボコッ！！

石畳を突き抜け、3体のフォビドゥンが現れた。  
土竜型のモール・フォビドゥン3体は、グランダムの際を突き、背  
後から攻め立てる。

「！しまった！！」

バキッ！！ヂュンッ！！

その一撃を受け、前のめりになって倒れるグランダム。  
更に、もう2体の攻撃を喰らい、グランザムは壁に叩きつけられ、  
唯に戻ってしまった。

「ゆ、唯！…よくも唯を！！」

平沢刑事が、フォビドゥン目掛けて駆け出す。  
そして、左腕の籠手に手をかざし、叫んだ。

チェイニング  
「変身！！」

平沢刑事の体を黒いボディスーツが包み込み、その上に青い装甲が  
被さる。

胸部に輝くWのエンブレム、鳥が翼を広げた様な姿をモチーフとし

たマスク、圧倒的なポリウーム。  
これこそは、古代の文献と現代技術が融合した、対フォビドゥン用  
外骨格アーマー・ウインガル。

ウインガルはモール・フォビドゥンに右フックを当て、更にもう一  
体にもミドルキックをかまし、唯から遠ざけようとしていた。  
だが、次々と襲いかかってくるモール・フォビドゥン達に、手こず  
っていた。

「くっ…!!」

遠ざかる意識の中、唯は『あの日』の事を思い出していた。

「ねえ、みんな。」

それは、数ヶ月前の事であった。

この日、唯達軽音楽部はいつものティータイムを楽しんでいた。

「どうしたの、唯。」

黒い長髪の少女、秋山 澪が唯に訪ねる。

「クリプトン文明の石碑って言うのが夢に現れて。」

唯の話によると、昨夜の夢の中にクリプトン文明の『戦士の石碑』  
が目の前に現れ、唯に世界の危機がやって来ると告げたと云う。

そして、石碑に刻まれた戦士にはめられたベルトが自動的に装備さ

れ、更にこう告げた。

『戦士よ、この世界に闇が訪れようとしている。いずれ現れるであろう異世界の戦士と共に、この地を守り抜いてくれ。頼むぞ。』

そして、石碑が目の前から消えてしまったのだ。

「石碑？戦士？…唯、お前ひょっとして頭がおかしくなったんじゃないの？」

同級生の田井中 律が、唯にツツ込む。

「嘘じゃないって。」

唯は必死に訴えるが、やはり夢は夢と決めつけられたらしく、2人からは白い目で見られてしまった。

「じゃあ唯ちゃん、試しに変身みて。それならいいでしょ？」

「ちえーっ。」

「…仕方ないか。」

琴吹 紬の提案により、渋々承諾する2人。

「では先輩、お願いします。」

後輩の中野 梓に促され、唯は変身を試みた。  
一定の形を取り…。そして叫ぶ！！

「変身！！」

教室内は静寂に包まれた。まるで、時間が止まったかの様に。

そして、唯が部活動を終え、律達と帰ろうとしていた、その時。

「きゃーっ！！」

遠くで悲鳴が聞こえた。

見れば、蜘蛛型の異形：スパイダー・フォビドウンが、女性を襲っていたのだ。  
しかも。

「憂！！」

唯の妹・平沢 憂ではないか。

「先輩！」

「うん！！」

唯は即座にグランザムに変身し、スパイダー・フォビドウンを迎え撃った。

この日以来、唯の…いや、軽音楽部の日常は変わってしまったのである。

ウィンガルが迎撃に苦戦している頃、遠くからようやくシャイアン達が現場にやってきた。

「もう、あんたが道に迷うから遅れちゃったじゃないの!」

「…すまん。」

2人はバイクから降りると、シャイアンはクロノ・ドライバーを腰にセットし、あなたは目を閉じ精神を統一する。

今、あなたは自らの精神世界におり、目の前には9つの扉がある。彼女の仲間達は扉の向こうで待機しており、必要に応じて呼び出し、ライダーの能力を借りているのだ。そして今回、選んだのは。

「つかさ、いる?」

「あ、こなちゃん、いらっしや〜い。」

そう、柊 つかさである。

「つかさ、力を貸して。」

「うん、いいよ。」

そして、こなたの横につかさの姿が現れ、右手を引くと、腰にオルタリングが装着される。

そして、右手をゆっくりと前へ出す。

つかさも、同じ動きをとり、シャイアンもカードを手にし、2人は叫ぶ。

「変身!!」

「マスカ・レイド!!」

シャイアンがカードをセットインし、こなたはオルタリングの光に包まれる。

『マスク・ライド デイクライド!!』

変身を終えた2人は、3体のモール・フォビドゥンに突撃し、ウィンガルに加勢する。

こなたの変身したライダー・アギトは、竜の力を持つライダーであり、本来ならストーム・フレイムの両フォームが使えるのだが、つかさの場合はそれに加え、クウガの武器まで使用出来る能力を持ち合わせている。

『こなちゃん、今回はどうするの?』

「もちろん、これだよ!!」

アギトは、足下にあつた1本の棒を拾うや念を込め、そして叫ぶ。

「『超変身!!』」

すると、棒は青く頑丈なロッドに姿を変えた。

「う、嘘…。」

「只の棒が…。」

4人は呆然とした。

北倉と松岡に至つてはあまりにも素晴らしすぎたのか、拍手すら送つていた。

ADは、一か八か他のマスク・ライド カードを使おうとした。前回、燃え尽きてしまったカード以外にも、まだ可能性があるかもしれないからだ。が、しかし。

ボツ!!

全てのカードが燃え尽きてしまった。

これで残つたのはADのみ。

「くそつたれ!!」

モール・フォビドゥンにミドル・キックを喰らわせつつ、ADは力



戦闘終了から1時間後。

唯の家の自室で唯は目を覚ました。

「…ここは？」

「起きたか、唯。」

「澪ちゃん…。私…。」

唯が辺りを見回すと、シャイアンが窓を見ていた。

「…あもう。」

「起きたか。皆心配してたぞ。」

唯は恥じていた。何て無様な戦いをしたのか、と。

…このままでいいのかな、私。

「あなた、ひよっとしてデイケイドさん？」

「ああ、一応な。」

「私、あなたと戦いたいです。戦わせてください!!」

唯の一言に澪達は驚いた。

何より、あの世界の破壊者かも知れぬ者に戦いを挑むのである。無事で済む訳がない。

だが。

「いいだろう。…ただし、戦うのは私ではない。こなたが私の代わりになるが、いいか。」

「うん、それでもいい。強くなれるなら。」

開けて翌日。こなたと唯は、街の一角にある広場に来ていた。

シャイアンは、こなたからまだレクチャーの途中だから、と言う理由で見学に回っている。

遷達の見守る中、2人は変身を済ませた状態で現れた。

因みに、平沢刑事も唯の事が心配なのかウィングルに変身して見守っている。

今回こなたが選んだのは、つかさの姉・柊 かがみに変身するクウガ。

見た目はタイタンフォームを赤くした感じだが、これこそかがみクウガの真骨頂、アウエイクニング・マイティである。

つまり、クウガのフォームであるマイティに、ドラゴンの瞬発力、ペガサスの超感覚、タイタンの攻撃力・防御力を加えた、『アルティメット・フォームのパワーダウン版』と言っても過言ではない。

今、唯のグランザムと、こなたのクウガが睨み合っ。

「いい？いくよ！！」

「うん！！」

今、両者が激突した。

グランザムは、いつもの通りにパンチで牽制し、ミドル・キックでいなす。

こなたクウガも、攻撃を交わしつつミドル・キックで間をとり、パンチを繰り返す。

が、今日のグランザムは調子が悪い様である。いつもよりキレが悪いのだ。

(ええ〜！！何で？旋風の威力が弱いよ〜！！)

そう、グランザムの旋風の力は、唯の心次第により、威力も変わってくるのだ。

つまり、今のグランザムは、単に力任せの最悪の状態なのである。

『こんなに軽くかわせるなんて、何かおかしくない？』

「確かにおかしいねえ。まさか、とは思っけど。」

戦闘開始から30分が経過した。

依然としてこなたクウガの方が有利である。

ここで、こなたクウガは助走をつけ、ジャンプしてキックの体制に入った。

グランザムも、足に旋風の力を溜め、ジャンプしてイオン・エネルギーをつま先に集中させ、キックの体制に入る。

が、タッチの差でこなたクウガの方に軍配が上がった。

「きゃああああっ!!」

吹き飛ばされ、変身が解除された唯に、戦意は無い。ただ、ぐったりとうなだれるのみ。

「どうしたんだよ、唯！」

いつになく、律が焦っている様に見えるのは、気のせいだろうか。他の皆は、啞然とするばかり。意外な決着に、こなた自身も驚く。

『随分、呆気なく終わったわね。』

「うん…。何かこう、迷ってる様な。」

(やはり…)。

梓の表情が、にわかに曇る。

シャイアンは、その表情を逃さなかった。

「…彼女に何があつたんだい？」

シャイアンが梓に訪ねる。

がしかし、梓が答えを返す事はなかった。  
新たな銀の壁が現れたからだ。

唯が気配に気付き、ゆっくりと体を起こすと、その方向に目を向ける。

「…!!あれって…。」

銀の壁から現れたのは、明らかにライダーではなかった。  
それは、まるでウインガルの様なメタルアーマーの一種。

ガシヨン、ガシヨン…。

金属音も高らかに、その戦士は黒いオーラを纏い、殺気を漲らせる。

やがて、黒い戦士は歩みを止め、こなたクウガの前に立った。  
カミキリをモチーフとした、その異様な外観。

ブラック・ビート。

「重甲ビーファイターの世界」の、黒い破壊神。

「…お前達が、『仮面ライダー』という奴か？」

「だとしたら？」

「お前達を、消させてもらう。」

すると、ブラック・ビートは、籠手と剣を一体化させた武器を召喚し、右腕に装備した。

スティング・ブレード。

本来なら、ビーファイターのリーダー・ブルービート専用の武器なのだが、何故かブラック・ビートが装備している。

45

ブラック・ビートがスティング・ブレードを振り下ろす。

こなたクウガは、キックを使用したため、回避できずに斬られてしまい、こなたに戻ってしまった。

「ううっ…。」

ダメージは相当あったらしいのか、身動き一つしない。

ブラック・ビートは、こなたに一瞥すると、唯達に標的を定め、ゆっくりと歩き始めた。

「……………」

今、唯の額には汗が大量に吹き出ており、恐怖に怯えている。

（だ、駄目だ。足がすくんで動けない…。）

目の前にいる黒い恐怖に戦慄する溼達。

が、

「唯、恐れるな！！」

何と、平沢刑事…ウインガルがブラック・ビートの前に立ったのだ。

「よく見てるんだ、お父さんの戦いを。」

この時、唯はグランザムとして戦い始めたばかりの頃を思い出していた。

「唯先輩って、何のために戦っているんですか？」

そして、こなたにも変化はあった。

ゆっくりと立ち上がるや、両手を腹部で交差させると、すうっ…とベルトが現れ、叫ぶ。

「変身!」

すると、グランザムと同じ深緑の戦士が姿を現した。  
その姿は、まるでアギトの様。  
しかし、この力はつかさの物ではない。

アナザー・アギト。

「アギトの世界」の、3人目のアギト。

『こなた、後は任せる。』

壮年の男の声が、優しくこなたの中に響き、アナザー・アギトはブラック・ビートに向かって行った。

TOUR 2      E N D

TOUR 3      に続く。

仮面ライダーグランザム編 〽けいおん! feat 夢戦士ウィングマン 〽

次回「仮面ライダーアナザーディケイド 〽青い瞳の破壊者〽」は

「くっ……。ゆ、唯……。」

「私、どうしたらいいの?」

「唯ちゃんが守りたい人って、誰?」

TOUR 3 唯の決意、皆の決意

その決意が、少女を成長させる！！

TOUR 3 唯の決意、皆の決意（前書き）

XX

「もっツツコミは来ないよね。」

キィィン。

XX

「な、何だありゃ？」

みさお

「ザヨゴーーーー！！！」

XX

「えええええっ！！ラ、ライトニング・ソニック？！……しかも、生身でええええっ？！」

みさお

「ヴェエエエイッ！！！」

XX

「ぎゃあああああっ！！！」

チュドーン……！！！！

バチバチ…。 ( ツルツパゲ )

そんなこんなで、スタートです。

みさお

「ザヨゴオ…チーズウ…」

あやの

「みさちゃん、よし、よし。よし、よし。よし、よし。」

### TOUR 3 唯の決意、皆の決意

あの黒い戦士が迫ってくる、どうすれば。

…そうだ、あいつの隙を突いて回避し、みさきちに頼もう。  
みさきちなら、一発お見舞い出来る！

あ、あれ？…か、体が動かない？！

そ、そうか、あの時キックで全パワーを使って…。

こんな時につ！…う、うわああっ！！

ズバアッ！！ ドサッ！！

あ、あいつめ…。

うう……。か、かがみ、大丈夫？

返事がない。…やられたのかなあ…。

は、早くあの子達を助けに行かないと、このままじゃ、まずい……。

『た……なた……』

えっ……。

『こなた……』

だ、誰……？

『こなた、後は任せる。』

そ、その声って、まさか……。

お、お父……さん……。

こなたの、あまりにも唐突な変身に、律達は啞然としていた。いや、むしろ重傷なものにも関わらず何故立ち上がったのか、不思議な位であった。

『…いくぞ。』

アナザーアギトは、ブラック・ビートを見据え、ダッシュを駆けて肉薄する。

パンチのラッシュからのスピッキク、そしてスティンガー・ブレードを回避してからのミドルキック。

その動き、まるで別人のよう。

「くっ、さっきの動きとは全く違う。」

さすがのブラック・ビートも、あまりの手数多さに翻弄する。

それを見ていたウインガルは、ブラック・ビートの間隙を突いて、フェザーカリバーを振りかざす。

「今だ!!」

その一撃は、確かに奴に届くはずだった。

だが。開いていた左手でフェザーカリバーを受け止め、そしてステインガブレードで右下から左上に掛けて斬り上げ、装甲を紙の様にズタズタにした。

「平沢！！」

「平沢君！！」

北倉と松岡が駆け寄るが、装甲のダメージが激しく立ち上がれるかどうかですら分からない。

「くっ…。ゆ、唯。」

「平沢、今はしゃべるな！！…とにかく今は後退するしかない。」

北倉に抱え上げられ、後方へ下がる平沢。

唯はと言えば、今だにガタガタと震えて動かない。

「…怖いよ…。」

その姿、まるで赤子の様。更に、ブラック・ビートを見て、怯えている。

『ま、ま、ま…』

アナザーアギトがブラック・ビートに立ち塞がるが、ブラック・ビートは唯に興味を持たなくなったのか、立ち止まってしまった。

「この世界のライダーは、こんなに腰抜けだったのか。…まあいい、

今日はこの辺でやめておこう。」

そして金属音を高く鳴らし銀の壁に消えていった。

『そつだ、一言言い忘れたが、クリプトン文明の奴らの親玉が、蘇つたらしい。』

「な…何いつ…!」

ブラック・ビートの声が最後にこだまし、平沢が驚く。

「ば、馬鹿な。」

『数日内に復活するそつだ。…まあ、せいぜい残った人生を楽しむ事だな。』

そして、高らかな笑い声と共に立ち去っていった。

平沢は、愕然とした。

まさか、『あの予言』が本当に当たるとは…。

平沢が『予言』の事を知ったのは、2年前の夏の事だった。この日、平沢宅に北倉が見せたい物があるから、と一冊の古文書を手を訪れていた。

「これが、例の古文書と言うのは。」

「ああ。どうだ、すごいだろう。」

平沢は1ページずつ丹念にめくり、中身を確認する。

どうやら、何かの呪術書らしく、意味不明の文字と共に半身半獣の戦士のイラストが書かれており、それが何ページも続いていた。そして最後のページをめくった、その時。

「おや?...これは?」

それは、何かの鳥をモチーフとした、細身の戦士のイラストが書かれたページであり、作り方まで書かれている。

しかも、そのページの下の方には予言めいた一文が書かれていた。

「北倉、読めるか?」

「ああ、一通りは読めるが。」

北倉が、その一文を読み始める。

『深緑の風の戦士、蒼き体の翼の戦士達と共に世界の脅威たる根源を破壊せんと立ち上がる。そのために現れし異界の戦士2人は、互いに力を合わせ三角の力持ちて根源を討ち果たす。』

「…何の意味だ？」

平沢は首を傾げた。

「さあな…。だが、この戦士のイラストや作り方のテキストがある以上、まだ何かありそうな気がしてならないんだが。」

その後、テキストに従い現代科学と融合して作られた外骨格アーモ―は『ウインガル』と名付けられた…。

「平沢、まずい事になったな。」

「ああ…。」

北倉達はこの後、平沢を警察病院へ連れて行き、治療を受けさせた。大した怪我ではなかったものの、しばらくは安静にした方がいいと医師から言われ、入院する事にした。

復活まで残り2日。

その間、北倉はウインガルの修復に全力を傾け、律達も北倉達を手伝う。

が、唯は未だに戦う事に怯えており、父の病室で1人看病していた。

「私…どうしたらいいの？」

唯は、答えが分からなかった。

いや、答える事に自信がないのである。

その日の夜、唯は付きっきりで看病しており、いつの間にか眠り込んでしまった。

唯は、夢の中でも泣いていた。

その悲しみは、まるで深海の様に深く、どんよりとしている。

が。

『…こんばんは。』

そんな唯を訪ねる者がいた。

柊 かがみ、仮面ライダークウガである。

『どうしたの？そんなに泣いて。』

唯は、今まで溜めていた思いの全てを語った。

それは、唯がグランザムとして戦い始めてから数ヶ月後の事である。  
この日の軽音楽部の部室で事件は起こった。

いつものティータイム中に、突然梓が立ち上がり、唯に向かって口を開いた。

「唯先輩って、何のために戦っているのですか!？」

いきなりの質問に、唯は戸惑った。

「梓ちゃん、どうしたの?急に。」

紬が梓をなだめるが、今の梓には唯しか見えていなかった。

「先輩、答えて下さい!！」

今日の梓は何かおかしい…。  
皆は思う。

一方、唯は梓の迫力に負けて押されていた。

「…えっと。何て答えたらいいのかなあ…。」

だが、梓の質問にも一理はある。

今まで唯は、軽い気持ちでフォビドゥンとの戦いに挑んでいた。ほとんどの戦いを『現れたから戦っている』だけで済ませていたからだ。

これでは、『とりあえず入部した』という気持ちで軽音楽部に入部したのと同じ理由になる。

…つまり、戦士としての重みが、かけらも感じられない。それを梓は感じ取ったのだ。

「私達だって、そのために平沢のおじさんの下で銃の腕を磨いたのに、先輩がそういう態度では困ります！！」

唯は、その時梓の目に涙が溜まっているのを見た。

「…あずにゃん。」

その時は何も答えられず、ただ黙っているだけだったのだが、梓の一言が今でも頭から離れられず、今日に至っている。

『そうだったのか。』

かがみは、唯の告白を全て聞くと、少し考え込んだ。

『確かに、前の一戦で技にキレが無かったのもうなずけるわね。』

「私、どうしたらいいのか、もう分からなくて…。」

何のために戦い、何をしたらいいのか？

そして、どうしたらいいのか？

今まで、それらとは無縁だった唯にとって、初めて迎える挫折であった。

『まず、現れたから戦う考えを捨ててみようよ。…そうすれば、何をしたいかが分かるはずよ。』

かがみの考えに、きよとんとする唯。

「でもでも、私に何が出来るか、って言われても…。」

再び泣き顔になる唯。

『じゃあ、こう考えたらどうかな？』

唯が、かがみとは逆の方を見ると、もう1人の姿があった。

かがみの妹、柊つかさ。仮面ライダーアギトだ。

『唯ちゃんが守りたい人って、誰？』

「…守りたい人？」

そう言われ、唯は誰を守りたいのかを口にした。

…りっちゃん、…澪ちゃん、…ムギちゃん、…あずにゃん、…憂、  
…お父さん、…北倉さん。

…そして、私達を応援してくれてるみんな。  
その人達を、戦えない人達を守りたい。

『それさえ分かれば、もう迷わないよね?』

『じゃあ唯ちゃん、最後にもう一つ質問させて。…お姉ちゃん。』

『うん。』

『あなたは、何のために戦うのですか?』

「守りたい人がいるから!」

朝日が、病室を照らし出す。

朝がきたのだ。

唯は、ゆっくりと体を起こし、まだ眠っている父の顔を見て病室を後にした。

( お父さん、行ってきます。 )

その思いを胸に、唯は新たに歩き出す。  
1人の戦士として。

唯がバイクを駆り、街中を疾走していた時、ビル的大型モニター前で奇妙なニュースを耳にした。

『今日、桜ヶ丘高校の校庭に巨大な塔らしき物体が落下し、生徒ら30人が重傷を負いました。警察では、謎の塔の調査を開始すると共に…』

唯…？

唯は怪訝そうな顔をしてニュースを聞いていた。

「行ってみよう。」

迷いなく桜ヶ丘高校へとバイクを走らす唯。

一方、現場にはシャイアンとこなたが塔を前に、気合いを十分に高めていた。

「こなた、ぬかるなよ。」

「うん、あんたもね。」

「…ところで、彼女達は来るのか？」

「大丈夫だよ、あの子達は。すぐに来るよ。」

実は、梓達も迷っていた。

唯が自宅に担ぎ込まれたあの日、こなたは律達と話をしていた。

「…その唯ちゃんが、グランザムだったんだ。すごいじゃん。」

が、1人梓だけは納得しない顔をしていた。

唯が、あまりにも不甲斐ない戦いをしていたのが気になっていたからだ。

5人の話が盛り上がっていたところへ。

「少し、いいかな？」

北倉が、何やらアタッシユケースを持って部屋へ入ってきた。

「北倉さん、一体どうしたんですか？」

紬の質問に、北倉は真剣な顔で律達を見ていた。

「うむ。…実は、ウィンガル量産型のモニターをやって欲しくてね。これを渡しておくよ。」

北倉がケースを開けると、中にはウィンガルに変身するためのブレレットが4人分入っており、それを皆に配り始めた。

「モニターって、何故に？」

訝いぶかしがる澗に、北倉は笑って、

「うん、もしかしたら君達もいけるんじゃないかな、と思ってね。」

この日は何も気にとめなかったものの、翌日のこなたと唯の一戦で、何の準備もしなかったばかりに、唯を苦しめる事になってしまい、皆はずっと己の未熟さを悔やんでいた。

（何故、唯を助けに入れなかったのだらう……。どうして唯に何もしてやれなかったのか……。）

因みにこの日の夜、かがみとつかさが、こなたの精神世界から離れ、唯の元に現れたのは言うまでもない。

「じゃ、行くか。」

「行きますか。」

シャイアンが、クロノ・ドライバーを腰にセットし、こなたも精神世界から仲間を選び出す。

「相手も集団で来るなら、ここはみゆきさんで行ってみるかねえ。」

こなたの横に桃色の髪をした長身の、眼鏡を掛けた少女が現れる。

高良 みゆき、仮面ライダー響鬼だ。

こなたとみゆきの手に、鬼を象った音叉が現れ、2人はそれを指で弾く。

チィーーン。

涼しい音色と共に波動が広がり、それを額に飾す。

たちまち青い炎に包まれ、そして気合いを入れ叫ぶ。

「『はあああああ…。はあっ！』」

みゆきの姿はこなたに統一され、鬼の姿をした戦士が現れる。

「マスカ・レイド!!」

【マスク・ライド デイケイド】

シャイアンもカードをセットインし、ADへ変身する。

「さて、と…。」

2人が塔に入ろうとした、その時。

「おい、待ってよー。」

遠くで声がした。

律達軽音楽部の面々だ。

「おまたせ!…みんな、いくよ!…」

「「「<sup>チェインゲ</sup>変身！！」」」」

するとどうだろう、皆は全員ウイングルに変身したではないか。

「私達、もう迷わない。唯にはかり迷惑はかけられないし。」

皆は力強くうなづく。

そして、肝心の唯も遅れてやって来た。

「お待たせ。」

唯は、既にグランザムに変身を済ませ、ここに現れた。  
北倉達を率いて。

「遅いぞ、唯。」

溼の叱咤が入る。  
もちろん笑顔で。

「これで役者は揃った。後は、奴らの親玉を倒すまでだ。」

その場にいた全員がうなづく。

奴らが歴史を繋ぐのか？

それともシャイアン達がピリオドを打つのか？

今、決戦の火蓋は切って落とされた…！！

TOUR 3 END

TOUR 4 へ続く。

TOUR 3 唯の決意、皆の決意（後書き）

次回「仮面ライダー アナザーディケイド」の青い瞳の破壊者は、

「我が宿願、今こそ…。」

「ヒーローは、何時だって負けない!!」

「チェイニング!! ウイングマン!!」

「あれが、異世界の2人の戦士…。」

TOUR 4

「青き翼の戦士」

戦士の名は、広野 健太…。



## TOUR 4 青き翼の戦士(前書き)

さあ、今年のラストランです。

今回は、少々無理してグランザム編の決着を書きましたが、まあ何とか年越しには間に合いました。  
では、ご賞味あれ!!

## TOUR 4 青き翼の戦士

AD達が、全速力で塔へ駆けつけていく丁度その頃、塔の最上階では、1人の男が玉座で様子を伺っていた。

全身に隈無く配された獣の顔、そして背部より生える巨大な翼。彼こそ、フォビドウンの王、マスター・フォビドウン・リメル。

「遂に来たか、深緑の風の戦士…。儂は、この日が来るのを待っていたぞ!!!」

リメルは、額の傷に手をやる。

かつて、グランザムにより付けられた古傷だ。

「グランザム、今度こそ貴様を倒し、世界を我が手に収める。見ておれ…。」

そして、リメルは杯を手にし、一気にワインを煽る。

「我が宿願、今こそ…。」

AD達が一階へ突入すると、そこには異様な光景が広がっていた。壁、天井、床、至る所に石碑が使われていたからだ。しかも、何れも生物の様に生きており、脈を打つ音でさえ聞こえる。

「いやああ、何じじい…!」

漣が悲鳴を上げる。

「ううっ。。。」

あまりの不気味さに細も言葉が出ない。

「みんな、ここで立ち止まってちゃだめだよ！」

K響鬼の一言で皆は正気を取り戻す。

すると、壁の石碑が黒ずみだし、そこからフォビドゥン達が現れた。どうやら、兵隊アリをモチーフとした量産型のようだ。

「よし、ここからは二手に分かれよう。律と漣、そしてこなたは量産型の足止めをして欲しい。」

「まかせたまへ〜。」

「おう！〜！」

「…怖いけど、やってみる。」

ADは、次々と現れる量産型にライド・クロニクル・ソードで対抗し、道を作っていく。

「唯と細、それに梓は私と共に最上階を目指す。…恐らく敵の親玉は、そこにいる筈だ。」

「ええ。」

「先輩、もう大丈夫ですか？私が、余計な事を言ったばかりに…。」  
だが唯は、梓の肩に手をやり、笑みを浮かべる。

「あずにゃん、私は大丈夫だよ。心配かけてごめんね。」

すると、梓はマスク越しながら笑顔を唯に返していた。

「よし、では行くか！」

その一言を皮切りにお互いは分かれていった。

押し寄せる量産型を律のフェザー・カリバーが斬り払い、

「いやあああああつ…！」

漣が悲鳴を上げながらもリズムカルに斬り倒し、

「みゆきさん、いくよ…！」

『…はい…！』

K響鬼の音撃棒・烈火が量産型を纏めて焼き払う。

二階に着いたAD達は、そこで意外な敵と出会った。

「!...お前は!」

そう、ブラック・ビートが立ちはだかつたからだ。

前は観戦中の身だったため、まともに戦うのは今回が初めてである。

だが、唯の闘志は揺るがない。

もう、前の怯えきつた自分はいない、守るべき人達がいるから。

「...何時かの腰抜けか。少しはまともになったか？」

「ええ、あなたのおかげでね。」

唯は構えを取り、ブラック・ビートの出方を見る。

ブラック・ビートも、スティングガー・ブレードを右腕にセットし、様子を伺う。

睨み合うこと約5分、先に動いたのはブラック・ビートの方だった。

「はあああつ!」

スティングガー・ブレードを構え、真っ向から斬りかかる。

前の戦いで、クウガを斬り付けた殺意の凶刃は、今グランザムに肉薄する!!

が、凶刃はグランザムには届かなかった。

右腕から放たれたスパイラル・デイバステイターにより、凶刃諸共ブラック・ビートを斬り裂いたからだ。

「くっ、ふ、…不覚。」

そして、ブラック・ビートはがっくりと膝を突き、肩で息をしていた。

「や、やったあ〜!!」

漸く訪れた、勝利への喜び。

忘れようにも、忘れられない手応え。

唯は、また一つ戦士としての道を踏み出したのであった。

一方、北倉達は塔の周りの外壁を見て驚愕の声を上げた。そう、外壁がフォビドウンの死骸を漆喰で塗り固めて作られていたからである。

「北倉君、これって…。」

「ああ、信じられないがこれは事実だ。」

松岡も口に手を当てて、驚く。

一階の戦いも佳境を迎えた。  
今まで黒かった壁の石碑は、ここへ来て白くなり、何も書かれてない普通の大理石に戻っていった。

「これって、一体…。」

「どうやら、この石碑は倒された時に元の大理石に戻るみたい。」

K響鬼は、だがしかし警戒を怠らなかった。

( まだ何かあるな…。 )

すると、中央部から石碑が30近くも現れるや、そこからゴキブリ型のフォビドウンが現れた。

「ぎゃあああああつ!!!!」  
「ゴキブリイイイイツ!!!!」

「うっわあ…。これはきついな…。」

「うう、これは絵的にきつい…。」

3人は、その場で固まってしまった。

二階では、ブラック・ビートとAD達の睨み合いが続いていた。

「よし、一気にいくぞー!!」

ADは一枚のカードをセットインする。

【アタック・ライド ブラスト】

ライド・クロニクルを銃型に変形させ、ブラック・ビートに向けて発砲する。

が、紙一重でかわし、再びスティングァー・ブレードでADに迫る。

「くそっ、しぶとい…。」

すると、梓がフェザー・カリバーにエネルギーを充填させ、ブラック・ビートに斬りかかった。

「うおおおっ…！」

ガシャアッ…！！

その両刀がブラック・ビートの装甲を斬り裂き、火花を上げる。

「ぐわああっ…！！…この小娘があっ…！！」

フラック・ビートの左腕が梓を捕らえ、強烈な一撃を加えた。

ガグワシャアッ…！！

けたたましい音を上げて、梓を守った装甲が碎け散る。

「ま…まだまだっ…！！」

それでも梓は立ち上がる。

「ヒーローは、何時でも負けない!!」

そう、平沢刑事の魂は梓にも伝わっていたのだ。  
だが、装甲のダメージは大きく、まともに戦える状態ではない。

と、その時。

3人とブラック・ビートの間に銀の壁が現れ、そこに1人の少年が現れた。

「だ、誰だ貴様は!!」

少年は、肩まである髪を靡かせ、ブラック・ビートに向き合う。

「僕の名は、広野 健太。又の名を…。」

健太は、ポーズを取り叫ぶ。

「チエイング!! ウイングマン!!」

健太の体が赤く輝き、ウイングガルに瓜二つの戦士が姿を現した。  
彼こそ、ウイングマン。

黒い細身のスーツに青いWのエンブレム、そしてウイングガルに似たマスク。

更に、背には巨大な翼が備わる、圧倒的なフォルム。

その全てが洗練されたスタイルに、AD達も目を奪われた。

「ウィングマン、だと…!!」

ブラック・ビートは、ステインガー・ブレードを外し、素手で殴りかかった。

「そんな柔な装甲で、勝てると思っているのかあっ!!」

がしかし、ウィングマンは軽くパンチをいなし、逆にパンチを繰り出した。

パンチがヒットし、のけぞるブラック・ビート。

「…くっ、何て重いパンチだ。」

そして、両腰に装備されたクロム・レイバーを手にし、ブラック・ビートを攻め立てる。

「うおっ!!…このままでは、や、やられる!!」

が、既に紐がエネルギーチャージを済ましており、斬り掛かっているのが見えていた。

「隙ありっ!!」

ガシャアアアアンツ!!

ブラック・ビートの装甲は砕け散り、派手に吹き飛ばされて大爆発を起こした。

「やったか…。」

ウィングマンも、漸く肩で息をし、AD達の方を向く。

「…しかし、よく見るとウィンガルに似てるね〜。」

唯が素直に意見を述べる。

「皆さんのに比べると、僕のなんかまだまだですよ。」

少し照れながらもウィングマンは答える。

一方、梓は装甲のダメージが大きすぎるのか、力なく倒れ込んでしまった。

「あずにゃん！」

皆が駈けより、梓を介抱する。

「あずにゃん、少し休んだ方がいいよ。」

すると、梓は笑顔で、

「唯先輩、私の方はいいです。早く、上の階へ…。」

唯は一瞬躊躇ったが、思い直し、

「わかった。ムギちゃん、ここをお願い。」

「ええ、任せて。」

そして、3人は上の階を目指した。  
全ての人々を守るために。

暫くして、K響鬼達も二階に上がってきた。  
しかも、澁の装甲がボロボロの状態で。

「澁先輩?!」

「澁ちゃん、どうしたの!?!」

律は、頭をポリポリと掻いて、

「いや、実は澁の奴が、ものすごい無双ぶりを発揮してねえ。」

一階に現れたゴキブリ型のフォビドゥン相手に、最初のうちは戸惑った3人であったが、澁がエネルギーをフェザー・カリバーに集中させ、

「もうやだああああっ!!」

の悲鳴と共に突撃し、瞬く間に全て殲滅させてしまったのだ。

紬と梓の目が点になり、改めて澁の方を見る。

「もう、やだ…。」

今にも泣きそうである。

A D達が最上階にたどり着くと、そこには玉座に座るマスターフォビドウン・リメルの姿があった。  
その威風堂々たる姿に、3人は圧倒される。

「遂に来たか、グランザム。…さあ、決着をつけるとしよう。」

玉座から、ゆつくりと立つリメル。  
そして、右手を天にかざすと、そこから石碑が現れ、中から一振りの刀を取り出した。

「では、いくぞ…！」

すると、姿が急に消え、A Dとグランザムに刀が命中する。

「ぐうっ…!!…何て素早い奴だ。」

「うわっ…!!…まだまだ…！」

2人は立ち上がり、構えを取り直す。

ウィングマンと言えば、その素早さに反応して空中に舞い上がり、リメルの出方を伺う。

( 奴は相当スピードを出している様だ。あれにどう対処するか…。 )  
地に降り、クロム・レイバーを再び手にし、リメルに斬りかかる。  
が、リメルは二尾の蠍の尾を振り回し、ウイングマンを寄せ付けな  
い。

「くっ、ならばこれでどうだ!!」

ウイングマンは、頭部に備えたスパイラル・カッターを投げつけ、  
蠍の尾を切り落とす。

更にADが、ライド・クロニクル・ソードでもう片方を切り落とし、  
グランザムはスパイラル・ディバステイターでリメルの刀を砕く。

「むうっ!! なかなかやるな。」

だが、リメルとて伊達にマスターと呼ばれている訳ではない。  
すぐに獣頭を切り離し、3人に向けて放つ。

「…ふっ。」

ADはソードで迎撃し、グランザムは旋風の力を生かして回避した  
後、ウイングマンのクロム・レイバーが迎え撃つ。3対1という不  
利の状況の中、リメルは互角の勝負を繰り広げていた。

( いよいよ体力も持たなくなってきたか…。よし、ここは。 )

リメルが片手を上げると石碑が現れ、そこに手を入れるや、中にい  
たフォビドゥンを引きずり出し、エネルギーを吸収し始めていた。

「あいつ、いきなり何を…。」

全てを吸い尽くし、干からびたフォビドゥンを、体から滲み出た漆喰の汗で固め、壁に向かって投げる。

「何っ！！」

「それって、あなたの仲間じゃないですか！！それなのに、どうして！！」

リメルは、舌なめずりをし、

「彼らは、儂にとってみれば食料の様な存在。儂の一部になる事こそが、彼らの幸せなのだあ！！」

彼らが？…食料？

いくら何でもやり過ぎだ、とAD達は思う。だが、それが目の前の現実である。

3人は、完全に怒っていた。まるで奴隷の様なフォビドゥンの扱いに。

「お前、仲間を何だと思っているんだ！！」

「仲間、だと？」

「そうだ、お前に仲間意識と言うのはないのか!!」

ADとウィングマンの問いに、リメルは嘲笑いを浮かべ、

「そんなものなど最初からない!!」

「ならば、お前には勝ち目はない。」

「…何？」

ADは言葉を続ける。

「人間にとって大切なもの、それが『仲間の絆』だ。それを否定し、まるで使い捨ての様に仲間を扱うお前に、何がわかる!!」

「…下らんな。」

そう言い切るリメルに、ウィングマンは反論する。

「お前だって、元は人間じゃないか!!なのに、どうして!!」

リメルは、ニヤリと笑い、

「この力、手に入れるため…。それ以外に理由はない。」

すると、唯が悲しみを込めた口調で問いかける。

「そんな人生、つまらないよ…。仲間がいれば、毎日が楽しく暮らせるのに…。」

と、そこへ。

「唯ー、お待たせ!!」

澪達が応援に現れた。

「みんなー!!」

その光景を見たリメルは、何かを感じていた。

これが、仲間というものか…。

「そう、彼女には仲間がいる。だが、お前には仲間がない。…その差だ。」

リメルは、苛立ちを隠しきれず、

「ええい、儂にいちいち指図するお前は、一体何者だ!!」

「私は、通りすがりの仮面ライダーだ。覚えておくがいい。」

すると、ライド・クロニクルから3枚のカードが飛び出し、ADの手に渡った。

1つはグランザムの像が写ったカード、そしてもう1つは青地に翼の生えた六角形の石碑がシンボライズされたカード、そしてもう1つはWの文字がシンボライズされた、同じ青地のカード。

それと同じくして、北倉達も最上階に現れ、唯達と合流する。

「あれが、フォビドゥンの王…。」

「ええ、そうです。」

細の一言に絶句する北倉。

「そうか、あの予言が現実のものになるのか…。」  
「予言？」

北倉は澁達に予言の事を話した。  
そして、彼女達は唯達を見て確信する。…ひょっとしたら、唯なら出来るかも、と。

「これが仲間の結束力だ！！いくぞ！！」

ADが一枚のカードをセットインする。

【ファイナル・アタック・ライド ウ・ウ・ウ・ウ・ウィングマン】

すると、ADとウィングルの両手にクロム・レイバーが装備され、リメルの三方に配される。

「?…一体何をやる気だ？」

クロム・レイバーから光が走り、三方を囲むと、双剣を真上に立て、三つの光を頂点に合わせる。

「こ、これは…!!」

そう、これぞディケイド・デルタ・エンド。  
その三角に捕まったら逃げられない、驚異の一撃。

「仕上げは、ウィングマンに合わせる!!」

「わかった!!」

3人は親指を立て、サムズアップの構えを取る。

「SHOCK!!」

3人同時に親指を下げる。

ゴオウウウツ!!

三角の中で爆発するリメル。

「やったか?!」

だが、爆炎の中から現れたのは、黄金に輝く人型の物体だった。  
これこそ、リメルの本体。獣頭の姿は単なる鎧に過ぎない。

「これが…。」

「奴の正体か…。」

「綺麗…。」

全員が美しさに見とれ、動きが止まる。

が、リメルは攻める手を止めようとはしない。

自身の体が輝くと、分身が3体、目の前に現れる。

ゴースト・リメル。彼の能力により生まれ出でし存在。

「くっ、またしても…!!」

ウィングマンが苦虫を噛む。

「…こなた、戦えそうなのはいいか？」

ADが訪ねるが、はっきり言って戦力として使えるのは、律のみである。

「りっちゃん、まだいける？」

「ああ、大丈夫だ。」

こなたの問いに、律は力強く答える。

「すまない、律。」

こなたも、一時変身を解除し、再度精神統一をして仲間を切り替える。

「かがみ、力を貸して。」

『わかったわ。』

そして、あなたの横に紫の髪でツインテールの少女が現れ、あなたの腰にアークルを出現させる。

「『変身！！』」

あなたは一定の型を取り、あなたは仮面ライダークウガ・アウエイクニング・マイティに変わる。

「さあ、いくぞ！！」

かくて、AD達VSリメルの第2ラウンドが始まった。

律とウィングマン、そしてKクウガがゴースト・リメルに飛びかかり、ADがリメル本体に肉薄する。

「うおりゃあああああつ！！」

律のウィングガルは、まだエネルギーが有り余っており、その大パワーを持ってゴースト・リメルを追い詰める。

ウィングマンも、クロム・レイバーを振るい、ゴースト・リメルに迫る。

「とりゃあああああつ!!」

Kクウガは、リズムカルにパンチを当て、ミドル・キックを喉元に当てる。

「うおおおつ!!」

「はああああつ!!」

A Dとリメルの戦いも、鬼気迫るものがあり、気が抜けない。

が、形勢はリメルの方が逆に有利となつていった。律のパワーが足りなくなり、一撃で吹き飛ばされたからだ。

「りつちゃん!!」

だがしかし、律も諦めない。

ウインガルの右腕にあるスイッチを押すと、どこからともなく翼状のパーツが飛来し、背部に接続するや、爪状のパーツが右腕に接続され、そのパーツからエネルギーチャージを始めた。

これがウインガルの秘密兵器、フェザー・クローである。

「いくぜおらああああつ!!」

その輝くクローの前に、ゴースト・リメルは消滅した。

残った2体もウイングマンとKクウガの前に敗れ、リメルは遂に追い詰められた。

「もういい加減に諦めろ!!」

「黙れ、人間風情がつ!!！」

リメルの体から衝撃波が発せられ、4人を襲う。  
梓と紬が盾になり、北倉達を守る。

「!!!」

律は何とか凌いだものの、破損が激しく再起動できるかどうか分からない。

A/D達もダメージが酷く、立ち上げられるのがやっとの状況であった。

「…どうだ、これが俺の実力だ!!！」

もはや全員ボロボロ。  
絶望的な状況だ。  
が、それでも。

「…私達は、諦めない。」

「それでも、みんながいる限り。」

梓と紬が立ち上がる。

「まだまだあつ!!！」

「…まだいける!!！」

律と澪も、ゆつくりと立ち上がり、

「心に思いがあれば、何度でも立ち上がる!」  
唯も立ち、5人は叫ぶ。

「……それが、ヒーロー魂だつ!」

リメルは、信じられなかった。

何故、立ち上げられるのか?

何故、我が力を受けても心折れる事がないのか?

「……これが彼女達の正義の心だ。その心は、いかなる悪にも屈しない!」

A D 達も立ち上がり、全員がリメルを睨みつける。

「だが、古文書の予言は全て当たっている。この後の事までは、我々でもさっぱりわからない。」

北倉の問いに、A D はカードを手に答える。

「いや、予言の続きは我々で紡いでいく!今、ここで!」

【ファイナル・アタック・ライド グ・グ・グ・グランザム】

A Dがカードをセット・インすると、A Dとグランザム、更にウィングマンが飛翔し、3人の足にエネルギーが収束されていく。そして、目の前にオーラカードが10枚形成され、そこを通過していく。

ディケイド・ディバステイター。

新たなる旋風の力を纏いし、三位一体の大技。

と同時にグランザムの足と腕、そしてマスクが銀色に輝き、体色が明るい緑に変わっていき、まるで別人の様になっていた。

更に、旋風に加え雷撃も加わり、威力を増していく。

ガカアツ!!!

3人のキックがリメルに命中し、その体が派手に外界へ吹き飛ばす。

「ゆおおおおっ!!!」

ゴオオオオオ……ン。

リメルは、遂に爆発を起こして世界から消え去った。

『ふう……。』

大きく息をして、戦いが終わった事を噛み締める全員。

「終わったねー。」

変身を解除したこなたがADに声をかける。

「ああ。」

ADも変身を解除してシャイアンに戻る。

残った者も、変身を解除し、元の唯達に戻っていった。

その後、塔を降りたシャイアン達は、この塔自体がフォビドウンの死骸で出来ている事を聞き、改めて哀悼の意を表した。それから数分後、塔は溶ける様に消滅し、この世界の戦いは終結した。

「…もう行くのか？」

銀の壁の前で、シャイアンは広野に問う。

「うん、僕の世界ではまだ戦いが続いているからね。」

「折角だから、唯ちゃん達に別れの挨拶でもしていけばいいのに。」

こなたが勧めるものの、広野の決意は変わらない。

「ありがとう。…でも、まだ僕の世界の悪は滅んではない。だから、その悪が滅んだら、また会いに行くよ。では。」

シャイアンは、無理強いするこなたを引き止め、広野を見送った。

「全くもつ…。」

「まあまあ。」

だが、シャイアンは分かっていた。

(何だか、また会えそうな気がする…。)

そして、シャイアン達も次の世界へ旅立つ時が来た。

「行っちゃうんだ…。」

悲しい顔をする唯に、平沢刑事が声をかける。

「唯、会えない訳じゃないんだ、ここは笑顔で送ろう。」

「そつだね〜。」

その一言で再び満面の笑顔を2人に見せる唯。

が、その時であった。

唯の真上に銀の壁が現れ、唯の体を通過していった。  
するとどうだろう、唯そっくりの人が、唯の隣に現れたではないか！

「えええええっ！！」

「っ、これは…！！」

シャイアン達も、流石に驚いた。

「こんにちは、私は平沢 唯のコピーです。」

このサプライズに、シャイアンも最初は戸惑ったものの、何とか理解し、

「どっするの？」

「…連れて行く。」

その一言で全てが解決した。

が、問題もある。

「名前はどじするの?」

「そうだな…。そうだ、平野 唯でどうだ?」  
すると、

「平野か…。うん、いいよ。」

あっさり承認した。

そして、やはり銀の壁により作られた、愛用のバイクそっくりのレプリカに唯が乗って、シャイアン達の準備は整った。

「シャイアンさん、今度来たら一緒にお茶会でもやろうよ。おいしいお菓子も用意するから。」

「そうだな。その言葉に甘えさせてもらおうよ。」

「絶対だからね!」

「…。ああ。」

そしてシャイアン達は銀の壁を抜け、次の世界へ入っていった。

「…ここが次の世界か。」

「…ん？」

たどり着いた先は、何故かアパートの前だった。  
そして、アパートの看板を唯が読んだ。

「…ひだまり荘…。」

だが、3人は知らなかった。何者かにより、見られている事に。

「シャイアンに、泉 こなた。あれが…。」

「あれが、異世界の2人の戦士…。」

TOUR 4 END

TOUR 5 に続く。

TOUR 4 青き翼の戦士（後書き）

次回「仮面ライダーアナザーディケイド」青い瞳の破壊者」は、

「知也、助けて…。」

「ゆのを悲しませる者は許さない！」

「お前は闇の末裔、なのに何故人間に味方する…!!」

「俺は沖田 知也、ゆのを守りし存在。」

TOUR 5

「仮面ライダーミラーージュの世界　くひだまりスケッチwith超  
光戦士シャンゼリオン」  
光と闇の狭間で」

その少女が抱くのは、光か？闇か？

お知らせです(前書き)

ピンポンパンポーン、お知らせです。

## お知らせです

実は、2011年の第1弾として、今人気の仮面ライダーオーズをベースとしたノベルを書くかどうかと考えております。

ただ、普通に書くのではなく、子供たちの間で人気のカードゲームを融合させ、無謀にもらき すたまで加えた、かーなり無茶苦茶な内容になっております。

それでもいいという人は、生暖かい目で見守って下さい。

また、機会があれば歴史物や他の分野にも着手しようかと考えております。

どうぞ、2011年も矢部小路XXを、よろしくお願い致します。

お知らせです（後書き）

お知らせでした。  
ピンポンパンポーン

XX  
「やっと完全版を仕上げる事が出来た。」

かがみ  
「仕上げた、って行改変して台詞を直しただけじゃないの！」

つかさ  
「あ、でも私の台詞が直ってる。」

こなた  
「ま、ほんの少しだけどね。」

XX  
「それに、編集で消してしまった所も復活させたしね。」

かがみ  
「ほんの少しね。」

XX  
「と言う訳で、拙い完全版ではありますが、よろしくお願ひします。」

こなたを乗せバイクを走らせるシャイアン。  
すると、前方に人影らしき影が2つこちらへ近づいてきた。

「人か！助かった！」

何せ、こなた以外に誰も会っていないため、随分久しく感じていた。  
だが、こなたは怪訝そうな顔をしていた。

「…どうした？」

「気をつけて。何かおかしいよ。」

「ああ。」

2人は、バイクを降りると迫ってくる人影へゆっくりと近づいていた。  
った。

が、その人影は2人目掛けて走り出した。  
しかも、かなり素早い。

「来たよ！早く変身して！」

シャイアンは、こなたに促されるまま、懐からクロノ・ドライバー  
を取り出し、腰にセットした。

そして、ライド・クロニクルから一枚のカードを取り出した。

カードには、黒と朱に彩られた戦士が写っている。

「早く、そのカードをドライバーにセットして！」

クロノ・ドライバーの左右にあるトリガーを引き、カードを手に叫ぶ。

「いくぞ…。マスカ・レイド!!」

カードをドライバーのスリットに入れ、トリガーを押し込める。(以降、この行為をセツトインと呼称)

【マスク・ライド デイクイド】

すると、シャイアンの左右に9つの幻影が現れ、彼と一体化した。そして、彼の真上に生成されたオーラカードがマスクに装填され、黒と朱のツートーンの戦士が姿を現す。左肩から右下にかけて走るXのライン。そして何より、戦士から放たれる神々しいオーラが、存在感をより一層引き立たせる。彼こそ、且つて世界の破壊者と言わしめたデイクイドの後継者、アナザーデイクイド(以降、AD)である。

目の前にいた人影は、素早い足並みを更に上げていく。

「クロツク・アップ?!」

こなたがその能力に気付いたが、ADは素早く反応した。

「…くつ、ちよこまかと蠅みたいに…。」

人影：ワームに対し、ADは一枚のカードを取り出した。  
そのカードには、カブト虫をモチーフとしたライダーが写っている。

【マスク・ライド カブト】

ハニカム形の金属が全身を包み込み、細身のカブト型戦士が現れた。  
仮面ライダーカブト。ZECTが開発した、対ワーム用外骨格アーマーである。

そして次に、一枚のカードを取り出し、セットインする。

【アタック・ライド クロック・アップ】

するとどうだろう。辺りの時間が緩やかになり、ワームのみがはつきりと見える。

ADがワーム目指して走り出すや、ライド・クロニクルが斜めに傾き、粒子状になった剣の柄が現れ、それを手にする。

そして、刀身が下の方から発生し、長剣を形作っていく。

襲いかかってくるワームの一体をライド・クロニクル・セイバーで斬り払い、もう一体もミドルキックで牽制し、斬りつけた後。

【クロック・オーバー】

ワームは、緑色の炎を上げて消滅した。

カードが排出され、ADに戻る。

(だが、何故私はこのカードを使おうとしたのだろうか…。)

カードを手に思案するAD。

「おそらく、ドライバーの情報によるんじゃないかなあ。」

こなたの言葉により、納得するAD。  
が、次の瞬間。

ボツ!!

何と、カブトのカードが燃え始めたのだ。

「……!!」

そして、カードは灰と化して、大地へ還っていった。

「カブトのカードが……。」

「仕方がないよ。燃えてしまった物は。」

落ち込むこなたを慰めるAD。

「次へいこう。こうしたって何の解決にもならないさ。」

こなたを再びバイクに乗せ、ADは走り出した。

銀の壁を抜け、次に来たのは、駅のロータリーであった。  
ここも損害は激しく、辺り一面に灰の山が堆く積もっている。  
が、こなたの表情はかなり険しい。

おそらく、灰を作り上げた者が近くにいたのであろう。

「待つて、ここは私が。」

A Dがライド・クロニクルに手を伸ばそうとするのを、こなたが制止した。

こなたが目を瞑る。

まるで、修行者が瞑想するかの様に、精神を集中し、何かを念じる。

『先輩、私に用ツスか？』

『あ、ひよりん。ちよつと力を貸して。』

何という事だろう、こなたの横に1人の少女が立っていた。

しかも、半透明のためかよくわからないが、黒髪を膝まで伸ばした、こなたより少し大きめの少女である。

その少女とこなたの腰には、いつの間にかベルトが巻き付いており、手には携帯電話が握られている。  
携帯電話を操作し、そして叫ぶ。

「変身!!」

その携帯電話をベルトにセットし、押し倒す様にはめ込む。

ベルトから伸びる赤いラインが前進に巡り、銀と黒のボディカラーに金の単眼が印象的なライダー、555変身した。

「こなた、君つて…。」

流石のシャイアンも驚いた。

「いい、ディケイドさん。私の戦い方を、よく見ていて。」  
すると、555の姿に呼応して彫刻の様な異形：オルフェノクが3体、灰の山から現れた。  
それだけではなく、別方面からは魔化魍が数十体現れ、AD目掛けて殺到した。

「ちっ、しゃらくさい!!」

ADは、一枚のカードを取り出した。

そのカードには、紫色の鬼を模したライダーが写っている。

#### 【マスク・ライド 響鬼】

カードをセツトインすると、涼やかな音叉の音が響き、青白い炎に包まれるやそれらが弾け飛び、紫色の鬼型ライダーが現れた。仮面ライダー響鬼。魔化魍と戦う自然の化身。

「ちよ、何勝手に変身して…っつて、向こうからも?!」

「こちらからも敵さんが押し掛けて来たんでね。レクチャーなら、またいずれ受けるよ。」

2人は、それぞれ別れて敵を迎え撃つ形となり、ライダーの力を存分に振るっていった。

こなた555（以降K555）は、オルフェノクにパンチを立て続けに繰り出し、背後のオルフェノクにも対応してミドルキックを繰り出す。

この555、原典の555とは違いアクセル・フォームになる事は出来ない。

しかし、カイザやデルタの武装は使用出来る、言わば「こなたの世

界の555」と言っても過言ではない。

そのK555は、3体のオルフェノクを一カ所に集めさせ、懐中電灯型のツール、ファイズ・ポインターを足のハードポイントにセツトする。

そして、携帯を開くやENTERのキーを押す。

### 【エクシード・チャージ】

ジャンプしつつ足のファイズ・ポインターから円錐状のマーカ―を打ち出し、3体のオルフェノクに打ち込む。

555は、そのままキツクの体制に入り、円錐状のマーカ―へと突入していった。

貫通し、3体の背後に着地した時には、3体は を浮かべて爆発、消滅していた。

「ふう、やれやれ。」

一方、AD響鬼と言えば、あまりの数にうんざりしたのか、一枚のカードを取り出し、セツトインした。

### 【アタック・ライド 音撃棒・烈火】

音声と共に、AD響鬼は腰にある音撃棒を手にし、先端から放たれた炎を魔化魍目掛けて放った。

炎は無数に分裂し、魔化魍に命中する。

爆音が轟き、消滅してゆく魔化魍。そして、全ての魔化魍は消し飛んだ。

（しかし、何故こんなに見知らぬライダーの力が使えるんだ?...ま

さか、私自身が本当にディケイドだから、なのか？)

戦いを終え、排出された響鬼のカードを見て1人ごちるA.D。  
しかし、カードはやはりと言うか炎を上げて燃え尽き、灰と化して  
しまった。

「また、燃え尽きたの？」

「ああ。…にしても、何故燃え尽きてしまうのかさっぱり分からん。  
」

すると、こなたの背後にいた透明の存在がシャイアンに声をかけて  
きた。

『それはね、この世界…うっん、この裏世界そのものがライダーの  
介入を拒んでいるんだよ。』

「誰だっ！」

『私の名は、柊 つかさ、仮面ライダーアギト。あなたの敵ではあ  
りません。』

背後から現れた少女は、薄紫のショートヘアにカチューシャ風の  
リボンを付け、どこかとぼけた印象を感じる顔つきをしていた。  
そして、こなたと同じ制服に身を包んでいる。

『かつて、あなたの世界に、オリジン・リイマジネーションの両方  
が介入を試みたんです。

…でも、介入は全部失敗して…。

そこで、オリジンの皆さんがバツクルを、リイマジネーションの  
皆さんがカードを開発して、この世界に送り込んだの。』

「…なるほど、な。」

『私達の世界と同じ様に、あなたの世界にも9人のライダーがいて、物語があります。…あなたは、9つの世界を巡り、ライダーとの絆を繋げて裏に見え隠れしている悪の根源を倒して下さい。』  
「絆を、繋ぐ…。」  
『あなたのいる世界については、私達が守っていきます。』

つかさの話聞いたシャイアンは、こなたに問いかけた。

「大体の事は分かった。…しかし、どうやって移動する？」  
すると、

「あ、それなら簡単だよ。」

「何、本当かつ！」

「うん、あの銀の壁に入るだけだよ。」

何て手軽な…。

シャイアンは、少し拍子抜けした。

三度こなたをバイクに乗せ、銀の壁に突入したシャイアンは、そのまま壁の中を走り出した。

目の前が開け、辺りを見ると、そこは女子校の校門前であった。

「ここは？」

こなたが学校の門に目をやる。

「桜ヶ丘高校…？」

丁度その頃、ショッピング・モールでは警官隊と謎の異形が死闘を繰り広げていた。  
警官の中には、大怪我をして倒れる者もあり、現場は騒然としている。

「あーもう、唯は何してるのっ！」

1人の女子校生が狼狽する。

「律、そんな事してる暇があるなら、あいつを止めなさいっ!!！」

もう1人の女子校生も、ライフルを撃ちつつ応戦する。

「あ、あれは!!！」

背の低い女子校生が、何かに反応した。

「…唯ちゃん!!！」

クリーム色の髪的女子校生も、マグナムを撃ちつつ仲間の名を叫んだ。

「律ちゃん、澪ちゃん、ムギちゃん、あずにゃん、おまたせっ!!！」

バイクに乗った女子校生が、仲間の元へ現れる。

「唯、遅いっ!!！」

40代の刑事が吠える。

「お父さん、ごめんなさい!!」

…さあ、ここからが私のターンだよ!!」

少女は両手を差し出すと、ゆっくりと左右に広げ、腰に深緑のベルトを体現させる。

そして、両手を真上で交錯させ、叫ぶ。

「変身!!」

両手を一気に降ろすと、足元から深緑色の風が巻き起こり、少女の体を包んでいく。

そして現れたのは、深緑のクワガタをモチーフとしたライダーであった。

ライダーの名は『グランザム』。

少女の名は、平沢 唯。

TOUR 1 END

TOUR 2へ続く

【特別編集】TOUR 1 デイケイドPART 2 【完全版】（後書き）

XX

「次回より、本編に戻ります。」

告知

今まで、シャイアンが巡った世界のライダーに関するデータベースを、書きたいと思っています。  
ライダーの能力だけでなく、細かいデータや戦力も書いていきます。  
ご期待ください。

XX

「さて、お待たせしました、第2章の開始です。」

こなた

「今回の世界のライダーは、かなり癖があるから今から楽しみだね。」

「

XX

「では、いってみよう!」

こなた

「さあ始まるぞますよ!」

シャイアン

「いくでガンス!」

唯

「フンガー!」

知也

『真面目にやる気はないのかあ!』』

ゆの

「まあまあ。」

新しい世界にやって来たシャイアン達。  
今彼等は「ひだまり荘」の前にいる。

「どつやら、ここにこの世界の仮面ライダーがいるらしいな。」

「…ここに、ですか？」

シャイアンの言葉に唯が反応する。

「ただ、どんなライダーなのか分からないから、油断は出来ないよ。」

が、すぐにこなたが一言加える。

3人はバイクから降り、アパートに近づいていった。

「いくぞ。」

すると、薄いブラウンの髪に×の字をした髪留めの、小柄な少女が慌てる様に飛び出していった。

そして、塀に出来た影の前に立ち、指をパチンと鳴らす。

影は、まるで切り取られたかのように動き出し、道路の所で四角に形作られそこから一台のバイクが浮かび上がってきた。

少女は影で出来たバイクに乗り、何処かへと走り去っていく。

「あれが、この世界のライダーらしいな…。」

「なら、急いで追いかけてよっよ!」

シャイアンの言葉に唯が答える。

が、シャイアンはちらりと後ろを見た後、口を開いた。

「よし、追いかけるならこなたを連れて行ってくれ。私は後から追いかける。」

唯は、こなたを後ろに乗せると、急いで後を追っていった。

唯を見送ったシャイアンは、ゆっくりと後ろを振り返る。

そこには、ブロンドの長髪にがっしりとした体型の少女が仁王立ちしていた。

黒いバイクに乗った少女は、河川敷に着くや辺りを見回し何かを警戒していた。  
すると。

ガシッ!!

長い腕が少女の首を締め付けた。

その長さ、2メートル。

「くっくっくっ、我が腕からは逃げられないぞ、ミラージユ。」

長腕にギリギリと締め付けられ、苦悶の表情を浮かべる少女。

「知也、助けて…。」

少女が男の名を口にすると、何と急に長腕を握りしめ、そのまま強引に振り解いてしまった。

『ゆのに何をした。』

少女……ゆのの口から発せられたのは、ドスの効いた男の声。

「ようやくのお出ましか、ミラージュ。」

『やかましい。…ロングアーム、ゆのに手をかけた罪は重いぞ。』

ゆのの中にいる存在が長腕の怪物：ロングアームに啖呵を切るや、右手を手刀に構え高く上げ、左手を腰に添えた。

黒い茨が腰に巻き付き、ベルトを形作ると、中央から黄金に輝くオーブが現れ、光を放つ。

『変身！！』

そして、右手を振り下ろすと、ゆのの中央に光が走り、まるで左右に分かれるかの様に光が走り、1人の黒い戦士のシルエットを映し出す。

これぞ、この世界の仮面ライダー・ミラージュ。黒の世界からやってきた負の力を持つライダーである。

その頃、シャイアンはブロンドの少女と対峙していた。

まるで親の仇の様にシャイアンを睨みつけている少女に、何かしらの覚悟が見え隠れしている。

「あんだね、世界の破壊者って。」  
「…やれやれ、またそれか。断っておくが、私のどこが破壊者なのか教えて欲しいのだが。」

だが、少女は答えなかった。

「問答無用!!いくよ!!」

「…仕方がない。一度戦って分かって貰うしかないか。」

そう言つてシャイアンはクロノ・ドライバーを手にし、腰にセットした。少女も額に手を翳し、透明なバイザーを出現させる。

「マスカ・レイド!!」

「燦然!!」

シャイアンはカードをセット・インし、少女はバイザーのゴーグル部を下げる。

ADが最初に姿を現し、次いで透明の装甲に包まれた戦士が輝いて現れる。

超光戦士シャンゼリオン。

この世界の、輝ける戦士の名前だ。

「…ほう、これはまた随分と美しい姿だな。」

「あ、ありがとな。」

少女は照れながら答える。

「だがしかし、誉めても何も出ないよ!!」

「ああ、そうだったな。では、いくぞ!!」

さて、ゆのが変身した…いや、中の存在が変身したミラージュは、異様な姿をしていた。全身を漆黒の装甲で包まれており、胸部に刻まれた爪痕も痛々しく、重厚な趣を持っている。燃える炎をイメージさせる肩の装甲もたくましい、武骨なスタイルを持つミラージュは、ロングアームを見つめたまま微動だにしない。た。

『…ゆくぞー!!』

ミラージュは、一気にロングアームとの間合いを詰め、パンチを繰り出しつつミドルキックで距離を調整し、更にチョップで長腕を払いのけ右ストレートを胸部に見舞う。

「くっ、なかなかやるな。では、これでどうだ!!」

ロングアームは自慢の長腕を切り離し、その腕をまるで鳥を操る様に動かしミラージュに迫った。

『くそっ、そいつは反則だっ!!ならば!!』

すると、ミラージュの腕部装甲が3つに分裂し、そこから金色の刃が3枚飛び出してきた。

胸部の装甲も強化され、より一層厚くなっている。

ミラージュ・アサルトフォーム。

攻撃力と防御力に特化した、特殊形態だ。

『…こいつでどうよ…』

所変わって、ADとシャンゼリオンの戦いはかなり白熱していた。

「なかなかやるわね。…この私と互角に張り合うとは。」

「まあな。しかし私は君達の事を知っている。…超光戦士シャンゼリオン、そして仮面ライダーミラージュ!!!」

「何故知ってるの!?!」

「それは秘密だ!!!」

乱闘戦の中、自分達の名を口にし動揺するシャンゼリオン。

まあそれはドライバーから得た情報だから、知ってて当然ではあるが、彼は敢えて言及はしなかった。

「君が光の戦士なら、この戦士の力は旋風だ!!!マスカ・レイド!!!」

ADはカードをライド・クロニクルから取り出し、セット・インする。

『マスク・ライド グランザム!!!』

すると、ADの足元から風が巻き上がり、大きな竜巻となってADを包み込む。

そして、クワガタの頭部を持つライダー…グランザムが現れた。

「うそ…、姿が変わった。」  
「さて、戦いはこれからだ。」

ミラージュとロングアームの戦いも佳境を迎え、ミラージュ・アサルトの腕部の3枚の刃に黒い雷撃が走り、そして黒き一撃をロングアームに叩き込む。  
グラビティ・スラッシュ。  
ミラージュの必殺技の一つだ。

『ゆのを悲しませる者は、許さない!』

ゴウツ!!!

ロングアームは爆発して消滅し、長腕も空中で消滅した。

が、突然。

バキィッ!!!

ミラージュの右側から何者かの奇襲を受けた。

『ぐおっ!!!』

彼は不意を突かれたのだ。  
その者は全身を銀色の装甲に包み、右腕には鋭い爪が備わっている。  
戦士の名はデスクロー。  
ミラージュと同族の者だ。

「お前は闇の末裔。なのに、何故人間に味方する!!」

デスクローの猛攻を受け、急に勢いが衰えるミラージュ。

その強力無比の攻撃に、流石のアサルト・フォームでも押されていた。

「全く、次から次へ…!!」

がしかし、ミラージュはパンチを2発繰り出し、ハイキックで顎を蹴り上げ、何とか引き離す。

と、そこへ。

「ちょっとゴメン、そこどいて!!」

何処からか、少女の声が双方に聞こえた。

「な、何っ!?!」

「一体、何処からっ!!」

ミラージュは、何かを感じたのかデスクローから急に離れ、当のデスクローはあたふたとしている。

すると、川の輝きから赤い騎士風のライダーが飛び出して来た。そして、着地と同時に右手に装備された龍頭の籠手を突き出す。

ポオオオオツ!!

籠手から灼熱の炎がほとばしり、デスクローを焼き尽くす。

「ぐああああっ!!」

デスクローは、大爆発を起こして消滅した。

実は、今から数分前の事。

こなたを乗せた唯のバイクが、河川敷まで来ていたその時。

「あ、あれは？」

唯が何かを見つける。

それこそ、援軍としてやって来たデスクローであった。

「援軍?! まずいねえ。」

こなたが叫ぶ。

ミラージュとロングアームとの乱闘が続く中、援軍を差し向けるのは、はつきり言って反則に等しい。

「何とか止めなきゃ!」

こなたは目を瞑り、精神を統一する。

すると、こなたの隣にオレンジの長髪にカチューシャを付けた少女が現れ、こなたの左手には四角いカードケースが握られていた。

「いくよ、あやのさん!」 『ええ、いつでもいいわ、泉ちゃん。』

その少女……峰岸あやのと共に、こなたはカードケースをバイクのバックミラーに翳す。

やがて、四角い形のバックルが双方の腰に装着され、そして右手を

斜めに構え、ポーズを取る。

「『変身！』」

カードケースをバツクルにセットし、あやのがこなたと一つに合わさった時、幻影がこなたに集中し、赤い騎士風のライダーが現れた。それこそ、ミラーワールドを舞台に戦ったライダー、龍騎である。K龍騎はバツクミラーからミラーワールドに入り、戦場を目指して走り出した。

そして、K龍騎はバツクルのカードケースからカードを取り出し、左腕にある龍型の籠手・ドラグバイザーに装填する。

『ストライク・ベント』

電子音と共に、赤き龍・ドラグレッダーが現れ、K龍騎の右手に頭部を模した籠手・ドラググローを装着し、先程の展開と相成った訳である。

戦いが終わり、双方共に変身を解く。

「あなたは、誰？」

こなたが、ゆのに問う。

「私は、沖田 ゆのです。」

そして、ゆのは中にいる知也と交代する。

『沖田 知也…ゆを守りし存在。』

「じゃ、ゆのちゃんの中にいる知也さんがライダーなんだね。」

『…ま、そう言う訳だ。』

知也は照れながら答える。

「私の名は泉 こなた。よろしくね。」

『こなた、か。よろしくな。』

2人がガツチリと握手したところで唯が現れ、揃ってひだまり荘に引き返す事となった。

その頃、ADグランザムとシャンゼリオンのバトルはまだ続いていた。

お互いに消耗している中、ADグランザムのハイキックがシャンゼリオンの左肩を捉え、更に旋風を纏う右ストレートが胸部装甲にヒットする。

「うっ…。このままじゃ埒が開かないな。」

「ならば、この辺で決着をつけよう。」

そして、ADグランザムはライド・クロニクルからカードを取り出し、セット・インする。

『ファイナル・アタック・ライド グ・グ・グ・グランザム!!』

A Dグランザムの右手に、風力にして50メートル程の旋風が纏われ、圧縮された旋風をシャンゼリオンに喰らわす。ストーム・ディバステイター、「その旋風で破壊する者」という名の必殺技だ。

シャンゼリオンも、胸部からシャンゼリオンに似た化身を呼び出し、突撃させた。

「シャイニング・アタック!!」

シャンゼリオン最強の必殺技が今炸裂し、激突する!!

ドオオオオオ……ン。

両者の必殺技が激突し、吹き飛ばされる。

丁度そこへ3人が帰って来たが、今の爆発音に驚き、慌てて2人の元へ駆け寄った。

「シャイアンさん、どうしたんですか?!」

「な、何があったの!?!」

「宮ちゃん、一体どうしたの!?! 教えて。」

「…あ、ゆのっち。ごめん、今そこにいる破壊者と戦っていたんだ。」

すると、ゆのの中が知世に変わる。

『無茶は止める、宮子。それに、あいつ等は破壊者でも何でもない。ただの考えすぎだ。』

知也の一言でうなずく宮ちゃん：いや宮子。

そう、シャイアンは手加減をして戦っていたからだ。

もし、最後に放った必殺技がトルネード・ディバステイターだったら、彼女は完全に粉々になっていたからである。

宮子は、ゆっくりと立ち上がると、シャイアンに握手を求めた。

「さつきはごめん。私の名は北大路 宮子、よろしくな。」

シャイアンは、快く握手に応じた。

その暖かい手に、照れる宮子。

「おお、早速彼女の萌え要素を発見!!」

「こら、こなた。彼女をからかうのはやめる。」

宮子をからかうこなたを諫めるシャイアン。

それを見たゆのは、にっこりと笑って返していた。

だが、一同は気が付いていなかった。

そこから離れたところで、カブトムシの頭の紳士が遠くから様子を見ていた事を。

『ふっふっふっ、漸く見つけましたよミラージュ。：次は、この「黒風のホーロイ」が相手になりましょう。』

そして、その後ろには、シャイアン達がこの世界に現れた時にいた、

謎の男の姿があった。

TOUR 5 仮面ライダーミラーシュの世界 〈ひだまりスケッチwith超

は、次回、「仮面ライダーアナザーディケイド 〈青い瞳の破壊者〉」

「え〜っと、これかな？」

「いや、サバじゃなくて!?!」

「あつた、これだ!?!」

「サバじゃねええええつ!?!」

T U R N 6

「サバじゃなくて!!」

…なぜに、サバ？

TOUR 6 サバじゃなくて!! (前書き)

こなた

「今回、更新が遅いね。どしたの？」

XX

「実は、新作を書き始めてね。それで、遅くなってしまったんだ。」

こなた

「えっ、また新作?!…しかも、まだデータベースですら出来ていないのに!?!」

XX

「ま、新作は丁寧にやっけていくつもりだから。心配なく。それに、データベースはまだ調査中だから。」

こなた

「そうなんだ。でも、なるべく早く終わらせてね。では…。」

こなた

「さあ始まるぞますよ!」  
シャイアン

「派手にいかせてもらおう!」

唯

「フンガー!!」

知也

「今、2月の新番組のセリフが混ざっていた様な…。」  
こなた

「気にしたら負けだよ。」

## TOUR 6 サバじゃなくて!!

仮面ライダーミラージュこと沖田ゆのと、超光戦士シャンゼリオンこと北大路宮子に出会ったシャイアン一行。  
ふと、ゆのが携帯で時刻を見ると、既に午後2時を過ぎている。

「じゃ、私の部屋でお菓子でもどうです?」  
「いいね、ゆのっち。…一緒にどう?」

ゆのと宮子の誘いに、一行は大きく頷いた。

一行がゆのの部屋に入ると、カラフルな色調の空間が目飛び込んできた。

「いやいや、ござっぱりとして綺麗じゃのう。」

急に年寄り口調になるこなた。

一行は、各々の所に座り、ゆのが入れてくれたお茶とクッキーを楽しんでいた。

「ところで、ゆのさん、でしたね。」

突然、シャイアンがゆのに話を切り出してきた。

「この世界のライダーの事について、聞きたい事があるのですが…。」

すると、ゆのは静かに目を閉じ、何かを念じ始めた。

そして、目を開けたゆの…いや、中にいる存在たる知也はシャイアンに向き合い、口を開く。

『私が沖田 知也、仮面ライダーミラージユです。あなたが、デイケイドですね。』

「ええ、そうですが。」

知也は、シャイアンの顔を眺め、そして一呼吸置き口を開いた。

『ならば私の話を聞いてくれますか？』

「ええ、当たり前障りがなければ。」

そして、知也は自分自身の話をシャイアンに聞かせた。

彼…ミラージユは、元々『黒の世界』という所からやって来た戦士だった。

黒の世界…それは、人間とは違う種族『シャドウサイダー』が住まう世界であり、元々はゆの達の世界とは全く関係はなかった。

しかし、闇將軍シュバルツの野望……人類支配計画が本格化するとミラージユ達『闇の末裔』は先兵としてゆの達の世界に送り込まれたのである。

本来、ミラージユは戦いなどは好まない方で、幾度となくシュバルツと対立したものの、結局止める事は出来なかった。

『私は、何としてでもシュバルツの計画を阻止しなければならぬのです。こんなに美しい世界が汚される事は、断じて許されません！…だからこそ、この世界にやって来た時に、力になる理解者を探していたのです。そして、私はゆのに巡り会い、知也を名乗ったのです。』

再び知也とゆのが入れ替わり、今度はゆのが口を開く。

「本当は、知也さんは優しい人なんです。…だから、私は知也さんに協力したのです。」

なるほど、と頷くシャイアン。

（黒の世界と聞いて、悪い人ばかりだと思っていたけど、こんな人もいたんだね。）

こなたは、改めて知也と言う人物の人となりを知ったのであった。

明けて翌日。こなたと唯は宮子の部屋で一夜を過ごし、シャイアンは女性と一緒にするのはどうも…という理由から表の車庫で一夜を過ごしていた。

シャイアンがゆのを起こしに部屋の入口まで来た時だった。

「あ、それ違っつて！」

宮子の部屋から声がした。

何だと思い、シャイアンが宮子の部屋の入口まで来ると。

「え〜っと、これかな？」

「いや、サバじゃなくて！！」

「唯ちゃん、アジはこっちにあるよ！」

「だが、そこがドジっ子唯ちゃんの萌える所なんだよね〜。」

何やら宮子達のにぎやかな声が響く。  
シャイアンが宮子の部屋の呼び鈴を鳴らし、部屋へ入っていくと唯が冷蔵庫を開けて何かを探している所であった。

「あ、シャイアンさん、おはよう!!」

「おはよう。…ところで、何をやっているんだ？朝から。」

「実は、朝から豪華にアジの塩焼きを、と思つて唯ちゃん達に手伝つてもらつていたんだ。」

だが、どうやら唯がアジとサバを間違えたらしい。

(普通は間違えないとは思うが…。)

1人心の中で突っ込むシャイアン。

結局、シャイアンの助けもあつて無事に朝食は完成した。

アジの塩焼きに生卵、味付け海苔に沢庵、ご飯に豚汁と旅館並の朝食である。

こなた達との朝食後、ゆのはスケッチブックを抱え、ひだまり荘を出た。

朝の風景を写生するためである。

バスに乗り、丘の上の公園を目指すゆの。

朝の空気は冷たいもののさほど寒くはなく、穏やかな暖かさもある。

公園に着いたゆのは、町を望む位置に腰を下ろし、スケッチブックに朝の町を描き始めた。

柔らかに描くゆののタッチに、知也は穏やかな笑みを浮かべる。

『流石ゆのだ…。うまく書けているよ。』

「あ、ありがとう。」

知也の一言に、頬を赤らめるゆの。

やがて、一通り描き終え一息突いた、その時。

『ほお、こんな所でお絵かきですか。流石、闇の末裔ですな。』

ふと上を見上げると、そこには黒いシルクハットを被った、カブト虫の頭の紳士が空中に浮いていた。

『貴様は、黒風のホーロイ。一体何の用だ。』

知也は紳士…ホーロイに口を開く。

『ええ、あなたの腕が鈍っていないか見に来たのですが。』

すると、知也…いや、ゆのの表情が歪んだ。

どうやら、ホーロイは知也を誘っている様である。

「知也、気をつけて。あのシャドウサイダーはすごく危険な感じがするよ。」

『ああ、任せなさい。あいつとは、いずれ決着をつけなくてなくてはならなかったのですから。』

戦闘を知也に任せ、自らの意識を後方へ下げていくゆの。

そして、右手を上げベルトを出現させ、一気に振り下ろす。

光と共にゆのの体がミラーージュに変わり、ホーロイに戦いを挑む。

一方、後片付けを済ませたこなた達は宮子の部屋でくつろいでいた。すると。

『大変だ、こなた！丘の上の公園で、女の子が変な奴に！』

一匹のコウモリらしき物が、こなたの元に現れた。

「な、何なのこいつ?!」

「あー、大丈夫。噛みはしないから。…で、どうしたの?キバット。ゆのちゃんの身に、なにが?」

こなたは、コウモリ…キバット三世に聞いた。

『ああ、暇だったので散歩していたら、黒い反応があつてな。…急がないとヤバいぞ。』

実は、かがみ達同様変身アイテムが飛び出すことはよくあり、キバットも夜中に精神世界から飛び出し、散歩に出る事があるのだ。

こなたは、キバットの言葉に頷き唯に話す。

「唯ちゃん、急ごう。シャイアンさんも急いで!」

「うん。」

「分かった。」

唯とこなたは、ひだまり荘の駐輪場に行き、バイクに乗って公園を目指す。目指していった。

シャイアンと宮子もバイクに乗り、公園を目指す。

公園ではミラージュとホーロイの戦いが続いていた。ミラージュは、既にフォーム・チェンジを済ませ、空中を舞っている。

全体的にスリムで、細い両腕部には不釣り合いな全長40cmの両刃のエッジが伸びており、背には小さい翼状の物が生えている。ミラージュ・クイックフォーム。それが、ミラージュの高速戦闘形態。

『さあ、どうした!!』

ホーロイが十体の分身を繰り出し攻め立てるが、ミラージュの高速剣に全て撃墜され、黒いスモッグで身を隠しても、感知能力で見破られ、斬撃が飛んでくる。まさに、一進一退の攻防戦である。

『流石ですね。…しかし、それが命取りです!!』

が、ホーロイは慌てず騒がずミラージュの動きに合わせて、何かを打ち込んだ。

打ち込んだ物は、小型の楔みたいな黒い物質。

更に黒い楔状の物質を無数に打ち込み、何やら呪文の様な言葉をミラージュに唱える。

すると、ミラージュの動きが急に止まり、黒い電撃が体を襲う。

『くっ…。か、体が動かない。ホーロイめ、姑息な手を…。』

これこそ、ホーロイ自慢の呪殺戦法。

相手を金縛りにさせ、自由を奪った上で仕留める狡猾なやり方である。

ミラージュは金縛り状態のまま地面に激突し、意識を失った。

『さあ、闇將軍様がお待ちですよ…。』

ミラージュは、ホーロイの放つ黒い風に包まれ、いずこかへと姿を消した。

その頃、シャイアンと宮子は公園に続く道路を走っていた。  
すると。

『ウガアアアアツ!!』

突然、道路から黒い塊が現れ、2人の進路を塞いだ。  
まるでゴリラの様な姿に、機械が至る所に取り付けられており、要塞を思わせる風貌を漂わせている。

シャドウサイダー、剛腕のパロモルス。

闇將軍シュバルツの忠実なるボディーガードである。

「新手か!」

「ここは私が行くわ、シャイアンは先に!」

シャイアンを制し、宮子がパロモルスの前に立つ。

「宮子…。すまない、先に行かせてもらう。」

宮子を置き、1人シャイアンは公園に向かう。

「さて、いくよー!ゴリラの化け物!」

宮子がシャンバイザーを額に装着し、シャンゼリオンに燦然しようとしたその時。

『ウガアアアアツ!!』

パロモルスが剛腕に物を言わせてかまいたちを発生させ、宮子に向けて放った。

かまいたちは宮子に命中し、宮子は宙を舞う。

「うわああああ!!」

その刹那、シャンバイザーが額から外れ、真下にあったトレーラーに落ちてしまった。

しかも、そのトレーラーは鮮魚専用で、積み込み中の荷物の中に紛れてしまった。

宮子は垣根に落下し、何とか大怪我は免れたが、シャンバイザーが無くては話にならない。

パロモルスが目前に迫ってくる、シャンバイザーは手元に無い。

宮子にとって、最悪のシチュエーションである。

が、そこに救いの女神(?)が手を差し伸べた。

同じひだまり荘の住人で、紫紺のショートヘアをツインテールに纏めた少女…山崎乃莉と、クリーム色のショートヘアに、後ろに小さく纏めた髪が印象的な相方の斎藤なずなが通りかかったからだ。

「あ、先輩。どうし…」

と乃莉が声をかけようとした時、2人の目にパロモルスが映った。

「「!!」」

「あ、乃莉スケか。ごめん、シャンバイザーを取ってきて!!そのトレーラーの積み荷の中に紛れているんだ。」

「え、シャン…。」

が、なずなは事態を飲み込めていなかった。

「わかりました、取ってきます。…なずな、いくよ!」

「え…。あ、うん。」

2人は鮮魚のトレーラーに向かい、シャンバイザーを探し出す。その間に、宮子はパロモルスの猛攻をかわし、チャンスを待つ。

「は、早く!!」

そして。

「あつた、これだ!!」

と、乃莉がシャンバイザーを投げて渡そうとした途端。それより早く、何かが宮子の手に渡った。

「サンキュー、燦然!!」

宮子が額に当てた物。それは、何故か冷たくて生臭い。

宮子は、恐る恐るのぞき見る。

そう、それはサバ。…しかも生。

「サバじゃねえええええっ!!」

宮子の絶叫が冬の青空にこだまする。

「な、なずなああああつ（怒）!!」

「ごめんなさい、ごめんなさい、ごめんなさい、ごめんなさい（以下百行続く）」

乃莉に説教され、しょんぼりとするなずな。

しかし、シャンバイザーは宮子の手に渡り、2人の役目はきっちり  
と果たした。

「改めて、燦然!!」

サバを投げ捨て、シャンバイザーを装着し直して仕切り直す宮子。  
光に包まれ、シャンゼリオンに変わるや一気呵成に攻め立てる。

一方、身動きが取れないミラージユの精神世界に、何者かが現れた。

「…あなたは？」

『アナタを助けにキマシタ。』

ゆのは声をかける。

その存在は、どうやらゆのを助けに来たらしい。

片言を話す謎の存在の正体とは？

果たして、シャイアン達はゆのを助け出せるのか？

T  
O  
U  
R  
7  
に  
続  
く。

T  
O  
U  
R  
6  
E  
N  
D

TOUR 6 サバじゃなくて!! (後書き)

次回、「仮面ライダーアナザーディケイド」青い瞳の破壊者」は。

「唯ちゃん、何故それを持っているの…!!」

「まずは、この女を処刑する。」

「キバって、いくぜー!!」

「もうこれ以上、お前の好き勝手にはさせない!!」

TOUR 7

「闇の中にある光」

また1つ、こなたに新たな謎が加わった…。

TOUR 7 闇の中にある光(前書き)

XX

「ん？あなた、どうした？」

あなた

「あ、作者さん？…実は今回、ちょっと嫌な事が…。」

XX

「あ、あの事か。ま、気にしなさんな。いつも通りにやればいいから。」

あなた

「そだね。ま、気を取り直していつてみよー！」

XX

「今回は、龍騎とあなたの新たな能力が明かされるよ！」

あなた

「さあ始まるぞますよー！」

シャイアン

「派手に逝くぜー！！」

唯

「フンガー！」



## TOUR 7 闇の中にある光

唯とこなた、そしてシャイアンは丘の上の公園にやって来たものの、既に誰もなく静かであった。

「確かに、ここだな。」

「うん、ここだね。…キバット、反応はどう？」

キバットは全感覚を研ぎ澄ませ、辺りを見回す。

『確かにここで戦闘があった、まだかすかに反応が残っている。』

こなたは、キバットを呼び寄せ念話で話を始める。

(ところで、パティちゃんはどうなった?)

(ああ、うまく彼女の精神世界に飛び込めた。今頃は敵のアジトの所にいるはずだ。)

実は、公園に来るまでの間に、こなたは自らの精神世界から1人の仲間をゆのの精神世界に飛び込ませていた。

彼女の名は、パトリシア・マーティン。仮面ライダーキバである。

彼女は、同じ負の力を持っている者の精神世界に入り込み、その者が危機に陥った時にキバの力を与える能力を持っており、こなたはゆののそばにいてくれる様にと彼女に頼んでいたのである。

「ねえキバット、彼女がどこにいるのか教えて。」

『よっし、任せなつて。』

こなたの手からキバットが飛び立つと、反応のある方角を探し当て、

シャイアンに伝える。

『分かったぜ、ここから南にある大きな倉庫だ。…しかも、大物ク  
ラスが2人いるぜ。』

大物…だと…？

シャイアン達は急いでバイクに飛び乗り、南の大倉庫を目指して出  
発した。

一方、シャンゼリオンはパロモルス相手に苦戦を強いられていた。  
剛腕に物を言わせる攻めに、シャイニングセイバーで応戦していた  
が、ジリ貧に変わりがなかったからだ。

「乃莉スケ、なずな、逃げろっ！！」

シャンゼリオンに促され、2人は近くのビルへと避難した。

「これ以上は…！！」

しかし、パロモルスの猛攻は留まる事を知らない。

やがて、シャイニングセイバーが悲鳴を上げて折れてしまった。

「…！！しまった…。」

次の瞬間、シャンゼリオンの体は宙を舞い、道路に叩きつけられて  
しまった。

（も…もう駄目か。）

ピクリとも動かず、最早死を待つしかないと覚悟するシャンゼリオ

ン。

「せ、先輩!!」

「…うそ、嘘よね!」

乃莉となずなも、既に声を失い立ち尽くしている。

『ぐあああああ…?!』

と、その時。

1台のバイクがパロモルスの前に立ちふさがった。

そう、唯とこなただ。

シャイアンが、2人に宮子の応援に行ってくれと頼んだ為だ。

シャイアンは、キバットを連れて大倉庫へと向かっている。

「お待たせ、宮子ちゃん!…さあいくよ、ゴリラもどき!!」

2人がバイクを降り、唯が前に立つ。

そして、懐から赤いバツクルを取り出し、腰に装着した。

「!それって…!!」

こなたは赤いバツクルを見て驚きの声を上げる。そう、彼女にとってそのバツクルは忌むべき存在。心の傷なのだ。

「唯ちゃん、何故それを持っているの…!!」

「…え?最初から持っていたよ。」

…嘘だ。そんなの嘘だ!あれは確か私の世界に置いてきたはず…。

なのに、何故…!!

だが、迷っていても仕方がない。

こなたは、改めて精神を集中させ、仲間を呼び出す。

『お待たせ、泉ちゃん。』

再びあやのを呼び出し、カードデッキを手にバックミラーの前に立つ。

デッキをバックミラーに写す。現れるVバツクル。

「『変身!』!」

デッキをVバツクルにセットするや、あやのはこなたと重なり、左右から来る幻影と融合し、龍騎への変身を完了させる。が、今の龍騎は全身が白だった。

よく見ると、カードデッキ自体も白く中央には龍ではなく獅子のシンボルが描かれている。

そう、これこそあやの龍騎のもう1つの力、光騎。

あやのの持つ龍騎のカードデッキは、実はリバーシブルになっており、龍騎と光騎の2種類に変身が可能なのだ。

そしてバイザーは、左腕のドラグバイザーに代わり右手に持つランサー型のレオンバイザーへと切り替わっている。

「全力でとばすよ、あやのさん!」

『うん!』

唯もまた右手にUSBメモリー風のアイテム『ガイアメモリー』を

手にし、スイッチを押す。

『ジョーカー!』

「変身!」

そして、ガイアメモリーをバツクル…ロストドライバーに装填し、  
Lの字に倒す。

『ジョーカー!』

唯の体を黒い旋風が包み込み、漆黒の戦士となる。

仮面ライダージョーカー。こなたが畏怖する、『切り札の戦士』。  
ジョーカーとK光騎は、パロモルス目掛けて打って出る。

さて、その頃。

大倉庫の壁に貼りつけられ、身動きが取れないミラージユが、目を  
覚ました。

『…ここは。!!貴様は!!』

彼の目の前に、倒すべき存在が姿を現している。まるで動く漆黒。  
昆虫とも哺乳類ともとれる、様々な動物の部位が寄せ集まったかの  
様な戦士。

それこそが黒の世界の支配者、闇將軍シュバルツ。  
その傍らには、先程戦っていたホーロイの姿も見える。

『ホーロイ…シュバルツ…!!』

ミラージュは、苦々しい眼差しをシュバルツに向ける。

『久し振りだな、ミラージュ。…随分と荒れている様だが。』

『今、貴様に話す舌はない。同族として、恥ずかしいぞ！』

シュバルツは、手にしたワイングラスに並々と注がれたワインを飲み干し、ミラージュに向き直す。

『まあそついきり立つな。久々の対面ではないか。ゆっくり話をしよう。…この女を始末してからな。』

ホーロイがシュバルツの右腕に黒い装置を取り付ける。

これこそ、闇の末裔が恐れる肉体分離器『ストームブリンガー』。

これにかかれば、どんな屈強の戦士でも、たちどころに肉体と精神が分離され、普通の人間と黒の世界の住人に分離されてしまうのだ。今まさに悪魔の装置がミラージュに向けられ、スイッチが入る。

フイイイイ…ン。

『ぐわああああっ！』

低く、どよめく様な音と共に。

ミラージュとゆのの体が分離され、ミラージュ…知也の姿がドサリと倒れて現れる。

整った顔立ちに少し鋭い眼差し、銀の髪に細いシルエット。

更にその身を包む、黒のシャツ、黒のズボン、黒のロングコート。

それが、知也の人間体。ゆのを励まし、勇気づけた者の正体。

『うう…。シユバルツ…!』

『ふん、ようやくのお出ましか。』

『で、シユバルツ様。小奴をいかが致します。』

シユバルツは、腰に差した將軍劍ダーク・カリバーをゆのの喉元に押しつける。

『まずは、この女を処刑する。』

『待て、やめろ!彼女は関係ない!』

『黙って見ておれ。お前をたぶらかし、墮落させた小奴に何の価値がある?…答えは皆無だ!』

『くっ…!ゆ、ゆの…すまない。私は、何もしてやれなかった。許してくれ。』

ダーク・カリバーの切っ先が、ゆのに襲いかかる…その時。

ガッツ!!

シユバルツの顎に何かが当たり、重心が取れず無様に倒れ込んだ。

『な、何だ今のは…!』

空中に浮かぶ、コウモリらしき物体。

そう、キバット三世だ。

『はい、残念です…!』

『くそっ、あのコウモリめ…!』

忌々しそうにキバットを見上げるシユバルツ。

すると、気を失ったはずのゆのが、急に目を覚まし、ニコツと笑う

やミラージュにウィンクした。

『キバット、よくできまシタ!』

『ま、俺にかかればこんなもんよ。』

『OK、キバット!』

いきなり片言の外人風に話すゆのを見て、ミラージュは呆気に取られていた。

『おい、その黒いの。』

『…あ、すまない。どうした?』

『早く変身するんだ、こいつを倒すんだろ?』

ミラージュは、キバットに促され右手を上げた。現れる黒い荊のベルト。

『変身!』

右手を振り下ろし、光に包まれて仮面ライダーミラージュに変身する。

『キバって、いくぜー!』

キバットも、ゆのに噛みつき魔皇力を注入し、鎖と共に現れたベルトに、自ら逆さにセツトする。

『『変身!』』

まるで超音波の様な音と共に、ゆのは仮面ライダーキバに変身、腕にはめられた金具を引きちぎりそのまま着地し、シュバルツに向き

合った。

『…これで形勢逆転だな。もうお前に勝ち目は無い!』  
『くそっ!!--』

すると、そこへシャイアンが遅れて現れた。

「…お前がシュバルツか。」  
『現れたな、世界の破壊者!やはり、あの男が言った通りだったな。』

あの男?

シャイアンは、ヘルメットを外し、シュバルツを睨みつける。

「…その男とは誰だ。」  
『ふん。貴様に教えたところで、何が出来る。』

シャイアンは、クロノ・ドライバーを腰にセットすると、ライド・クロニクルからカードを取り出し、シュバルツに迫る。

「知らなければ、戦って聞くまでだ。…マスカ・レイド!!」

【マスク・ライド デイケイド!!】

シャイアンがADになると同時に双方は動き出し、戦いの火蓋が切られて落とされる。

そして、唯とこなたの戦いも佳境を迎えていた。ジョーカーの華麗な足裁きに加え、K光騎のランサーによる斬撃によりパロモルスを

押していく。

流石の機械類も連続攻撃の防御には向かないらしい。

『うううううう…』

と、ここでK光騎はバイザーの柄の付け根にあるスロットルを開き、カードデッキからカードを引き、スロットルに装填する。

【ストライク・ベント】

バイザーが消え、そしてK光騎の真上から人型の白い獅子の頭を持つ空飛ぶモンスターが現れる。

これが、光騎の契約モンスター・ブライトライガーである。

そして、ブライト・ライガーの右腕に似た武装が、K光騎の右腕に装備された。

巨大な針状の武器・ブライト・バンカーでパロモルスの胸倉を狙い、一撃を加える。

ガシッ！！

重い一発が命中し、パロモルスを守る機械類がスパークする。

と、パロモルスの肉体から大量の血が流れてきた。

「あの機械類って、鎧の役目だけじゃなかったんだ。」

「うん、どうやらあの怪力分のダメージを吸収するバリアーも兼ねていたんだ。」

勝機あり！

そう読んだ唯は、右の腰にあるスロットルに、白いガイアメモリを挿入する。

そのメモリにはUの一字が刻まれており、スイッチを押し、メモリを起動させる。

【ユニコーン・マキシマムドライブ!!】

「ユニコーン・ライダーパンチ!!」

ジョーカーの右手が白い渦に包まれ、重量級のパンチが決まる。

『グオオオオオッ!!』

更に火花を上げ、きしむ機械類。

更に畳み掛ける様に、K光騎が新たにカードを引き、シャインバイザーのスロットルにセットする。

【リターン・ベント】

龍騎と入れ替わるカード「リターンベント」により元の龍騎に戻るや、こなたがあやのに話しかけた。

「あやのさん、あれをやるよ。…ちょっとくすぐりたいけど。」

『え、でも…きゃあああああっ!!』

するとどうだろう。K龍騎が逆さになり、そこから変形を始め、遂には一体の巨大な龍に変わってしまった。

リュウキ・ドラグレッダー。龍騎のファイナル・フォーム・ライドである。

これも、こなたの能力の1つ。

仲間の変身するライダーに可変能力を与え、戦況を有利に導くセル

フ・ファイナル・フォーム・ライドである。

『泉ちゃん、ひどいよ。(泣)』

「ごめんね、あやのさん。…でも、これで何とかなるかもしれないよ。」『…うん。(ぐすん)』

そしてすかさず、唯に話しかける。

「唯ちゃん、そっちも準備して！」

「うん!!」

ジョーカーは、ユニコーンのメモリを抜き、ジョーカーのメモリを挿入しスイッチを押す。

【ジョーカー・マキシマムドライブ!!】

「『ファイナル・アタック・ライド リ・リ・リ・リュウキ!!』」

3人の息と技が融合した、三位一体技・ジョーカー&ドラゴン・ライダー・キック。

今それが、パロモルスに命中した。

『グアアアアアッ!!』

パロモルスは、光となって消滅し、2人のライダーが残る。

一部始終を見て唾然とするシャンゼリオンと乃莉達。まるで、狐につままれたかの様に。

「す…すごい。」

「…。」

「…。」

まさに言葉にならない、とはこの事か。

「あ、そうだ！！シャイアンさんの所へ急がないと！！」

K龍騎は、あわててバックミラーからミラーワールドに飛び込み、大倉庫を目指していた。

残ったジョーカーもバイクに飛び乗り、後を追う。

そして大倉庫では、AD・ミラージュ・キバとシュバルツ・ホーロイとの決戦が続いていた。

キバのトリッキーな動きに流石のホーロイも攻めあぐね、ミラージュとコンビネーションで形勢はより一層不利になっていく。

『…ならば、先程の手で！！』

ホーロイが黒い楔状の物質を再びミラージュに打ち込む。

が、ミラージュに届く前にADがキックを駆使してはたき落とす。

「随分とセコい真似をするな。…許さん！！」

ライド・クロニクル・ソードを構え、カードを一枚手にし、セットオンする。

【ファイナル・アタック・ライド デイ・デイ・デイ・デイ・デイケイド

！！】

A Dの前に10枚のオーラ・カードが展開し、A Dが前進する事で力が収束され、黄金の刃を生み出す。

その刃はホーロイを斬り裂き、更にもう一太刀浴びせる。

『…こ、こんな事があって…!!』

ホーロイは、体の各部から小爆発を起こし、やがて大爆発を起こして消滅した。

『ホーロイ!!…おのれえっ!!』

シュバルツがダーク・カリバーを振るい、黒い斬撃をキバに放つ。

『…し、しまっ!!』

『オーマイガート!!』

キバが咄嗟の一撃に対処出来ず、防御の構えを取ろうとした時。

バチバチバチッ!!

何者かがキバの前に立ち、守ったのだ。

それは、何とミラージュだった。

しかも、アサルトにもならず。

「知也!」

『おい、大丈夫か?!』

『シツカリしてくだサーイ!!』

ゆの達が心配するが、ミラージュは尚も前を見据え、揺るがぬ闘士を見せる。

『私なら大丈夫だ。…ゆのは、私が守ってみせる。』

その光景に、シュバルツは動揺した。

黒の世界の者に、そんな甘い感情があったとは。まさか、そんな…。

「やはり、お前は何も分かってなかった様だな。」

ADがシュバルツに口を開く。

「たとえ異なる世界の者であっても、支え合い、助け合う心を持つ者はいらる。ミラージュは、それを自らの身を以て証明した…。」

『これ以上、お前の好き勝手にはさせない!!』

すると、ライド・クロニクルから3枚のカードが飛び出し、ADの手に収まる。

マスク・ライド、ファイナル・アタック・ライドと共に、新たにファイナル・フォーム・ライドが加わっている。

ADは、迷わず新しいカードをセットインする。

【ファイナル・フォーム・ライド ミ・ミ・ミ・ミラージュ!!】

「少しくすぐつたいが、よろしいか？」  
『？何だ急に。…って、うおおっ?!』

A Dが背後に回り両手をかざすと、ミラージュの体が黄金に輝き、アサルトとクイツクの装備が同時に装備された。

これぞ、ミラージュとゆのの心の絆にA Dの絆が加わった『シャイニング・ミラージュ』。

あれが、ミラージュの力だと?…ふざけるな!!

シュバルツは、ダーク・カリバーを振るい、ミラージュに斬りかかる。

がしかし、黄金の刃が凶刃を食い止め、返しのアーム・セイバーで胸部を斬り裂く。

『ぐあああああっ!!』

後ろにのけぞり、傷口を押さえ立ち上がるシュバルツ。

A Dは、それに構う事なくカードをセットインする。

【ファイナル・アタック・ライド ミ・ミ・ミ!ミラージュ!!】

すると、ミラージュとA D、そしてキバの体が数体に分裂し、その手には光の刃が握られていた。

これぞミラージュの名の由来たる『ディケイド・ミラージュ・シャイニング』。

「す、すいじ…。」

『じいっあ、すいじぜ。』

『ワンダフル!!』

キバとキバット、パティが驚きの声を上げる中、ADとミラージユは数体の分身と共に黄金の刃をシュバルツに振り下ろす。キバも、遅れを取る事なく振り下ろす。

シュバルツの装甲は光り輝く刃により脆くも斬り裂かれ、黒い欲望の塊は光の中へと消えていく。

『これが、光の力…。これが、光の世界…。そして、闇の中にある光…。』

シュバルツは光と化して消滅し、この世界は救われた。

変身を解いたゆのとミラージユ。

とここで、割れた鏡からK龍騎が現れ、3人の元へ駆けつける。

「…やっと、終わったね。」

「ああ。」

K龍騎が安堵の吐息を漏らすのと同時に、ミラージユとゆのが再び融合し、元の鞘へと戻っていった。

さてその頃、ひだまり荘で触れる事のなかった、ゆのの先輩たる土方ヒロと近藤沙英は何をしていたか。

「ZZZ…。」

「すやすや…。」

沙英は同人誌の締め切りに追われ、ヒロは彼女のサポートに走り、2人して疲れて眠っていた。お疲れ様です。

そして唯は……道に迷っていた。

明けて翌日。

いよいよこの世界との別れの時が迫っていた。

「これで、お別れですか。何か、寂しくなりますね。」

悲しい顔をし、別れを惜しむゆの。

「だが、あなたには彼がいるじゃないか。…その絆、いつまでも大切に。」

「そうだよ、それにこれが最後じゃないんだよ。」

「またいつだって会えるから、心配しないで。」

3人の言葉に勇気づけられるゆの。

『ゆの、私もついている。大丈夫だ。』

「知也…。うん、ありがとう。」

改めて、頬を赤らめるゆのに、宮子が軽く肩を叩く。

「それだけ元気があればまず大丈夫だな。…シャイアン、また今度

手合わせしてくれよな。待ってるから。」

「ああ、その時は手加減無しだ。」

そして、3人はバイクを走らせ、次の世界へと旅立った。

がしかし、遠くで見ていた黒い服の男もまた銀の壁を通り、次の世界へと移動する。

シャイアン、次こそは…！！

銀の壁を通り、次にやって来たのは、何故か大草原のど真ん中であつた。

「何、こじ。」

「ふむ、ここは一体…。」

「ん、どこだろう。」

取りあえず、バイクを走らす一行。

だがここで、彼らはある物を目撃した。

それは、石を積んだだけのサークル。

しかも、かなり古い時代の物だ。

「！まさか…。」

シャイアンは見覚えがあるのか、衝撃的な一言を口にした。

「ここは、アイルランドだ。」

「ア、アイルランドオオオオオっ!!」

図らずも、アイルランドまで来てしまった一行。  
この世界を守るライダーとは、一体何者なのか？  
そして、この世界で待ち受ける出来事とは？

T O U R 7 E N D

T O U R 8 へ 続 く

TOUR 7 闇の中にある光（後書き）

次回「仮面ライダーアナザーディケイド 青い瞳の破壊者」は、

「我が名はケイン、仮面ライダールウなり！」

「神官様、大変です！！フェイト様が！！」

「バロールめ……！！」

「わしに齒向かおつとするな……！！」

TOUR 8

「仮面ライダールウの世界〜リリカルなのはfeatケルト神話〜  
ブリューナク」

混沌の世界を斬り開け、太陽神ルウ！！

XX

「今回は、久々に2つに分けて更新します。」

こなた

「それに加えて、私の方にもちょっとだけ変化があるよ!」

XX

「更に、ちょっとだけ読みやすくしてあるから(変わっていないか  
つたらごめんなさい)ね。…そして、あのヒーローもマスク・ライ  
ドで登場!」

こなた

「では!」

こなた

「さあ始まるぞますよ!」

シャイアン

「いくぜ、いくぜ、いくぜえっ!」

唯

「フンガー!」

モモタロス

「おいおいおいっ!!俺のセリフを取るなああああっ(泣)!!」

あなたは、魔法と聞いて何を思い出しますか？

魔法使い？…それとも、魔法の道具？

ないしは、魔法の世界？

確かに、そう答えても間違いではないかも知れません。

しかし、その魔法という概念を作ったのは誰か？と訪ねたら、どう答えますか？

それこそが、今回シャイアンが訪れた世界、魔法の世界の一族：ダ  
ーナ神族なのです。

次の世界にやって来たものの、いきなり草原のど真ん中に放り込ま  
れ、困り果てるシャイアン一行。

あまつさえ辺りには民家すら見あたらない最悪の状況に、しかしシ  
ヤイアンはむしろ喜んでいた。  
何か、感じる物があるようだ。

「何だ、この高揚感は。…久々に心が踊るな。」

「そんなにうれしいの？…ストーンヘンジ以外何も無いのに。」

さすがのこなたも、呆れた顔をしてシャイアンを見ていた。

「ま、それが男の世界、踏み込めない領域ってやつなのかねえ。」  
「あはは、そ〜だね〜。」

唯もにこやかに答える。

やがて、ストーンヘンジの東方面から朝日がのぞき始めていた。  
現在の時刻は午前6時過ぎ。  
朝日がストーンヘンジを照らし、3人を祝福する。

「きれいだねえ…。」

「ああ。」

「映画のOPみた〜い。」

3人が感動に浸っていた、その時。

「ぎゃあああああつ!!！」

悲鳴が森の方から聞こえた。

3人が森の中に入っていくと、1人の男が背の低い妖精に襲われていた。

その妖精は、醜悪かつ凶悪な顔つきに、それに見合う小柄で細身な体型、更に血のような赤い帽子にチヨッキを纏い、より不気味な印象を与えている。

レッドキャップ。ヨーロッパに伝わる古い伝承に登場する、凶悪な死の妖精。

今その一団が、追いかけて来たのだ。

「こ、こいつらは!!！」

「な、何あの不気味な妖精は!!」  
「こ、怖い…。」

シャイアンは、すかさずクロノ・ドライバーをセットし、カードを手にする。

「マスカ・レイド!!」

【マスク・ライド デイケイド!!】

セットインを素早くこなし、ADに変身するやレッドキャップの団に向かっていった。

唯もロスト・ドライバーを腰にセットし、ジョーカーのメモリーを手にする。

『ジョーカー!!』

「変身!!」

ジョーカーメモリーをロストドライバーのスロットルに挿入し、一気に倒す。

『ジョーカー!!』

仮面ライダージョーカーに変身し、男に襲いかかるレッドキャップをミドルキックで迎撃する。

だが、こなたの方は難航していた。

「あやのさん、お願い!!」

『ごめんね、泉ちゃん。ちょっと、今は…。』

実は、前の世界で無理矢理ファイナル・フォーム・ライドをしたため、あやのは精神的に参っているのだ。

「ううん、どうしよう。」「  
すると。」

『チビすけ、私なら大丈夫だってヴァ。』

「あ、みさきち。丁度よかった、人手が足りなくて困っていたんだ、助けて！」

ショートヘアーに八重歯の中性的な少女、日下部みさおが助け船を出した。

『みさちゃん、お願いね。』

『あやの、任せて！』

こなたの隣に、いつもの通りにみさおが現れた。

「…あれ？」

何故か違和感を覚えるこなた。

通常なら半透明で見えないはずだったが姿が見えていたからだ。どうやら、こなたの精神世界にも異変が起こっているらしい。

『…チビすけ、私が見える？』

「うん、よく見えるよ。でも、どうして？」

『ちゅあ…。』

が、今はそんな事を言ってるひまはない。

こなたは、右手に持つブレイバツクルに既に刺さっているカードを左手で押し入れ、腰にセツトする。

みさおも、こなたと同じ動きをする。

ベルトが巻き付かれ、変身の構えを取り、そして。

「『変身！！』」

ブレイバツクルにあるレバーを引き、スペードのエンブレムを現す事でオリハルコンプレートが彼女達の前に出現する。

こなたとみさおの2人が走りだし、オリハルコンプレートを同時に通過し、カブト虫がモチーフの青いライダー・ブレイドが姿を現した。

「いくよ、みさきち！！」

『おうっ！！！！』

Kブレイドは、手にしたブレイラウザーを振り回しレッドキャップを斬り伏せていく。

だが、レッドキャップの数は減るどころかますます増えていく。これではきりが無い。

「こなたちゃん、なかなか数が減らないね。」

「そうだね、唯ちゃん。なら、私にいい考えがあるよ。…みさきち、ちよつとくすぐったいけど、いい？」

『あれやるのか？…いいいぜ、丁度こいつらの多さにウンザリしてたところだったから。』

Kブレイドは一呼吸した後、2人同時に叫ぶ。

「『ファイナル・フォーム・ライド ブ・ブ・ブ・ブレイド!』」

すると、Kブレイドの体が空に浮かび倒立すると、背にカードデッキが装備され、足にブレイラウザーが挟まり巨大な剣の姿になる。これぞ名付けて、ブレイドブレード。

「唯ちゃん、これを使って!」

「うん!」

ショーカーがブレイドブレードを手にすると、腰から新たなメモリーを取り出した。

『サイクロン!』

そして、サイクロン・メモリーを腰のスロットルに挿入し、スイッチを入れる。

「いくよ、みさきち!」

『よっしゃ、いくぜ!』

2人も呼吸を整え気合いを高める。

「『ファイナル・アタック・ライド ブ・ブ・ブ・ブレイド!』」  
『サイクロン・マキシマムドライブ!』」

一方、ADも巨大な剣を手にしたジョーカーを見て、横の方へ避けた。

「なるほど、こづいう手もあるか。」

ADが呟く。

サイクロンの力とブレイド・ブレイドの雷撃を纏い放たれる斬撃、サイクロン・アンド・ライトニング・スラッシュ。

その一振りで、レッドキャップの一団は瞬く間に壊滅した。

「これはすごいな。」

流石のADも返す言葉がなかった。

その威力、まさに無双。

変身を解いた唯とこなたは、男の元に駆け寄る。

「大丈夫ですか？」

「ああ、大丈夫だ。…しかし、君達って強いね。」

「えへへ。」

照れる唯とこなた。

が、ADだけは変身を解除せず、ある一点を見つめていた。

その視線の先にあったのは、またしても何かの一団であった。

しかし、先程の者とは違い何処か神々しい感じですらある。

白いスーツに剣を帯び、手には槍や斧を装備した、戦士か騎士を思わせる数十名の後方には、神官らしき者が3人控えている。

やがて、その一団のリーダーらしき男が前に出、ADに声をかけた。

「お前が、ディケイドか？」

「そつだ。…お前の名は？」

「私の名はケイン。仮面ライダールウだ。」

「ルウ？」

ルウ…それは、ケルト神話における太陽神であり、最強の神でもある。

また、彼の持つブリューナクという槍は30もの穂先を持ち、狙えば誤りなく敵を撃ち抜く威力を持つという。

「そつか、彼がこの世界のライダー…。」

「ええつ、あんなおじさんが？」

確かに、見た目は40代前半で線がガツチリとしている。

顔つきはワイルドそのもの、髪もボサボサの長髪とイケメンとはかけ離れている。

こなたの発言にカチンときたのか、ケインは声を荒げる。

「誰がおじさんだ!!」

「…ご、ごめんなさい。」

「うむ、素直でよろしい。」

こなたが謝り、ようやく話が落ち着く。

「ところで、お前の強さが本物かどうか、少し見せてもらおうか。」

「…別に構わないが。」

ケインは、手にした槍に取り付けてある横長で六角形のバックルを外すと、それを腰に取り付ける。

すると、バックルから3本の鎖が飛び出し、腰を一周してバックルに接合した。

どうやら、鎖がベルトの役割を果たしている様だ。

ゴーン、ゴーン、ゴーン…。

教会の鐘の様な待機音が草原にこだまする。

「変身!!」

ケインの頭上に太陽の光が集まり、一つの輪となって体を通過する。そこから現れたのは、白金の鎧に包まれたライダーの姿。

騎士の様な風貌に、剣と槍が合わさったランサーを手に持つ、威風堂々とした佇まい<sup>たたず</sup>。

これが、仮面ライダールウである。

「わあ…。」

「かつこいい…。」

こなた達も、美しい姿に惚れ惚れとしていた。

「では、いくぞ!」

「来い!!」

ADはライド・クロニクル・ソードを手にルウに斬りかかるが、ランサーとの長さがネックとなり、なかなかどうして手こずっていた。

「どうした、我がブリューナクに恐れおののいたか!」

が、ADとてそこまで間抜けではない。  
クロノ・ドライバーからの情報により、すかさずライド・クロニクルをガンモードに切り替え、カードをセットインする。

【アタック・ライド ブラスト!!】

後方へと跳ねながらガンモードで迎撃するAD。  
が、ルウはブリューナクから光弾を30発生み出すと、それを一斉に発射した。

「!!」

慌ててガンモードで光弾を撃ち落とすが、その内の数発が弾幕をかいくぐり、ADに命中した。

だが、ADは一瞬姿を消した。…いや、姿を変えたのだ。  
そう、命中する前にライド・クロニクルからカードを出し、セットインを済ませたのである。

【マスク・ライド ウィングマン!!】

かつて、グランザムの世界で彼らを助けた者：ウィングマンの力を借り、光弾を回避したのだ。

【フォーム・ライド ウィングマン ガーダー】

次のカードをセットインすると、ウィングマンの体に鋼鉄の装甲が装備され、白銀の翼を広げ急降下した。

ウィングマンの急所や負傷しやすい箇所に配されているガーダーは、

頑丈な反面重い事がネックになるが、このガードーは重さがあまりなく、むしろ扱いやすくなっている。

「くっ、そんな小細工が通用すると思うなよ！」

ADウィングマンとルウが、今まさに激突せんとする、その時。

「2人共、おやめなさい！！」

2人の戦いを止める者がいた。

その者は見た目9才位の少女で、ゆったりとしたローブを纏い、頭には縦長の帽子をかぶり、ブラウンのロングヘアをサイドテールに纏め、幼きながらも凛々しさを兼ね備えている。

2人の戦いを止めた少女は何者なのか？

PART 2 続く。

XX

「さて、今回はここまで。」

こなた

「今回は少し長くなりそうだね。」

XX

「ああ、元が神話だから尚更気合いを入れないとね。」

こなた

「なのはちゃんも、まだ出てこないしね。」

XX

「そこも、気合いで何とか。」

こなた

（本当に大丈夫かなあ、なんか心配だよ…。）

XX

「というわけで、バイバイ！」

TOUR 8 ブリューナク PART 2

仮面ライダールウとADの激突を止めた少女。

その少女は、両者の前に立ち柔らかな口調で話し始めた。

「ケイン、今回の私達の目的を忘れたのですか？」

「…はい、太陽神ルウ様の神託を受けるためです。」

「分かってくれればいいのです。」

少女の言葉に圧倒されるAD。

(この少女、出来るな。)

お互い変身を解除し、皆は自己紹介を始めた。

「我が名はケイン、仮面ライダールウなり!!」

「私の名はシャイアン。よろしく。」

「私は泉こなただよ。よろしく。」

「私は平野 唯です。よろしくね。」

そして、少女も自己紹介を始めた。

「私の名はナノハ・レイランド、よろしくね。」

彼女の名を聞き、こなたは驚いた。

そう、こなたの世界ではナノハと言えばリリカルなのはの事を指しているのだ。

リリカルなのはと言えば、日本が誇る有名な魔法少女アニメであり、今現在も人気が高い。

そのなののが、名前こそ違うが目の前にいる。

今、こなたは興奮を抑えながら笑顔の彼女を見ていた。

ナノハによる太陽神の神託が厳かに執り行われ、そして立ち会ったシャイアン達に向き直り、こう告げた。

「ルウ様は、異世界から来たこちらの方々の力があれば、邪眼神バロールの野望を砕く事が出来るであろう、と告げています。」

ナノハの言葉に魔導士達からどよめきが起こった。

何より、あの『世界の破壊者』がバロールを倒す切り札に指名されたのだ。驚かない訳がない。

当のシャイアン本人も、驚きを隠しきれない。

「これはびっくりだ。…だが、指名された以上手は抜けられない。喜んでお引き受け致します。」

やはりシャイアンも家が代々騎士の系列、因果があるのであろう。表情が生き生きとしていたのは、言うまでもない。

その後、シャイアン達はナノハの誘いで太陽神教会のある街…ニユーグランデシティーにやって来た。

ちなみに、ナノハと護衛の騎士は一緒にバンに乗っており、その脇をシャイアンとこなたの乗るバイクとケインの乗るバイクが併走し、唯のバイクが後方を固める。

この街は、魔導士達の大半が職人を兼業しており、鍛冶屋はもちろん靴屋・洋服屋・食堂e t cが軒を連ね、中世の街並みにマッチしている。

また、科学や現代技術も大切にしているらしく、魔導士がバスに乗ったり、携帯電話を普通に使用したりと実に興味深い。

「これはすごいな…魔法と科学が見事に調和している。」

「そう、これが私の守っている街だ。」

こなたや唯も目を輝かせて街中を見回した。何よりこなたの反応は凄まじく、もう辺り一面をなめ回すように見ている。

「わぁ…何かすごいよね。」

「うん、おとぎの国に来たみたい。」

シャイアン達とケインが、にぎやかに会話を交わしながら太陽神教会を目指していく途中。

ピ、ピ、ピ…。

ナノハの懐にしまつてあつた携帯電話が鳴りだした。携帯電話を取り出し、連絡を受ける。

「あ、もしもし。」

電話の相手は、太陽神教会の魔導士であつた。

『神官様、大変です！！フェイト様が！！』

「…一体、何があったのですか？！」

『バロール軍の部隊に襲われました！！只今、教会に待機している騎士達が迎撃していますが…。』

「フェイトちゃんか？！」

『とにかく直ぐに引き返して来てください！！』

フェイトちゃんが？…襲われた！？

ナノハは魔導士に大至急引き返すと伝えたと、慌てて太陽神教会へと向かう様にドライバーに指示し、先を急いだ。

「？何かあったのかな。」

「あの慌てようから察すると教会で何かあったようだ。」

シャイアンもナノハに起こった事態を察し、ケインに目で合図する。ケインも、シャイアンの合図を理解し軽くうなずく。

唯も理解したのか、シャイアン達に食らいつく様について行く。

ニューグランデシティーの郊外にある、まるで要塞のような教会。そこが太陽神教会である。

今、そこではバロールの放った刺客と教会附属の騎士達が死闘を繰り広げていた。

数では騎士の方が上回っているが、何より相手がダークエルフヤレツドキャップの混成部隊である。

魔法や飛び道具を駆使して相手を翻弄しつつ、騎士を撃破していったのだ。

がしかし、ケイン達の帰還により形勢は逆転した。

『くっ、戻るのが早すぎる…！』

ダークエルフの1人がぼやく。  
シャイアンは、バイクからの折り際にすかさずADに変身し、ダークエルフをライド・クロニクル・ガンモードで撃破していく。  
そして、ケイン達も騎士に守られながら教会にたどり着いた。

「あ、ちょっといい？」

とここで、こなたが立ち止まり少し念を送り始めた。

騎士達は最初、魔法が何かを使うのかと思っていたが、こなたの隣りから実体を持った少女が現れた事に驚き、少し引いていた。  
これが、こなたの更なる能力、セパレート・スピリット。

本人の変身を封印する代わりに精神世界の仲間達を実体化し、召喚する力である。

どうやら、この世界にやってきてから発動したらしい。

さて、こなたが召喚したその少女は、こなたより背が少し低く、ピンクのミドルヘアをサイドテールにまとめ、おとなしい印象を皆に与えている。

「ゆーちゃん、後をお願い。」

『任せて、お姉ちゃん。』

少女…小早川ゆたかは、そう言うやベルトを手に走りだし、腰にセツトするとピンク色のスイッチを押し、何かを呼びだした。

『来て、パピヨンちゃん！』

『…はい、かしこまりました、ゆたか様。』

ゆたかの背後から現れた、アゲハチヨウをモチーフとしたイメージ…パピヨンイマジンが、ゆたかの中に入り込むと、ゆたかの髪の毛の

部に金のメッシュが装着され、一体化した事を示す。  
柔らかな音楽が教会内に響き、右手から手品の様に黒いパス…ライ  
ダーパスを取り出すと、ベルトにセタッチした。

『『変身!!』』』

【パピヨン・フォーム】

すると、ゆたかの体にオーラスキンが形成され、ピンク色のオーラ  
アーマーが装着された。

これが、ゆたかの変身するライダー、New電王・パピヨンフォー  
ム。

見た目こそNew電王に似ているが、基本スペックはそれを上回っ  
ている。

彼女は、腰にセットされていたデンガツシャーを走りながら組み立  
てると、敵陣目がけて攻撃を開始した。

『さあ、手加減なしでいきますよ!!』

デンガツシャー・ザンバーが数体のレッドキャップを斬り倒し、更  
にダークエルフをも斬っていく。

その活躍に、騎士達も呆然としていた。

が、ダークエルフ達は魔法陣を展開し、新たにワーウルフを召喚し  
たのである。

二本足で立つ狼、といった姿のワーウルフは、New電王にダッシ  
ユで間合いを詰め鋭い爪を突き立てた。

ガシッ!!

爪はオーラアーマーの硬さをも苦とせず、深々と突き刺さる…はず  
が。

グアアアアッ！！

逆にへし折れてしまった。

この機を逃さず、空いた手でパンチを顔面に決め、一気に引き離す。だが、ワーウルフを大量に展開したためか今度は騎士側が不利になっていた。

「仕方あるまい。このまま見殺しには出来ん！！」

それを黙って見ていたケインがようやく重い腰を上げる。

ブリューナクを召喚し、バツクルを腰にセットし、ルウに変身する。

「こなたと唯は神官殿を連れてフェイト様の所へ！…そんなに数は多くないはずだ！」

ケインの声に答えるかの様に、2人はナノハと共にフェイトの部屋を指して走り出した。

「さあいくぞ！！」

ADとNew電王、そしてルウが揃い、3人は大軍目がけ一気に畳みかける。

ADの攻撃に加え、ルウのブリューナクによる光弾と電王の斬撃で、大軍は徐々に数を減らしていき、騎士達も3人の奮闘に遅れを取らじと武器を持つ手に気合いを乗せ、大軍に挑んでいく。

一方、こなた達はフェイトがいるであろう教会の三階に来ていた。

と、その時。

「！あれを見て！！」

唯が何かを見つげ、指を指す。

そこには、護衛の騎士2人が血みどろになって倒れているのが見え、扉もだらしなく開いている。

まさかと思いナノハが駆け寄ると、既に部屋の中はもぬけの空であった。

「…フェイトちゃん！」

ナノハは、自分の力の無さに涙を流し、こなたは拳を固く握りしめ悔しがった。

唯も、こなたの悔しそうな顔を見て、ただ呆然とするしかなかった。

ワウルフに、今ADのガンモードが命中し、爆発して消えた。…最後の一体が。

「これでラストか。」

「どうやら、そうだな。」

『お疲れさまです。』

パピヨンがADとルウの労をねぎらうと、『それでは、私はこれにて』と言い残し、こなたの元へと帰っていった。

その後、フェイトが既にいなくなっている事を魔導士から聞き、ケインは拳を地面に叩きつけ憤りを鎮めていた。

「バロールめ……!!」

一方、ここはバロールの本拠地・闇の領域。

漆黒が支配するこの領域に、1人の少女が運び込まれた。

少女を抱きかかえて現れたのは、グランザムの世界やミラージユの世界に姿を見せた、あの男であった。

「バロール様、例の少女です。」

『おお、よくやった。では、決戦が始まるまで牢屋につないでおけ。』

ブロンドのロングヘアをツインテールにまとめた、赤い目の少女……フェイト・テストアロツサは、領域の片隅にある牢屋に放り込まれた。動く気配も全くなく、ぐったりとしている。

だが、弱ったその体からかすかに光が放たれた。

光は尚も光り続け、闇を明るく照らし出す。

『わしに逆らおうとするな!!』

急に闇の奥から声が轟き、暗黒の障気がフェイトを包み込む。

フェイトから放たれた光が弱々しくなり、やがて消え失せた。

この声の主こそ、邪眼王バロール。

ケルト神話にその名を轟かす破壊の王にして、ルウの叔父にあたる神である。

『何とか鎮まったか……。しかし、わしを倒したルウの末裔が、よもやこんな形で我が軍門に下るとはな。まさにチャンス到来。今こそ

魔導士達を倒し、我が野望を成し遂げん!!」

邪眼王の笑い声が、闇の領域に響き渡る…。

TOUR 8 END

TOUR 9 に続く

次回「仮面ライダーアナザーディケイド 青い瞳の破壊者」は、

「あなたは？」

『僕の名は、紅 渡…。』

「本来なら、ブリューナクの使い手はナノハとフェイトだった。」

「今日こそ、バロールを討つ!!」

「いっちょ、派手にいってみるか。」

TOUR 9 「嵐の前触れ」

今明かされる、シャイアンの秘密……。

TOUR 8 プリユーナク PART 2 (後書き)

XX

「今回は、何かタイトルの割にハツタリ感が強い様な…。」

こなた

「結局、プリユーナクの出番も少なかつたし。」

ケイン

「全くだ。…次こそ頼むぞ、でないと見てくれる人がいなくなるぞ。」

「

XX

「何とかやってみるよ。このノベルを楽しみにしている人がたくさんいるんだ、気合いで乗り切るさ。」

こなた

「そう、その調子でがんばって!!」

シャイアン

「ところで、次回だと『あの方々』が現れるらしいな。」

XX

「あーっダメダメ、ネタバレ自重!」

シャイアン

「何、そうだったのか。すまなかつた。」

XX

「全く…。」

こなた

「ねえ、その方々もリイマジキャラ？」

XX

「（こなちゃんまで…。仕方がない）その通り、リイマジだよ。」

シャイアン

「こなたには甘いな、駄めg…アッー！！」

ドカーーーーンッ！！

ジュウウウウウ…。

XX ギガント装備

「もうやめれ、こなた達だって自重してるのに！！」

こなた

「まあまあ。と、とにかく次回をお楽しみに！」

シャイアン

「お楽しみにー。（髪型が30年前の鶴瓶になった）」

TOUR 9 嵐の前触れ（前書き）

XX

「今回は戦闘無し!!」

こなた

「…えっ!？」

XX

「その代わり、シャイアンに関しての秘密が少しだけ明らかに!」

こなた

「へえ、楽しみだね」

XX

「後、ラストに『あの方々』も!!」

こなた

「おお〜!!」

XX

「では今回も。」

こなた

「始まるぞますよ!」

かがみ

「また、それか。」

こなた

「あ、3年B組」

シャイアン

「元ネタが分からない。」

かがみ

「本当に中身は変わってないわね。」

こなた

「うぐうぐ。」

## TOUR 9 嵐の前触れ

フェイトがバロール軍の手に落ちた…。

事態を重く見たケインは、早速太陽神教会の神官達を集め、フェイト奪回の策を練り始めた。

もちろん、ナノハも対策を練りケインに提言したものの、神官達の反応は芳しくなく正直言って低迷していた。

一方、シャイアン達は教会の中庭で見習い達が支給していたスープとパンを食べていた。

この世界に来てから何も口にしていないため、3人はあつと言う間に完食する。

「随分長い会議だな。」

「…フェイトちゃんがさらわれたからねー。この分だと夜まで長引きそうだよ。」

「そだねー。」

「そうだな。」

こなたの言葉に頷く2人と、その時。

「！」

シャイアンは何者かの気配に気付き、その者がいるであろう方向へ走り出した。

「あつ、どうしたの？」

「こなた達は先に教会に入ってくれ。少し用がある。」

訳も分からず只呆然と走り去るのを見届けるこなたと唯。

シャイアンが教会の裏手に来た時、1人の男が木陰から現れた。

ブラウンの髪型に中性的な顔つき。

スリムな体型を包み込む赤いスーツ。

一見するとモデルかホストにも見えるその男は、シャイアンの姿を確認すると、ゆっくりとした足取りで歩み寄ってきた。

「あなたは？」

『僕の名は、紅 渡。』

「：仮面ライダーか？」

『はい、僕は仮面ライダーキバに変身します。』

「キバ。：。そうか、あなたがオリジンのキバか。」

シャイアンは、前の世界でゆのが変身したキバを思い出していた。

『ええ。：。確か、シャイアンさんでしたね。実は、あなたにまつわる情報を掴みまして、それを伝えに参りました。』

「私にまつわる事？」

『はい。あなたを倒し、今ある世界を破壊しようとしている存在についてです。』

「：その存在とは？」

『その者の名は、帯刀。たてわきく。かつて、他の世界の科学者と共にクロノ・ドライバーの開発に携わっていた人物です。』

「：ちよつと待ってくれ。まさか、今までの世界で起こった事件の裏に、帯刀が絡んでいたのか？」

『はい。ブラック・ビートを召喚したのも、闇將軍シュヴァルツに人類支配を勧めたのも。：。あなたが世界の破壊者と触れ込んだのも、

彼です。』

今、シャイアンは言葉では言えない位の怒りを覚え、拳を固く握りしめていた。自分のいた世界のみならず、他の世界にまで破壊の手を伸ばしていた事に。

「許せない。全くもって許せない！帯刀め！！」

『怒るのはごもっとも。…しかし、今は目の前の事態を解決するのが最優先です。』

「……………」

漸く怒りが静まり、冷静さを取り戻したシャイアンは渡に今まで気にかけていた事を1つ質問した。

「1つ、聞いてよろしいか？」

『ええ、どうぞ。』

「今の話とは全く関係ない話になるが、実はマスクライド・カードが全て燃え尽きる異変が起こってしまった。…こなたの変身も未だに腑に落ちない所がある。何がどうなっているのか教えてほしい。」

すると、渡は少しかぶりを入れながら、

『やはり、そうでしたか。こう言うのも何ですが、何故カードが燃えてしまったかは僕も分かりません。』

「…むう。」

『あと、こなたの変身についてですが、それは恐らく過去にあった事件と関係があります。』

「事件？」

『どういった事件かは分かりませんが、彼女にとって…恐らく忘れられない事件だと思いますね。飽くまで僕の憶測ですが。』

「…なるほど、な。」

「とにかく、彼女の存在は必要不可欠です。大切に守って下さい。」

「分かった。…今の私に守りきれるかどうかは分からないが、善処はする。」

渡は、にこりと笑みを返す。が、何か言い忘れたのか、あつと言う顔をして、

「そう言えば1つ言い忘れてましたが、あなたの持つクロノ・ドライバーの開発に、帯刀とあなたの父が関わっています。帯刀があなたを狙っている理由は、多分それもありますね。」

「それは、帯刀が私を狙う理由の1つと考えていいか？」

「…ええ、更に言えば彼女も対象に入っています。」

「こなたも？」

「はい。理由はよく分かりませんが。」

シャイアンには心当たりがあった。

数ヶ月前、シャイアンの父：ガラハド・ブルーローズが行方不明となり、その6日後に帰って来ていた事があったのだ。

まさか、その6日間に帯刀と共にロスト・ドライバーを完成させたというのか？

シャイアンは少し考えてしまったが、今は余計な事を考えている暇はない。

「…貴重な情報をありがとう。」

シャイアンが渡に感謝の言葉をかける。

がしかし、渡の体が急に透けてきていた。

ノイズらしき雑音も入り、徐々に透けていく。

「渡、体が…。」  
『大丈夫、これはホログラフです。ご心配なく。それよりも、帯刀には十分気をつけて…。』

そして、渡のホログラフは消滅した。

クロノ・ドライバーの開発者にして私を倒そうとしている者、帯刀。何故、私をつけ狙っているのか？どうして、こなたも狙っているのか？

…だが、後に彼は知る事になる。帯刀がシャイアンとこなたを狙っている理由を。

シャイアンがこなた達の元に戻り、神官見習いから教えてもらった部屋でくつろいでいた、その夜。

コンコンコン。

誰かが扉をノックする音がした。

一体誰だと扉を開けると、そこにいたのはケインとナノハであった。

「ケイン、それにナノハちゃん。一体どうした？」

「いや実は、ワインを一杯どうかと思っただけ。」

そう言うと、ワインの入ったボトルを見せ、部屋に入ってしまった。ケインは更に袋に入っているチーズと生ハムも取り出し、持参した皿に盛り付けると、これまた持参したワイングラスにワインを注ぎ、その場にいたこなたと唯も交えて、ゆっくりとワインを酌み交わし

ていた。

こなたと唯は未成年のため、ナノハが持参したミルクとクッキーで盛り上がっていた。

「ケイン、いきなり私の所にやって来て、一体どうした？」

「バロール討伐戦が明日に決まってるな。開戦の前に一献酌み交わそうと思って。」

ケインがワインを一口飲み、チーズを一かけ口に運ぶ。

シャイアンもワインを口にし、ケインに問う。

「ま、私は別に構わないが。…だが、理由はそれだけじゃない筈だ。」

「……。」

「凶星、だな。」

「ああ。」

唯達がミルクとクッキーで盛り上がっている間に、ケインはシャイアンにナノハの事を打ち明け始めた。

「本来なら、ブリューナクの使い手はナノハとフエイトだった。」

「しかし、今の使い手はケインだ。それでいいじゃないか。」

「だが、ナノハは本来魔法が得意で接近戦は苦手なのだ。…が、フエイトも扱える武器が剣系で槍系ではない。」

「それで、ケインにお鉢が回ってきた、と。」

「ああ。…扱えるのは世界広しといえどお前しかいない、と言われ  
てな。」

「…なるほど。」

シャイアンはワインをグラスに少し注ぎ、一口飲む。

「更に言えばナノハは私の娘だ、無理してブリーナクを継がせようとしても、反対されるのは目に見えている。」

「確かに。」

シャイアンは横目でナノハを見た後、視線を逸らし再びワインを口にする。

「だがしかし、彼女にもチャンスはあるだろうか？」

「ああ、機会があればな。」

そして、ケインはワイングラスに残ったワインを飲み干し、再びワインを注ぎ直す。

今日は、ワインを飲むスピードがやたらと早い。

「だが、こればかりは彼女の意志に任せるよ。親が何やかや口出ししたって聞くとは限らないからな。」

「ああ。」

シャイアンも、これ以上深入りするのを避ける様にワインを一口飲み、生ハムを一口かじる。

「フェイトも、同じ事を考えていると思うな。」

「ま、そうだな。…ナノハと仲がいいから、尚の事だ。」

シャイアンの言葉に頷くケイン。

「今日は、本当にありがとう。」

ナノハが唯達に礼を述べ、ケインも赤い顔をしてシャイアンに向き合う。

「では、明日教会の前で待ってるぞ。」

「ああ。」

そして、ケイン親子は自室に帰っていった。

「まさか、ナノハちゃんとケインさんが親子だったとは、全く知らなかったよ。」

「世の中、色々あるものだ。」

「本当だね。」

翌日、教会前には幾多の騎手団と魔導士達が集まっていた。その数、5000。何れも名うての者ばかり。

「すごいね、まるでここが城みたいだよ。」

こなたも、あまりの数の多さに圧倒される。

唯に至っては、口をあぐりとしてその光景を見ていた。

「各騎士、及び魔導士の諸君！いよいよバロールとの決着をつける時がきたー!!」

ケインのスピーチが始まる。

「いよいよだね。」

『ええ、いよいよね。』

こなたの言葉に、横にいたかがみが答える。

もう既に姿がはっきりと見えるまでになったかがみ達ではあったが、まだこなたに触れるまでには至っていない。

「我らダーナ神族は、古き時代にバロールと戦い、そしてバロールを闇の領域に封印した。…しかし、今の世になり闇の領域の封印が解かれバロールが蘇ってしまった。…厳密には復活ではないが、精神体として存在するバロールを今一度封印し、再びこの地に光を取り戻そう!!」

ケインの力強いスピーチに、騎士や魔導士達が拍手を送る。

「さあ行こう！我らの宿敵を倒し、平和をこの手に!!」

この言葉を合図に、騎士団と魔導士団が教会を後にし、戦場を目指して前進する。

「よし、我々も行くぞ。」

シャイアンの言葉に、2人も頷き、バイクに乗ろうとした。

だが、こなたがマシン・ヴァーミリオンの後ろに跨った、その時。

こなたの横に銀の壁が現れ、一台のバイクが姿を見せた。

姿は『555の世界』のジェット・スライガーに似ていたが、無駄が一切無いシンプルなデザインで、何よりこなたの体型に合わせたシートやステアリング式のハンドルと最新鋭の装備が随所に凝らさ

れている。

リトル・スライガー：「こなたの新たな力。

こなたはリトル・スライガーに座り、新たにステアリングを握りしめた。

「すごい…何か、力が漲ってくるよ。」

「そんなにすごいのか。」

シャイアンは、こなた専用のバイクの登場に、漸く肩の荷が降りたと感嘆し、騎士団達と共に進軍した。

「全軍、出撃！！」

騎士団長の号令が上がり、民衆の声援の中5000の兵群は出撃した。

「今日こそ、バロールを討つ！！」

ケインの士気も高く、一糸乱れぬ行軍は続く。

一方、バロール軍もレッドキャップやダークエルフといった精鋭1000名を連れて進軍していた。

『フフフ…。』

その奥の機動馬車に陣取る少女……フェイト、いや彼女の肉体を支配したバロールは、これから起こる戦いに歓喜せずにはおれずニヤリとほくそ笑んでいた。

時を同じくして、ケインの行軍に付いていくかの様に、5人の影が動き出した。

まるで、幽霊の様に。

「いつちよ、派手にいくとしますか。」

TOUR 9 END

TOUR 10 続く

TOUR 9 嵐の前触れ（後書き）

次回、「仮面ライダーアナザーディケイド」青い瞳の破壊者」は

「貴様が、帯刀か！」

「おーい、シャイアン！」

「あきらめるなああああつ！..！」

「よお、先祖。」

TOUR 10

「バロール討伐戦」太陽神VS邪眼王」

今始まる、宿命の戦い……。

XX

「いよいよ始まるバロール討伐戦!」

こなた

「私も大活躍するよ!」

シャイアン

「しかし、何だ?...この悪寒は。」

XX

「話の後半では、遂に『あの方々』も乱入!」

こなた

「おお〜!」

XX

「では、いつてみよ〜!」

こなた

「われら!」

かがみ・つかさ・みゆき・シャイアン

「ライダー電撃隊!」

ドカーーン！！ 後方で爆発

こなた

「ビツク・ワンー!!」

かがみ・つかさ・みゆき・シャイアン

「ライダー!!」

かがみ

「誰も知らないわよ、このネタ…。」

今、両軍はフェアリー・ヒルにて睨み合っている。

フェアリー・ヒル：そこは神話の昔、太陽神ルウと邪眼王バロールが戦いルウが勝利を掴んだ地である。

バロールがここを指名したのも、何かの縁だろう。

勿論、ケインも異議は唱えるつもりはない。

ケインの選んだフォーメーションは、ファランクス。古代ローマでも使われた横一線の陣形だ。

一方、バロールは陣形を組むことはなく、集団戦闘をメインとしたスタイルを取っている。

ただ、ケインのファランクスは1つ工夫が施しており、左右に魔導士団を2隊ずつ配してあり、騎士団をフォローする様にしている。

午前10時ジャスト。

両軍は堰を切るかの様に一斉に攻めた。

シャイアンは、たどり着く前に既にADに変身しており、こなたと唯も変身を終えていた。

今回、こなたが選んだのは仮面ライダーカブト・マスクド・フォーム。

岩崎みなみが変身するライダーだ。

彼女の能力は、クロック・アップ。一時的に周囲の時間を遅らせ、戦闘を有利に進める力。

がしかし、この能力は集団戦闘にも有利であり、特にワーム戦では猛威を奮う。

みなみの場合、クロツク・アップだけではなくエンハンスという能力を持っている。

これは、手にしている武器を強化し威力を高める力で、キックやパンチを主力としているカプトにとって相性のいい力である。

但しエンハンスは30秒しか持たず、しかもタイムラグが激しいため、いざという時しか使えない弱点もある。

そんなカプトをチョイスしたこなた。∴しかし、これも想定内。実は、今回こなたは賭けに出たのである。

それは、騎士団達が出発する数時間前。

精神世界でこなたは皆を集め、ある提案を告げていた。

「今回、大軍と戦うため消耗戦になると思うので、有志を募りたいんだけど。」

「有志？」

「うん。条件は1つ、集団戦を経験した人、それだけ。」  
「と。」

「∴私なら、こなちゃんの力になれるかな？」

「つかさかあ、うん、いいよ。」

まず、仮面ライダーアギト∴柊 つかさが名乗りを上げ、その後疲れがまだ溜まっているみさおとあやのを除いて、ひより・みゆき・みなみ・パティがこなたの力として名乗りを上げた。

さて、シャイアンも今回は二手に別れて戦っている。  
シャイアン、こなたが最前線で戦い、唯はナノハの護衛として後列に残している。

理由は簡単、ジョーカーは集団戦に向かないと判断したからだ。

これには唯も抗議したが、正直な話ナノハを守らなければ軍の統率が乱れるため、止むなく唯はシャイアンの言葉に従い後方に下がる事としたのである。

さて、最前線で戦っているADは、早速マスク・ライドを敢行した。  
レッドキャップの数が思った以上に多いためだ。

「数の暴力というのは、感心しないな。…マスク・レイド！」

『マスク・ライド グランザム!!』

グランザムに変身した途端、レッドキャップの行軍が止まった。

『な、なんだ!!』

『姿が、変わった…!!?』

驚き、慌てふためくレッドキャップの一团に、ADグランザムは一枚のカードをセットインする。

『アタック・ライド スパイラル・ディバステイター!!』

ADグランザムの右腕が巨大な龍巻に包まれ、唸りを上げてレッド・キャップの一团を薙ぎ払う。

更に、後方に控えていたダークエルフの一团をも薙ぎ払い、後には何も残らなかった。

「やれやれ、何とか倒したか。…しかし、妙だな。」

ADグランザムは、腕を組んで不思議がる。

味方の報告によると、バロール軍の数は1000。なのに、今戦った数は300近く。約半数ほどだ。…明らかに数がおかしい。

しかも、時間を追う事に数が増えている。

ADは、どこかに伏兵が潜んでいると踏んでいたが、ここは平地ばかりで隠れるところは全くない。

おまけに、伏兵が隠れそうな高い草すら生えていない。

わざわざ伏兵を用意する必要が果たしてあるだろうか？

「…分からない事だらけだな。」

が、考えていても埒はあかない。

ADに一旦戻り、マシン・ヴァーミリオンを駆り次の戦場を目指す。

その頃、こなたはカプト・マスキドフォームでダークエルフに挑んでいた。

彼女としては、すぐにでもキャスト・オフして一気に仕留めなければならなかった。

が、周りには味方の騎士が戦っており、迂闊にキャスト・オフが出来なかったのだ。

(さて、どうするか。)

カプト・クナイガン・アックスでダークエルフを斬り伏せつつ、Kカプトはキャスト・オフの機会を待つ。

さて、バロールは如何にして大軍を短期間に揃える事が出来たのだらうか？

答えは簡単。実はマジック・ミラーを100枚用意し、それにレッドキャップやダークエルフを写し出し数を水増ししていたのだ。

この鏡、1人映す毎に10人の分身が作れ、100枚の鏡で1000人分の増員を作り出す。

但し、1回の使用につき20分のインターバルを置かなければ再起動は難しく、連続で使用するとなれば更に100枚追加しなければならぬ。

がしかし。バロールは人数の頭数さえ揃っていればいい、と特に気にする様子はなく他の者も気にすることはなかった。

ケインの手にしたブリューナクが唸りをあげ、レッドキャップの一軍を薙ぎ払う。戦闘開始から10分、ケイン達の優位は変わらず相手の数も減ってきている。

「この調子で攻めていけば、フェイト様の所に辿り着けるのも時間の問題ですね。」

騎士の1人がケインに進言するが。

「いや待て、何かがおかしい。」

急にケインが首を傾げた。

ADが思っていた事を、ケインも思っていたからだ。

確かに、数が少しずつ戻ってきている。…しかも、短時間に。

(何かあるな…。)

ブリューナクを振るいつつ、ケインはその謎に立ち向かう。バロールとの決着を早期につけるために。

(あやつめ。我々のトリックに、気付き始めたな。)

バロールは、マジック・ミラーによるトリックがばれるのを懸念していた。

戦場から数百メートル離れた所にミラーが置いてあるとは言え、まだ油断は出来ない。

もし、ミラーが破壊されてもしたら被害は甚大。もはやルウに勝つどころではない。

ならば、自ら出向きミラーを守るか、それとも…。

あれこれ思索していると、突然凄まじい風が陣内に吹き込み1人の男が目の前に現れた。

「何か、お困りの様ですな。」

『何者だ、貴様。』

「私は帯刀と申します。あなたを助けるためにやって参りました。」

何だと、と言うが早いか帯刀は懐から四角い箱の様な物体を取り出し、バロールに投げて渡した。

『…これは？』

「これは、あなたの新たな力。きっと役に立つでしょう。」

『ふむ、…まあよい。お前の言葉、信じよう。』

「ありがたき幸せ。」

バロールは、四角い箱を腰にあてがうと右腕を高く上げ、構える。

『ふっ…変身!!』

箱からベルトが伸び、バロールに巻き付くや赤い光に包まれ、1人の戦士に姿を変えた。

骸骨の様なマスクに左右に伸びる角。鎧は、あたかも血に染まった狂戦士を思わせる。

何より象徴的なのは、額に不気味に輝く赤い眼。これが、この世界のダーク・ライダー。冥府の魔王、仮面ライダーバロールだ。

『ふっふっふっ…ハーツハツハツハツ!!』

バロール軍陣地に不気味な笑い声が響く…。

帯刀はニヤリとほくそ笑むや、スタスタと立ち去ろうとしていた。

『待て、どこへ行く。』

「私は厄介な仇敵を倒しに行つて来ます。いかがなさいますか？」

『…わしも行く。どのみちルウとは決着をつけるのだ、わしが行かなくてどうする。』

バロールは、慌てて同行を願い出る。帯刀の答えは当然OKである。

ADが、マシン・ヴァーミリオンを駆りバロールの喉元を目指す。すると、目の前に銀の壁が現れるや、中から帯刀が姿を見せる。

「貴様が帯刀か！」

「…いかにも。…そして、初めまして。」  
「…。」

ADは無言でバイクから降りると、ライド・クロニクルをソード・モードに変形させ、帯刀に斬りかかった。

「貴様のせいで、世界は崩壊を続けている!!」  
「…それが、どうした?」

帯刀は太刀筋を見切り、ひらりと交わす。

「今ここで貴様を倒し、崩壊を止める!!」  
「それは無理ですね。」  
「何っ!!」

帯刀は懐からタバコを取り出し、ゆっくりとふかしながらADを見つめる。

「どのみち、この世界は崩壊する。バロールの手によって、な。」  
「そんな事はさせない!!」

再び、帯刀に斬りかかるも余裕でかわす。

「…ま、こんな所で遊んでいる場合ではない。彼にバトンタッチしよう。」

帯刀は銀の壁を召喚すると、その中にすうっと消えていき、入れ替わりで別の者が1人姿を現した。

黒い装甲に身を包んだその戦士は、百足をモチーフとした装飾をし、まるで血に飢えたかのような真紅の目をADに向ける。

『重甲ビーファイターカブトの世界』の戦士の1人、ビークラッシュ  
ヤー・ムカデリンガー。

悪しき昆虫戦士を前に、ADも戸惑う。

「…獲物の臭いがする。」

「くっ、また異世界の戦士か！」

ムカデリンガーが今まさに飛びかからんとした、まさにその時。

「お〜い、シャイアン。」

緊迫感のない声が後方から聞こえた。

その男は、ヒョロヒョロとした顔に全く見合わない顎髭、痩せこけた風貌からは想像もつかない猛ダツシユ。

彼の名はシャツフル・ガードナー。シャイアンの腐れ縁である。

「シャツフル、お前どうしてここに…！」

「細かい事は抜きだ。まずは、あいつを何とかしなくてはな。」

「いきなり来ていきなり仕切るな！」

「まあ待て慌てるな。俺は渡って男から頼まれたんだ。シャイアンに同行してくれって。」

「渡が…？」

何でよりによってシャツフルに…？

そんな疑問を抱きつつ、ADはライド・クロニクル・ソードを構える。

だが、シャツフルは背中に背負っていた剣を引き抜くと、鏢に当たる部分のスリットにカードを一枚セットインし、前にスライドさせた。

その一連の動作は、ディエンドを思わせる。

「いくぜ…。変身！」

『マスク・ライド ディスラッシュユー!!』

するとどうだろう。シャツフルの体が無数に分裂し、そして一カ所に収束していった。

そこから現れたのは、ディエンドに似た戦士。しかし、カラーはシアンではなく右を朱に、左を紫紺に彩られ、オーラカードは山吹色と派手な事この上ない。

仮面ライダーディスラッシュ。

新たな仮面ライダーの誕生である。

PART 2 に続く。

仮面ライダーデイスラッシュ…彼の登場に、ムカデリンガーは驚きを隠せなかった。

「貴様、何者だ！」

「通りすがりの仮面ライダー。そんだけだ。」

割と素っ気なく答えるデイスラッシュ。

「シャイアン、先に行つてな。あの先に奴さんの陣地がある。」

デイスラッシュは手にした剣…ソードライバーで北北東を指した。どうやら、その方向にバロールがいる様だ。

「シャッフルはどうする？」

「俺は、ここで百足の化け物をやっつける。…まあ心配すんな。」  
「すまない、恩に着る。」

シャッフルに言われ、ADはマシン・ヴァーミリオンに跨りバロールを目指して走り出す。

「やてど。」

デイスラッシュは、先程の動作でカードをセットインする。但し、今回は2枚セットインしてある。

「行つてらっしゃい！…！」

『マスク・ライド ブレイド・龍騎!』

ソードライバーを一振りするや、光と共に現れたのは日下部みさおと峰岸あやの本人。ライダーの姿で、ではない。

どうやらディエンドの物とはタイプが違い、『ライダーに変身した姿』ではなく、クレインの壺により本人を召喚してから変身させるタイプらしい。

しかも…。

「あ、あれ？日下部と峰岸は？」

2人の消失に焦るかがみ。

そう、こなたの精神世界からの召喚も可能の様だ。

「…あれ、ここはどこ？」

「それに、私達泉ちゃん所にいた筈なのに。」

戸惑う2人に、デイスラッシュは、

「早く変身して！目の前に敵がいるよ！」

慌てて変身し撃ってかかる2人、デイスラッシュも後について行く。

さて、漸くキャスト・オフしたKカブトは、たった今クロック・アップでダークエルフの一軍を倒したばかりであった。

「…これ以上クロック・アップを続けるのは危険かと。」  
「そうだね、じゃあ次にバトンタッチしよう。」

が、しかし。

『こなた、大変よ！日下部と峰岸がいなくなったの！』

「ええっ!？」

驚くこなた。だが、今は。

「ごめん、話はまた後で。」

かがみからの報告を聞いたこなたは、カプトからつかさのアギトに変身すると、急ぎストーム・フォームに変身、ストーム・ハルバートとかがみから受け継いだクウガの力により、拾った剣を変形させたタイタン・ソードの二刀流で更に薙ぎ倒していく。

さて、後方に控えていたナノハと唯は、騎士からの報告に首を傾げていた。

兵力の回復が思ったより早く、しかも四桁台が多く報告されている。

「何かおかしいねー、こんなに早く回復するなんて。」

「確かに変ですね。…まさかとは思いますが、相手は何らかの兵力回復の魔法を使っているのでは…。」

「魔法…ねえ。」

確かにその通りである。バロール軍はマジック・ミラーを使い、兵力を回復させているのだから。が、それが分かかっていても打つ手が無い。

どこにマジック・ミラーが配置してあるのか、皆目見当がつかない

からだ。

だが、そのマシック・ミラーの配置所に新たな動きがあった。

「さあ、次の兵力補充だ。」

「これでルウもお終いだな。」

2人のダークエルフが全員にマジック・ミラーに立つよう合図を送ろうとした、その時。

『気に入らねえな。』

と言うが早いか、瞬く間に2人のダークエルフは討ち取られていた。

『さて、やるか。野郎共!!』

その影…海賊風の男と4人の仲間は金色に彩られたディケイドライバー似のバツクルを腰に当てると、ベルトが伸び剣を切り結ぶ様な待機音を高らかに鳴らす。

更に腰にある辞書サイズのカード入れからカードを取り出しセットインする。

『『『『『変身!!』』』』』

『カメン・ライド …』

男達の体は、足から順に装甲をまとい、やがて全身が海賊風の鎧に包まれていた。

『さあ…派手にいくぜ!!』

5人の戦士は、まず100枚のマジック・ミラーを破壊しまくった。とにかく、根元を断たなくては何もならない。

「貴様等、何をするっ!」

「くせ者めっ!」

見回りのレッドキャップが5人に気がついて斬りかかるが、元より歯の立つ相手ではない。

数秒と経たずに見回りを斬り倒し、更にミラーの破壊を続ける。

その頃、ケイン達騎士団はレッドキャップやダークエルフの団を蹴散らし、奥に控えるバロールの陣地を目指し進軍する。とここで、ケインの足が急に止まった。

「…漸くのお出ましか、バロール。」

そう、バロールが遂に現れたのだ。しかも、仮面ライダーという最悪の形で。

『久しいな、こうやってルウと向き合うのは。』

「…そんな事はどうでもいい。今ここで決着をつける!!…この世に生きる弱き者を守るために!!」

ケインがバツクルを構え変身しようとした、その時。

ドンッ！！

両陣営から花火が揚がり、戦闘終了を告げた。

「…むう、止むをえん。今回の戦闘は一時預ける。」

『ま、仕方あるまい。明日、決着をつけるとしよう。』

こうして、初日の戦闘は終了した。

「今回、魔導士団のバツクアップが今一つであった。…数に戸惑っていたのは想定外だが、だからと言ってバツクアップを怠ると被害はもつと拡大する。そこを気にするように。」

「…分かりました。」

この日の夕方、騎士団長と魔導士団長を交えた会議が開かれていた。

「それと、これは極秘情報だがバロール軍の数の多さの秘密がわかった。…やはりマジック・ミラーを使用していた様だ。」

「やはりな。」

ケインの横にいたシャイアンがコクリと頷く。

「斥候からの情報によれば、ミラーを破壊する5人の人影が確認されたそうさ。…これは、我らにとって絶好のチャンス！」

「一気に押し込めるかも知れませんか。」

騎士団長も合いの手を入れる。

「そう、その通りだ。…そこで、翌日の戦闘は魔導士団も戦闘に加わってもらおう。よろしいかな？」

「お任せを。」

会議が終了し、各々が持ち場に戻っていった。

但し、シャイアンとシャツフルだけは、誰もいない会議用テント内で話を続けていたが。

「あれから百足の戦士はどうなった？」

「あー、あいつか。あいつなら、とつとと片付けた。」

ムカデリンガーとデイスラッシュ達との闘いは、ほとんど一方的にデイスラッシュが押ししていた。龍騎のパンチに一瞬怯み、体制を整える隙を与えずブレイドの斬撃が命中、更にデイスラッシュの一撃を受け火花を上げながら倒れ込んだところへデイスラッシュがカードをセットインする。

『ファイナル・アタック・ライド デ・デ・デ・デイスラッシュ！』

『！』

すると、デイスラツシユの持つソードライバーが光り輝き、その鮮烈なる一太刀をムカデリンガーに浴びせたのである。

『ぐぎやああああつー!』

そして、ムカデリンガーは塵となって消滅した。

その後、龍騎とブレイドがこなたの元へ帰って行ったのは言うまでもない。

「なるほど、な。」

「ま、あんにやるめの事だ、きつと何かありそうだ。」

何か、か…。

シャイアンはシャツフルの言葉に一抹の不安を抱えていた。

その後、シャイアンは唯とこなたにシャツフルを紹介した。

「こちらの方は？」

「シャツフル・ガードナー。私の腐れ縁だ。」

「おいおい、そりゃないだろ。…ところで、そこの青ちよびね。」

「私はこなたって名前があるよ。」

シャツフルにからかわれる様な一言を言われ、むくれるこなた。

「これからも、そちらの仲間さんの力を借りるかもしれないから、よろしく!」

その時、みさおが「あーっ、あの時のライダーなのか!」と食ってかかる一幕があったが、ここはかがみとあやのが押さえ込んで事なきを得た。

明けて翌日。

バロール軍は何時になく士気が高まっていた。実は、昨夜のうちに軍備が整ったからである。

ミラーが破壊されるアクシデントがあったものの、新たな軍勢が到着したのだ。

それは、邪妖精スプリガン。

闇の巨人の血を引き、魔法も遮断する能力を持つ妖精の登場にバロール以下全軍が歓喜に包まれていた。

一方、ケイン軍にも動きがあった。後方にいたナノハが魔導士団の先頭に立って戦うと言い出したのだ。

どうやら、フェイトの波動を感じていたらしい。

戦闘開始と同時にケイン軍は浮き足立ってしまった。

残った手勢はともかく、スプリガンが見えた途端に騎士達が恐れってしまったからだ。

「お、おい、スプリガンが加わったなんて話、聞いてないぞ!!」  
「冗談じゃない!!」

昨日とうって変わって変わって士気がいきなり下がってしまったケイン軍

下の騎士達は、我先にと戦場を去ろうとする。

「待て、退却するな！戦うんだ！…彼らを見る…！」

騎士達が恐る恐る目をやると、そこには巨体に怯む事なく戦うAD達の姿があつた。

ADはライド・クロニクル・ガンモードでスプリガンを射抜き、デイスラッシュはマスク・ライドで響鬼を召喚して迎え撃ち、こなたは555に変身してスプリガンを打ち倒し、ジョーカーはスプリガンの足元でうろついているレッドキャップを迎撃している。

「あれを見て何かを感じないのか？」

「うう…。」

「彼らは異世界からやってきて、我らの世界を守るために尽力しているんだ。戦わずに逃げるとは恥ずかしいと思わないのか…！」

「……。」

「あきらめるなあああ…！」

あまりの剣幕に黙り込む騎士達。

一方、ナノ八率いる魔導士団は、ADがスプリガンを押さえている間に側面から一斉に魔法を叩き込み、レッドキャップの一軍を全滅させていた。

また、ダークエルフの一団も一部の騎士団が突入し瞬く間に壊滅していった。また、ダークエルフの一団も一部の騎士団が突入し瞬く間に壊滅していった。

その勇姿に、逃げ出そうとした騎士達は一瞬に目が覚めた。

もう一度勇気を出して立ち向かおう、と。

それに、まだフェイト様の奪回も終わっていない。

彼らの士気は再び高まり、スプリガンに向けて前進していった。

バロール軍の精鋭は全て倒され、残るはバロールのみとなった。

「さあ、来るがいい、バロール！私はここだ！」

ケインの怒声が戦場にこだまする。

が、現れたのは何とバロールが憑依したフェイトそのものだったのだ。

どうやら、彼女を盾にして戦うつもりらしい。

「くっ、卑怯な…！」

あまりの酷いやり口に、苦虫を噛む思いのシャイアン達。

『…ルウよ、わしの配下は全て滅び、残るはわしだけとなった。今度こそ決着をつけよう。』

「…ああ。」

ケインはバックルを取り出し、仮面ライダールウに変身する。そして、無言で仮面ライダーバロールに斬りかかった。

「ケイン様っ…！」

他の騎士達もケインに続こうとしたが、ナノハの防御結界に阻まれ、先へ進めなかった。

彼女も知っていた。…この戦いは全員無事では済まない事を。

だが、ADとK555だけは結界に入らず、ルウと一緒に前進していった。

K555はカイザ・ブレイガンでバロールの右肩を狙い、ブレード・モードで斬りつける。

バチッ！！

だが、肩部に備え付けられたカッターに阻まれ、逆にストレートを喰らい吹き飛んでしまった。

次にADがライド・クロニクル・ガンモードを放つが、防御結界に弾かれ、マジック・ミサイルを数発受け火花を散らしながら持ちこたえる。

「まだまだあつ！」

ルウのブリューナクが唸りを上げ、バロールの装甲を打ち砕く。

更に右からのK555によるデルタ・ムーバーの援護射撃によりバロールの体制が崩れる。

そしてすかさずADのアッパーが炸裂。

のけぞるバロール、追撃で魔力弾を放つルウ。

が、バロールも弾道を見切り下へよけ、ルウへマジックミサイルを放つ。

しかし、ルウは防御用の短剣・フラガロクでマジック・ミサイルを弾き、ブリューナクで斬りつける。

戦闘開始から10分。

一向に決着がつかない。

ここで痺れを切らしたナノハが結界を解き、唯とディスラッシュに

後を任せて1人でバロールに向かっていった。  
フェイトを助けたい、その一心で。

『来よつたな、ルウの末裔。…ここで纏めて倒してくれるわ!』

バロールが額に赤く輝く邪眼をナノ八に向ける。

その邪眼に捕まったが最後、待つのは死のみ。

これが、バロールを邪眼王と言わしめる所以である。

そして、放たれる赤い魔弾。

だが、ADとルウが邪眼の前に立ちはだかりナノ八を擁護する。

「まだまだ、まだ負ける訳にはいかない!!」

「そうだ、まだ勝負はついてない!」

2人は既にボロボロの状態であったが、それでもまだ立っている。  
最早根性でしかない。

『な、何故だ!何故そこまでして女を救おうとする!?何故倒れない!?!』

ADは、焦るバロールに言い放つ。

「…それが人間の持つ負けない心、友を救わんとする友情だ。例えどんな状況であつても決して折れる事のない力、それがお前にはあるか?あるはずは無かるう。」

『ううう、貴様は一体何者だ!』

「通りすがりの仮面ライダーだ。覚えておくがいい!!」

そして、ライド・クロニクルからカードが2枚排出され、ADの手に収まる。

1枚はルウが描かれたカード、もう1枚は槍と剣が交差し、中央に太陽が表されているカード。

その内の1枚を手に、クロノ・ドライバーへとセットインする。

『ファイナル・アタック・ライド ル・ル・ル・ルウ!!』

すると、ADの右腕に光が収束され、30もの弾丸を形作っていく。ルウの周りにも光の弾丸が30程作られ、それらが螺旋を描く様に回っている。

ディケイド・ブリューナク。光を司るルウならではの、連携技。

「これが、ナノハ親子の絆と友情だ!」

そして、光弾はバロールに向けて放たれ、全弾命中する。

『ぐおおああああつ!!』

と、バロールの体から何かが弾き出された。

体こそボロボロだが、紛れもなくフェイトである。

すぐに合流したナノハによりフェイトは回収され、バロールは体型を維持できず崩壊していく。

「フェイトちゃん!」

「…な、ナノハちゃん?よかった、私は…。」

「今は何も言わないで。」

「…うん。」

「やったか?!」

「ああ。だが安心するのはまだ早い!今こそ奴を打倒する時!」

ルウの一言にシャイアンは改めてカードをセットインする。

『ファイナル・アタック・ライド デ・デ・デ・ディケイド!』  
と同時に、K555も動く。

「ひよりん、ちょっとくすぐったいけど、いい？」

「大丈夫っす、いつでもOKっすよ!」

「『ファイナル・フォーム・ライド ファ・ファ・ファ・ファイズ  
!』」

K555の体が宙に舞い、一丁の巨大砲に変形する。

これが、ファイズ・ブラスター。悪しき力に対抗する強大な力。  
その巨大砲はルウの手に渡り、更に引き金はナノハが握る。

「ナノハちゃん、いくよ!」

ナノハは無言で頷く。

「『ファイナル・アタック・ライド ファ・ファ・ファ・ファイズ  
!』」

ADが宙に舞い、更にルウもファイズ・ブラスターを構え、ナノハの引き金を持つ手に力がこもる。

「よくも、フェイトちゃんに酷い事をしたね…。ちょっと、お話し  
しようか。」

ナノハの怒りは既に爆発寸前である。

そして、A Dの前にオーラカードが10枚展開し、キックを繰り出しながら通過していく。

「冥府で頭を冷やしてこおおおおい！！」

デイメンシヨン・キックとファイズ・ブラスターの砲撃が同時に炸裂し、仮面ライダーバロールは大爆発を起こして消滅した。

『ゆおおおおおつ！！』

そして、消滅した位置から霧のような物が立ちこめ、そして青空に溶けていった。

それがバロールの本体。実体のない、さまよえる魂。

今、全てが終わった。

バロールとルウの、神話の時代からの戦いは終わりを告げた。

騎士達は手にした武器を掲げて雄叫びをあげ、ケインは変身を解き、フェイトを抱え上げ味方の陣へと戻っていく。

さて、その帰り道。

シャイアン達は何者かに付けられているのに気づいた。

最初は気のせいだと思っていたが、確実に付けられているのに気づいたのはニューグランデ・シティーの入り口付近であった。

バイクを止め、辺りを見回すと。

「ひよつとして、あれ？」

「あれ臭いねー。」

「いい加減に出て来い。」

すると、後方にいた影が動き、5人がシャイアン達の前に現れた。

「よお、御先祖。」

男は、懐に忍ばせていたサンバイザーを被り、改めて向き直す。

「ああーっ！！あんたはアニメ店長！！」

驚きの声を上げたのは、こなたであった。

「ようやつと見つけた、伝説の少女A！！…だが、今の俺は海賊ライダー、いつでも相手に出来る。」

「…ところで、御先祖とは？」

「そうだったな。あんたが持っているディケイドライダーもどきが、こいつの御先祖ってわけさ。」

アニメ店長が手にしたのは、ディケイドライダーに似た金色のバツクル。

それを見たシャイアンは驚き、口をあんぐりとする。

他のメンバー…白石みのもと杉田店員、そして女性店員2名も、同じバツクルを手に入っていた。

「驚いたー、セバスチャンも持ってたなんて。」

「そりゃあ、店長とは知り合いだからねえ。」

セバスチャ…ゲフンゲフン、白石は照れながらこなたに語りかける。

「シャイアン、とか言ったな。いい面構えをしているな。…今回は顔合わせ程度だが、次に会うときは一度手合わせを願いたい。」  
「いいだろう。」

アニメ店長とシャイアンは軽く拳を合わせると、そのまま立ち去っていった。

明けて翌日。

いよいよ旅立つ時がきた。

シャイアン達はケインに握手を求め、ケインもそれに応じる。

「ケイン、これからどうする?」

「バロールも倒れ、脅威は消え去った。…しかし、平和がこのまま続くとは限らない。これからも神官達や戦えない者を守るために、戦っていくよ。」

「あなたなら立派な騎士になれます。…娘さんをよろしく。」

「ああ。」

こなたと唯もナノハに握手をし、別れを惜しむ。

「フエイトちゃんは?」

「今、病院で入院しているよ。けがの程度は軽いつて。」

「早くよくなるといいね!。」

「お姉ちゃん、ありがとう。」

3人はバイクに乗り込み、スロットルをふかす。

「では、また会おう。」

「ああ、美味しいワインを用意して待ってるからな。」

「お姉ちゃん、またねー！」

「うん。」

「またねー。」

そして、3人はバイクを駆り、銀の壁を通過していった。

「ところで、シャツフルさんは？」

「放っておけ。あいつは神出鬼没だ、そのうちまた現れるぞ。」

シャイアン達が次に訪れた世界、そこは、  
鬱蒼とした森が続く山の中であった。

「ここは、どこ？」

その頃、山奥の屋敷に黒い装束を纏ったかのような仮面ライダーが、  
ある人物に謁見していた。

その人物は、何者かによく似ていた……。

T  
O  
U  
R  
  
1  
1  
  
に  
続  
く。

T  
O  
U  
R  
  
1  
0  
  
E  
N  
D

TOUR 10 バロール討伐戦〜太陽神VS邪眼王〜 PART 2 (後書き)

次回「仮面ライダーアナザーディケイド〜青い瞳の破壊者〜」は、

「俺の名はジョー・マヤ。伊賀流の忍者だ。」

「お、…お母さん？」

「姫を、姫を守るんだ!!」

TOUR 11

「仮面ライダー陣雷の世界〜with 忍者戦士 飛影〜 母に似た姫」

その面影に、  
こなたは何を感じるのか？

唯

「えっ、私が？」

XX

「うん、今回こなたの様子がおかしいんだ。」

唯

「うん、わかったーやってみるよー！」

唯

「さあ始まるぞますよ。」

紬

「いくでがんす。」

律

「嫌いじゃないわー！」

漣

「それ、泉 京水！」

梓  
「もじやだ…(泣)」

皆さんは、忍者：とくれば、たいていの人は時代劇・マンガ等の忍者しか知らない人も多いことだろう。

だが、この世界は忍者が実在し、なおかつ仮面ライダーとして戦う者までいる世界なのである。

「う、ううん…。」

この世界に来たとたん、急にこなたが熱にうなされ始めていた。

シャイアンが額に手をやると、かなり熱い事はわかった。だがしかし、近くには病院もなく、民家すらない。

前の世界でも、来た当初民家がないのはわかっていたが、流石に今回ばかりは参ってしまった。

「さて、どうするか。」

取りあえず、リトル・スライガーの操縦をマニュアルからオートに切り替え、山の麓まで走らせることにした。

町が見えてくれば、病院で診てもらえるはず。シャイアンは、そう考えていた。

が、世の中そうは甘くない。

何と、目の前に妖怪らしき者が2体現れたからだ。

頭は鶏、そして筋肉質の体を覆う山伏風の装束、立派に生えた翼。

この世界の怪人、アヤカシの一体・鶏天狗である。

「カラスならともかく、何故鶏なんだろう？」

「さてな。…とにかく、あなたが戦えない以上まごついている暇はない。」

「そだねー。こなたちゃんは私に任せて、シャイアンさんは鶏さんのほうを！」

「ああ、任せた！…マスカ・レイド！」

すぐさまADにマスク・ライドし、すぐにライド・クロニクル・ソードで鶏天狗へと斬りかかるシャイアン。

しかし、鶏天狗は結構身軽でソードをひらりとかわし、手にした禅杖でADを殴りつけた。

更に空中高く舞い上がり、蹴りまで見舞う。

「くつ、なかなかやるな。そちらがスピードなら、こちらもスピードだ！」

ADは一枚のカードを手にし、セフトインする。

『マスク・ライド ミラージュ！！』

『フォーム・ライド ミラージュ クイック！！』

ADの中央に光が一条走り、左右に展開するや黒い戦士が姿を現し、更にもう一枚カードをセフトインする。

すると、ADミラージュが細身の体になり、両腕に片刃の剣が装備された高速戦闘形態に姿を変え、鶏天狗に肉薄する。

流石の鶏天狗も高速形態のスピードについて行けず、即座に弾き飛ばされてしまった。

すぐに体制を立て直しても、ADミラージュQFが斬撃で崩す。

「さて、後片付けといくか。」

『ファイナル・アタック・ライド ミ・ミ・ミ・ミラージュ!!!』

新たにカードをセットインし、高速で鷄天狗に詰め寄るADミラージュ。

そして連続で斬撃を決め、鷄天狗は爆発して散った。変身を解除し、こなたの元に向かうシャイアン。まだ熱は引く気配がなく、うんうんと唸っている。

「まずいな…。」

「どうしよう?」

すると、そこに1人の男が通りかかった。

年にして20才代、整った顔立ちにブラウンの少し入った髪色、細身の体を包むは紫紺の装束に赤い帷子<sup>かたびら</sup>。

「一体、どうした?」

「連れの者が熱を出して、途方に暮れていたのだが、どこかに病院はないか教えてほしい。」

「病院、か…。」

男は何か思案し、そして口を開く。

「ならば、俺達の屋敷にその子を連れて来てくれ。…このまま放っておく訳にはいかないからな。」

「ありがたい、あなたの好意に感謝します。」

シャイアン達はバイクを銀の壁にしまうと、こなたを背負い男の後についていった。

「ところで、あなたの名前は。」

「俺の名はジヨー・マヤ。伊賀流の忍者だ。」

「忍者、なんですか?!」

「忍者…だと?」

何と、彼らは本物の忍者に会ってしまったのだ。

この世界の仮面ライダーなのだろうか?それとも…。

期待と不安を抱えつつ、シャイアンはジヨーの後についていく。

たどり着いた所は、純和風の屋敷であった。

「ここが、あなたの…。」

「そうだ、ここが俺達忍者の拠り所、忍者屋敷だ。」

門をくぐり、ジヨーが屋敷の者にこなたの看病をする様言付けると、シャイアンは背負っているこなたを屋敷の者に預けた。

「ところで、ちょっとついてきてくれないか。会わせたい人がいるんだ。」

「会わせたい人?…別にかまいませんが。」

シャイアンはジヨーと共に奥の間へと進んでいく。

奥へ行くと、そこは灯明のみの薄暗い畳敷きの間であった。薄い幕の向こうには、髪の長い小さな女性が鎮座し、ジヨーはシャイアンと女性に謁見する。

「姫、デイケイドを連れて参りました。」

「そうですね、ありがとうございます、ジョー。」

やはりな…。

シャイアンは心の中でつぶやく。

何か話が良いすぎる、とは思っていたが。

「あなたがデイケイドですか。」

「はい、私がそうです。」

「では、私の話を聞いてください。…実は、最近私達の周りで良からぬ噂が立ちまして。」

「噂？」

「ええ、私を亡き者にし、当主の座を狙う者がいるらしいのです。」

「当主の座を、ですか。」

話を聞く限り、どうやら穏やかに事が運ぶ訳ではないらしい。…どこの世界でもそうだが。

だが、こればかりは見過ごす訳にはいかない。

「このままでは私達も安心できません。もしよろしければ、私の護衛をジョーと共に頼みたいのですが。」

一応、シャイアンはジョーにも訪ねる。

「ジョー、あなたは？」

「俺は毎日姫を護衛しているから、特に問題はないが。…しかし、護衛は多いに越したことはない。」

シャイアンの心は決まった。

「分かりました。連れを看病してくれる恩もありますし、お力になれるなら。」

「引き受けて下さるのですか、ありがとうございます。」

「すまない、シャイアン。俺達が至らなかつたばかりに……。」

「容体は？」

「うん、だいぶ落ち着いたみたい。」

その後、シャイアンはこなたが休んでいる部屋に行き、唯に容体を聞いていた。

だが、今は彼だけではなく、姫とジョーも一緒であった。連れの具合を見たいためだ。

「こちらが、連れの方ですか？」

姫が、こなたの顔を見た瞬間、かすかに表情が変わった。

「え……？」

似ていたのだ。…こなたに。

「……！」

ジョーも、姫とこなたを交互に見比べ驚く。

頭のアホ毛と眼差しの柔らかさをのぞいて、まるでそっくりだったのだ。

…いや、全体の柔らかさは姫に分があるようだが。

「し、信じられない。ここまで姫に似ているとは。」

もし彼女が元気な姿であつたら、紛れもなく影武者になれるだろう。あまりの類似に医者も、

「私も長い間姫に仕えてきましたが、ここまで似ているとは、全くもって驚きです。」

だが、ここで1つ疑問がある。

ジョーはシャイアンがこなたを背負っている時点で、姫に似ていると気がついてはいるはずである。

なのに今になって気がついたのは、少しおかしい。それは何故か？

答えは簡単。

ジョーは、こなたの容姿に気がつかなかったのだ。

…全くの鈍感である。

しばらくして、こなたは目を覚まし、横をちらりと見た。

目を覚ますまで待っていたのか、姫はこなたのそばから離れずにいた。

「目を覚まされましたか。」

すると、こなたが姫を見るなり驚きの声をあげた。

「お、…お母さん？」

「…え？」

姫は、きよとんとした表情でこなたを見つめる。

「どうやら、こなたは姫が母親に似ているため、そう言ったのだろう。が、姫は臆する事なくこなたの手を取り、優しく話しかける。

「…私が、あなたの母親に似ているのですか。」

「ええ。」

「残念ながら、私はあなたの母親ではありません。…ですが、もし困った事がありましたらいつでも声をかけて下さい。」

「…ありがとうございます。」

この日は、姫を狙う者もなく無事に過ぎていった。

明けて翌日、朝からシャイアンはジョーと共に姫の護衛についていた。

シャイアンは、いつでもADになれるようにクロノ・ドライバーを懐に忍ばせ、ジョーは姫に何かあってもいい様に、つきつきりで行動していた。

そして午前10時、姫が書齋で書物に目を通していた、その時。

「…！」

2人が外にいる気配に気づく。

すると、ここでジョーが動いた。

「シャイアン、姫を頼む。」

「わかった、任せろ。」

ジヨーが表に出ると、そこにいたのは猪の頭に鎧兜を身につけたアヤカシが若い忍者見習い相手に戦っていた。

「皆、どうした!」

そこへジヨーが間に合った。見習いの何人かはかなり痛手を被っている。

「あ、ジヨーさん!」

「このアヤカシは結構強いですが、気をつけて下さい!」

「わかった、皆は下がっているんだ!」

ジヨーは腰に差してある短刀を引き抜き天にかざす。

「変化、陣雷!」

短刀が共鳴し、それを額にかざすと梵字が現れ、それを中心に光が拡散しジヨーの体にまとわりつく。光が消え、そこに現れたのは全身が白く輝く鎧に包まれたライダーであった。

仮面ライダー陣雷。

人々を脅かすアヤカシを倒すべく生み出された、白い希望のライダー!。

陣雷は、背に差してある忍者刀・雷破を引き抜き、アヤカシ・猪武者に斬りかかった。

雷を纏っている雷破の一太刀は、猪武者の鎧にかなりのダメージを与え、更にミドルキックを絡めた連続技に流石の猪武者も尻餅をつく。

だが、猪武者も黙っているわけではない。  
すぐに起きあがると、背部から金棒を取り出し陣雷に迫る。  
その一振りに陣雷も雷破を構えて受け止める。

ズンッ！！

重い一撃にひざを突く陣雷。  
流石にまずいと感じたのか、右腕に梵字を発動させ、新たな姿に変わる。

「変化、黒獅子！！」

陣雷の白い鎧が、黒く重厚な鎧に変わり、手甲も重く頑丈な物に変わる。

胸に獅子の紋章を抱く陣雷の剛力強化フォーム、変化・黒獅子。  
今それが姿を現した。

瞬時に体制を立て直し、猪武者を弾き飛ばした、陣雷・黒獅子。

「よし、こいつならっ！！」

すかさず、左フックで猪武者の間合いを離すと、右ストレートを顔面に叩き込み、ミドルキックでいなす。

「さて、仕上げといきますか。」

黒獅子の右手に闘気が宿り、やがて巨大な何かを形作る。  
それは、等身大の手裏剣。しかも、至るところに梵字が浮かび、更に威力を増す。

「くらえっ！！」

黒獅子から放たれた手裏剣は、寸分の狂いなく猪武者に命中し、爆発を起こして消え去った。

が、それと同時に。

姫のいる書斎の上空に黒い影が急降下してきた。

ジヨ一のいる位置からでは間に合わない。

「し、しまった!!!」

ジヨ一は、急ぎ残った見習いを連れて姫の元へ駆け込む。

「姫を、姫を守るんだ!!!」

T O U R 1 1 E N D

T O U R 1 2 に続く

TOUR 11 仮面ライダー陣雷の世界 〽with 忍者戦士 飛影〽

次回「仮面ライダーアナザーディケイド 〽青い瞳の破壊者〽」  
は、

「帯刀、覚悟…！」

「私の正体を明かす時がきた様だな。」

「姫を守るが俺の使命…ここで死ぬ訳にはいかないんだ…！」

TOUR 12  
「その魂、いのち姫のために」

命ある限り、守り抜け！！

XX

「今回から、こなたが復帰するけど…」

唯

「では、今回も私達が代役で！」

XX

「ああ頼むよ、こなたにあまり無理させたくないから。」

唯

「さあ始まるぞますよ。」

紬・律

「嫌いじゃないわ!!」

澪

「おiiiiiiiっ!W泉 京水は、やめええええいっ!!」

梓

「もう帰りたい…(号泣)」



姫のいる書齋目がけて急降下をかけてきたのは、カラスの頭部に山伏の姿をした烏道士かみすどしである。

手にした禅譲を掲げ、今にも屋根を破らんとする勢いで攻撃を仕掛けようとしていた。

ジヨも見習いと共に烏道士を止めるべく走り出すが、いかんせん向こうの方が早く、追いつけない。

「く、くそっ！間に合えっ！！」

が、しかし。

『マスク・ライド イクサ！ゾルダ！』

突然、どこからか電子音が聞こえ、屋根の上に2人の女性が立っていた。

1人は、アップルグリーンのロングヘアに鼻まで伸ばした前髪の姫風の女性。

もう1人は、ブロンドのロングヘアを束ねた、いかにも気が強そうな女性。

アップルグリーンの女性は、仮面ライダーゾルダ・山辺 たまき、もう1人は、仮面ライダーイクサ・黒井 ななこ。

『レ・デ・イ』

「変身！」

『フ・イ・ス・ト・オ・ン』

黒井は、右手に抱くイクサ・ナックルを左の掌にあてがい、バック

ルにセットする。

バツクルから現れる十字型のエネルギーが鎧の姿に変わり、それがななこに装着され、イクサが爆誕する。

「変身！」

一方、既にVバツクルが装着された状態のたまきは、右手に持つカードデッキをVバツクルにセットし、ゾルダに変わる。

2人は、イクサカリバー・ガンモードとマグナバイザーを構え、烏道士を狙って砲撃を開始した。

狙い誤りなく命中する2人の砲撃、落下する烏道士。

とそこへ、ゆつくりとした足取りで仮面ライダーディスラッシュ…シャッフルが屋根の上から現れた。しかも、だらしなく伸びをしなから。

「全く、おちおち寝られやしねえ。」

ため息混じりであくびをし、屋根から降りていく。どうやら、屋敷の上で寝ていたらしい。

「ご両人も降りてきて、一気に仕上げといくよ〜ん。」

なんだ、この軽いノリは。やる気はあるのか？

ジョーは、彼を見て侮っていた。

だが、烏道士とディスラッシュの斬り合いが始まると、剣裁きが見事の一音であり、しばし見とれていた。

一太刀と一太刀の間のロスが無く、詰めの間合いも素早いからだ。

よほど剣に精通していなければ出来ない芸当である。

『アタック・ライド スラッシュ！』

ここでカードをセットインし、烏道士に更なる一撃を与える。

「更に追加だよん。」

『アタック・ライド ストライク・ベント!』

立て続けにカードをセットインし、今度はゾルダにマグナ・ホーンを装備させ、一撃を与える。

イクサもイクサカリバーをソードモードに切り替え、烏道士に斬りつけたところで、烏道士は爆発して果てた。

「あら、最後にこれを使ったかったけどな。」

そうして手にしていたのは、クロス・アタックのカード。召喚したライダーに必殺技を使わせるカードだ。

が、はつきり言って使わなかった方がよかったかもしれない。

ゾルダのファイナル・ベント…エンド・オブ・ワールドで屋敷が丸焦げになる可能性があるからだ。

「ちっ…。」

その時、扉に立っていた帯刀は烏道士が倒されたのを見て苦虫をかんでいた。

猪武者と烏道士の時間差攻撃はタイミングもよく、うまくすれば姫を倒す事も出来た。

しかし、ディスラッシュの邪魔が入り、計画は失敗に終わった。

さすがに同じ手は使えない。となれば、もう実力行使あるのみ。せめて、ディケイドだけでも道連れに…。

「…ん？」

ジョーが何者かの気配に気付き振り向くと、そこにスーツ姿の帯刀が全員を見下ろしていた。  
その表情、まさに般若。

「帯刀、貴様…！！」

それに真っ先に反応したのはシャッフルであった。  
それにつられ、シャイアンと姫も表に出る。

「！帯刀！！」

シャイアンも帯刀を見て身構える。  
すると、帯刀はシャイアンを指さし、

「シャイアン、私は貴様に1対1の勝負を所望する。…今夜10時、逢魔ヶ原で待っているぞ。」

そう言い残し、帯刀は目の前から消えた。

「いいのか？シャイアン、あいつの口車に乗って。」

その後、こなたのいる部屋でシャッフルはシャイアンに聞いた。  
こなたの顔色はすっかりよくなり、もう起きてもいい、と医者も太

鼓判を押すくらいだ。

「いずれにせよ、あいつとは決着をつけるつもりでいた。覚悟は出  
来ている。」

「しかし、あいつとは因縁も何もないだろう。それなのに、どうし  
て…。」

すると、シャイアンは前の世界での事を皆に話した。

自分の父がクロノ・ドライバーとライド・クロニクルを数日で仕上  
げた事、その時の開発担当者が帯刀だった事を…。

「なる、そう言う事か。」

「何だか知っていそうだね、シャツフルさん。」

唯の一言に、シャツフルは頭をボリボリと掻きながら、

「ああ、実はな。俺の叔父も開発に関わっていたんだな、これが。」

まさに大カミングアウト。

シャツフルの親戚まで開発に関わっているとは。

ここまでくると、もはやすごいだけでは片づけられない。

「こなた、君は姫のそばにいてくれ。自分の母に似ているから、な  
おさらだろう。」

「うん。体調もよくなったし、もう大丈夫だよ。」

こなたは、にこやかに答えた。

「結局、行くのだな。」

午後9時30分。

ジヨーが逢魔ヶ原に向かうシャイアンを見送るべく、入り口で待っていた。

もちろん、唯やシャツフルも一緒だ。

「奴との対決で決着がつくかはわからないが、やれるだけの事はやってみる。」

「シャイアン、あいつはかなりのくせ者と見た。十分気をつける。」

「任せろ。…唯、シャツフル。姫を頼む。」

「まーかせなさいって。」

「うん、気をつけてね。」

「ああ。」

そしてシャイアンは、マシン・ヴァーミリオンを駆り、対決の場へと向かう。

午後10時ジャスト。

月光の元、シャイアンは逢魔ヶ原にたどり着いた。

「…よく来たな、シャイアン。さあ、ここで貴様の息の根を止めてやる。」

「帯刀、覚悟：！」

即座にADにマスカ・レイドしたシャイアンは、ライド・クロニクルをガン・モードに切り替え、帯刀に攻撃する。

だが、帯刀に命中したものの全て弾き返されてしまった。

まるで、コンクリートの壁にボールを投げた時の様に。

「なん…だと？」

流石にADも驚きを隠しきれない。

…そう、元々帯刀はキバの世界の人間。  
とくれば、当然正体は…。

「私の正体を明かすときが来たようだな。」

「正体…？」

帯刀が片手を上げると、顔面にステンドグラス風の紋様が浮かび、やがて人型のシルエットが獣型に変わり、月光の元その姿が明らかになる。

「貴様、その姿は…!!」

「そう、これが私の正体…アノマロカリス・ファンガイアだ!!」

胸部から現れるシャッターの様な口、頭部に無数に存在する複眼、更に脇から脚部にかけて生える巨大なヒレ。

これが、アノマロカリス・ファンガイア（以下ACF）。  
帯刀の真の姿。

「さあゆくぞ…私の復讐、今こそ成し遂げさせてもらおう!!」

一方、屋敷の方では新たな刺客が姫の命を狙うべく動き出していた。前方500mに陣取るその一団は蝦蟇<sup>がま</sup>の頭を持つ武者姿のアヤカシを筆頭に、鶏天狗や烏道士の亜種、更にはカマキリの足軽<sup>むかで</sup>や百足の法師までそろっており、まさに百鬼夜行。

「来たな。」

「ああ、熱烈大歓迎だ。」

ジヨーとシャツフルが屋敷の外に陣取り、アヤカシを迎え撃つ体制を整える。

姫は、こなたのいる部屋で唯と共におり、こなたと共にシャイアンの帰還を待っている。

午後10時03分。

シャツフルとジヨーが各々変身し、アヤカシに斬りかかっていくが、いかんせん数が多すぎて裁ききれない。

とここで、陣雷は左手の梵字を発動させ、新たな姿に変わる。

「変化・爆竜!!」

竜の頭部に疾風を思わせる装甲、薄手の手甲に軽やかな脚甲。摩槍・竜風を手にしたその姿、まるで竜神。

竜風を振り回し、アヤカシを薙ぎ払っていく姿に、デイスラッシュも発起しカードを1枚セツトインする。

『マスク・ライド 響鬼 月読!』

ソードライバーを一振りし、みゆきを召喚するデイスラッシュ。

そして、みゆきは鬼の面を持つ、三日月を抱いた音叉を鳴らすと、白い炎に包まれ響鬼 月読に変身を完了した。

「はあああああ...はあっ!!」

手にした双刀・山彦 海彦を振るいアヤカシを斬り払っていく響鬼 月読、更に空中にいる鶏天狗達に対応すべく、カードを1枚セツ

トインする。

『マスク・ライド ブレイド ダブルジャック!』

次に召喚したのは日下部 みさお本人が変身するブレイド。

本人召喚、ブレイド変身後即座にラウス・アブソーバーにアブソーブ・クイーンをセットインし、フュージョン・ジャックをラウスする。

しかし、この後が違う。

更にクラブのフュージョン・ジャックをもラウスし、2つのジャックの力を持つブレイドが現れた。

これこそ、みさおブレイドの持つ特殊強化能力、ダブル・ジャックである。

スピード・ジャックによる飛行能力とクラブ・ジャックによる攻撃力アップの付加により、オリジンのブレイドにはない2つのジャックの力を得る事ができる。

その恩恵を受けたブレイドは、重装甲に包まれ、オリハルコン・ブレード付加の強化ブレイラウザーを持ち、屈強な力を発揮し空飛ぶアヤカシ達を蹴散らしていく。

が、ブレイドは遠くから放たれた無数の光を見つけや、シャッフルに大声で知らせた。

「大変だ、遠くから弓矢で狙ってきたんだってヴァー!」

「何だと!」

このままでは間に合わない。

そう思った瞬間。

何と、陣雷が姫のいる部屋の前に立ち、飛んできた矢を全て体で受け止めたのだ。

しかも、まるでハリネズミの様に。

「お、おい、大丈夫か!？」

「このくらい、何て事はない。」

デイスラツシユは、陣雷の行動に驚きを隠しきれない。

シルエツト越しに見た姫は、驚きの声すら上げられず、ただ見ている事しかできなかった。

こなたは全く動くことができず、唯に至ってはロスト・ドライバーすら起動させる事ができなかった。

「ひ、姫、無事ですか。」

「ええ。ジヨー、けがの方は?」

「大丈夫です。この程度…。」

「ジヨー…。」

「姫を守るが俺の役目。…ここで死ぬ訳にはいかないんだ!」

「…。」

ジヨーの覚悟に、姫の頬を涙が走った。

こなたは自分自身の力不足にうなだれ、唯は拳を握り悔しがる。

結局、何も出来なかった。守る事ですら…。

その、こなたの後悔の念が、この後奇跡を呼ぶ。

丁度その頃、ADとACFの激突は更に激しさを増し、ADはウィングマンにマスク・ライドして対抗していた。

「帯刀、何故私と父上にそこまで復讐するのだ!？」

すると、ACFは攻撃する手を止め、ADに語りかけた。

「私は悔しかったのだ、デイケイドを研究し数年かけて開発してきたクロノ・ドライバーとライド・クロニクルを、お前の父ガラハドが数日で仕上げてしまった事に……。」

「……。」

そして、ACFは拳を握りしめ、天を仰ぐ。

「数日……たった数日だぞ！私が長年貯めてきた研究や開発の成果を、数日で否定したのだぞ！」

「……。」

「おそらく、キングに提出した報告書にも私の名はないだろう……だからこそ、私は誓った！お前を倒し、デイケイドという存在を自らの手で消し去ってやろうと……！」

「そのために、世界を巻き添えにする、と。」

「ああそうだ。世界の危機など私の心の傷に比べれば……！」

すると、ADウィングマンはライド・クロニクル・ソードをACFに向け、語りだした。

「貴様に言っておく。私の父上は、そこまで強欲ではない。」

「そんな事、分かるものか……！」

「何故、私の父上を信用しない！？貴様の研究の後押しをしたただけだぞ……！」

「そんなのは嘘だ！何故、私に対して嘘を言うのだ……！」

「嘘ではない！私を信じてくれ！」

ADウィングマンがソードの切っ先を下げ、ACFをなだめる。

「第一、その様な人を貶める事をして父上が喜ぶ訳がない。一緒にいてわからなかったのか？」

「何：？本当なのか？」

ACFは迷っていた。

もしADの話が事実なら、今まで他の世界でやってきた行為は全て無駄だった事になる。

本当に信じていいのか？

それとも、疑ってかかった方がいいのか？

どうすべきか考えた、その時。

『帯刀、彼が言った事は全て事実だ。』

そう、キバの世界のキング・紅 渡が銀の壁から現れた。

TOUR 12 END

TOUR 13 続く

TOUR 12 その魂（いのち）、姫のために 加筆修正版（後書き）

次回「仮面ライダーアナザーディケイド 青い瞳の破壊者」は、

「力が…力が欲しい。」

「そうだったのか。私は、なんという事を…。」

「トライオー!!!」

TOUR 13

「仮面ライダートライオー」

こなたの新たな力が、  
覚醒する…。

TOUR 13 仮面ライダートライオー（前書き）

XX

「いやいやいやいや、今回は手こずった。」

こなた

「…いろいろ?」

XX

「うん、いろいろ。」

こなた

「体力とネタは?」

XX

「ああ、有り余っているから心配しないで。」

こなた

「あまりムチャしないだね。では…」

こなた

「今回は、いよいよ私がオリジナル・ライダーに変身だよ!」

XX

「そして、陣雷の世界のボスキャラ登場に、帯刀とシャイアンの勝

負が意外な方向へ！」

XX・こなた

「「では、いつてみよー!!」」

こなた

「さあ始まるぞますよー!!」

シャイアン

「キバっていくぜ!!」

唯

「うんたん」

シャツフル

「ブルオアアアアアツ!!」

CVは…わかりますね？

漣・かがみ

「まじめに始めなさいよ!!」  
も生身で

ギガント&ケルベロス装備…しか

4人



TOUR 13 仮面ライダートライオー

「あ…あなたは！」

「キング…。」

キング・紅 渡の登場に、ADとACFは驚いていた。

元より、本来ならオリジン・リイマジネーション共に裏世界に介入は出来なかったはずである。

それが今、目の前にいる…しかもCGやホログラフィーではなく、生身の体である。

「大丈夫なのか、ここにいて。」

「私でしたら、大丈夫です。…それよりも、帯刀。」

渡はACFに向き合い、彼の肩を軽く叩いた。

「彼の言葉を、何故信じないのですか。…それとも、僕が嘘をついていると思っっているのですか？」

「…正直な話、私が今まで心血注いで研究してきた成果を、彼の父が…ガラハドが全て否定してしまった事に憤りを感じずにはいられなくて…。」

だが、AD…シャイアンは彼の心情を察したのか、ライド・クロニクルをブック・モードに戻し、ACFに語りかけた。

「確かに、成果を否定し、侮辱するのは悪い事だ。…しかし、それは、貴様の…いや、あなたの勘違いなのでは。」

「そうです。現に、報告書にはガラハドさんの名前は載ってはいません。帯刀、あなたの名前なら載っています。」

渡の話に、ACFは驚いた。

自分の名前しか載っていない？…しかも、ガラハドの名が外されている、だと？

「にわかには信じられない。証拠があれば、私も納得できるが…。」

「証拠、ですね。キバット！」

『わかったぜ、渡！』

すると、上空から書類をくわえたキバットが舞い降り、ACFに書類を手渡した。

『これが、証拠だぜ。よく読んでみな。』

受け取った書類に目を通し、そしてため息をつく。

「やはり…。」

屋敷では、デイスラッシュと響鬼 月読がアヤカシを相手に善戦していた。

「あと残るは、蝦蟇野郎と僅かの手勢のみか。手こずらせやがって。」

「しかし、陣雷さんが動けなくては…。」

響鬼の言葉も尤もである。

今彼は、姫を守るために矢ぶすま状態で身動きがとれないからだ。

「……………」

一方、こなたは床に伏せてしまい石のように固まり、動く事が出来なかった。

「ああ…い、いやだ…。いやだよ…。」

矢ぶすまの陣雷を見て、あの時の記憶が甦ったのである。

それは、こなたにとって忘れがたい記憶、『ガイアメモリ事件』。

かつて、仮面ライダージョーカーとして戦っていたこなたは、とある企業が製作したガイアメモリをモニターで使用した事があった。がしかし、ガイアメモリの暴走により完全に戦闘マシーンと化したこなたは、止めに入ったかがみ達をも打ち倒し、彼女達に痛手を与えてしまったのである。

それ以来、こなたはロスト・ドライバーを忌み嫌う様になったのだ。もつとも、今はオーナーが唯になった時点で、精神的に緩和されてはいるが。

その時以来、こなたは心の中で思っていた。。

自身のトラウマを克服できる、新たなライダーの力が欲しいと。

皆より劣っていてもいい。

もう、あの惨劇を繰り返さないために。  
何より、皆を守りたいがために。

「力が…力が欲しい。」

こなたは、力なくつぶやく。

片や表では、陣雷が傷だらけのまま再び動き出していた。

あれだけの痛手を被っていても、平気でいられるのには訳がある。

それは、超自然治癒能力。彼は、大きな痛手を負っていても、しばらくすれば傷口は短時間で修復し、再び行動できる様になるのだ。

全ての矢を引き抜き、雷破を手にアヤカシを斬りつける様は、闘神を思わせる。

まさに、鋼の体。

「こいつぁ驚いた。流石に俺もシャッポを脱ぐぜ。」

デイスラツシユも手放して賛美する。

蝦蟇武者に向かい、デイスラツシユと響鬼は間合いを取りながら斬撃を繰り出していく。

音撃剣・海彦山彦を、まるで太鼓を叩く様に捌く響鬼に対し、蝦蟇武者は太刀と小刀を巧みに使いこなし、時々舌を鞭のように振るいデイスラツシユと響鬼に食らいつく。

「くっ、こんな時に青ちよびれは何をやっているんだ！」

デイスラツシユも、いよいよ息が切れてきたらしく、剣を振るう腕が重くなつてきていた。

途中で、遠方の弓矢隊を一掃したブレイドも加わり蝦蟇武者を共に追い詰めるものの、蝦蟇武者は冷静に対処し、全く隙がない。

そんな中、あなたは相変わらず伏せたまま動けないでいた。

彼女には既に戦う気力はなく、ただ震えているだけで、顔すら上げられない。

『あなた…。』

かがみ達も、どうしたらいいのかわからず途方に暮れていた。力にはなりたい。しかし、今は何を言っても震えるだけ。

だが、その時。

救いの手が、あなたに差し伸べられた。しかも、あなたの中から。

『あなた、あきらめるな!!』

…え?お父さん?

『あなたは、お父さんの子だろう?だったら、しっかりしなきゃ!』

で…でも…。

『過去の事にとらわれるな。前を見て、歩き出せ!…お母さんに似

「た人を守りたいんだろ？」

「う…うん。」

『力なら、お父さんと皆の力を合わせればいい。力の使い方をマスターすれば、その力を自在に使いこなせる。』

「…使い方を教えて！今すぐ！」

『よし、わかった。…意識を集中して。今、こなたに力を送るから。』

すると、こなたは上半身をゆっくりと上げ、両手を天にかざし、握り拳を作り胸の前でぶつけ合わせる。

「…どうなさいました？」

「…え？」

こなたの行動に驚いた姫は、急に声をかける。唯も驚いて口をあぐりと開け、呆然としていた。

逢魔ヶ原では、報告書を読み終えたACFが、涙していた。

「そうだったのか。…私はなんと…。」

「どうやら、今まで自分が思っていた事が間違いだ…た事に気がつい

た様である。

そう、帯刀の名前はあったが、ガラハドの名前はなかったからだ。

『これでわかったか？…元々彼とは戦う理由なんて無かったんだよ。』

キバットの意見も尤もである。

早い時期に事実さえ知っていれば、デイケイド相手に、無駄に戦う事はなかった。

しかし、デイケイドを倒す事に目がくらみ、先が見えていなかった。ACFが後悔していた、その時。

「…しまった！このままだと屋敷が危ない！！」

「なぜだ？」

ACFが突然大声を上げ、そこにADが訪ねた。

「屋敷には、アヤカシを束ねている九尾狐大將軍が迫っているのだ。

…しかも、かなり腕の立つ親衛隊を連れて。」

「な、何だと！？」

「デイケイド、先に行ってくれ。…もう戦っている暇はない！！」

「わかった。行かせてもらう。」

そして、ウィングマンから戻ったADはマシン・ヴァーミリオンに乗り込み、屋敷を目指した。

『渡、俺たちも！』

「ええ、行きましょう。」

「キング、私も行きます。せめてもの償いに。」

「わかっていきます。」  
『一緒に来い、共に戦おうぜ!』

渡とキバット、そして帯刀も屋敷を目指して動き出す。

屋敷では、こなたが拳をぶつけたまま立ち上がり、そして顔を上げて叫ぶ。

「トライオー!!!」

すると、どうだろう。

両拳から光がほとばしり、こなたを包み込むや空中に舞い上がり、外へと飛び出していった。

「?...青ちよびれ、どうしたんだ!？」

「ちびすけ?!」

「泉さん?!」

3人が驚く中、光が止み、そこに新たな戦士が現れた。

まるでバツタの様なマスクに鋭い触角状のブレード・アンテナ、肩は短剣の様に鋭角に伸び、両腕に備わるカマキリ風のアーム・ブレード、脚部には薄手の頑丈なプロテクター。

そして、飾りも何もないターミナル付きのベルト。

仮面ライダートライオー。

こなたの新たな力。

そして、自らの力を使いこなした真の姿。

『これが…私の姿…。』

改めて両手を見、そして全身を眺める。

『この…高まりは…何？』

素振りをして感触を確かめるトライオー。

ひたすら軽く、そして素早い身のこなし。

他のライダーの力もすごかったが、今の力の方が何倍もすごい。

…いや、凄まじい。

「…？」

蝦蟇武者は、舌を伸ばしトライオーの頬をぺちぺちと叩いて様子を見ていた。

その様子が気に入らないのか、トライオーは舌を掴み、思い切り振り回すと塀の外に放り投げ、そしてジャンプ一発で塀を飛び越え、蝦蟇武者にキックを放つ体制に入った。

まるでホバリングの様に空中に止まり、狙いを定めると、それ目がけてキックを繰り出す。

脚部に黄金のオーラをまとい、蝦蟇武者に鋭角にキックが命中した。藪の中に消えた蝦蟇武者は、炎の柱を上げて消滅、この世から消える。

『これ…すごい…。』

流石のこなたも、キックの威力に言葉が見つからず、ただ驚いていた。

「ちびすけ…。」

「泉さん…。」

響鬼とブレイドもトライオーの凄まじい威力に言葉もない。

『ふむ。やはりここは、麻呂が出なくては。…それにしても、帯刀は一体どこへ油を売りに行ったのやら。』

そして、はるか上空から様子を見ていた白い9つの尾を持つ狐の貴族は、軽くうなずくと屋敷の方へと降りていった。

彼こそ、九尾狐大將軍。きゅうびぎつなだいしゅうぐん

アヤカシを纏める者にして、最強のアヤカシ。

「…あいつはっ!?!」

「何だ、今度は狐のオカマかつ!?!」

陣雷とデイスラッシュは、現れた九尾狐大將軍に対し各々の武器を構え、出迎える。

『麻呂はオカマではないでおじやる。無礼であるぞ!?!』

九尾狐大將軍の怒声が、月光照らす屋敷にこだまする。

「あれも敵なの?…姫様、ここにいて下さい!」

呆然としていた唯も、ようやく我に帰り、ロスト・ドライバーを腰にセットした。

『ジョーカー!!』

ガイア・ウイスペーも高らかに、ジョーカーメモリをロスト・ドライバーに挿入し、起動させる。

『ジョーカー!!』

仮面ライダージョーカーに変身し、早速キックを九尾狐大將軍に決める。

がしかし、黒い障気が九尾狐大將軍の前に現れ、キックを阻む。

「あつ、しまった!…惜しいな。」

バックジャンプして間合いを取り、次の攻撃に備えるジョーカー。

「こうなれば、一気に攻めるしかねえ!…悪いけど、嬢ちゃん達は青ちよびれの元に戻ってくれ。あの子が力を十分に発揮するには、2人の力が必要だからな。」

「わかつたんだってヴァー!」

「わかりました。ディスプレイッシュさんもお気をつけて。」

そう言うや、ブレイドと響鬼は消える様にこなたの元に戻り、トライオーと一体化する。

更に体が軽くなったのを感じたトライオーは、九尾狐大將軍に向け手刀を繰り出す。

手刀は周りの空気を取り込み、鋭い刃となり相手の顔にかすり、軽い切り傷を刻む。

『ほう…。向こうにも骨のある者がいるでおじゃるな。』

九尾狐大將軍の表情が急に険しくなり、そして腰にある妖刀に手をかけ、ゆっくりと引き抜く。  
その刀身は闇よりも尚黒く、また放たれる妖気は他のアヤカシよりも圧倒的である。

「ものすごい殺気だな。」

「ああ、今までのアヤカシの倍以上はあるぞ。」

すると、陣雷は左手で印を切り九尾狐大將軍に斬りかかる。

が、九尾狐大將軍は余裕でかわし、鳩尾にアツパーを決める。

がしかし、彼の拳は虚しく空を切り、残影のみが残る。

「…うん？」

すると、いつの間にか数体の陣雷の残影が、九尾狐大將軍を取り囲んでいる。

忍法分身の術。数体の分身を生み出し、一斉に攻撃する陣雷の技。

その分身は九尾狐大將軍に斬りかかるが、巧みに剣を振るい分身を1体ずつ潰していく。

「くそつたれが!!！」

そこへ、デイスラッシュがソードライバーを構え、九尾狐大將軍の胸板を斬り裂く。

「むうっ!!！」

一発いいのを喰らい、のけぞる九尾狐大將軍。

ここでトライオーが腕のブレードを展開させ、追い討ちをかける。

『いつけええええつ!!!』

ザシャツ!!!

ブレードが命中し、うずくまる九尾狐大將軍に、今度はジョーカーのパンチが炸裂する。

バキツ!!!

顔面に命中し、吹き飛ぶ九尾狐大將軍。

だが、陣雷はここに来て疑問を抱き始めた。

あまりにも九尾狐大將軍が弱すぎるからだ。

いくらアヤカシの御大将とて、おんたいしやう少しくらいは齒こたえがあってもいいはずである。

だが、完全に打たれ弱い。弱すぎる。

「…お前、何か考えているのか。」

『…。』

九尾狐大將軍に訪ねる陣雷。

が、向こうは返事がない。

『くつくつくつ…ふはーっはっはっはっ!!!』

「何がおかしい!!!」

急に笑いだす九尾狐大將軍、その笑い声に気が逆立つ陣雷。

九尾狐大將軍が、ゆっくり立ち上がると妖刀を高く掲げ何やら術を

唱える。すると、銀の壁が4人の前に現れ、そこから牛の頭を持つ侍と馬の頭を持つ侍が現れる。

『まだこれからでおじゃる。…ゆくぞ!』

「くそつ、しつこすぎるぜ…!!」

目の前の新手に毒づく陣雷。

いくら超自然治癒能力を持つ陣雷とて、既に限界が近づいており、回復も鈍くなっていたからだ。

「く、くそつ!…ハア、ハア…!!」

片膝をつき息を荒げる陣雷に、牛の侍…牛頭鬼ウシノコが金棒を振り上げ迫ってくる。

更に、デイスラッシュとトライオー、ジョーカーに馬の侍…馬頭鬼ウマノコの刀がうなりを上げて迫る。

『さあ…覚悟を決めるがいい!麻呂の勝利でおじゃる!!』

TOUR 13 END

TOUR 14 続く

TOUR 13 仮面ライダートライオー（後書き）

次回「仮面ライダーアナザーディケイド」青い瞳の破壊者」  
は、

『ええい、邪魔でおじゃる！』

「手下ですら、主を気遣う優しさがあるのに、貴様は…!!」

『もうお前の言葉には乗るものか！』

「忍びは死なず」

その忍者魂、朽ちる事無し…。

TOUR 14 忍びは死なず(前書き)

XX

「今回は、割とすんなり書けたな。」

こなた

「ま、相変わらずグダグダかつ統一感ゼロだし。」

XX

「…それを言っちゃあお終いよ。」

XX

「今回で陣雷編はファイナル!」

こなた

「私も大活躍するよ!」

XX

「『では、いってみよー!』!」

こなた

「さあ始めるねますよ!」

シャイアン

「さあ、振り切るぜ！」

唯

「部活に入らないだけでニートお！？」

シャツフル

「ゴリラァ、立てこの野郎！」

かがみ

「まともに始めなさいよ！！」  
みさおからキンググラウザーを借り  
てきた

4人

「「「「「...」」」」」

## TOUR 14 忍びは死なず

牛頭鬼と馬頭鬼の攻撃が、4人に決まろうとした、その時。

『アタック・ライド ブラスト!!』

横から銃撃が炸裂し、牛頭鬼はバランスを崩して倒れ込む。  
ADが間に合ったのだ。

「大丈夫か、みんな！」

「遅いぜ、全く！」

ついでに馬頭鬼にも発砲し、怯んだところへデイスラッシュはカードをセットインする。

『アタック・ライド スラッシュ!!』

「くらいやがれ!!」

胸部にソードライバーがめり込み、一気に斬り裂く。

『グオオオオオツ!!』

更にジョーカーが新たなガイアメモリを手にし、スイッチを入れる。

『プリズム!!』

そして、スロットルにセットする。

『プリズム・マキシマム・ドライブ!!』

「全速前進!…プリズム・マシンガン!!」

起動スイッチを押したジョーカーの右手に虹色の光が収束し、その拳を馬頭鬼に放つ。

放たれた拳は、無数の光の矢となって馬頭鬼の体に炸裂する。

『ぐおおおおつ!!』

揺らめく巨体、手から滑り落ちる刀。

そこをすかさず、トライオーのアームブレードが馬頭鬼の胸部を薙いで間合いを離し、そしてターミナルベルトに手をかざす。

するとターミナル部が輝き、そこに電王のバツクルが現れた。

「電王・パピヨンフォーム!」

トライオーの声に反応し、オーラスキンがトライオーに装備され、オーラアーマーが連結しNew電王・パピヨンフォームに変わった。最後に、本来の装着者のゆたかがトライオーと一体化し、変身は完了する。

『お姉ちゃん…。』

「…どしたの? ゆーちゃん。」

ゆたかが、驚きの声を上げる。

『何だか…力が沸いてくる…。』

「多分、それが私の能力らしいね。」

どうやら、ゆたかはトライオーから漲るエネルギーを受け、力を貰ったようだ。

「いくよ、ゆうちゃん！」

『うん！』

トライオーNew電王（以下T電王）は、デンガツシャーをハルバード・モードに変え、一気に馬頭鬼へと斬りつけていく。

片や牛頭鬼と戦っている陣雷は、黒獅子に変化し無数に拳を振るっていた。

ADのライド・クロニクル・ソードによる斬撃も加わり、牛頭鬼は徐々に押されていく。

「間に合った様ですね。」

とそこへ、渡と帯刀がADと合流し、姫を守るべくキバットと共に姫の元へと駆け寄る。

『た、帯刀！麻呂を裏切る気でおじゃるか！？』

『…そう言う事だ、その化け狐！いや、ナインテール・レジエンドルガ！』

九尾狐大將軍の一言にキバットが答える。

そう、九尾狐大將軍の正体は、キバの世界のモンスター、ナインテール・レジエンドルガ（以下、NTL）。

既に滅んだと言われていた、レジエンドルガ一族の生き残りである。

『くっくっくっ。よくぞ麻呂の正体を見破ったでおじゃるな、そこ

のコウモリモドキ。』

『ああ、帯刀とは違う力を感じたからな。』

更に言えば、『本物』の九尾狐大將軍を討ったのも、彼なのだ。本人だと偽り、権限を掌握するために。

『しかし、レジエンドルガが大將気取りとは、出世したものだな。』  
『誉め言葉として受け止めさせてもらうでおじゃる。』

キバットの突っ込みに答えるNTL。

馬頭鬼とT電王パピヨンフォームの戦いもクライマックスに入り、ハルバードを握る手にも力がこもると、ここで。

「ゆうちゃん、ちょっとくすぐりたいけど、いい？」

『え、何?...って、きゃああああっ!!』

何と、いきなりFFRをし始めたのだ。

「『ファイナル・フォーム・ライド デ・デ・デ・電王!!』」

そして、電王は変形を始め、デンオウパピヨンに姿を変えた。

「一体どうしたの？お姉ちゃん。』

「この馬兵士を素早く倒すために、パピヨンちゃんにバトンタッチしようと思って。」

『なるほど。』

そう、トライオーは手っ取り早くN T Lを倒すために、攻め手の早いパピヨンを選んだのである。再びデンガツシャー・ハルバードを構え、馬頭鬼に挑む。

「『さあ、手加減なしでいくよ!!』」

電光石火の攻めに、流石の馬頭鬼も耐えきれなくなり、無数の傷を刻みながら地に伏した。

牛頭鬼と陣雷・A Dの激突もクライマックスに入り、ここでA Dがカードを手に陣雷に声をかける。

「ここは私が仕留める。あの狐は、ジョーに任せた。」  
「ああ、任せろ。」

陣雷はN T Lに向けて走り出し、A Dはカードをセットインする。

『ファイナル・アタック・ライド デ・デ・デ・ディケイド!!』

十枚のオーラカードが牛頭鬼に展開し、A Dがオーラカードを通過して威力を増す。

デイメンション・キック・アナザーは牛頭鬼に炸裂し、牛頭鬼は吹き飛ばされて爆破した。

陣雷は爆竜に変化し、N T Lに挑みかかる。  
が、そこへ。

…!!

何と、馬頭鬼が立ちはだかったのだ。  
しかも、傷口から血を大量に滴らせて。

『ええい、邪魔でおじやる！』

怒ったNTLは、手からプラズマ弾を放ち、馬頭鬼を倒してしまっ  
た。

「な、何いつ！」

その場にいた全員は一瞬凍りついた。

NTLが、自らの手で部下を始末してしまったからだ。

「…お前、部下をなんだと思っているんだ？」

『麻呂にとってみれば、部下など只の手駒。使い捨てにもならぬ。』

NTLの邪悪な笑みを浮かべた冷酷な言葉に、陣雷はキレた。

「手下ですら、主を気遣う優しさがあるのに、貴様は…!!」

『…ふん、その程度の浅知恵しかないお前達になにがわかる。』

「浅知恵、か…。哀れだな。その下らない考えは。」

『下らない…だと!？』

「ああ、そつだ。」

NTLの言葉に、ADは憐れみを込めた言葉を放ち、更に食い下が  
る。

「ここにいる男は、姫を守る一心で身を粉にして戦い、忠義を貫いている。今貴様が葬った部下でさえ、主への忠義を尽くすために我らの前に立ちふさがった。それを貴様は侮辱し踏みにじった。貴様に部下を罵る資格はない!!」

ADは、グランザムの世界で部下を食糧扱いしていたマスター・フオビドウン・リメルの事を思い出していた。それ故に、怒りも相当のものである。

『ええい、さつきから戯言を言いよって!!…お前は一体何者でおじやる?!』

「通りすがりの仮面ライダーだ。覚えておくがいい!」

すると、ライド・クロニクルから三枚のカードが飛び出し、ADの手に収まる。

一枚は、陣雷が描かれたカード、もう一枚は左上に陣雷、右下に分身が描かれたカード。

そして、もう一枚は十字手裏剣に二振りの刀を交差させたライダー・クレストのカード。

その内の中央のカードをクロノ・ドライバーにセットインする。

『ファイナル・フォーム・ライド ジ・ジ・ジ!陣雷!!』

「少しくすぐったいが、よろしいか?」

「な、何だ?…って、ぐわああああっ!?!」

ADが陣雷の背後に周り、軽く触れると陣雷が4人に分裂し各々がフォーム・チェンジした姿になっていた。

陣雷の基本フォーム、黒獅子、爆竜に加え、赤い色の鳳凰を象った

陣雷：鳳来鷹が現れ、NTLに向き合う。

『これが、俺の…。』

「私からのサプライズだ。この力なら、奴を討てるはずだ！」

4人は、同時にうなづく。

「みんな、いくぞ！」

「うん！」

『はい！』

「やーってやるぜ！！」

「うん、いくよ！」

『姫を守るために、この命を捧げん！』

皆の覚悟が一つになり、同時に技が発動する。

『ファイナル・アタック・ライド ジ・ジ・ジ！ 陣雷！！』

『フル・チャージ！！』

『ファイナル・アタック・ライド デ・デ・デ！ ディスラッシュ

！！』

『ジョーカー・マキシмум・ドライブ！！』

『お、おのれえっ！！』 「逃さないよっ！！」

まずジョーカーのライダーキックが炸裂し、続いてディスラッシュ

のデイメンション・スラッシュが命中する。

それに続いてT電王のエクストリーム・ハルバードが命中し、最後にディケイドと陣雷の融合技：ディケイド・カゲブンシンが襲いかかる。

『…くっ！！』

NTLは逃げ出そうとしたが、何故か体が固定されてしまい、動けなかった。

見ると、姫と帯刀：ACFが、念動波で足止めをしている。

そう、これが姫の能力。

優しき者が放つ、怒りの力。

『た、帯刀、麻呂を助けて！』

NTLが帯刀に助けを求めたが。

『もうその言葉には乗るものか！』

ACFはNTLの助けを断り、更に強力な念動波を繰り出す。

『お、おおおおおっ！！』

鳳来鷹のクローが命中し、爆竜の槍、黒獅子の拳が後に続き、更に陣雷の雷破が命中する。

そして最後にADのデイメンション・キック・アナザーが命中し、屋敷の外に飛び出していく。

『こ、これで勝ったと思わないでおじゃる…!…し、勝負は、ここからでおじゃるうううう!…!』

そして、NTLは爆音をあげて消滅した。

戦いが終わった翌日、遂に別れの時がきた。

こなたは、姫をチラッと見て顔を下げた。  
別れるのは、確かにづらい。だが、いつまでも甘えている訳にはいかない。

「いよいよ、お別れですね。」

「うん。。。」

すると、姫はこなたの手に軽く触れ、そして柔らかな笑みを浮かべた。

「大丈夫です、またいつでも会えますよ。…次に会ったその時は、ジョーや皆さんと一緒に、何かご馳走しましょう。」

「…ありがとうございます。」

こなたは、顔を赤くして照れていた。

「そう言えば、まだ名前を名乗っていなかったね。…私の名は、泉  
こなた。」

「こなた…よいお名前ですね。」

一方、唯とシャイアンは、またしても来ないシャツフルに、いらだ  
つていた。

「シャツフルさんは？」

「あいつの事だ。どこかで昼寝でもしているだろう。…仕方がない、

こなた、ゆくぞ！」

「あ、ちょっと待ってよ！」

そして、こなたは再度姫の方を見て、笑顔を見せた。

「また来いよ、次に会ったら夜まで語り合おうぜ！」

「ああ、そうしよう！」

「さようならあ。」

「さようなら。」

銀の壁をくぐり、次の世界に向かうシャイアン一行。

「あ、誰かいるよ。」

「…渡か。」

と、ここで一行は紅 渡に出会った。  
もちろん、帯刀も同行している。

「何かあったのか？」

「ええ、とても重大な話があります。」

T O U R 1 4 E N D

T O U R 1 5 に続く

TOUR 14 忍びは死なず（後書き）

次回「仮面ライダーアナザーディケイド 青い瞳の破壊者」  
は、

「みんなに力を返すね。」

「今、この世界に変化が起きようとしています。」

「久しぶりだな、シャイアン。」

「インターバル 渡とガラハドと世界の変化」

今回は、作者からのお知らせもあります。

TOUR 15 インターバル 渡とガラハドと世界の変化（前書き）

XX

「さて今回はインターバルと言う訳で、ここにいるのは私だけですが、後書きに大事なお知らせがあります。」

TOUR 15 インターバル 渡とガラハドと世界的変化

銀の壁の中で、再び出会ったシャイアンと渡。

「重大な話、とは？」

「ええ、実は僕達の世界…いえ、あなた達がオリジンと呼んでいる  
原典世界と、あなた達のいる裏世界…アナザーワールドが繋がった  
のです。」

「何っ！それは本当かー！」

世界と世界の連結に、シャイアンは驚いていた。まさか、こんな事  
態になるうとは…。

だが、シャイアンは思う。

「しかし、何故渡達の世界と繋がったのだろうか。」

「それは、おそらくニンテール・レジエンドルガを倒した時に、  
あなたが救った世界と僕達の世界が繋がったと思いますが。」

『おかげで行き来が楽になったぜ。』

渡の懐に潜り込んでいたキバットも、ひょっこりと現れシャイアン  
に話しかける。

あの時。

NTLを倒したのと同じ頃に、シャイアンにより救われた世界…グ  
ランザム・ミラージュ・ルウの世界が他の世界と連結し、また同時  
に陣雷の世界も救われたため、どこかで繋がったのだ。

「渡、そうなると色々と厄介な事が起きそうだな。」

「例えば？」

「まず渡達の世界の怪人達が、組織を作ってこちらに攻め入る可能性が1つ。2つ目は、向こうのライダー達が私達の世界のライダーと上手くやっていけるかどうか。」

渡は腕を組んで、しばし考えた。

すると、何かを思い出したのかシャイアンに対して口を開く。

「それに関しては大丈夫です。僕達がいる限り、相手は組織を組んで攻め入る事はありません。…それに、他の世界のライダーもアナザーワールドには興味がありますから、何とかやっていけるでしょう。」

渡の返答に安心し、ホッと胸をなで下ろすシャイアン。

もし、彼らとうまくやっていければ、オリジンやリイマジ達との絆が繋がり、友好の輪も広がる。

つまり、オリジン・リイマジ・アナザー、3つの世界の危機を回避する手段が早い内に見つかるかもしれない。

只でさえ、シャイアン達だけでアナザーワールドを救いきれるかわからない状況で、救いの手が差し伸べられれば、これほどありがたい事はない。

「…ところで、こなたちゃん。あなたに会いたい人達が来ているのですが。」

「…え？」

いきなり話を振られ、戸惑うこなた。

渡が指をパチンと鳴らすと、銀の壁の向こうから何者かが集団で現れた。

「…え、え、えええええつ?!」

こなたが驚くのも無理はなかった。  
そう、こなたの知り合い…かがみ達が、目の前に現れたからだ。  
しかも、精神体ではない。ちゃんとした、実体だ。

「あ……ああ……。」

こなたの目から、とめどなく涙があふれてくる。

こなたのあまりの動揺に、かがみは笑みを浮かべてこなたの元に歩み寄り、そつと抱き寄せる。

「こなた、あんたらしくくないわよ。そんなに泣くなんて。」  
「うう、…ひつく、えぐつ、うええん。」

感動のあまり、かがみの腕の中で号泣するこなた。  
つかさ達も、感動でもらい泣きをする。

ようやくこなたが泣きやみ、落ち着きを取り戻したところで、こなたは皆に向き合い口を開いた。

「かがみ、みんな。」

「……?」「」

「みんなに力を返すね。」

突然のサプライズに驚くかがみ達。

「いきなりどうしたのよ。」

「私ね、新しいライダーに変身出来たの。だから、かがみ達の力を

返さなきゃ悪いと思って…。」

だが、かがみは…と言うより他の皆はこなたの心の中を見透かしていたのか、

「いいのよ、こなた。私達の力はこなたが持つてて。」

「…え？」

かがみにやんわりとなだめられ、こなたも驚く。

「私達も、あれから鍛え直して何とか力を取り戻したわ。…それに。」

「それに？」

「こなたの中にある私達の力は、私達と共通よ。…だから、心配しないで。」

「柊ちゃんの言う通りよ。そんなに気を使わないでね。」

かがみとあやのになだめられ、少し戸惑うこなた。

そう、ガイアメモリ事件以来、かがみ達は自らを見つめ直し、更に精進を重ね精神面を鍛え直し、こなたに与えた分の精神力を取り戻したのである。

特に、ゆたかは皆の倍以上に鍛えていたため、かなりの強化が出来たと言ってもいい。

「そうだったんだ。なら、皆から貰った力は大切に使うよ。」

「…ふふっ、こなたも強くなったわね。」

こなたの言葉でかがみも納得し、お互いにほほえみあった。

もちろん、他の皆もこなたの元に集まり、久々に9人の笑顔が戻ってきた。

こなた達のやりとりを見ていた2人は、安堵しホッと胸をなで下ろす。

「よかった。本当に……。」

「ええ。……ところで、もう一つ大事な話があります。」

「それは一体……？」

渡は、シャイアンに向き合い、話を切り込む。

「今、世界に異変が起きようとしています。」

「異変？……世界が繋がった以外に、何かあったのか？」

「はい。残り5つの世界に新たな世界が融合し、バランスが崩れてきているのです。」

「な、何だと?!」

シャイアンは、かなりの衝撃を受け、硬直した。

そう、まだ巡っていない5つの世界に全く新しい世界が融合し、アナザーワールドの均衡が取れなくなってきたのだ。

しかも、それが1つだけの融合で済む問題ではない。

場合によっては2、3個も融合している可能性があるのだ。

そうなればアナザーワールドのパワーバランスが取れなくなり、やがて全ての世界が消滅する恐れもある。

「それだけは、何としても止めなくては!」

「まあお待ちください。いくら慌てても、まだ時間はあります。」

「……しかし!」

シャイアンが何とかしようとして慌てふためくが、そこを渡がやんわりと鎮める。

「そのために、彼を連れてきたのです。」

「一体、誰を？」

渡が再び指をパチンと弾くと、今度は壁の向こうから1人の男がシャイアンの前に現れた。

その男は、年にして40代前半、ブロンドの短髪に細めのマスク、右目が赤に左目が青のオッドアイが印象的な、スラリとしたスタイルの男である。

「久しぶりだな、シャイアン。」

「…父上！何故ここに？！」

突然のサプライズに、驚きを隠せないシャイアン。そう、彼の父・ガラハドが現れたからだ。

「実は、ガラハドさんにも協力を要請してまして、そこにいるかがみさん達やアナザーワールドのライダー達のパワーアップアイテムを作ってくれる様に頼みましたら、快く引き受けてくれました。」

「…と言うわけで、よろしくな。」

よもや、自分の父親が渡に再び協力するとは。シャイアンも驚きすぎて、言葉を失った。

「私は別に構いませんが、くれぐれも変人扱いはやめて下さい。」

「おいおい、そりゃひどいだろう！！」

シャイアンの一言に、すかさず突っ込むガラハド。

がしかし、開発の手腕がいいのはクロノ・ドライバーやライド・クロニクルの実績を見て明らかであり、渡もシャイアンも認めている。それに、彼が技術を悪用するのを嫌うのは、シャイアンが一番よく知っている。

只、シャイアンには1つ気がかりがある。

言うまでもなく、帯刀も開発に加わるかどうかであろう。

「…ところで、帯刀はどうする？」

「それでしたら、ご心配なく。彼は、今後ガラハドさんと共に開発を手伝う事を約束してくれました。」

『ま、判決を下すまでもないがな。』

「…そうですね。」

渡とキバットの答えに、納得するシャイアン。

「あ、それとかがみさん達の事です。」

「彼女達が、何か？」

「かがみさん達は、強化が完了している人から順次こなたちゃんのを要請に応えてもいい様に頼んであります。彼女達は、かなり頑張っていますからね。」

「なるほど、彼女達もそれなりに強化したのか。それは頼もしいな。」

シャイアンは、かがみ達も別のところで頑張っていた事に敬意を表し、改めて彼女達の凄さに驚いた。

取りあえずかがみ達を集めたシャイアンは、全員に問いただした。

「さて、強化が終わっているのは誰なのか、素直に手を挙げて下さい。」

シャイアンの問いにまず手を挙げたのは、ひよりであった。

「私なら、すぐに行けるッス。」

ちなみに、強化が終わっているのは、ひより・みさおのみで、後は強化待ちの状態である。

「ひよりならまず大丈夫だな。555の力は、今までかなり頼りになったからな。」

シャイアンに誉められ、ひよりは少し顔を赤くした。

「あ、ありがとう。…これからも頑張るッス。」

「…あのお。」

とここで、さつきから聞いてばかりだった唯が口を開いた。無理もなかった、そこにいた唯に気がつかず、話ばかり進んでいたから。

「あ、ごめん。あなたの事をすっかり忘れていました。」  
「渡さん、ひどいよお。」

完全に涙目の唯を見て、気まずい空気が辺りに流れた。

だが、それでも渡は冷静に唯と向かい合い、話し始める。

「唯さんは、確かあなたちゃんの世界のロスト・ドライバーを使っていますね。」

「はい、しばらく借りていました。」

「いやだからって、無断で借りるのはちよつと…。」

唯の一言に、冷や汗をかいて突っ込むこなた。

「では、ロスト・ドライバーをかがみさん達に返してください。僕が、こなたちゃんの世界の企業から預かってきたロスト・ドライバーをあなたに渡します。」

『あれから改良を重ねて安全性を上げた、って言ってたからな。』

ひ、ひどい（泣）。

渡とキバットの言葉に心の中で泣くこなた。

そう、ガイアメモリ事件以来その企業はガイアメモリやロスト・ドライバーに改良を加え、安全性を向上させた新モデルを発表したからだ。

しかも、陣雷の世界でこなたが熱でうなされて倒れていた間に。

旧式のロスト・ドライバーをかがみに渡し、新型のロスト・ドライバーを手にする唯。

「でも、旧式のこれはどうするの？」

「それでしたら、こなたちゃんの世界に戻してください。本人は、もうロスト・ドライバーは必要はない様ですし。」

かがみの問いに即答する渡。

現状ではトライオーに変身した時点でロスト・ドライバーは既に用

はないため、こなたの世界に戻しても差し支えは特にない。  
しかも、かがみ達の精神体が一緒なら、尚更のこと。

「あ、待って。それなら、私が貰うよ。」

そこへ、ガラハドがロスト・ドライバーを貰いたいと名乗り出た。

「父上、いくら何でもそればかりは…。」

「大丈夫、大丈夫。このドライバーのパーツさえあれば、新しい強化アイテムが作れそうなんだ。」

だが、シャイアンは知っている。こうなると、誰にも止められない事に。

「渡、どうする?」

「まあ、本人がよければ…。」

するとこなたは即答で、

「おじさんがよければいいよ。…但し、変な方向に改良しないでね。」

「それって、ひどくない!?!?…orz」

完全にへこむガラハド。

そして、新たな世界へ出発する時がきた。

シャイアン・こなた・唯は、改めてバイクにまたがり、ひよりはオート・バジンを銀の壁から呼び出し乗り込む。

「では、後の事をよろしく。」

「わかっていきます。」

「あの子達の強化が済んだら連絡するよ。…それまでくたばるなよ。」

「

「こなた、また何かあったら呼んでね、その時は強化した私達の手を存分に振るうわ。」

「ありがとう、かがみん。」

「かがみん言うな!…って、随分言っただわね、この言葉。」

「そだね。」

「田村さん、気をつけてね。」

「ゆたか、ありがとう。」「モシ何かあったら、私達がヘルプに向かいマース!!」

「サンキュー、パティ。」

「…私も、応援に行くわ。」

「みなみ、ありがとう。」

「…いいなあ、みんな。私なんて、どうせ。」

「大丈夫、私達がいるぜ。」

「唯ちゃん、心配しないでね。」

「あ、ありがとう、みさおちゃん、あやのちゃん。」

「いって事よ。…困った事があったら、いつでも呼んでくれよ。」

「すぐに助けに行くわ。」

「では、行ってくる。」  
「「「気をつけてー!!!」」」

それぞれの思いを胸に、4人は銀の壁を走り抜け、そして渡達は各々のすべき事をこなすべく、こなたの世界へと戻っていった。

そして、4人が次にたどり着いた地は、どこかの商店街であった。辺りを見回しても人が全く見当たらず、まるでゴーストタウンの様である。

「何だ、ここは。」  
「人がいないみたいっスね。」  
「静かすぎる…。」

シャイアン達が呆然とする中、唯は商店街の看板に目をやった。

「え…、陽昇町？」

その頃、1人の20代の男が共同墓地を訪れていた。そして、花束を墓に捧げた後、悔しそうに拳を固め、ボソリとつぶやく。

「結局、残ったのは俺だけか…。くそっ!!!」

T  
O  
U  
R  
  
1  
6  
  
に  
続  
く

T  
O  
U  
R  
  
1  
5  
  
E  
N  
D

TOUR 15 インターバル 渡とガラハドと世界的変化（後書き）

XX

「さて、大事なお知らせとは、TOUR 16から後書きの内容を変更する事です。」

こなた

「変更？」

XX

「そう、前書きではいつものOPをやり、後書きでは登場したキャラの紹介をしたいと思います。」

こなた

「なるほど。」

XX

「もちろん予告も、しっかりやるからご心配なく。」

こなた

「登場キャラの事を把握するのは、いい事だよ。どんなキャラか、よくわかるからねえ。」

XX

「そしてもう一つ。次回から第2章という形でスタートし、ガラハドのアイテム開発話と別のライダー達の話も追加します。」

こなた

「うわお、作者さんそんな事して大丈夫か?!」

XX

「大丈夫だ！問題はない！」

XX・こなた

「「と言う事で、次回からよろしく！」」

## 第2章 予告（前書き）

XX

「第2章の予告です。かなり気合を入れました。」

## 第2章 予告

残り5つの世界で起こった、異変…。

他世界の融合。1つのライダーの世界に複数の世界が絡み合い、新たな世界を作り出す。

が、それは同時に世界の滅びを意味し、アナザーワールドの崩壊を、ひいてはオリジン・リイマジネーション両世界の崩壊を更に加速させる。

だが、世界の崩壊を止めるべく戦う戦士もいた。

それが、仮面ライダーアナザーディケイド・シャイアン。

悪意を破壊し、絆を繋げる彼の戦いは今、新たなステージへ…！

そして、彼と共に戦う女子高生戦士、仮面ライダートライオーこと泉 こなた。

更に、ガイアメモリを駆使して戦う、もう1人の女子高生戦士・仮面ライダージョーカーこと平野 唯。

新たに、こなたの親友である柊 かがみ率いるパラレル・ライダーズも仲間に加わり、戦いはヒートアップする。

新しい力、新しい能力、新しい絆。

そして見えてくる、世界崩壊の影に潜む、巨大な悪意…。

アナザーディケイドは世界崩壊を食い止め、アナザーワールドを平和に導くのか、それとも…。

仮面ライダーアナザーディケイド 青い瞳の破壊者

第2章 融合した世界編

近日スタート!!

## 第2章 予告（後書き）

次回「仮面ライダーアナザーディケイド」青い瞳の破壊者」

「ううう…うおおおおっ…！」

「ひよりん、彼を止めるよ！」

「あいつ、暴走しているな…。」

TOUR 16

「仮面ライダーライトニングの世界」with エルドランシリーズ」

ライトニング、暴走」

彼の暴走を止められる者は、いないのか…！

XX

「今回から変わる、3つのキーワード！」

1つ！書くページ数を最低4ページ、最高5ページとし、EXとして『ガラハドの開発ファイル』を2TOURに1つのペースで追加。

2つ！前書きをオース形式+簡単な小ネタ形式にする。

3つ！後書きには各登場キャラのプロフィールを付け加える。」

こなた

「そして！今回のキーワード！」

XX

「あー、こなちゃん。まだ気が早いつて。」

シャツフル

「おいしいいいっ！くそ作者あああっ！」

XX

「ん？どうした、シャツフル。」

シャツフル

「てめえいい加減にしろよコラアアア！何だあの予告はあっ！俺の名前がないじゃないかああああっ！」

XX

「え？…あ、すまん。忘れてた。」

シャッフル

「全く、俺がいないと話自体が締まらなくなるぞ！いいのか？」

XX

「ま、そこはこなた達でカバーするから。それに。」

シャッフル

「ん？」

XX

「先の開発ファイルの予告に出してやるから。」  
シャッフル

「本当か？わかった、それならOKだ。」

XX

「やっとわかってくれたか。では…」

こなた・シャッフル

「レディ・ゴーー！！」

次の世界にやって来たシャイアン達は、まるでゴーストタウンと化した陽昇町商店街で警戒体制をとっていた。

鳥の羽ばたく音も、風の吹き荒ぶ音も、今は不気味に感じる。

「な、何asca、ここ…。」

「人っ子1人いないなんて、何か変だね。」

「こ、怖い…。」

3人は、あまりの静けさに気味悪がっていたが、シャイアンだけは別だった。

(何かあるな…。)

シャイアンが辺りを見渡すと、突然「何か」が走り去る音がした。

「!?!」

かと思うと、周りの家々が、まるで紙のように吹き飛んでいき、もうもつと土煙が上がる。

「な、何あれ?!」

「速すぎてわからなかったッス…。」

「気のせいかな、雄叫びまで聞こえたような…。」

こなたの感は、当たった。

雄叫びの正体、それは青いパワードスーツを思わせる、ともすればロボットと見紛う姿の『仮面ライダー』なのだ。だが、そのライダーは様子がおかしかった。その瞳は狂った様に赤く輝き、息使いも荒い。

「ううう…うおおおおっ!!」

野獣のような雄叫びを上げ、再び走り出すライダー。その向かう矛先は…シャイアン達であった。

「皆、変身するんだ！奴が来るぞ！」

シャイアンにうながされ、3人は各々変身する。

『スタンバイ』

「変身！」

『コンプリート』

『ジョーカー!!』

「変身！」

『ジョーカー!!』

「トライオー!!」

「マスカ・レイド!!」

『マスク・ライド デイクイド!!』

4人は変身を終え、迎撃体制を整える。

程なくして、雄叫びをあげ突撃してくるライダーを確認したトライオーと555は、真つ向から止めに入る。

「ひよりん、彼を止めるよ！」

「了解ッス！」

まずトライオーがアームブレードを展開し、ライダーを斬りつける。更に555もミドルキックで軽くないなし、返す刃で珍しく裏拳を決めライダーを引き離す。

「ううう、ぐああああっ!!！」

様子を見ていた2人も加勢すべく動くが、何者かの気配を感じ足を止めた。

2人が振り向くと、そこには全身黒ずくめの獣にも似た二足歩行の生物が2匹いた。

ただ、頭部が黒い球体をしており、1つ目が不気味に光る。

『グオオオオオッ!』

2人を見つけるなり、2匹の獣は飛びかかってきた。

何とか回避し、体制を立て直すADとジョーカー。

ここで、ADがカードを1枚取り出しセットインする。

「化け物相手には、騎士の力だ！マスカ・レイド！」

『マスク・ライド ルウ!!』

ADの姿が中世の騎士の様な姿に変わり、手には長槍が装備されている。

仮面ライダールウ、魔法を駆使して戦うライダーである。

ADルウは、長槍・ブリーナクを振るい、黒い獣に斬りつける。

ブンッ！、ドスッ

重い一撃が決まり、怯む黒い獣。

更にブリーナクを縦横無尽に振り回し、黒い獣を追い詰める。

一方、ジョーカーもパンチとキックを黒い獣に決め、押していた。

新しいロスト・ドライバーの具合も相まって、軽く感じながらも重い一撃は、黒い獣の体力を削るのに都合がよかった。

「シャイアンさん、決めましょう！」

「ああ、決めるとしよう。」

『ファイナル・アタック・ライド ル・ル・ル・ルウ!!!』

『ジョーカー!!!マキシマム・ドライブ!!!』

ADルウのFARとジョーカーのマキシマム・ドライブが同時に発動し、ADルウが軽く地を蹴ると空中高く舞い上がり、黄金のオーラを纏ったキックが放たれる。

「ライダー・キック!!!」

そして、ジョーカーもライダーキックを放つべく助走をつけて走り出し、大空高くジャンプしキックの体制に入る。

ルウのライダーキック『グラン・シャイニング』は、黒い獣に命中し30m近く吹き飛ばす。

ジョーカーの『ライダーキック』も黒い獣に命中し、25m程吹き飛ばす。

しばらくして、2体の黒い獣は光を発し、爆発を起こして消滅した。

片やこなたの方はと言えば、暴走するライダーに苦戦していた。

腕力に物を言わせ、パンチを繰り出す単純な攻めながら、555の装甲に重いダメージを与えており、トライオーも攻めあぐねていた。

「くっ、思ったより強いツスね。」

「うん、そうだね。…こうなったら、化け物には、化け物だ！」

ターミナル・ベルトに手を当て、光と共にフェイク・キバットがセツトされたキバット・ベルトを召喚する。

そして、予め用意していたドツガ・フエッスルを吹かせた。

「召喚、キバ・ドツガ！」

『ドツガ・ハンマー!!!』

フェイク・キバットのくわえたドツガ・フエッスルが商店街に響き渡り、ドツガ・ハンマーが召喚されトライオーが直接手にする。

するとどうだろう、トライオーがキバ・ドツガフォームに早変わりし、精神体のパーティが降臨して、変身を終える。

「せ、先輩！すごいツス！」

「さあ、ここからだよひよりん！」

「了解ツス！」

丁度この頃、遠く離れたビルの上で、1人の男が双眼鏡で町中の

様子を見ていた。

年にして30歳代、ボサボサの髪に無精ひげ、しかし体型はスリムであり、ハンサムなマスクを称えたナイスガイである。

「あいつ、暴走しているな……。」

「暴走は想定内よ。あれくらい暴れてくれないと、あの黒い化け物は倒せないでしょ。」

「しかし、本当にいいのか？あのライダーシステムで。もう少しプログラムを練り込んでいけば、あんな……。」

男の横にいた、年にして20代後半の女は少し高飛車に男に語るが、男は考え直せとばかりに意見を述べる。

「そんなのは、どうでもいいのよ！……とにかく、あそこにいるディケイドに破壊されては今後に差し支えが出るわ。何としてでも回収して。」

女の激昂に、男も萎縮する。

「くっ……。わかった、部隊を連れて回収に行ってくる。」

「お願いね。」

男は女に押し切られる形で了承し、止むなく数人の部下を連れてライダーの回収に向かった。

555は、途中からデルタ・ムーバーに切り替え遠方から銃撃を開始し、<sup>トライオー</sup>トキバ・ドツガはドツガ・ハンマーを的確に当て、ライダーの体力を削っていく。

「出来るなら、生かして捕獲したいねえ！」

「情報を得たいから、ツスね！」

「もちろん！！！」

そして、Ｔキバ・ドツガは新たなフェイク・キバットにくわえさせ、柔らかな音色を奏でさせる。

『ウエイク・アップ！！』

元のキバ・キバフォームに戻ったトライオーは、野球のピッチャーの様なモーシヨンを取り、フェイク・キバットを分離させヘル・ゲートを解放、天空高く舞い上がりキックの態勢に入る。

『エクシード・チャージ』

555も、バックルに取り付けられたメモリーチップを懐中電灯型のファイズ・ポインターにセット、脚部のハード・ポイントに接続した後、555フォンを開きENTERを押す。

フォトン・ブラッドが脚部に充填され、そのまま高くジャンプし空中で静止、ポインターから赤い光の矢が放たれライダーに命中し、キックを放った。

キバの『ダークネス・ムーン・ブレイク』と、555の『クリムゾン・スマッシュ・ハリアー』。

2人のキックがライダーに命中し一気に押し込める。だが。

「うううおおおおっ！！！」

2人のキックが逆に押されようとしていたのだ。

しかも、ノーガードで少しずつ前進しながら。

「先輩、さすがにきついッス。勢いが落ちてきた…！」  
「頑張つて、ここが踏ん張りどころだよ…！」

と、そこへ。

左右からジョーカーとADが一撃を繰り出し、ライダーの勢いを落としていた。

ジョーカーの手には銃らしき物が握られ、ADはライド・クロニクル・ガンモードで銃撃している。

勢いが急に落ち、止まるライダー。

「ありがとう、これで決められる…！」

「いくッス、先輩！」

そして、2人のキックは綺麗に決まり、ライダーは地面に大の字になって倒れた。

「手強い奴だった…。」

「一気に疲れたッス。」

「それにしても、これって…。」

戦いを終え、変身を解く4人。  
すると、シャイアンのクロノ・ドライバーから急に情報が入ってきた。

しかも、信じられない事に。

「どうやら、奴がこの世界のライダーの様だ。」  
シャイアンの言葉に驚く3人。

と、突然。

「そこまでだ、破壊者。」

数人の軍人らしき者が4人の前に現れた。  
銃を向けられ、たじろぐ3人。

しかし、それでもシャイアンは冷静だった。

「そのの者。あなたは何者だ。」

「ほう、さすがディケイド。たじろぎもしないとはな。…俺の名は、  
地球防衛軍特殊防衛戦隊長、日向 仁だ。」

「日向 仁…だと。」

「ああ。そこにあるライダーシステム、返して貰うぞ。」  
「…。」

今、ライダーをめぐる戦いが始まる。

TOUR 16 END

TOUR 17 に続く。

こなた

「今回のプロフィールは、前書きにも出てきたシャッフルさんだよ。」

かがみ

「一体、どんな人かしら。」

・シャッフル・ガードナー（イメージCV：岩槻 規夫）

年齢：21歳

身長：198cm

体重：98kg

出身地：ルクセンブルク

シャイアンの幼なじみにして腐れ縁。

家はシャイアン同様騎士の家系で、本人曰く「黒騎士だそうな」。

性格は大雑把で豪放磊落。

掴みどころがなく、ともすれば無責任にも思えるが、やはり騎士らしく優しいところもあり人の手助けをする事もある。

シャイアンがアナザー・ワールドに旅立った翌日、ガラハドからソードライバーを託され、旅立つ決心をした。

好物は、いかの塩辛とげそ天（何故か酒のつまみに食べている、無類のいか好き）。

好きな事は、剣の稽古とチェス。

嫌いな事は、悪事を働く事。

こなた

「好物が、いか尽くして…（汗）。」  
かがみ

「…意外に日本好きなのね、この人。」

次回 「仮面ライダーアナザーディケイド 〈青い瞳の破壊者〉」  
は、

（脳内BGM：「仮面ライダークウガ」より『開幕』）

「こいつは、俺が止める！」

「本当に、このままでいいのか？俺は…。」

「みんなの期待を裏切る訳には…！」

「何だか、あの人かわいそう…。」

TOUR 17

「ルシファーと仁の苦悩」

仁は、どこへ向かうのか？破滅か、それとも…。

TOUR 17 ルシファーと仁の苦悩(前書き)

こなた

「前回の3つのキーワード!」

かがみ

「1つ!次の世界にやって来たシャイアンさんの前に、暴走するライダーの姿が!」

つかさ

「2つ!黒い獣が出現するも、こなちゃんとひよりちゃんの連携プレーで暴走ライダーは完全に停止!」

みゆき

「3つ!しかし、そこに現れたのは、地球防衛軍と名乗る数人の軍隊、しかもライダーを引き渡すよう要求してきました!」

こなた

「さあいくぞますよ!」

かがみ・つかさ・みゆき

「レディー・ゴー!」

## TOUR 17 ルシファーと仁の苦悩

シャイアンは今、地球防衛軍特殊防衛戦隊隊長：日向 仁に向かい合っていた。

目的は唯一つ、ライダーの回収である。

「引き渡すのは構わないが、まずはライダーの状況を調べるのが先だ。」

「それは、こちらでやる。さあ渡すのか、渡さないのか、どっちだ！」

と、そこへ。

「ちょっと、待ったあ！」

銀の壁が両者の間に現れ、シャッフルが何故かつかさ連れて現れた。

「こいつは、俺が止める！」

「シャッフル、一体どういうつもりだ。」

「こいつは、ここにあるライダーシステムを使い回し、世界を破壊する気だ。そんなのは、俺が許さねえ。」

「ちっ！」

仁は、舌打ちするや黒いバツクルを懐から取り出し、腰に装着した。

「ライダーシステムを渡さなかった事、後悔させてやる。」

「それはどうかねえ。」

シャッフルもソードライダーにカードをセツトインし、歩み寄る。

「つかさ、下がっているんだ！」

「うん！」

「変身ー!!」

『マスク・ライド ディスラッシュー!!』

つかさが後方に下がる頃には、両者がライダーに変身していた。

仁が変身したライダーは、漆黒の烏をモチーフとした鋭角な装甲を持つ、禍々しい姿をしていた。

更に、背後から放たれる黒く鈍いオーラが周りに威圧感を与え、より不気味な印象を受ける。

仮面ライダールシファア。

堕天使の名を冠した、この世界のダーク・ライダー。

ディスラッシュは、ルシファアの放つオーラに屈する事なくカードをセツトインし、ルシファア目がけ走り出す。

『アタック・ライド スラッシュー!!』

白光りする刃を振るい、ルシファアに向けて斬りつける。

左腕で受け流し、右腕に仕込まれた黒いサーベル『グラビ・マッシュヤー』で迎え撃つルシファア。

「おっとー!!」

黒い一撃をかわし再び斬りつけるデイスラッシュに、ルシファーは反応できず胸部装甲に傷を作ってしまった。

「…なかなかやるな。だが、これは交わせまい！」

すると、ルシファーの背後からドス黒いオーラが立ち上り、黒い炎を形作る。

そして、黒い炎の短剣が生成されデイスラッシュに向け放たれた。

「飛び道具とは、卑怯だぞ！」

デイスラッシュはソードライバーを使い弾き返し、流れ弾は後方にあるつかさところだがアギト・ストームに変身し、ストーム・ハルバードを駆使して叩き落とす。

「やってくれたな！なら、倍返しだ！」

『アタック・ライド ストライク・ベント！！』

新たにカードをセットインしたデイスラッシュ。その右腕に龍騎のドラグ・クローが装備され、ルシファー目がけ放たれる。

「少し冷静になれ！あんなシステムなんぞ、あっても自分達の身を滅ぼすだけだ！」

ゴウツ！！

「な、うおおおおっ！！！」

ルシファーの腹部にクリーンヒットし、きれいに吹き飛び瓦礫に落

下する。

「た、隊長!」

「俺はいい、それよりもライダーの回収を!あいつの戯れ言は聞き流せ!」

仕方なく、機銃を手にライダーの元へ向かう隊員。

こなた達は抵抗しようとするが。

急にシャイアンの表情が険しくなった。

「待て、このライダーの装着者は…既に亡くなっている。」

「えっ?!」

シャイアンの言葉に隊員達は足を止め、2人も戦闘を中断し変身を解いた後、シャイアンの元に向かう。

「おいおい、本当か?」

「嘘じゃない、脈もなく瞳孔も開いたままだ。」

「じゃあ私達、人を殺しちゃったの?」

「マジで、スか…。」

が、シャイアンは首を横に振り、こなた達に罪が無いことを伝える。

「いや、むしろ最初から亡くなっていた、と見ていい。我々が、このライダーと遭遇する前から。」

「と言う事は、嬢ちゃん達は死人と戦っていた、と?」

「そう言う事になるな。」

その事実、仁は深くうなだれた。

まさか、こんな事になってしまうとは…。

「何という事だ。…あ、すまない。システムは回収させて頂く。我々は、このシステムだけは何んとしても完成させなくてはならないんだ。…どんな事があったも。」

仁は、ライダーの腰にあるバックルを外し、変身を強制解除させた後、嚴重なアルミケースにバックルを入れ保管した。

「システムは回収した。迷惑をかけて申し訳ない。」

そして、仁と隊員達は近くに止めてあったバンに同じく回収した遺体と共に乗り込み、その場を後にした。

「…あの暴走ライダーが、この世界のライダー？まだ信じられないよ。」

「ああ。クロノ・ドライバーの情報だと、あれはまだ未完成でまともにかせる状態ではないらしい。」

「まるでゾンビみたいッスね。死んでも戦う辺りが。」

「いや、あれは既にゾンビを越えて操り人形だ。完全に、な。」

とここで、シャツフルが不満そうな顔でシャイアンを訪ねる。

「ところで、本当にいいのか？あいつらが、暴走ライダーシステムなんぞを持ってて。」

だが、シャイアンは確信していた。まだ何とかなると。

「大丈夫、きっと彼なら諦めずに何らかの策を立ててくれると信じている。」

その夜、こなた達は横になって休んでいるシャイアンに2つの質問をぶつけた。

「ねえシャイアンさん。」

「?どうした。」

「さっきから、あのライダーをずっと『ライダー』って普通に呼んでたけど、本当は何と言うの?」

確かに、さっきまで何の疑いもなくライダーと呼んでいた、あの暴走ライダー。

名称位なら絶対あるはずだ。

こなたは、そう思っていた。

すると、シャイアンはこなた達の方を向き、話し始めた。

「…実はドライバーからの情報だと、あのライダーは正式名称がまだないそうだ。」

「名前が、ない?」

「ああ。しかも、まだシステムの実験中で、祿にデータも取れてないらしい。」

「そうだったんすか。」

「なるほどね…。」

今度は、唯が話に斬り込む。

「それともう一つ。この世界って、何個の世界と融合しているんですか？」

「ドライバーの情報だと、3つの世界と融合している。」

「……3つも?!」「」「」

「そうだ。その内、少なくとも1つは完全に吸収されて消滅している。」

既に消滅した世界がある…唯達は、シャイアンの言葉に戦慄すら感じていた。

その頃、仁は自室で1人ウイスキーを煽っていた。

グラスにウイスキーを注ぎ、深く溜め息をつく。

「本当に、このままでいいのか？俺は…。」

グラスを傾ける表情は、どこか暗くあか抜けていなかった。

そう、全ては自分達の世界に、別の世界が融合した時から始まった。別世界から来た黒い獣…エビル・ビーストは、瞬く間に数を増やし仁達の世界の地上を蹂躪していった。

そこで、人々は融合されたもう一つの世界の科学者達からもたらされた、ライダーシステム…ルシファーを使い、何とかエビル・ビーストを撃退していった。

がしかし、ルシファーは装着者に対しての負担が大きく、下手すれ

ば死に至る事もわかってきた。

そのため、開発者達は仁達の世界の『地球防衛軍』に協力を依頼し、ルシファーをベースとした新たなライダーシステムを作り始めていったのだ。

こうして開発された新しいライダーシステムは、まだ性能が未熟で、おまけにシステムが安定しないと暴走する危険性もあり、長らく改良に全力を傾けてきた。

しかし…改良すれば改良するほどシステムは不安定になり、遂には死者まで出してしまった。

今まで俺の知り合いだけで、何人亡くなっていたのだろうか？

地球防衛軍はこのままで大丈夫なのか？

何より、あんな不安だらけのライダーシステムで戦っていけるのか？

仁は疑問だらけのまま、今日を生きてきた。

だがしかし、完全に無駄足か？と問えば、そうではない。

仁の仲間達は、それでも前向きに付き合ってくれた。

最前線で戦い、散った者。開発に立ち会い、実験で命を落とした者。全員が、仁の味方であった。

そんな皆の願いは、1つ。

エビル・ビーストを倒し、平和を掴み取る。

今でも、これからも。

この意志は、願いと祈りは消える事はないだろう。

仁の心の中で、永遠に。

「みんなの期待を裏切る訳には…！」

仁は、その言葉を胸に眠りについた。

一方シャイアン達とは言えば、陽昇町の外れにある公園で一泊していた。

シャイアンが見張りに立ち、こなた達はベンチに毛布を敷いただけの簡易ベッドで休んでいた。

「ねえ、こなちゃん。」

「ん？どしたの、つかさ。」

つかさは、こなたに仁の事を話していた。

「何だか、あの人かわいそう…。」

「確かにね…。」

あの時つかさは、仁の目を見てふと思っていた。

何故、悲しい目をしているのだろう、と。

それは、こなたも同じ考えであった。

どこか悲しく、また後悔の念すらある、まるで深い湖の底の様な眼差し。

2人にとって、それは忘れられない、印象に残る事であった。

「何をそんなに思い詰めてるのか、知りたいね。理由がわからない以上放っておけないし。」

「うん、私達も同じライダーだから、話し合えばわかるかも。」

すると、こなたの中で、1つのアイデアが閃いた。

「…そうだ、明日もしその人に会えたら、あのライダーの事を聞いてみようよ。ひょっとしたら、この世界を救うきっかけになれると思っよ!」

「そうだね、こなちゃん。明日が待ち遠しいね。」

そして2人は、先に寝ている唯達と共に眠りについた。

T O U R 1 7 E N D

T O U R 1 8 に続く。

TOUR 17 ルシファーと仁の苦悩（後書き）

こなた

「さて、今回のプロフィールは、地球防衛軍の日向 仁さんだよ！  
」

日向 仁

身長 189cm

体重 89kg

特技 サバイバル

地球防衛軍特殊防衛戦隊隊長にして、仮面ライダールシファーの装着者。

自分達の世界に現れたエビル・ビーストを倒すべく結成された戦隊の隊長だが、隊員達が次々と散っていったため、残ったのは彼だけになってしまった。

そのため、気性は少し荒くなってしまったが、仲間等を大切にすることだけは持っており、自ら盾になってでも他の隊員や一般人を守る事から、万人に慕われている。

好きな食べ物は、ウイスキー（しかも、ヴィンテージ物）・おでん。  
好きな事は、隊員達等の無事がわかる事。

嫌いな事は、悪事を働く事。

こなた

「かなりの熱血漢だねえ。本当に、優しくていい隊長さんだよ。」

今回は、ガラハド開発サイドの話。

NOTE 1

「高良家と家宝と組み手の相手」

響鬼の強化アイテム、遂に完成！！

NOTE 1 高良家と家宝と組み手の相手（前書き）

ガラハド

「今回から、本編2話に1回のペースで私ガラハドの強化アイテム開発秘話を話していくぞ。」

XX

「初回は、仮面ライダー響鬼こと高良 みゆきと門下生達の話だ。」

シャッフル

「しかも、俺も活躍するから、期待して待ってるよ。」

シャッフル

「ところで、前回の仁のプロフィールにイメージCVが入ってなかったぞ。」

XX

「あー、そうだった。∴次回の本編前書きで発表するから、しばらく待っててね。」

シャッフル

「全く、しっかりしてくれよな。」

ガラハド

「では本編をどうぞー！」



## NOTE 1 高良家と家宝と組み手の相手

「…ただいまー。」

シャツフルが疲れた表情で別世界から帰ってきた。しかも、青筋を数本浮かべて。

シャイアン達から別れた後、彼はルウの世界に行き、ある物を手に入れるために太陽神教会にかけ合っていたのだ。

それは、純度100%のオリハルコン。

何だ、それならこなたの世界に行けばいいじゃないか、とお思いだろう。

が、純度の話となると全く話は異なる。

こなたの世界にあるオリハルコンは純度80%で、おまけに精製しても強度的に弱く、他の金属を混入しなくては使い物にならないからだ。

「しかし、何故こんなに必要なんだ？…武器を作るなら大量にもらってくる必要はないんじゃないか。」

文句を言いながら、シャツフルは大量に詰め込んだオリハルコンの袋を下に置いた。

「あー、ご苦労さん。これで響鬼の強化アイテムが作れるよ。」

そこへ、ガラハドが小脇に箱を抱えてやって来た。

「おやつさん、何でオリハルコンがこんなに必要なんですか！」

「すまん、すまん。…けど、今はオリハルコンが大量に必要なのだ。」

「

そして、シャツフルは小脇に抱えた箱に目をやり、

「?ところで、その箱は一体…?」

「あ、これ?実はな…。」

それは、今から数時間前。

ガラハドは、高良家の前にいた。

彼がここにいる理由、それは先祖代々音撃戦士の家系のみゆきから貸りたい物があつたからだ。

とりあえず、みゆきには借りたい物があるから家に向かうと連絡を入れてはいたが、家にいるかどうかまではわからない。

「…いるかなあ。」

彼が心配していると。

「~~~~~っ!」

庭の方から、悲鳴みたいな声が聞こえた。

「な、何だ?!」

ガラハドが何事かと高良家の庭へ向かうと、みゆきの母・ゆかりが、庭先でつまづいてコケていた。

「お母さん、大丈夫ですか!？」

「いたたたた…。だ、大丈夫よ。」

丁度その場にみゆきも居合わせていたため、ガラハドにしてみれば、いるかいないかの確認がとれただけでも収穫であった。

「あ、みゆきさん。」

「あ、確か…ガラハドさん、でしたね。」

所変わり、ガラハドと高良親子は八畳敷きの和室で対面していた。

「先程は、どうも失礼いたしました。」

「いえ、無事で何よりです、奥さん。…ところで、みゆきさん。例のアレをお願いします。」

「はい、わかりました。」

すると、みゆきは床袋から白木の箱を取り出し、ガラハドの前に差し出した。

「なるほど、これですか。」

ガラハドは白木の箱に手をやり、ゆっくりと開けた。

そこに入っていたのは、1振りの小太刀であった。

小太刀とは、太刀を小さくした刀で、小回りが利き狭いところでも存分に振るえる、日本刀の最高傑作である。

ただ、この小太刀は錆が酷く、あちこちが欠けており使うには耐えられない代物である。

「本当に、これで大丈夫でしょうか。」

みゆきが心配する中、ガラハドは小太刀を手にじっくりと眺めていた。

「……。」

眺める事10分。

ガラハドは小太刀を箱に戻すと、みゆきに向かい口を開いた。

「みゆきさん、これを借りていきますよ。すぐに返しますから。」

「どの位で返してもらえますか？」

「1、2日あれば大丈夫ですよ。」

「……と言う訳だ。」

「なるほどな、刀を借りて刀をコテコテに強化する、と。」

ペチッ。

ガラハドはシャッフルにデコピンをする。

「違う、違う。この刀をスキャナーにかけて、データを取るんだ。」

「刀のデータを？」

「ああ。この刀は、そのままでは使えないからな。データに取れば、コピーが取れるし。」

2人は急ぎ研究所に戻り、早速大型スキャナーに借りてきた小太刀をセットし、スキャンを開始した。

ヴヴヴヴヴ……。

スキャナーが小太刀の表面を通過し、ガラハドのキーボードを叩く

音が小気味よく室内に響き渡る。

「ところでおやっさん、オリハルコンは一体どうするか？」

「とりあえず、そこに置いといて。後で開発部に回すから。」

開発部つつたつて、他に誰がいるんだよ…。

シャツフルは、心の中でツッコんだ。

実を言えば、開発部のメンバーはガラハドとシャツフルの2人だけで、他に誰もいないからだ。

それなのに、開発部と言われてもピンとこない。

仕方なく、持ってきたオリハルコン満載の袋を下に置き、取りあえず成り行きを見守っていた。

それから2日後、シャツフルは小太刀を返しに高良家の元を訪れていた。

流石にバイクだと、箱が邪魔で運転できないため、なるべく怪しまれない様に箱自体にラッピングを施し、リボンまでつけて持ってきていた。

「…一応連絡は入れたものの、いるかどうか。」

シャツフルが、インターホンを押そうとした、その時。

ガヤガヤ…。

数人の胴衣を着た男達が右手からやってきた。

「ん？君達は？」

「我々は響鬼流の門下生です。高良師範に稽古を頼んだのですが、中々来なくてどうしたのか様子を見に来たのですが。」

門下生の話を聞き、シャッフルは思うところがあったのか少し考え、

「丁度いい。俺も彼女に返す物を届けに来たので、一緒に呼ぼう。」

「そうですね。それでは、よろしくお願いします。」

まず門下生達がインターホンを押し、みゆきを呼び出した。

「師範、時間です。迎えに来ました!」

続いてシャッフル。

「もしもし。おーい、みゆきいー。…応答がないな。」

「それは困りましたね。」

とにかく、この状況を何とかしなくては…。

シャッフルと門下生達が門の前で考えていると。

「あゝ。どうかなさいましたか?」

何という事であろう。

シャッフル達とは逆の方から、みゆきが帰ってきたのである。

「師範、今までどこに行っていたのですか。」

「心配しましたよ。」

「申し訳ありません。少し、買い物に出ておりました…。それに今、私は受験勉強中でありまして、手が放せないのです。」

みゆきが丁寧に謝ると、門下生達は「あ、いいんです」と返事を返

していた。

だが、折角来てくれたのにかわいそうだ、と感じたのか、シャツフルがみゆきに話を持ちかけた。

「そうだ、今手が空いてるんだけど、俺で良ければ…。」

「え、本当ですか？ありがとうございます。それでは、組み手の方をお願いします。」

「組み手が…。OK、引き受けましょう。」

門下生達を引き連れシャツフルが向かった先は、高良家の裏手にある道場。

高台にあるその道場は、あちこちに手入れが行き届いた、響鬼流にふさわしい落ち着きのある場所であった。

胸衣に着替えたシャツフルは、早速準備運動を開始し、組み手に備えた。

呼びに行つた者と道場に残つた者も合流し、こちらも準備運動を始める。

ちなみに、シャツフルはルクセンブルクで空手や柔道の師範を務める程の腕前を持ち、その実力は群を抜いている。

「さあ、準備が終わつた人から順に来なさい！」

「それでは、いきます！」

夕方、ガラハドが小太刀のデータを纏めていた所へ、シャツフルがボロボロになって帰ってきた。

そう、あれからシャツフルは門下生達と組み手を1時間程やってい

ただが、あまりの強さにボロ雑巾状態になってしまったのだ。

「お、おかえりー。… 一体どうしたの？その体。」

「肩慣らしに組み手をやったら、まあ強いこと強いこと…。」

「で、小太刀は？」

「ちゃんと返したよ。約束は、守らないとな。」

「よし、体が休まったら急いで開発に入ろう。」

「了解！」

それから数日後、遂に響鬼専用の強化アイテムが完成した。

道場の中庭で行われた完成のお披露目には、母・ゆかりや門下生達はもちろん、近所のみなみや彼女の母・ほのか、更にゆたかや他のみんなも集まっていた。

「みゆき、よかったわねー。響鬼がパワーアップ出来て。」

「あ、ありがとうございます。…これも、ガラハドさんのおかげです。」

かがみの言葉に顔を赤くして照れるみゆき、そして完成を心待ちにしていた門下生達もどこか誇らしげであった。

今回、みゆきは響鬼流の胴衣に身を包み、頭には鉢巻を締め気合いを入れている。

やがてガラハドが白木の箱を手に現れ、そして箱をテーブルの上に置き、アイテム・ムラサキ装甲村正をみゆきに手渡した。

「これが…。」  
「高良ちゃんの、新しい力…。」  
「はあ、きれいだぜ。」  
「この場につかさがいないのが残念だけど、本当にきれいな…。」  
「美しい…。」  
「きれい、見とれちゃいそう…。」  
「あー、みんな離れて。危ないから。…では、みゆきさん。」  
「はい。」

かがみ達の見守る中、みゆきは音撃叉を鳴らし、響鬼に変身する。  
そして、装甲村正を手に、叫ぶ。

「村正、装甲！」

おつと失礼、ここからはネタバレのためお教え出来ませんが、感想だけは記しておきます。

「すごい、凄すぎる…。」  
「高良ちゃん、かつこいい！」  
「なんか、私のよりも凄くいいぜ！」  
「みゆきさん、かつこいい…。」  
「先輩、凄くかつこいいです！」  
「みーゆーきー、かつこいいわああああっ！」  
「みゆきちゃん、凄くかつこいいわよ！」

…ま、あまりのかつこよさにゆかりさんが壊れかけてますが、とにかく無事に完成披露は終了した。

「おやつさん、無事に終わってよかったですね。」  
「ああ、本当にな。」

シャツフルは今回のお披露目には参加出来なかったが（組み手の痛みが引かなかったため）、ガラハドの顔を見て満足だったのがわかっただけでも何よりの収穫だった。

「オリハルコンもまだ余ってますし、次はどうします?」  
「そうだな…。」

次は、誰を強化しようか。そう思うだけでも心が踊る、ガラハドであった。

NOTE 1 END

NOTE 2 続く



次回「仮面ライダーアナザーディケイド 青い瞳の破壊者」  
は、

「何っ！長官が！！」

「これで、ルシファアは我らの物だ。」

「こなちゃん、私を止めてえええええっ！」

「いかん、このままでは！」

TOUR 19

「アルティメット・バーニング」

つかさ、闇の炎に覚醒！

TOUR 18 アルティメット・バーニング(前書き)

ゆたか

「前回の3つのキーワード!!」

みなみ

「1つ!...仁さんとシャッフルさんが、いきなり戦闘開始。」

パティ

「ツー!しかし、シャイアンさんのヒトコトでジタイはストップ!」

いずみ

「3つ!その夜、仁は悪夢の過去を振り返り翌日を迎えた。」

XX

「さて、NOTE 1で述べた仁のイメージCVですが、中尾隆聖氏に決めました。では、本編に入ります。」

ゆたか

「では、始まります!」

みなみ・パティ・いずみ

「レディー・ゴー!!」



TOUR 18 アルティメット・バーニング

仁、後は任せた。

仁君、今までありがとう。

「行くな、飛鳥！吼児！」

隊長、今までありがとうございました。

あいつ等に、一矢報いて見せます！

よし、行くぜ！！

「おい！鷹介、力哉、虎太郎！早まるな！戻って来い！！」

隊長、ここから先は俺達全員が奴ら仕留めます！…先に行つててください！！

あんな奴らに、地球の侵略はさせません！

隊長…お元気で。

行こう、みんな！

おーっ！！

「拳一、浩美、しのぶ！皆！帰ってこい！死に急ぐな！」

何故だ。何故、死に急ぐ？

何故、俺の目の前から去っていくんだ？

どうしてだ？

「…また、この夢か。」

午前5時30分。

ベッドの上で、仁は汗を滝の様にかいて目を覚ました。

毎日の様に、隊員達が散っていく夢を見ていた彼は、頭を抱え苦悩する。

俺は、何のために戦隊の隊長になったのか？

何のために、今まで犠牲者を出させない様に苦心してきたのか？

これでは、まるで意味がない。

つい昨日も、長官から借り受けた部下がライダーを装着しテストに出たものの、結局暴走から死なせてしまい申し訳なく思っていた。

何をやっているんだ、俺は…。

仁は、卓上にある写真を手にし、しみじみと眺めた。

そこに写っていたのは、仁をはじめとした戦隊の全員が、穏やかにVサインをして撮られた記念写真であった。

「皆…俺はどうすればいい？」

と、そこへ仁の携帯電話が鳴り響いた。

「…何かあったのか？」

仁は写真を卓上に戻し、携帯電話を手にした。

電話に出たのは、若い別部署の隊員だった。

何やらあわてているらしく、息づかいが荒い。

「俺だ、一体どうした！」

『た、大変です！た、た、た、た…。』

「あわてるな、落ち着け！何かあったんだ！」

『武田長官が、数人の部下を連れて、出撃しました！しかも、ルシファー初号型を持ち出して！』

「何っ！長官が…！」

『長官の身に何かあったら大変です。我々も後を追いましょー！』

「そうだな、…よし、追いかけるぞ！」

『了解！』

陽昇町、午前5時50分…。

今、町のターミナルで1人の女性と数名の隊員、そして数体のエビル・ビーストが、互いに睨み合っていた。

女性は、肩まである茶色の髪に引き締まった顔つき、スリムな体を軍服で包み込み、若くしてキャリア・ウーマンの趣すら漂わせる。

彼女こそ、地球防衛軍長官・武田 桂<sup>かづひ</sup>である。

かたやエビル・ビーストの指揮官らしき1体が前に出、桂に語りかけた。

『ほう、地球防衛軍長官が自ら現れるとは、勇敢な事だな。…だが、それもここまでだ。』

『黙りなさい！…今日こそお前達を倒し、この地球からエビル・ビーストを一掃して見せよう！』

『ほざけ！…この地球は我々の物だ、まずは先に貴様等を消させていただく。』

桂は、すかさずルシファアのベルトを装着すると、ダッシュをかけながら変身し、まず手短に近くのエビル・ビースト2体をパンチ数発で撃破し一気に間合いを詰めていく。

『いくぞおおおおっ！』

『行け、我が同志達よ！目の前の敵を倒せ！』

一方その頃、公園にいたシャイアン達は未だ4人が穏やかな寝顔で毛布にくるまり、眠っていた。

やがて、エビル・ビーストとルシファアの戦いが始まると、こなたとつかさが同時に目を覚ました。

「起きた様だな、お2人さん。」

「う、…ん。一体何があったの?」

「ふあゝ、おはよーこなちゃん。朝から騒がしいね。」

寝ぼけ眼のこなたとつかさに、シャイアンは遠くに目を凝らしなが  
ら、

「まずい、戦闘が始まったようだ。」

「えっ、この近くで?」

「ああ。」

「はうゝ、早くここから逃げなきゃ。」

最初は戸惑った2人だったが、落ち着きを取り戻すと眠っていた唯  
とひよりを起こし、急ぎバイクに飛び乗り公園を後にした。

(しかし、何故朝から戦闘が始まったんだ?)

事情を飲み込めないシャイアン達は、いぶかしがった。

そして、彼らが県道を走っていると、目の前を数台のジープやバイ  
クが通りかかった。

「ん?あれは…。」

バイクに乗っている人物が仁とわかり、一行はバイクを止め、シャ  
イアンが声をかける。

「仁、そんなに急いでどこへ行くんだ?」

「おう、あんたか。長官が無理して出撃したんだ、しかもルシファ  
ー初号型を持ち出して。」

「何だとっ?!」

もし、長官やルシファーに万一の事があつたら指揮系統が乱れ、大変な事態を招いてしまう。

いくら何でも無茶が過ぎるのでは?

シャイアンが案ずると、すかさず皆を呼び集めた。

「みんな、ちょっと集まってくれ。話は聞いているな?」

シャイアンは皆を集めると、それぞれに指示を飛ばした。

「こなたとつかさは、仁と共に長官の救助に向かってくれ!唯とひよりは、私と共に町中にいる敵を倒す!」

「OK!」

「うん、任せて。」

「了解!」

「了解ッスよ!」

そして、こなたとつかさは仁と長官の救助に向かい、シャイアンと唯、ひよりは町中へと向かっていた。

と同時に、遠くから爆発音が響き渡った。かなり規模が大きい様だ。

「まずい、急ごう!」

こなた達が、先程爆発音が聞こえた場所に着くと、辺りは焼け焦げ隊員達はエビル・ビーストの餌食となっており、長官の姿は見当たらなかった。

「しまった、遅かったか...!」

「ひどい、みんなボロボロだよ。」  
「何で、こんな…。」

仁が、まだ息のある隊員を抱え起こすと、すぐに長官の事について聞いた。

「おい、しっかりしろ！長官はどうした！」

「ち、長官は…奴らに…挑みかかって…。」

「おい、どうした！おい！」

隊員は、そのまま息を引き取った。

「またしても守れなかった…。くそつ。」

「仁さん、思い詰めちゃダメだよ。それよりも、早く長官を探さなきゃ。」

「…そうだな。よし、早く探しだそう。」

こなたに促され、仁達は後処理を他の隊員に任せ、長官を探すべくあちこちを駆け回った。

「おーい！長官、どこにいるんだ！！」

「どこですかあー！」

「いたら返事してくださいさあーい！」

すると、

「…あれは…！」

「！？」

仁達の左側に何者かが倒れているのに気がついた。

そう、紛れもなく長官である。  
しかし、長官はルシファー初号型を装備しておらず、生身のまま横たえていた。

「長官、しつかりして下さい！」

「う…仁？仁なのね？」

「ああ、俺だ、仁だ。何でこんな無茶をするんだ。」

「…ごめんなさい、私にも何か出来ないかと思って。」

「馬鹿だな、そうだった事は俺達に任せればいいのに、出しゃばるから。」

とその時。

ユリア…。

仁達の向こうからエビル・ビーストのリーダーと言うべき者が近寄ってきた。

そのエビル・ビーストは、ライオンの頭部に熊の腕部を持ち、コウモリの翼を背中に生やしたキメラがごとき屈強さを醸し出すエビル・ビーストであった。

「あ…あいつよ。世界を破壊しようとするエビル・ビーストのリーダーは。」

「…あいつか！長官、しばらく動かないで。俺が片付けてくる！」

仁は、長官を壁に寄りかからせると、急ぎルシファーのベルトを装備して変身、リーダーらしきエビル・ビーストに肉薄していった。

「こなちゃん、私達も行こうよ！」

「うん、急ごう！」

「変身！」

「トライオー！」

こなた達もトライオーとアギトに変身しルシファアの後を追う。

『…ふん、誰かと思えばルシファアのコピーか。見くびられたものだ。』

「やかましい！貴様を倒し、長官の仇を討つ！」

『やれるものなら、やるがいい。』

するとどうだろう。エビル・ビーストの手にルシファア初号型のバツクルが握られているではないか！

「貴様、それは?!」

「そこにいる女から手に入れたのだ。ま、口ほどにもなかったがな。」

そして、エビル・ビーストのリーダー…バエルはルシファア初号型のバツクルを装備、何と変身してしまったのだ。

「これで、ルシファアは我らの物だ。」

バエルが右手を上げると、ルシファア初号型の装甲がいびつに膨れ上がり足元から黒い炎が噴き上がった。

更に装甲がゴムの様に変形し、まるで悪魔の様な姿に形作っていく。やがて、炎が収まると仁達の目の前に異形のライダーが姿を現した。ルシファア初号型よりもエッジが鋭く、漆黒のボディーは更に濃くなり闇そのものの様になっている。

悪魔の様なマスクと相まって、威圧感是十分すぎる位である。

仮面ライダーサタン。

この世界に生まれた、もう一人のダーク・ライダー。

「くそっ！」

ルシファーは右腕に収納されたグラビ・スマッシュャーでサタンに斬りかかるが、その黒い一太刀はサタンの装甲に阻まれ、へし折れてしまった。

更に左からパンチを繰り出すが、サタンの反応は早く瞬時にかわされルシファーに裏拳を決められてしまった。

だが、そこへトライオーのミドル・キックがサタンに決まり、アーム・ブレードで一気に畳みかける。

『ほう、異世界のライダーは中々歯応えがあるな。』

「そりやどうも！」

更につかさアギト・トリニティフォームによる斬撃が決まり、サタンはよろけて倒れる。

「仕方ない。お前達、奴らを倒せ！」

サタンの一声で数十体のエビル・ビーストがサタンの影を介し姿を現した。

ただ、その姿は獣型や昆虫型、鳥型とバラエティーが豊富で昨日の黒い獣型とはまるで大違いである。

トライオーとアギトがエビル・ビーストの前に立ちふさがるが、数が多い上にルシファーの活動時間も限界まで来ていたため、トライオーはベルトに手を当てオルタリングを召喚し、アギトに変

身して迎撃した。

「いくよ、手加減なんて効かないからねっ！」

Ｔアギトの奮戦により数を減らしていくエビル・ビースト。

そんな中、もう一人のアギト…つかさは獅子奮迅するＴアギトを見て内心ふと思っていた。

（こなちゃんは、やっぱり強いよ。私にも、こなちゃん位の力が欲しいな…。）

つかさが思い念じた、その時。

フウッ…。

え、何？

つかさアギトのオルタリングの中央が黒く変色し、そしてサタンの

時と同じ黒い炎が体から噴き上がった。

「…！つかさ！！」

Tアギトも驚くその姿は、まるでアギトのバーニング・フォームとクウガのアルティメット・フォームを足して2で割った様な全く新しい姿であった。

肩部の形状及びクロスホーンの形状はクウガ・アルティメット・フォームに酷似しており、体色もアルティメットに近い。

アギト・アルティメット・バーニング。

つかさの、新たな力。

と同時に究極の闇を抱えた、最高の力。

『ううう…うおおおおつ！！』

つかさと異なる奇声を発し、アギトUBから放たれた負の炎は、エビル・ビースト数体を焼き尽くし、更にオルタリングから現れた剣を握りしめ、エビル・ビーストの群れに突撃していった。

長さ2・5m位の黒い剣は、柄と鍔がアギト・フレイムフォームのフレイムソードに似ており（ホーンは展開済み）、刀身はクウガのライジングタイタンソードに似ていた。

両者を足して2で割った剣：アルティメット・フレイムソードで当たるを幸いに振り回し斬りつけていくアギトUBに、こなたは一抹の不安を感じていた。

（まさか、とは思っけど暴走してないよね？）

だが。

こなたの予感は的中した。

全てのエビル・ビーストが倒された状況で、アギトUBがTアギト

の方を向いて突撃を敢行したからだ。

「こなちゃん、私を止めてええええつ!!！」

「やはり、ね。」

アギトUBの暴走に、さすがのトライオーも止められるかどうか、心配になっていた。

が、心配しても仕方がない。

「アギト・バーニング！」

止むなくトライオーはアギト・グランドフォームからバーニング・フォームにスイッチし、アギトUBを止めるべく組み付いていった。がしかし、腕力はUBの方が上らしく徐々に押されていき、やがて振り解かれてしまった。

「つ、つかさあ!!！」

「誰か、止めてええええつ!!！」

「いかん、このままでは！」

遠くからその様子を見たルシファーは、よろよると立ち上がると2人が戦い合っている場所目がけて走り出した。

活動時間もそろそろ切れようとしているのにも関わらず、彼は駆ける。

もう、これ以上無駄な血を流してほしくないために。

T  
O  
U  
R  
  
1  
9  
  
に  
続  
く

T  
O  
U  
R  
  
1  
8  
  
E  
N  
D

TOUR 18 アルティメット・バーニング（後書き）

こなた

「今回は、地球防衛軍長官の武田 桂さんだよ！」

・武田 桂 かつら

（イメージCV：水樹 奈々）

身長 175cm

体重 教えられない

地球防衛軍の長官にして国連の幹部。

前長官・武田 一馬を父に持ち、その性格は冷徹で部下に対して無理を押しつける強引さもある。

特に仁に対しては冷たく当たる事もあり、時として命を落としかねない任務を命じる事も。

しかし、裏返せばそれだけ仁を深く信用している証拠であり、仁も彼女の要望に応えるために尽くしている。

また、ルシファー初号型の適格者でもあり、特にエビル・ビーストとの戦いでは最前線に出向く事もある。

過去に恋人をエビル・ビーストとの戦いで失っており、この事が彼女に暗い影を落としている。

ライダーシステムの提唱者という側面もあり、その理解度は他の追随も許さない。

こなた

「彼女のプロローグを見ると、何だか笑顔が足りないね。笑った顔も見てみたいな。」

次回「仮面ライダーアナザーディケイド 青い瞳の破壊者」は、

「やめろーっ!」

「俺は、どうすればいい?」

「こなちゃん、私、闇が怖いのだ。」

「何のために仲間が散っていったのか、考えた事はなかったのか?」

TOUR 19

「他がために」

仁とつかさ、2人の闇は晴れるのか?

TOUR 19 誰がために(前書き)

ガラハド

「前回の3つのキーワード!」

ゆい(成実)

「1つ!地球防衛軍の武田長官がエビル・ビーストの討伐に乗り出すも、返り討ちにされた上、ルシファアまで奪われてしまった!」

そうじろう

「2つ!仁達とシャイアン達が合流し、二手に別れて行動を開始した!」

ゆたか

「3つ!しかし、つかさ先輩のアギトが究極の闇に飲まれ、いきなり暴走!現在、お姉ちゃんが必死に止めています!」

XX

「今回のキーワードは、『笑顔』。仁とつかさの2人は、果たして立ち直れるのか?」

こなた

「そして、あのライダーシステムも再登場!」

こなた

「さあ始まるぞますよ!」

ゆい（成実）・そうじろう・ゆたか  
「レディー・ゴー！」  
「」

TOUR 19 誰がために

つかさのアギト・アルティメット・バーニングとこなたのＴアギト・バーニングとの戦いは尚も続いた。互いに体力も消耗し、息も切らしているが、闘志は衰えを知らず最早気力で戦っている状態である。

「こなちゃん、早く私を止めて！」

「つかさ、必ず止めるからね！」

Ｔアギト・Ｂが右手に灼熱のエネルギーを貯めて必殺の拳・バーニングボンバーを放つ構えを取る。

が、アギト・ＵＢもアルティメット・フレイム・ソードを投げ捨て、闇を纏った炎を右手に宿し、究極の拳・アルティメットボンバーを放つ構えを取り、先に仕掛けてきた。

『うおおおおっ！！！』

「…させないよっ！！！」

Ｔアギト・Ｂも、ほぼ同時にバーニングボンバーを放ち、双方の拳が激しくぶつかる…はずだった。

「やめるーっ！」

両者の激突を止めたのは、何と仁のルシファーだった。しかも、双方の拳を掴んで受け止めたのだ。

「嘘…。」

「じ、仁さん…。」

「…馬鹿野郎が、何故女同士で殴り合う必要があるんだ！」

すると、ルシファアの腕部装甲がミシミシと音を立てて砕け、更に全装甲にも亀裂が走り、スパークを起こして前のめりに倒れた。

「い、嫌ああああっ！！」

両者の変身が解かれ、つかさの叫びが天高く響きわたり、その場にひざを突き両手を見る。

さすがのこなたも、こればかりはどうしようもなく、只つかさを見つめるしか術はなかった。

それから数分後、シャイアン達が現場に到着し、こなたから情報を聞き出していた。

シャイアンは敵の増援を考え、3人で町内を見て回っていたが、結局増援らしい者は見つからず、今に至っている。

「…何、つかさが？」

「うん、急に姿が変わったかと思うと、いきなり敵を蹴散らして私にまで襲いかかってきて。」

「それで、止める事は出来たのか？」

「それが、仁さんが体を張って止めてくれたんだけど、装甲がボロボロに砕けて、倒れてしまった。」

「そうか…。ところで、つかさはどうした？」

「そこにいるけど、今は話しかけない方がいいよ。」

シャイアンが、つかさの方を見ると、彼女は肩を小刻みに震わせ怯えきっていた。

まるで恐ろしいものを見てしまったかの様に。

その後、仁とシャイアン達は長官を乗せたバンを護衛し、こなたは怯えるつかさをリトル・スライガーの後ろに乗せて、シャイアンの後についていった。

地球防衛軍本部に着くなり、本部内が蜂の巣を突いたように騒がしくなったのは、言うまでもない。

午前10時頃、ようやく仁が治療室から姿を現した。あちこちに傷が見えるが、大した傷ではないようだ。

「仁、体の方は大丈夫か？」

「やあ、あんたか。少し頭がクラクラするが大丈夫だ。」

「あまり無茶はするな。皆も心配していたぞ。」

「…すまなかつた。」

だが、仁の心中は穏やかではなかった。

そう、長官が大怪我をして治療室に担がれたために、指揮系統が乱れに乱れ統率が取れずじまいであったからだ。

おまけに、地球防衛軍の中で、真っ向から戦えるのは既に仁しかおらず、事態は一向に改善されないままなのである。

「なあ、シャイアン。」

「どうした？」

「俺は、どうしたらいい？」

「…ルシファアの件か。」

シャイアンの問いに、仁は力なく答える。

「ああ。技術者達の話だと、完全復活は望めないそうだ。…後に残ったのは、使えるかどうかですら怪しいライダーシステムのみ。正直、最悪の事態だ。」

「しかし、あのシステムは使い方によっては戦力になる。もちろん、暴走さえ起きなければの話だが。」

「お前、正気なのか？あのシステムを使うとどうなるか、知ってるはずだ。」

だが、シャイアンは知っていた。昨日起こった暴走が、只の暴走ではない事を。

装着者の安否を確認したあの時、シャイアンはクロノ・ドライバーにある情報端末を通してシステムの意味を読み取っていたのである。

『仁君、皆の意志を無駄にしないで。僕達が何のために散っていったのか、それを忘れないで！』

(なるほど、これが暴走の原因なのか…。)

「確かに私は知っている。…おそらく、暴走の原因はシステムの不備や故障ではなく、使用する人物の意思ではないかと私は思う。でなければ、あそこまで暴走はしないはずだ。」

「使用者の意思…？」

一方、こなたは病室のベッドで恐怖に怯え、震えるつかさと一緒に

いた。

その小さい手を震える手に重ねながら。

やがて、つかさはこなたに口を震わせながら話しかけた。

「あのね…。」

「どしたの？つかさ。」

「こなちゃん、私、闇が怖い…。」

「闇が、怖い？」

「うん。今でもその感覚は覚えてる。…深くて、暗くて、光すら届かない程の闇が私の周りを取り巻いて、手を伸ばしても誰も助けてくれない、そんな感覚だったの。」

つかさの話聞き、こなたはかつて自分が『ガイアメモリ事件』で受けたあの感覚を思い出していた。

あの時も、彼女の精神世界に突然現れた闇によって苦しみ、光を求めて必死に手を伸ばしていたからだ。

最も、今はトライオーに変身出来る事で、闇の影響は完全に打ち消されているが。

「うん、わかるよ、つかさの気持ちは。私だって、一度だけ闇の影響を受けた事があったから。」

「…ガイアメモリ事件の事？」

つかさの問いに、こなたはコクリと頷く。

「あの時は本当に大変だったよ。私だって自分の暴走を止める事が出来なかったから。」

「……。」

「でもね、つかさ。だからと言って、闇を怖がっちゃだめだよ。」

「どうして？」

一方、シャイアンがライダーシステムを使う事を勧めるのに対し、仁は難色を示していた。

（あのシステムを使えば、俺だって暴走しかねない。だが、システムがなければエビル・ビーストをのさばらせる結果になってしまう。∴使用者の意志と言う物も気になるし、どうすればいいんだ！）

すると、シャイアンは仁に1つ質問をぶつけた。

「仁さん、あなたには昔、仲間がいましたね。」

「ああ。みんな、俺に後を任せて散っていった。∴本当に、いい奴らばかりだったよ。」

すると、シャイアンは鋭い眼差しで仁に聞いた。

「では、1つ聞かせてほしい。」

「何を？」

「仲間が何のために散っていったのか、考えた事はなかったのか？」

「何のために？」

「そうだ。∴これは私の憶測でしかないが、あのライダーシステムを正常に動かす鍵は、仁さんの仲間を思う心だと思っている。」

「仲間を思う心、か∴。」

シャイアンは、更に仁へと語りかける。

「あのライダーシステムには、あなたの仲間達の思いが込められている。∴そして、その思いは今でもシステムの中に息づいているん

だ。」

「俺の仲間の思いが……。」

「ええ。」

そう、ライダーシステムの暴走を抑える力、それこそが仁の仲間達を思う心なのだ。

そして、シャイアンが聞いたシステムの声こそ、仁に対し皆が何のために、誰がために戦い散っていったのかを問い正していたのである。

「仁さん、もう一度自分自身を見つめ直してほしい。……仲間達が何のために散っていったのか、あなたに後を託したのかを。」

「……。」

一方、こなたに闇を怖がるなど言われたつかさは、正直戸惑っていた。

が、こなたはそれでも話を続ける。

「……つかさ、昔ね、ある人からこんな言葉を聞いた事があるの。」

誰かの笑顔を守るためなら、闇に落ちても構わない』って。」

「誰かの笑顔……。」

「うん。つかさの笑顔って、すごく可愛いよ。だから、つかさもかがみやみゆきさん達の笑顔を守るために頑張れば、究極の闇も力を貸してくれるよ。」

「私や皆の笑顔のために……。」

「まずは笑顔、笑顔。いつも通りに笑って。」

こなたに促され、いつものスマイルを浮かべる。

「うん、やっぱりつかさは笑顔が一番いいよ。」  
「あ、ありがとう、こなちゃん。」

ようやく元気を取り戻したつかさと共に、こなたは病室を後にした。そして、シャイアンも今まで迷っていた仁と一緒に現れる。

「やふー。」

「こなたか、つかさはもう大丈夫か？」

「私は、もう大丈夫だよ。仁さんの方も大丈夫ですか？」

つかさの満面の笑顔を見た時、仁は誰がために皆が戦い散っていたのかを悟った。

俺達の世界を守るため、何より世界中の人々の笑顔を守るために礎となつて散つていった。

今の今まで気付かなかった、皆の意思。

「ああ、もう大丈夫だ。」

「よかつたあ。」

穏やかなつかさの声に、仁も自然と力が入る。

つかさもまた、仁やこなたの、いや他の世界の人々の笑顔を守るために究極の闇を受け入れる覚悟を決め、仁との握手を求めた。  
当然、仁も握手に応じ、つかさと固い握手をする。

午後01時37分。

遂にエビル・ビーストの基地と言えるべき場所を特定する事に成功した。

「エビル・ビーストの集結場所が特定出来ました！」

「場所は？」

「北北東に30キロ、芦川山の中腹に大部隊：おそらく全世界中に散らばっていたエビル・ビーストが集結していると思われます！」

「よし、よくやった！後は、俺達に任せってくれ。ライダーシステムを使う！」

「しかし、あのシステムは……。」

隊員がシステムの使用を止めようとするが、今の仁にはライダーシステムを使うには十分すぎる位気力が高まっており、特に問題は無い。

「大丈夫だ、任せろ！……それより、長官の事を頼む。」

「はい、わかりました。任せてください！」

隊員達も仁の心情を汲み、元氣よく答える。

午後02時40分。

シャイアン達と仁は、バイクを駆り芦川山の麓まで来ていた。

「さて、ここからが本番だ。」

「ああ、そうだな。」

全員が変身の構えを取り、ライダーに変身する。

「マスク・レイド!!!」

『マスク・ライド デイクライド!!』

『スタンバイ!』

「変身!!」

『コンプリート!!』

「トライオー!!」

「変身!!」

『ジョーカー!』

「変身!!」

『ジョーカー!』

そして、仁も懐から稲妻を象ったバツクルを取り出し、腰に巻き付け変身する。

「変身!!」

すると、バツクルが輝きだし、仁の全身を包み込み変身を完了する。前に見た時とは違い、その姿はまるで大空を舞う鷲のような精悍なマスクに、太陽が如く赤いスーツカラーを纏った、黄金の装甲を胸部や手足に装着する勇ましき戦士であった。

「これが、ライダーシステムの真の姿…。」

「そうだ。それこそがこの世界を守るライダー、ライトニングだ。」

「ライトニング…、何という最高の響きだ。気に入ったよ。」

「気に入ってもらえて光栄だ。…よし、そろそろ行こう、みんな。」

「…了解!!」「…」

今、6人のライダーが芦川山に集い、この世界最後の戦いが始まる  
…！

T O U R 1 9 E N D

T O U R 2 0 に続く

TOUR 19 誰がために（後書き）

【今回のトーク】

XX

「いよいよ仮面ライダーオーズも終盤に向けて加速していくねえ。劇場版ではブラカワニも出てくるし、たまんないなあ！」

こなた

「あーところで、劇場版は見に行くんでしょうね？」

XX

「もちろんさ。」

かがみ

「前の劇場版も見逃しているし、今度見なかったら私達全員でライダー大戦やるからね！」 パラレル全員ライダーキックの事

あやの

「 柊ちゃん、落ち着いて！」

ゆたか

「次回は、私の強化のお話です。」

NOTE 2

『ゆたかと黒龍とバックアップ』

ゆたか

「…どうぞ、お楽しみに！」

NOTE 2 ゆたかと黒龍とバックアップ(前書き)

ゆたか

「orz」 土下座

ガラハド

「皆さん、今回は悲しいお知らせが…。」 土下座

シャツフル

「一体どうしたんでえ、おやっさん！ゆーちゃん！」

ガラハド

「詳しくは、本編を見てくれ。」

## NOTE 2 ゆたかと黒龍とバックアップ

この日、ガラハド・ゆたか・パピヨンの3人は洗い顔をして腕組みしていた。

「…困つたな。」

「はあ…。」

『いかが致しましょう。』

とそこへ、シャツフルがまるで行商人の様な格好でやって来た。

その背負っている唐草模様の風呂敷の中には、「グランザムの世界」で手に入れた中古の電子機器が入っている。

どうやら新しく開発する強化パーツの部品欲しさに、シャツフルに依頼したらしい。

「ただいまー、おやっさん。…あらま、3人で何やってるの?」

「ああシャツフルが、丁度いい。実は、ちょっと困った事が起きてな。」

「何いいいいいつ! New電王の強化が出来ないだとおおおおつ  
!!!」

あまりのサプライズに、シャツフルは仰天した。

「ああ、そのために今ゆたかちゃんとパピヨンの3人で話し合ってたんだがな。」

「…で、ゆーちゃんのNew電王が強化出来ない理由って何だ?」

『理由は簡単です。New電王は既に最終形態と同等…つまり、強化する必要がないのです。』

パピヨンの言う通り、今現在ゆたかの扱うNew電王は武器がデンガッシャーザンバー・ボウガン・ハルバードの3つだけで事足りている上、パピヨン自体もモタロス以上に強い（おまけに真面目）ため、強化する必要が全くないのだ。

ならば新フォームが欲しいなら電王の世界からデネブを呼べばいいじゃないか、という声もあるが、デネブに言わせれば、

「パピヨンが許してくれないだろう。それに、侑斗の事も気になるし…。」

と半分あきらめている。

よって、実質上強化は不可能に近く、どうしようもないのである。

「うーん、どうしたらいいんだろう。パピヨンちゃん、何かいいアイデアはないの？」

『アイデア、ですか。』

「パピヨン、君のアイデア次第でゆたかちゃんの行方が決まる。頼む、何とかいいアイデアをひねり出してくれ。」

『ひねろ、と言われましても…。』

パピヨンが腕組みして考えていると。

ピーン！

シャッフルが何か閃いたらしく、ポンと手を打った。

「…そうだ、パピヨン、ゆうちゃんが電王以外のライダーになればいいんじゃないか？」

「え、私が？」

『確かにいいかもしれませんが、はっきり言って微妙ですね。』

「何故に？」

『ゆたか様が変身出来るライダーは、こなた様達の物を除けば性能的に偏りすぎています。バランスの問題ですね。』

確かに、言われてみれば重火器メインだの格闘戦メインだのと、一部を除けばバランスが偏ったライダーが多い。（ま、そこがライダーの良いところなのだ）

しかし、飽くまでバランスに拘るパピヨンは、それらをゆたかに勧めるのはどうしても出来ないだ。

「…しかし、他に方法はないぞ。」

『ですが…。』

と、ガラハドがなだめているところへ。

キンコーン。

玄関のベルが鳴り、何者かが訪ねてきた。

「こんにちはー。…ガラハドさんにゆたかちゃん、一体どうしたのですか？」

峰岸 あやのが、研究所にやってきたのだ。

彼女の手には、焼きたてのクッキーがバスケットにいっぱい入っている。

そう、今は3時ジャスト。

丁度会社だと3時休憩に入っている時間である。

「仕方ない、あやのちゃんのクッキーをつまみながら、今後の事を考えよう。」

そして、テーブルの上にクッキーと紅茶が用意され、全員は午後のアフタヌーン・ティーを楽しんだ。

その間にも、ガラハドとゆたかとパピヨンは今後について話し合ったものの、進展は全くなく行き詰まってしまった。

「どうしよう…。」

「うーん…。」

『…。』

すると、あやのがガラハドに話しかけた。

「あー、ガラハドさん。」

「どうした？」

「実は、今朝私の机にある鏡の前に黒いカードデッキが置いてあったのです。…まさか、とは思いますが、ゆたかちゃんの役に立てば…。」

と言うや制服のスカートのポケットからカードデッキを取り出し、机の上に置いた。

「こ、これは…!」

『ひょっとしたら、これならいけるかもしれません。』

カードデッキには、龍騎と同じ金色の龍のクレスト（紋章）が浮かび、しかも龍騎のものよりも力強く描かれている。いい物を手に入れた、と感じたガラハドは、ゆたかにデッキを使うように話しかけた。

「ゆたかちゃん、これを使ってみてはどうか？」

が、ゆたかの表情は少し良くなかった。

「え、でも…。」

「今は戸惑っている暇はない。使える物は、有効に使おう。パピヨンちゃん、ゆたかちゃんのバックアップを任せられるかな？」

『はい、こんな私でよろしければ。』

ゆたかは、正直困っていた。

いきなり見ず知らずのライダーシステムを使う事に加え、性能が未知数のカードデッキに不安を感じずにはいらなかったのだ。

何より、黒いカードデッキから立ち上がる不吉なオーラらしき物に彼女は圧倒されており、触るのですらためらう程に手が震えていたのである。

が、ガラハドとパピオンは確信していた。

ゆたかなら、きっと使いこなせる筈だ、と。

どうやら、2人はカードデッキに封印された力が、ゆたかを必要としている事を認識した様である。

「ゆたかちゃん、だいぶ困っている様だな。」

『それでしたら、私めにお任せを…。』

戸惑うゆたかにパピヨンは、震える手を取り優しく語りかけた。

「ゆたか様、ご心配なく。このカードデッキに封じてある力は悪しき力ではございません。」

「パピヨンちゃん……。でも、私に使えるか不安で怖いのに。」

ゆたかは不安に押しつぶされたのか、顔が泣きそうになっていた。が、それでもパピヨンはゆたかの心を落ち着かせ、勇気づけるために言葉を続ける。

「大丈夫です、私もゆたか様と共に戦っている身、正邪の区別はわかっています。…確かにカードデッキ自体は黒いのかもかもしれませんが、それは見た目だけで他は何の危害もありません。どうぞ安心してお使いください。」

「……………」  
「もし、ゆたか様に万一がありましたら、私がバックアップ致します。私も、ゆたか様の一部ですから……。さあゆたか様、勇気を持って力を手にして下さい。」

パピヨンの優しさが伝わったのか、ゆたかの手の震えは止まり、パピヨンの手を力強く握りしめた。

「ありがとうパピヨンちゃん。私、やってみるね！」

「ゆたか様……。」

パピヨンの揺るがない忠義と優しさに、その場にいた3人がホロリと涙したのは言うまでもない。

午後3時30分、ガラハドの部屋。

ゆたかは、カードデッキを手に鏡の前に立っていた。そして、横には龍騎のカードデッキを手にしたあやのが並んで立っている。

「ゆたかちゃん、準備は出来た？」

「はい、来ています。…パピヨンちゃん、お願い！」

『はい、ただいま。』

ゆたかがパピヨンを呼ぶと、精神体のパピヨンが現れ、ゆたかと一体化し準備は完了した。

「よし、ではテストを開始する。始めて。」

「はい！」

ゆたかがカードデッキを鏡にかざすと、鏡に写ったベルトが腰に装着され、あやのと同じ手順でベルトを装着する。

「変身…！」

2人が同時にカードデッキをベルトに装填し、両者はミラー・ライダーに変身した。

あやのはいつもの龍騎に変わり、ゆたかは龍騎に似てはいたが全体が黒く、目も少しつり上がっているライダーに変わっていた。

黒い龍騎…リユウガ。

その能力は龍騎よりかなり高く、使う人によってはこれだけで十分他のライダーと渡り合える力を持つ。

しかも、ゆたかの場合パピヨンとセットで変身しているため、性能は大幅に向上している。

「ゆたかちゃん、具合はどう？」

「…特に異常はありません。」

「拒絶反応もないところを見ると、まずは一安心だな。」

ガラハドも手放してリュウガとゆたかの適合性を褒める。

だが、問題はまだある。

ミラーワールドで実際に戦ってみなければ、リュウガとゆたかの相性がいいかどうか分からないのだ。

「では、ミラーワールドに行ってテストを開始して。ゆたかちゃん、あやのちゃんの言う事は、ちゃんと聞いてね。」

「はい！」

ゆたかの力強い返事に、ガラハドは更に彼女の可能性の高さを感じていた。

「一応俺もついて行くぜ。2人より3人の方が、安全性は大幅に上がる筈だ。」

「まあ待て、ここから先は彼女達だけの問題だ。余計な心配は、しなくてもいい。」

「…ま、確かにそうだな。」

シャッフルは介入しようとしたものの、ガラハドがやんわりと止めたため、止むなく待つ事にした。

2人がミラーワールドに突入すると、辺りを見渡しミラーモンスターの出現を警戒する。

と、そこへ。

グルルルル…。

うなり声を上げ、ミラーモンスター・ギガゼールが2体上空から降下してきた。

「…来たわ、構えて！」

「はい！」

龍騎とリュウガは腰のカードデッキから1枚ドロし、左腕に装備されたドラグバイザーとブラックドラグバイザーにカードを装填する。

『『ストライク・ベント』』

すると、上空に控えていたドラグレッダーとドラグブラッカーが、2人に自らの頭部を象った武器を送り、それらを右腕に装着する。

「この武器は、反動が凄いから気を付けてね。」

「大丈夫です、私にはパピヨンちゃんがついていますから。」

「心配しなくても大丈夫そうね。じゃ、準備はいい？」

「いつでもどうぞ！」

龍騎とリュウガは腰を少し落とし、前方のギガゼールを見据えクローを構える。

そして、接近してくる2体の間合いを計る。

「よく引きつけて…、今！」

「えいっ！！」

両者のクローから火炎弾が吐き出され、2体のギガゼールを火だる

まにする。

そして、大爆発を起こしギガゼールは消滅した。

「…よしっ!!」

リュウガは緊張の糸がほぐれたのか、地面にペタリと座り込み息をつく。

龍騎もリュウガの元に駆け寄り、彼女を誉め称える。

「すごい、上手じゃない!」

「あ、ありがとうございます。」

が戦いは終わっていない。次に、全く似たタイプの黒いギガゼールが現れたのだ。

両者は、次に引いたカードをバイザーに装填し、ソードベント…ドラグセイバーを手にギガゼールへと斬りつけていく。

ガッ、ザシュツ、チュンツ!!

互いが斬り合う事数分、そろそろ2人に限界が来ようとしていた。ミラーライダーのミラーワールドに滞在出来る時間は10分が限度であり、それ以上留まると粒子化現象を起こし消滅してしまうのだ。

「…時間ね。長居は出来ないわ!」

「一気に決めましょう!」

両者は、最後の切り札を引き、バイザーに装填する。

『『ファイナル・ベント』』

ドラグレッダー・ドラグブラッカーが到着し、2人は息を合わせてジャンプした。

きりもみを決めつつ上昇、キックの体制を整え標的を絞り込み、そしてドラグレッダーとドラグブラッカーの放つ炎に乗りキックを決める。

ドラゴン・ライダー・キック、そしてブラック・ブラスト・キック。2人のキックが2体のギガゼールに命中、爆発した。

「ふう…。」

ため息をついてお互いが向き合い、無事を確認する。

「ゆたかちゃん、合格よ！おめでとー！」

「あ…ありがとうございます！」

いつの間にか、2人はサムズアップで応えていた。

「ま、何はともあれご苦労さん。」

ガラハドが笑顔で2人を迎え、シャッフルは拍手をして2人を褒める。

ゆたかから離れ、横に並ぶパピヨンも、深くため息をつき彼女が無事に戻れた喜びをかみしめる。

『よかった。ゆたか様が無事で…。』

「パピヨンちゃん、ありがとう。それにおじさん、シャッフルさん、

ただいま。」

「2人共、おかえり。」

あやのも、終始にこやかに会話を聞き、ホッと胸をなで下ろしていた。

午後4時20分、2人が帰る時間になり、ガラハドとシャツフルは研究所の入口で見送ろうとしていた。

「今日は、ありがとうございました。」

「またクッキーが欲しくなりましたら、私に声をかけて下さい。」

2人の屈託のない笑顔に、ガラハドの頬は緩む。

シャツフルに至っては、完全にデレデレである。

そして、2人が帰ろうとしたその時、ガラハドは何かを思い出したらしく、

「あ、そうだ。あやのちゃん、これを渡しておくよ。」

「?」

ガラハドはあやのを引き留め、彼女に一枚のカードを手渡した。

そのカードは、黄金の翼が写り込んだ美しいカードで、背景に炎が逆巻いている。

「…これは!」

「そう、あやのちゃん専用のカード『ライジング・サバイブ』だよ。」

数日前、完成したんだ。」

「あ、ありがとうございます！」

新たな力を手にして、あやのの顔は赤くなる。

「先輩、おめでとうございます！」

「ありがとうございます。ゆたかちゃん。」

2人を見送った後、ガラハドは研究所に戻り、シャッフルが持ち帰ってきた電子機器の解体に着手した。

次に控えるライダーの強化に必要なシステムを作るための、パーツ取りのためである。

「次は、一体誰を強化するんで？」

「そうだな…、パティちゃん辺りを強化してみるか。」

最早彼の開発スピードは神掛かっている。そう感じるシャッフルであった。

【おまけ】

2人がミラーライダーに変身してテストしている頃、遠くで鼻血を1リットル近く流しながら見つめている男がいた。

「ゆたか、か。…かわいいーなー。」

…そう、あやのの部屋にカードデッキを置いていった張本人、神崎四郎である。

NOTE 2 ゆたかと黒龍とバックアップ（後書き）

シャッフル

「しつつかし、強化出来ない理由がアレじゃあ、仕方ないなあ。」

ガラハド

「けど、代わりにいい物を手に入れたんだ、結果オーライだよ。」

シャッフル

「ま、今後に期待しよう。…だが、今回最も納得いかねえええええっ！！（かがみん風に）なのは、神崎のエロ親父だな。」

ガラハド

「あいつの鼻血、えらい事になってるからな。」

シャッフル

「1リットルも出るか、普通は！」

ガラハド

「ま、こじは。」

シャッフル・ガラハド

「お後がよろしいようぞ。」

次回、「仮面ライダーアナザーディケイド 青い瞳の破壊者」は、

「みんなの笑顔のためなら、私は怖くない！」

「それじゃいくツスよ！」

「お前は誰だ？」

TOUR 20

「ソード・ブラスター」

555の新しい力、降臨…。

TOUR 20 ソードブラスター（前書き）

シャイアン

「前回の3つのキーワード！」

こなた

「1つ！私とつかさの一騎打ちに仁さんのルシファーが乱入、ルシファーが使用不能に！」

つかさ

「2つ！落ち込んでいた私と仁さんを、シャイアンさんとかなちゃんを励ましてくれた！」

ひより

「3つ！芦川山にエビル・ビーストが全て集結している情報をキャッチし、私達が現場に向かった！」

シャイアン

「さて、タイトル通り今回からひよりが強化アイテムでパワーアップするのだが…。」

ひより

「？何か不満ツスか？」

シャイアン

「いや、不満はないのだが、とあるキャラに似ているような気がする。な。」

ひより

「キャラのダブリは気にするなツス！」

シャイアン

「そ、そうか……。では！」

シャイアン

「さあ始まるぞますよ！」

こなた・つかさ・ひより

「レディ・ゴー！！！！」

こなた

「（はっ）おいしいiiiiiiiiっ！それ私のセリフううううっ（泣）

「！！」

## TOUR 20 ソードブラスター

芦川山の中腹：丁度赤土がむき出しになっている開けた地に、6人のライダーは立っていた。

そして、バエル率いるエビル・ビースト軍団も、中腹に軍を3つに分け配置しライダー達を迎え撃つ。

『ふふふ、見ている人間共。我らの力を、その目に焼き付けるがいい。』

バエルも、サタンのバックルを手に軍の後方に控える。

お互いに相手をにらみ合う中、555…ひよりはオートバジンを呼び寄せ、サイドに接続してある日本刀型のバックパックを取り外し、それを担いでにらみ合う。

(いよいよ出番ツスよ、私のセイバーちゃん！)

そう、これこそひよりが新しく得た力。

未知の実力を秘めた、驚異のアイテムである。

午後2時19分。

遂に、エビル・ビーストが動いた。(脳内BGM：『仮面ライダークウガ』より『戦士』)

「来たぞ！」

「よし、作戦通り動いてくれ。唯とひよりは右側を、こなたとつかさは左側を、私と仁は中央を攻める！」

「了解！」

6人は、一斉に散開し決められた陣地へと切り込んでいく。

特に、唯とひよりが受け持つ右側への攻撃は重要な意味がある。

そこには、情報管制能力を持つエビル・ビースト…ブレイン・キャメルが後方に控えており、彼は逐次キャッチした情報をバエルに伝える能力があるからだ。

そのため、エビル・ビーストらはここで唯達を食い止めブレイン・キャメルを守らないと、今後の作戦に差し支えが出てしまい、下手すれば情報なしで戦わなければならないのだ。

だが、2人は一向に怯む事もなく前進する。

「何としても、ここで纏めて叩き潰さない！」

「うん、そうッスね！」

2人は気合いも十分に大群を潰していく。

一方こなたのトライオーは左側のエビル・ビーストの大群をアーム・ブレードで薙ぎ払い、つかさのアギトはUBに変わりアルティメット・フレイム・ソードで斬り裁いていた。こなたとつかさの2人が受け持つ左側は、特殊能力を持つ強者が多く苦戦は必死である。

特に、奥に控えているエビル・ビースト…ジェノサイド・ビートルは、頭部の角から繰り出される雷撃により、広範囲を焼き尽くす能力があるため、うかつに手が出せないのだ。

しかも、敵味方関係なく雷撃は放たれるため、彼の存在は迷惑な事

この上ない。

こなた達からすれば、ジェノサイド・ビートルから先に片付けたいところであったが、奥に控えている上に雷撃がいつ飛んでくるかわからない事もあって、トライオーは攻めあぐねていた。がしかし、アギトの剣裁きは迷いがなかった。

「つかさ、もう闇は怖くない？」

アーム・ブレードで飛んできた火球を斬り払いながら、彼女はアギト…つかさに質問した。

「うん、もう大丈夫。だって…。」

「？」

「みんなの笑顔のためなら、私は怖くない！」

彼女の力強い答えに、トライオーも安堵の息を漏らす。

完全に迷いは吹っ切れたね、これなら安心して攻撃できる、と。

一方、AD・ライトニングの2人は、エビル・ビーストの大群が数多くいる中央を突き進んでいた。

「いつくぜえ！」

ライトニングは両手を広げ、そこに大気中の静電気を集束させると黄金に輝く両足から稲妻がほとばしり、辺りにいるエビル・ビーストを焼き尽くす。

ライトニングの雷撃技の1つ、『グラウンド・スパーク』である。

この技は、広範囲・単体の選択が効くため、汎用性はかなりある。

しかし、集束から発射へのタイムラグが長いと言つ難点があるため、滅多やたらと使えないのが痛いところだ。

が、ライトニングは格闘戦がメインのため、この技は補助的に使うのが正解と言えるだろう。

続いて、ライトニングは更に迫り来るエビル・ビーストに向かいキックを放つ体制をとつた。

右足に稲妻が集束され、そして空中高くジャンプした後、大群目がけてキックを繰り出す。

ライトニングの持つ最強の雷撃技、『シュープリーム・ブラスト』である。

間違えてもシュークリームではない、念のため。

ゴウウウウツッ!!

エビル・ビーストの大群は瞬く間に蒸発し、影も形も残ってはいない。

その横でライド・クロニクル・ソードを振るい奮闘するADも、ライトニングの技の冴えに、改めてこの世界のライダーシステムが良い方向に向かっているのを認識した。

同志の消滅がブレイン・キャメルから報告される度に、バエルは憤りが募っていくのを感じていた。

まさか、世界中から集まったエビル・ビーストがたった6人のライダーに全く歯が立たないのである。

本来なら、エビル・ビーストは一般的な武器：ショットガンやバズ

「カ等の実弾兵器相手なら、4〜5人で集中攻撃すれば1体倒せるかどうか、といったレベルのため、数体がチームを組んで動けば特に差し支えはない、そう読んでいた。

しかも、ライダーシステムも未完成のまま。よって、勝機は大幅にあると踏んでいたのだ。

しかし、現実とは違っていた。

ライダーシステムは既に完成していたのか、動きが滑らかで暴走も起こっていない。

他のライダー5人も同志よりパワーが段違いな上、1薙ぎで数体の同志が吹き飛ばされ爆発する。

「こんな馬鹿な話があるか！我らは最強の生命体だぞ！…それを、あんなチンケな装備の人間にしてやられるとは！」

「ですが、ジェノサイド・ビートル様の軍勢は未だに優勢と聞いております。まだ勝負の行方はわかりません。」

側近が何とかバエルをなだめるものの、バエルの怒りは収まらない。しかも、その間に次々と敗戦情報が彼にもたらされ、その度に怒りはますます募っていく。

「…ジェノサイド・ビートルに通告だ。これ以上奴らの進行を許すなど！」

「か、かしこまりました！」

左側の竹林の奥深く、そこにジェノサイド・ビートルは、どっしりと腰を下ろして連絡を受けていた。

「わしが動いていいのか？」

『既にバエル様から許可は降りている。奴らの進行を何としても喰い止めてくれ!』

「…了解した。」

すると、ジェノサイド・ビートルは巨大を揺らしながら立ち上がり、竹林を後にした。

ジェノサイド・ビートル…カブトムシをモチーフとした、エビル・ビースト最大の巨体を誇る実力者である。

その姿を見て、こなたとつかさは呆然と見ていた。

「こ、こなちゃん…あ、あれ…。」

「…でかいねえ、ありゃ。」

2人は、ジェノサイド・ビートルの巨体に圧倒されていた。

その大きさ、ゆうに3・5m近く。今までの倍以上の大きさを誇っている。

が、それでも2人は意を決してジェノサイド・ビートルに戦いを挑む。

人々の笑顔を守るために。

さてその頃、ひよりと唯は右側の軍勢の大半を潰し、情報管制軍の中枢に突入していた。

既に護衛のエビル・ビーストは倒され、残るは奥に控えているブレイン・キャメルのみ。

らくだをモチーフとし、全身に機械が所狭しと取り付けられた異質な姿に、唯とひよりは呆然としていた。

「何か、重そう…。」  
「まるで、電子の要塞ツスね。」

すると、ブレイン・キャメルはひよりの一言にカチンときたのか、重い電子機器を全て取り外し、身軽に近い姿で2人に向かっていった。

『今の発言、あまりにも失礼！ここは、情報管制軍最後の砦たるブレイン・キャメルが、お相手いたす！』

すると、ブレイン・キャメルが一瞬消え、2人は大幅にダメージを喰らった。

「うわっ、素早い！」  
「きゃっ、何今の！」

そう、ブレイン・キャメルのもう一つの特徴：機動力の高さに2人は脅威を感じずにはいられなかった。

見た目はふざけてはいるが、いざ戦ってみるとその強さははっきりとわかる。

伊達に情報管制軍の総司令をやっている訳ではないのだ。

が、555だけは例の日本刀型バックパックを盾にして次の攻撃を防御したため、ダメージは何とか抑えられている。

何て頑丈な武器なんだ、とブレイン・キャメルは心の内で毒づくが、相手はここまでの連戦で疲れがピークに達しているはず。

倒すなら今だ、とばかり両手に高振動を発生する片刃の剣を腰から引き抜き、2人に肉薄する。

すると、555はファイズギアに装填されたファイズフォンを外し、日本刀型バックパック…マルチソード・ギアの側面にある携帯が入

りそんなスリットに装填した。

「お願い、セイバーちゃん！」

『アウェイクニング!』

電子音が鳴るや、柄の上面にあるカバーを開く。

そこにはファイズフォンと同じコンソールが配置されており、『555』と入力した後『ENTER』を押す。

『スタンバイ!』

その瞬間、555の黒いスーツ部が青く輝いたかと思うや銀の装甲が金の装甲に変化し、フォトン・ブラッドが赤から白金に変化する。更に、マルチソード・ギアを左腰に取り付けると刀を抜くかのような動作をし、白金に輝く両刃の直刀が現れる。

これこそ、555の最強形態、ソード・ブラスター。接近戦用に特化した、スペシャル・バージョンである。

「では、いくツスよ！」

白金に輝く刃を振り翳し、555ソード・ブラスターはブレイン・キャメルに斬りかかる。

ブレイン・キャメルは、その刃をひらりとかわし高振動の刃を振り下ろすが、その一撃は555に当たる事はなかった。

白金の刃が、あたかも意志を持つ鎖のようにつねり、555を護つたからである。

これぞ、ソード・ブラスター最高の技『チェーンブレード・モード』である。

「まだまだ。セイバーちゃんの底力は、この程度じゃないツス！」

そして、ADとライトニングも敵陣の中枢…バエルの控える玉座の間まで来ていた。

バエルは既に仮面ライダーサタンに変身し、2人を迎える。

「…ようやくの、お出ましか。」

「ああ、やっとここまで来たな。」

2人は、サタンに向き直るや構えをとり、向こうの出方を見る。

「…よく来たな、人間。私がバエルだ。」

「バエル…貴様のせいで、一体何人…いや何百、何千、何万人の命を奪ってきた！」

「…さあ、どのくらいかな。数えた事もないよ。」

「てめえ……！！！」

バエルは、ライトニングの質問に適当に答え、玉座から立ち上がり2人をにらみつける。

がしかし、2人の闘志は揺らぐ事はなく、逆にバエルをにらみつけ、構えをくずさない。

「ほお…大した肝の持ち主だな。私の眼圧に屈しないとは。」

「当たり前だ！貴様が奪った人々の笑顔を取り戻すまではな！」

すると、バエル…仮面ライダーサタンは構えをとり、ライトニング目掛けて走り出し、軽く右のストレートを繰り出した。

ライトニングも右フックで応戦し、相打ちに持ち込む。

すかさずADが左のミドルキックでサタンの右脇を攻め、更にライ

ド・クロニクル・ガンモードで右腕の動きを封じ、ライトニングをサポートする。

『なかなかやるな、人間の分際で。』

「ふん、貴様とは覚悟が違っただよ!」

ライトニングは右手を翳し、空気中の静電気を吸収しながら左手にエネルギーを溜め、雷撃を放つ。

しかし、サタンは左手で雷撃を弾き返し、更に暗黒の弾丸を数発生成し、ADに向け発射した。

「くっ!」

ADが暗黒弾をかわし、ライド・クロニクルからカードを取り出そうとした時。

ヴヴ…ン。

突然、銀の壁が現れ、そこから何者かが現れた。その足取りは比較的ゆっくりであり、ADの前に立ち彼を守る様にサタンの方を向く。

「お前は誰だ?」

「……。」

サタンが怪訝そうに、その人物に訪ねた。しかし、その人物は答える事はなかった。

「?何だ、あいつ。」

ライトニングも、いきなり現れた謎の人物に戸惑う。

が、A D だけはその人物に見覚えがあった。  
黒いスーツに青い装甲、背に付けしは白銀の翼。両腕に抱く黄金の  
爪、腰に付けし片刃の双剣。

「ウインガル…平沢刑事か！」

そう、その名はウインガル。  
「グランザムの世界」のライダーである。

## TOUR 20 ソードブラスター（後書き）

### 【今回のトーク】

シャイアン

「あれが、ソードブラスター…。」

ひより

「どう？あれが、私最強の装備、マルチソード・ギアッス！！」

シャイアン

「まあ、ビジュアル的には印象に残ったが、な…。」

ひより

「？」

シャイアン

「正直な話、シンゴードとグムと555を足して2で割

ったような…。」

ひより

「それ言っちゃダメエエエエツ！！」

次回、「仮面ライダーアナザーディケイド（青い瞳の破壊者）」は、

（脳内BGM：『仮面ライダーアギト』次回予告用）

「これでラストッス！」

「お願い、当たってえ！！」

「貴様、眉毛はあるか？」

TOUR 21

「笑顔を守る者」

ライティング編、完結…。

TOUR 21 笑顔を守る者(前書き)

こなた

「前回の3つのキーワード！」

かがみ

「1つ！芦川山に集結した世界中のエビル・ビーストを倒すべく、AD達6人は決戦に挑む！」

みさお

「2つ！それぞれの戦いが始まる中、遂に555が最強形態・ソードブラスターに進化した！」

あやの

「3つ！敵の本陣に突入し、戦いを繰り広げるADさん達の前に、ウインガルが乱入、戦いは混戦状態に！」

XX

「今回は、この世界のラスト・バトルにふさわしく、こなたクウガが再登場！」

こなた

「そして、ウインガルの正体も明らかに！…更に、今回から各世界のラストの後書きに工夫加えてみたよ！」

XX

「あゝ、長かったなあ…何とか形にはなったよ。」

こなた

「この調子だと、次も大変そうだね。」

XX

「幸い、ネタには困ってないけどな。」

こなた

「頑張つてね!…では、早速!」

こなた

「さあ始まるぞますよ!」

かがみ・みさお・あやの

「レディ・ゴー!」

TOUR 21 笑顔を守る者

ADの前にいきなり現れ、彼を守る形でサタンに立ちふさがるウインガル。

ADは思つ。思わぬ形で援軍が来たな、と。

『貴様、一体何者だ？』

すると、ウインガルはサタンを指差し、

「デイケイドさんには、指一本触らせません。すぐにでも失せなさい！」

(平沢刑事ではない…？)

女の声を聞いたADは、ウインガルが平沢刑事ではない事を知り、驚いた。

『女ア…許さぬっ！』

サタンが怒りに任せ、巨大な漆黒の刃を形作ると、空中高く舞い上がり刃を振り下ろした。

が、その刃は黄金の爪…イカロス・クローに遮られ、逆に鋭い一撃を受ける。

胸部に深々と傷を残し、後方に下がるサタン。

更に追い討ちをかけるべく、腰部の左右に装備されている機関砲を使いサタンに確実にダメージを与えるウインガル。

ADは、ウインガルが作ってくれたチャンスを生かすため、ライド・クロニクルをソードに変形させ、一気に攻め立てる。

そして左側の情報管制軍では、ひよりの555ソードブラスター・唯のジョーカーとブレイン・キャメルとの戦いが、終わりを迎えていた。

動きではブレイン・キャメルが上だが、ソードブラスターの剣裁きにより実力は五分五分。ほとんど差はないと言ってもいい。

（あの戦士、実力は未知数。何が起こるか、解析不能……。）

ブレイン・キャメルの情報分析能力をもつてしても、ソードブラスターの性能は全くわからず、心の中で焦り始める。  
が、そこへ。

「そこっ！」

『ユニコーン・マキシマムドライブ!!』

ジョーカーが着地点を見極め、ユニコーン・ライダー・パンチをブレイン・キャメルの腹部に決める。

『ガハアアアアッ!?!』

くの字に曲がりながら吹き飛ぶブレイン・キャメルを確認し、ソードブラスターは再び柄にあるカバーを開け、コンソールの『ENT ER』を押す。

『エクシード・チャージ!』

電子音と共に、白金色のフォトン・ブラッドが胸部からマルチソード・ギアに伝わり、剣の輝きを更に増す。

「これで、ラストツス！」

その輝く刃を振りかざし、動きを止めたブレイン・キャメルに叩き込み、そして一気に斬り裂く。

ソードブラスター最高の技、『プラチナム・アヴァランチ』。

一撃必殺の、白金の一太刀。

『グアアアアツ！…バエル様に、栄光あ…れ…。』

ブレイン・キャメルは、最後に自分の主…バエルを讚美し、爆発して果てた。

右側の特殊能力軍では、トライオーとアギトUBが、ジェノサイド・ビートル相手に殴り合いを展開していた。

元より身長差にリーチがあるジェノサイド・ビートルに対し、2人はジャンプしながらキックやパンチを決めていたが、問題は頭部の角から放たれる雷撃である。

ジャンプ中に雷撃が当たると、さすがに攻撃が止まってしまい、致命傷になりやすいからだ。

現に、ジェノサイド・ビートルはここまで4回程雷撃を繰り返しているが、何れも味方を巻き込んで命中しているため致命傷にはなっていないが、ダメージは少しずつたまっていく。

「はう〜。こなちゃん、あの角が厄介だね〜。」

「うん、あれを何とかしないと。…にしても、このカブト虫は装甲が厚いねえ！」

アームブレードも絡めながら攻撃しても、アルティメット・ボンバーを使って牽制しても、一向に傷1つ付かないジェノサイド・ビートルの装甲。

その堅さに閉口したトライオーはベルトに手を翳し、みさおのブレイドを召喚しようとしていた。

ブレイドなら、雷撃に耐性がある上、万が一のための『メタル』や『タイム』といったカードでの防御、ジャック・フォームによる反撃やFFRで変形してアギトUBに使ってもらう、等の選択肢があり戦略に幅が出るからだ。

「みさきち、力を…。」

ところが、ここで現れたのは何故かつかさの姉のかがみの精神体だった。

「あれ？かがみ、みさきはどうしたの？」

『あ、日下部なら今回私が「ちょっと私と代わって」って頼んで下がってもらったわ。』

「ええーっ？！何すんの、せつかく力を貸してもらおうと思ったのに。」

ふくれっ面をしてかがみに抗議するこなた。

しかし、精神体かがみの口からは思いもよらない言葉が飛び出した。

『こなた、ごめんね。…その代わりに、私の本体がアメイジングの力を手に入れたから、そっちを使って！』

「え、かがみの本体が?!」

トライオーは軽くうなずき、そしてベルトに手を翳し直し叫ぶ。

「クウガ・アメイジング!!!」

するとどうだろう、一旦クウガ・マイティに変身したかと思えば一気に体色が黒くなり、現れたアークルも中央を金色に染めたライジングを思わせるカラーに変わる。

クウガ・アメイジング・マイティ。「驚異」と言う名の力を、こなたは借り受けたのだ。

「こなちゃん、お姉ちゃんが力を貸してくれたの?...すごい!!!」  
「まあ、ね。それよりも、このまま一気に押していくよ!準備はいい?」

「うん!」

まずクウガAが先にダッシュをかけ、その後をアギトUBが続く。クウガAの手には、どこかから拾ったのか太い木の枝を手にしており、瞬く間に黒く鋭い刃を持ったロッドに姿を変える。

アメイジング・ロッドと言うべきそのロッドを縦横無尽に振り回し、ジャンプした後頭部目がけてロッドを振り下ろした。

ガキイツ!

鈍い音をあげて、角とロッドがぶつかる。

『愚かな...。』

ジエノサイド・ビートルは、そんな事にもお構いなしに5度目の雷撃を放つ。が、トクウガAには通用しなかった。いやむしろ、逆にトクウガAの方が雷撃を吸収しており、かえって向こうの力を倍増させる結果となる。

『我が雷撃が…通用しない…だと？』

驚く暇もなく、次にアギトUBの攻撃が急所の腹部に決まる。通常のパンチではあるが、威力は段違いであり、ジエノサイド・ビートルが片膝を突く。

『が…はあっ…』

休む暇もなく、次に両者がキックを放つ体制に入る。

トクウガAの両足には黄金の雷が蓄積され、アギトUBも足元に黒いアギトの紋章が浮かぶ。

「これで決める！」

ロッドを放り投げ、トクウガAが先にキックを決めるべくジャンプする。

するとここで、アギトUBに変化が起こった。

何と両肩の装甲が吹き飛び、右に黒いフレームの肩アーマー、そして左に同じく黒いストームの肩アーマーが現れ、そして両肩と胸部からエネルギーが両足にたまっていくのがわかった。

アギト・カオス・トリニティ。

つかさアギトの最終形態である。

「つかさ、やったじゃない！」

「うう…なんか、すごい力が体の中にたまっていくよ…！」

力が十二分にたまったアギトCTは、すぐさまジャンプしキックの体制をとる。

「お願い、当たってえー！」

TクウガAとアギトCTの放つダブルキックがジェノサイド・ビートルに命中し、空中高く舞い上がった後爆発四散した。

「遂に我だけとなったか…。出よ、我が親衛隊よ！」

両軍が壊滅した事を知った仮面ライダーサタンは、隠していた戦力…バエル親衛隊を2体呼び出し、3対3の乱戦に持ち込んでいた。ウインガルとADが親衛隊の迎撃を引き受ける頃、ライトニングはサタンにニヒルな笑みを仮面の下で浮かべ、いきなり組み付く。

「バエル、眉毛はあるか？」

『眉毛？何だ、それは。』

「ねえよな、まぶたもまつげも、いや鼻や口も何もないからな。」

『何が言いたい！』

「人間つてのはな、笑顔がなければ今を生き抜くのは無理なんだよ！…てめえらが倒した俺の仲間もな、その笑顔を守るために散っていったんだ！」

その思いが込められたパンチの雨霰に、じりじりと追い詰められるサタン。

が、サタンも負けじとパンチを繰り出し応戦する。

『笑顔？…ふん、そんなものがなくとも我らは生きていける！』  
「貴様等はな…。ま、所詮は表情も感情もないただの黒い丸玉頭、目エ1個だけでは何も出来まい！」  
『表情や感情など要らぬ。…この世界さえ手に入れば、後は何とでもなる！！』

ああそうかい、とばかりに更に更に拳を固め、パンチを繰り出すライトニング、そして世界を手にとんとする野望を胸に、拳を更に繰り出すサタン。

思惑の異なる両者の殴り合いに、しかしADは努めて冷静だった。

(この激突、仁が勝つ！)

そしてADはライド・クロニクル・ソードを逆手に持つや、親衛隊の懐深く踏み入り必殺の一太刀を右下から左上へ斬りつける。

「！！！」

がしかし、親衛隊も自らの黒い殻を破り、狼の姿をしたエビル・ビーストに脱皮しようとしていた。

「…逃すか！」

ADは、その僅か数秒を見逃さず更に真っ向から一太刀浴びせる。真っ向から2つに斬り裂かれた親衛隊は、脱皮する事なくそのまま爆発四散し、ウインガルの方も機関砲を打ち込み脱皮を阻止しつつ、左腕の黄金の爪…イカロス・クローを脱皮したての薄い部分に叩き込む。

『ウオオオオツ!!』  
「これでっ!」

そして右手に握られた片刃の曲刀：フェザー・カリバー・ネオで追  
い討ちをかけ、もう1人の親衛隊を撃破する。

「これでわかったか?：俺達はな、みんなの笑顔のためなら死をも  
覚悟して戦っているんだ!：貴様の歪んだ野望なんぞに、屈してた  
まるか!！」

と、ライド・クロニクルから2枚のカードが飛び出し、ADの手に  
収まる。

そう、ライトニングのカメンライド・カードとFARのカードであ  
る。

「仁、手っ取り早く決めよう。」

「ああ、そのつもりだ。」

ADが青いカードを手にし、クロノ・ドライバーに装填する。

そのカードには、握手をモチーフとしたマークに稲妻が重なってい  
る紋章が描かれていた。

『ファイナル・アタック・ライド ラ・ラ・ラ・ライトニング!!』

ADが右手を上げ、その手に光を宿していく。

ライトニングもまた、右手を上げ光を宿す。

そして、お互いに集まった光を1つに結束させ、一筋の太い光の柱  
を形作る。

それは、まるで巨大な剣にも見え、サタンは現れた光の柱に恐怖す

る。

「見たか！これが我々の結束力だ！」

「貴様のチンケな野望のために散っていった仲間達の仇だ！とくと味わえ！！」

2人は、現れた光の柱をサタンに向けて振り下ろす。

デイクイド・プラズマ・セイバーである。

サタンも、黒いオーラを放ちバリアを形成、光の柱を防ぐ。すんでのところで止められてしまったのだ。

「残念だったな。私には、闇の力がある。これがある限り、私は死なぬ！」

「それは、どうかな？」

すると、ウインガルがフェザー・カリバー・ネオを両手に持った双剣の構えでエネルギー・チャージを開始するや、双剣を振り下ろし円月型の衝撃波を放った。

「砕け散りなさい、邪悪の化身！」

ガシャーン！！

その衝撃波はサタンの黒いバリアを砕き、サタンは光に包まれる。

「ぐうう、わ、我が野望は粉碎された…その朱色の。貴様は一体何者だ！？」

「通りすがりの仮面ライダーだ。…覚えておくがいい！！」

「うぐわああああっ！！！」

バチバチバチッ！！

関節部から火花が飛び散り、更にメキメキと音を立てて装甲が砕け散る。そして仮面ライダーサタンは、バエルごと光に飲み込まれ消滅した。

長かった悪夢は、ようやく終わりを迎えた。

戦いが終わり、シャイアンはウイングルの資格者に声をかけた。

「その君、あなたは一体…？」

「…私ですか？」

ウイングルが頭部のマスクを外すと、そこに現れたのは……。

「君は確か、梓、だったね。」

「はい、中野 梓です。」

そう、かつて最初の世界でウイングルに身を纏いADと共に戦った少女…梓だったのだ。

「しかし、その姿は？」

「これは、新たに警視庁が開発した新型のシステム、ウイングル Mk.2です。私は、テスト生として参加していたのですが、今回銀の壁に導かれて…。」

「そうか。」

そして彼女の背後に銀の壁が現れた。

「あ、もう帰る時間の様ですね。では、失礼します。」  
「ああ、気をつけてな。」  
梓はシャイアンに一礼すると、銀の壁に消えていった。

芦川山の戦いから数日、ゆっくり休養をとったシャイアンは、次の世界に向かうべくマシン・ヴァーミリオンにまたがり、仁達と握手をしていた。

「次の世界に向かうのか。」  
「ああ、こうしている間にも世界が融合してきているからな。急いで世界を救済しなければならぬんだ。」

既に余所の事情を飲み込んでいた仁であったが、今回の事件とい世界との融合といい、いろいろとまずい事が外の世界で起こっているのを更に肌で感じていた。

「そうか…。出来れば俺もついて行きたかったが、今は自分の世界に笑顔を取り戻すのが先だ。」  
「とは言え、あわててはだめだ。ゆっくりと、皆に笑顔を与えてやってくれ。」  
「わかった、俺もあわてずにやっていくよ。」

そして、時間が来てしまった。

「仁、我々はあなたの勇姿を忘れない!…また会おう!」  
「ああ、また来いよー!」

そして、全員は銀の壁をくぐり次の世界を目指す。

TOUR 21 笑顔を守る者（後書き）

銀の壁の中を進む一行。  
と、そこへ。

「おい、こなたあー、みんなあー。」

「おい、チビすけえー。」

かがみとみさおが、シャイアン達の後を追ってやって来た。

「あ、お姉ちゃん。」

「やふー、かがみん！」

「かがみん言うな！！…あ、そうそう。つかさ、田村さん、交代よ。」

「あ、そうだった。」

「忘れてたツス。」

「ふふつ、元気でいいな、みんなは。」

賑やか且つ和やかな雰囲気の中、つかさとひよりは一旦フェードアウトし、かがみとみさおがバトンタッチする形で後を引き継いだ。

シャイアン達5人が次にやって来た世界、そこは近代ビルが立ち並ぶ都市の真ん中であつた。

「…」

「風力発電の風車、それに街の通り…まさか、風都?!」  
「Wの世界かよ、マジでえ!?!」

が、その意見はシャイアンによって否定された。  
「いや、そうではない様だ。」

そう、そこに現れたのは。

年にして中学生位の少女3人が、手にした昆虫型のコントローラーをかざし、叫ぶ。

「「「重甲!!」」」

そして、3人は青と赤と緑の昆虫戦士に姿を変えた。

「ここは、『重甲ビーファイター』の世界…!!」

次回、「仮面ライダーディケイド く青い瞳の破壊者」は、  
パティ

「ワタシがパワーアップするハナシデース!オタノシミニ!」

「タシロットと身体測定と気になるデータ」

NOTE 3 タツロットと身体測定と気になるデータ（前書き）

ガラハド

「さて今回は、パティちゃんの強化の話だ。」

パティ

「オー！ワンダフル！これでワタシもみんなにオイツイテハッピー  
デース！」

ガラハド

「では、いってみよう！」

### NOTE 3 タツロットと身体測定と気になるデータ

『いくら何でも、ダメな物はダメ!』

「そう冷たい事は言わないでくれ。少しでいいから。」

この日、ガラハドは久々にオリジン・キバの世界を訪れていた。そしてキャッスル・ドランに立ち寄り、キバットにある事を頼んでいた。

それは、タツロットを貸してほしいと言う事。

しかし、こちらとしてもタツロットは貴重な戦力であり、迂闊に貸す訳にもいかず遂には押し問答と化してしまったのである。

『とにかく、いくら功労者として簡単にタツちゃんを貸す訳にはいかないぜ。』

「大丈夫だ、すぐに返すから。」

『いや、だから…。』

と、そこへアームズ・モンスター御一行が帰ってきた。

大量の荷物を抱えているところを見ると、どうやら渡に頼まれて買い物をしていたらしい。

「どうした、キバット。」

「あ、博士、こんにちは。何かあったのですか?」

「……。」

ガラハドは、仕方なく事の顛末を3人に話した。

「むう、…さすがにそれは無理だな。」

「キングの許可がなくては、まず無理でしょう。」

「……怒られる。」

が、さすがの3人も表情を曇らせる。…無理もない、あのタツロツトを貸すのである。

しかも、今キヤッスル・ドランには渡はならず、オリジンの世界を巡り被害状況をまとめている最中なのだ。

無断でタツロツトを貸すという事は、まず死を意味する。

「そうか…。」

『だから、言わんこつちやない。大人しく元の世界に戻ってくれな  
いか。』

これ以上もめるのは得策ではないと思ったガラハドは、やむを得ずこなたの世界にある自分の研究所に戻る事にした。

が、彼は帰り際にガルル…次狼に自筆の手紙を手渡し、これを渡に読んでもらう様頼んだ。

「これを渡せばいいんだな？」

「ああ、渡にどうしても読んでほしいんだ。頼む。」

「わかった、任せろ。」

それから数日後、渡からの手紙が届いた。どうやら、手紙を読んでくれたらしい。

「おやつさん、その手紙は？」

「数日前、私がガルル君に手紙を渡していたんだ。どうやら、答えが返ってきた様だな。」

ルウの世界に行っていたガラハドが、届いた手紙に驚く。  
そして、ガラハドが手紙の封を開け、中身を確認する。

「……………」  
「………」  
「どうですか？」

彼の表情は…満面の笑み。  
つまり、OKである。

「やったよ、これで開発がだいぶ進むぞ。」  
「そうか、おやっさん！」

シャツフルも手放して喜ぶ。

そして、2人は封筒に入っていた資料を広げ、細部を確認していた。

実は、ガラハドがほしかったのはタツロットの身長や体重といった  
『外見』のデータであり、中身ではなかったのである。

既に中の方は開発は完了してはいたが、肝心の外側のデータが無く  
手が止まってしまった状態だったのだ。

が、キバットはガラハドがタツロットの秘密を知りたいと勘違いし  
ていたようで、数日前あの様な押し問答になってしまった、これが  
真相である。

ガラハドがガルルに託した手紙を読んだ渡は、事の真相を知り、早  
速ガルル達とキバット・タツロットを呼び出し、手紙の内容を話し  
た。

『何だ、早い話タツちゃんの身体測定がしたかったただけだったのか。…もう少しわかりやすい理由を言ってくればよかったのに。』  
「うん、キバットももう少し話を聞いてやってくればよかったのに。」

『ま、それなら話は早いでしょう。いち早く私の身体データを取り、ムツシュに送りましょう！』

因みに、タツロットはガラハドの事を「ムツシュ」呼んで親しんでおり、クロノ・ドライバーの開発中は、ずっと語り合っ仲としてそばを離れなかったと言う。

「そうした方がいいぞ、渡。あいつ、かなり困っていたからな。」

「何とか力にならないかな？」

「…俺か？」

「いや、力の事じゃないから。」

「うん、わかった。帯刀さんを、ここに。」

こうして、ガルル達と帯刀の見守る中、タツロットの身体測定は滞りなく行われ、集まったデータをキバットに託し、そして今に至る。

タツロットの身体データを元にした外面は2日後に完成し、完成済みの機器類を内部に組み付け、ようやく完成した。

「ふう、ようやく出来たぞ。」

「しかし、キバを強化すると言ったって、一体どの様な姿になるのか、皆目見当がつかないぜ。」

「ま、それは使ってみてからののお楽しみだ。」

完成した翌日、いよいよパティや渡を招いての実装に取りかかった。

『おい、本当に大丈夫か？もう1人の俺。』

『ああ、何でもパティが…と言うよりキバの鎧が劇的に変化するらしいんだけどな、何だかいやな予感がするぜ。』

『…同情しますよ、向こうのキバットさん。』

『ありがとう、ご両人。』

オリジンのキバットとタツロットに慰められたパティ・キバットは、既に腹を括っていた。

どーんと来い、全てを受け止めてやるぜ！…と。

午後1時20分、渡やキバット達が見守る中パティはキバに変身し、完成したタツロットを呼び出した。

『パティ、いくぜ！ガブツ！』

『ヘンシン！！』

『よし、タツロットを呼んでくれ。』

『オーケイ！！』

「カモン！マイ・フェイバリット、タツロット！！」

パティがコールすると、研究所の窓から黄金に輝くタツロットが舞い降りた。

見た目も完璧にそっくりなそれは、意思こそ無いものの的確に飛来し、キバの左腕に装着された後巨大な黄金の翼がキバの背中から現

れ、キバを包み込んだ。

シャッフル

「おっと、ここから先はネタバレになるから明かせないが、キバットの台詞から何とか推測してくれ。」

キバット

『おいしいいいっ!! あんたはキバをどうしたいんだあああああっ!!!!』

「よし、実験は概ね成功だ!」

「ワンダフォー! スバラシイデス!!」

「うん、いろんな意味ですごいですね。」

『まさにグッド・サプライズでしたよお!!!!』

ただし、当のキバットは。

『冗談じゃねえ! あんなの、キバじゃねえ!! 別の何かだ!!!!』

「まあまあ、落ち着いて。」

渡はキバットをなだめてはいたが、この後暫くの間滝のように涙を流していたのは言うまでもない。

実験が終わり渡達も帰って行った夜、シャッフルはガラハドに一冊の調書を渡していた。

「調査結果を纏めたけど、正直な話あまりいい話じゃないですよ、おやっさん。」

「ま、大体こうなろうとは予想していたがな。」

その書類には、今までシャイアンが巡った世界の怪人達の大多数が消滅し、オリジン・リイマジネーションの世界にいた怪人達が入れ替わりで攻めてきた、と言う衝撃的な内容であった。

「更にデータをかき集めたんだけど、オリジンの世界から来た怪人達による被害が、どこも酷くて…。特にミラージユの世界は、ファンガイアやオルフェノクが大量発生して、目も当てられない状況だとか。」

「さすがにそれは想定外だったな。…何とかして原因を突き止めなければ、被害はますます増えていくぞ。」

すると、シャッフルが何やら考え始め、数分後何か閃いた。何か考えがあるらしい。

「そうだ、おやっさん。いつそ、かがみ達を応援に行かせてはどうだ？ いずれにせよ、強化アイテムのテストをやらなきゃならないし。」

「あの子達を？…ま、確かに他に何もしないよりはましかな。よし、かがみ君達と話をつけてくる。」

数時間後、みゆき・あやの・ゆたか・みなみ・パティがガラハドに呼ばれ、研究所のソファでくつろいでいた。

ちなみに、かがみ・みさおは既にこなた達と合流し、つかさ・ひよりはこちらに帰っている途中です。

「よし、みんな集まったね。…みんなも話は聞いていると思うが、今裏世界にオリジンやリイマジの世界から来た怪人達が現れて暴れ出し、被害が拡大している。そこで、強化アイテムの調整も兼ねて各世界に飛んで、撃退してほしい。」

すると、あやのが恐る恐る手を挙げた。

「あの一、私達の勉強面はどうしますか？」

考えてみれば、ここにいる面々は全員高校生、赤点だけは絶対受けたくない。

すると、ガラハドは胸を張って答える。

「それについては問題ない。勉強については私がバックアップしよう。」

「あと、困った事がありましたら私に聞いて下さい。」

それに併せて、みゆきも名乗り出てくれた。

「あと、ここにいない人については到着し次第連絡を回すので、心配しないでほしい。」

ガラハドの一言に、全員は安心して胸をなで下ろした。

かなり心配していたのか、ゆたかに至っては最初緊張のあまりコチコチに固まっていたが、すぐに元の柔らかな表情に戻っていた。

翌日、やっと戻ってきたつかさとひよりにガラハドが昨日の事を告げると、すぐに皆の後を追う様に銀の壁を走り出した。  
この後、ガラハドやシャツフルが皆の家族や黒井先生に事情を説明したのは言うまでもない。

こうして、つかさ達パラレルの面々は裏世界の平和を守るために動き出した。

彼女達の行く手に、幸あらんことを…。

NOTE 3 タツロットと身体測定と気になるデータ（後書き）

【今回のトーク】

ガラハド

「これで、ある程度は強化成功だな。」

シャッフル

「あと残るは、みなみのみ。うーん、楽しみだ！」

ガラハド

「あ、そうそう。：読者の皆さん、次回から裏世界を守るために旅立ったつかさ達の物語が始まるよ！」

シャッフル

「待ち受ける試練・過酷な戦い・そして更なる謎……。」

ガラハド

「私達も時々登場するから、ご心配なく。」

シャッフル・ガラハド

「NOTE 4をお楽しみにー！」

次回「仮面ライダーアナザーディケイド」青い瞳の破壊者」は、  
(脳内BGM:『仮面ライダークウガ』より『開幕』)

「無視すんなゴルアアアアッ!!」

「これが俺の力、ブラック・ビートだ!!」

「グ…グロンギ…!!」

「と、当麻あ!!」

「仮面ライダー???の世界」とある魔術の禁書目録with重  
甲ビーファイター」敵の名は上条 当麻」

美琴よ、当麻を止めるのだ…!!

つかさ

「前回の3つのキーワード!!」

かがみ

「1つ!555ソード・ブラスター&ジョーカーがブレイン・キヤメルを撃破!!」

いのり

「2つ!トライオー&アギトが、強敵ジェノサイド・ビートルを打ち倒す!!」

まつり

「3つ!AD&ライトニングが仮面ライダーサタンを倒し、5つ目の世界を救った!!」

475

XX

「さて、ようやく折り返し地点まで来たけど、戦いはまだ続く。」

こなた

「しかも、今回あの主人公がまさかの敵に!!」かがみ

「しかも、ラストで更なるカミングアウトが!!」

みさお

「くうううう!楽しみだぜ!!」

XX

「では、早速!!」

こなた

「さあ始まるぞますよー！」

かがみ・つかさ・いのり・まつり  
「レディ・ゴー……」  
「……」

シャイアン達の目の前に突然現れた、3人の戦士…ビーファイター。カブトムシのオスをモチーフとした、青い装甲の戦士…ブルービートル。

同じカブトのメスをモチーフとした、赤い装甲の戦士…レッドル。クワガタをモチーフとする、緑の装甲の戦士…ジースタッグ。が、後方にいるシャイアン達には目もくれず、3人はある一点を見つめていた。

シャイアンが3人の視線の先を見てみると。

「…あれは？」

そこには1人の男の姿があった。

まるで栗のイガの様なツンツン頭に年相応のマスク。背丈のある細身の体を学生服（夏服）が包んでいる。

だが、表情は冷徹そのものであり、ニヒルな笑みをつつすらと浮かべている。

「見つけたわ…当麻。」

「……。」

その男…当麻はブルービートルを睨みつけ、軽くあざ笑う。

「フツ。」

「何がおかしいの！！」

「貴様、この俺を連れ戻しに来たのだろうが、今まで俺と戦って何敗した？…美琴。その腕では、俺を連れ戻すのは無理だな。」

「くっ……。」

当麻の返答に、苦虫を噛む思いでキツと睨みつけるブルービート。

「…美琴？」

こなたが、当麻の言葉にいぶかしがる。

「こなた、今当麻が美琴って言ったよね？」

「うん、間違いなく言った。」

「じゃあ、ここは…。」

「『とある魔術の禁書目録』<sup>インデックス</sup>の世界だよ。間違いない。」

かがみは、こなたの言葉に同感したのか、うんと頷いた。  
と、ここぞかがみが一つ疑問を抱く。

「でも、当麻は普通美琴をビリビリとか言わなかった？」

「言うよ。でも貴様は言い過ぎだよ、いくら何でも。」

「あーもう、そんなのはどうだっていいんだぜ。状況を説明してくれヨ。」

「…うるさいよ…！」

「みよ〜。(泣)」

そこへ、こなたとかがみの会話に何故かみさおが割って入るが、2  
人に怒られた。

すると、当麻がブルービートの後方にいたシャイアン達にようやく

気付いた。

正直言つて、気付くのが遅い。」

「ほう…。美琴、世界の破壊者も一緒なのか？」

「…えっ？」

ブルービート達が振り向くと、シャイアン達が立っているのにようやく気付いき、怒声を挙げた。

「ちょっと、何故世界の破壊者がここにいるの？邪魔でしょうがないわよ！…もし、この世界を破壊する気なら、後で私が相手になるわ！」

「ま、そういつた事はどうでもいい。それより…。」

「無視すんなゴルアアアア！」

怒声を軽くスルーされ、更にブチ切れるブルービート、そして冷静に話しかけるシャイアン。

「君が上条 当麻か？」

「ああ、そうだ。それがどうした？破壊者。」

がしかし、シャイアンは眉一つ動かさず冷静に話を続ける。

「ああ知っていると。君の素性も、この世界の事も、な。」

「ほう…俺を知っているとは、すっかり有名になったな。」

そう、先程クロノ・ドライバーから情報が届き、彼はその情報を読み取ったからだ。

そして、シャイアンは当麻に更に問いかける。

「では、1つ質問させてくれ。」

「ん？」

「君は、『幻想殺し』の使い手だったな。」

「ああ、あれか。」

当麻も、眉を動かす事なく質問に答える。

「君は本来この世界を、その能力で守る存在だ。なのに、何故敵対するのか、それを教えてほしい。」

「おっと。その話の前に、『幻想殺し』の事で1つ訂正があるぜ。」

当麻の返事に、皆は用心のため構える。

「『幻想殺し』なら、既に捨てた。」

「『えっ!!』」「『』」

何というカミングアウトだろう。

当麻の持つ能力にして、トレードマークと言わべき『幻想殺し（イマジン・ブレイカー）』を、彼は捨てたと言い切ったのだ。

しかも、彼をよく知ることなとかがみは尚更驚いていた。

「…嘘でしょ？絶対、嘘だよな？」

「あんだ、『幻想殺し』を捨ててどうするの？それこそ何の変哲もない、ただの人間に逆戻りよ!!」

「「??.??.」」

完全に置いてきぼりのみさおと唯を残して、話は更に続く。

「だが、その代わりに俺は力を手に入れた。…刮目して見よ!」

当麻は、懐から黒い虫型の通信機の様な装置を取り出し、起動させた。

装置からほとばしる異様なオーラが全身を包み、更に鋭い瞳から鈍い光も放たれる。

「邪甲!」

そして、シャイアンは…いや、こなたとかがみの2人も驚きを隠しきれなかった。

何故なら…。

「これが俺の力、ブラック・ビートだ!」

そう、かつてグランザムの世界でシャイアン達を苦しめたブラック・ビートに姿を変えたのだ。

しかも、こなたには因縁があり、彼に手酷いダメージを受けた記憶がある。

「…なるほど、それが君の答えか。」

シャイアンは、すかさずクロノ・ドライバーを装備しカードを手に変身する。

「ならば、手加減なしでいくぞ。…マスカ・レイド!!!」

『マスク・ライド デイクライド!!!』

そして、こなた達も各々変身し、ブラック・ビートに備える。

因みに、今かがみはクウガ・アメイジング・マイティ（以下Aマイティ）に変身しており、みさおブレイドもダブル・ジャック（スピードとハート）で迎え撃つ。

「…そう来たか。ならば、こちらも!」

ブラック・ビートが右手を挙げると、道の脇から5体の怪人が現れた。

しかも、かがみは現れた5体を見て、驚きの声を上げる。

「グ…グロンギ…!!」

そう、ブラック・ビートが呼び出したのはクウガの世界にいる筈の古代の戦士、グロンギなのだ。

しかも、ブラック・ビート…当麻がグロンギ語で指揮を取ってきたのである。

「パガドグダヂジョ、ジユベー！！（我が同士達よ、行け！！）」  
「ゴゴゴ！（おー！！）」

グロンギ達は、各々の得物を手に一斉にAD達に襲いかかってきたが、クウガAマイティとトライオー、ジョーカーとブレイド・ダブルジャックが立ちはだかり、グロンギの進行を阻止する。

「ここから先は行かせないよ！」

「かかってきたまへー！！！」

「かかって来なさい！」

「相手になるぜ！！！」

そして、クウガAマイティは落ちていた木の棒を拾って変形させたアメイジング・ロッドを手に、トライオーはキバ・ガルルフォームに変身してグロンギを迎え撃つ。

かがみは、武器をつかさにて全て与えてしまい、スペック重視のアウエイクニング・マイティで過ごしていたため、武器を手にして戦うのは随分久しぶりとなる。

が、そんなブランクをもとせずロッドを振り回して戦う姿に、Tキバ・ガルルも安心していた。

（何だか懐かしいな、かがみんが武器を手にするのって。）  
（かがみん言うな！）

心の中でつぶやいたにも関わらず、何故か心の中でもツッコミを入れられるTキバ・ガルルであった。

一方、ブルービート・ADとブラック・ビートは己が全力をぶつけ合い、壮絶な殴り合いに発展していた。

「くっ!!」

「はっ、そらっ!!」

そして、ブラック・ビートの拳がブルービートの鳩尾を捕らえ、派手に火花を散らして吹き飛ばすが、すかさずADがライド・クロニクル・ガンモードで援護し、体制を立て直したブルービートが空中高くジャンプしキックを放つ。

だが、瞬時に道路を蹴ってブラック・ビートもジャンプし、キックを放つ。

結果は相打ち。

両者は落下し、地面に叩きつけられた。

「大丈夫か?!」

「何とか、ね。。。」

先に立ち上がり、拳を構えるブラック・ビート。

「くっ!!」

すると、今まで横で待機していたジースタッグとレッドルが動き出し、ブラック・ビートに殴りかかる。

「お姉様の仇いいいいいつ!!」

「当麻、もうやめてえ!!」

特に、レッドルは悲痛な叫びをブラック・ビートにぶつけていた。

どうやら、レッドルの装着者はブラック・ビート…当麻の知り合いらしい。

「ふっ、知らんなあ！貴様のような輩はあ！！」

「と、当麻あ！！」

ブラック・ビートは右腕に装備されたスティングー・ビュートを使い、レッドルの喉元を押さえつけ、真上に放り投げた。この武器は、はさみ状の先端とブレード状のワイヤーから成っており、ブラック・ビートがメイン武装として使用している。

「うわあー！！」

地面に叩きつけられ、もんどり打って倒れるレッドル。

「ふん、間抜けが。」

そして、ジースタッグの拳がブラック・ビートに時間差で迫るが、左手で受け止めると軽々と持ち上げ、興味なさげに横へ放り投げた。

ガッシャーン！！

「…ふん。」

「…つうう。」

ジースタッグに一瞥し、再び向き直るブラック・ビート。とここで、2つの爆風がブラック・ビートの右横で起こった。見ると仲間のグロンギ2体がクウガAマイティとTキバ・ガルルによって倒されていた。

「くっ、…ゴボセ！ジヨギ、ゴラグダチロボギ！！（おのれ！よし、お前達も来い！！）」

ブラック・ビートが叫ぶと、後方から10人のグロンギが追加で現れた。しかも、ゴ種の精鋭ばかりを集めた親衛隊だ。

「しまった！増援か！！」

「後ろからも？！まずいよお！！」

完全に不意をつかれた形のブレイドとジョーカーは、後方のグロンギに対応すべくUターンして走り出した。

戦闘開始から12分。

その間に、ジョーカーがマキシмум・ドライブでグロンギ1体を仕留め、ブレイドはスペードの飛行力とハートの鋭角な切れ味を合わせ持つダブル・ジョーカーのライトニング・スラッシュでグロンギ2体を討ち倒している。

が、状況は相変わらずグロンギ側が有利である事に変わりはない。こちらにも更に数体倒してはいるものの、なかなか数が減っていきなからだ。

「あーもう、面倒だからまとめて倒すよ！」

ついにテキバは奥の手…FFRを使うことにした。

「いくよ、パティちゃん！」

『オーケーデース、コナタ！』

「『ファイナル・フォーム・ライド キ・キ・キ・キバ!』」

すると、Tキバが変形し巨大な弓矢に変わった。  
これぞ名付けてキバ・アロー。

そのキバ・アローはジョーカー…ではなく何故かブレイドに託された。

「えええええっ!? な、何で私?!」

「目の前を見て、ゴ種の中に水棲種がいるよ!」

「…水棲種?」

ブレイドが目を凝らして遠くを見ると、確かに水棲種が数種類いる。そう、Tキバは雷属性のブレイドで一気に倒そう、と考えていた様だ。

「わかった、んじゃやってみるぜ。」

『サンダー!』

ブレイドはブレイラウザーにサンダーをラウズし、キバ・アローに蓄電する。

そして、横にいたジョーカーもガイアメモリを手にし、ガイアウイーパーを押す。

『ルナ!』

彼女が持つルナのメモリーは、紅 渡からもらった新ロスト・ドライバーに付属していた物で、この他にもあと数本がベルトにストックしてある。

『ルナ！マキシマム・ドライブ！』

すぐさま横のスロットルにセットし、キバ・アローにふれた後スイッチを押し、ルナの力をキバ・アローに集中させる。

「『ファイナル・アタック・ライド キ・キ・キ・キバ！』」

こなたがFARを発動させ、ブレイドが弓を目一杯引き、一気に放つ。

するとどうだろう、全ての雷光弾があたかも蜘蛛の子が四方へ散っていくかの様に飛び出し、グロンギに全て命中、爆発四散した。

「…やるじゃない、じゃ私も負けられないわよ！」

ブルービートが、ブレイド達の戦いに触発されたのか、1枚のコインを取り出し念じ始めた。

やがて、ブルービートの周辺に強力な磁力による磁場が発生し、手にしたコインをブラック・ビートに向け、射出体制をとる。

そう、これが美琴の最強の技にしてトレードマークの『レールガン』である。

「碎け散れえええええつ！」

必殺の一撃が今ブラック・ビートに炸裂し、ガリガリと音を立ててブラック・ビートの装甲を削っていく。

と、思いきや。

ゴウツ！！

確かに当たってはいたが、途中で止められている様にも見えた。そして、磁場が消え去りコインが力なく落下していく。ブラック・ビートの装甲は、当然ながら無傷。傷1つもついていない。

「う…嘘…。幻想殺しを使っていないのに、どうして…。」

愕然として、膝をつくブルービート。

こなた達もブルービートの元に集まるが、正直な話事態を飲み込めていなかった。

「レールガンが当麻には効かない、と言うのはよくあるが…。」

「体で消し止めた…だと?!」

「こなた、これは一体…。」

「私だつてわからないよお。…これも、一種の『幻想殺し』なの?!」

「…お姉様。」

「当麻、一体どうして?…もう私の知ってる当麻じゃないの?」

こなたやかがみですら戦慄する衝撃的な力ミングアウト。

普通なら、右手を差し出すだけで能力を止める『幻想殺し』だが、

体で消し止められる時点で既に性能が大幅にレベルUPしている。  
もはや打つ手はない。

そんなAD達に更に追い討ちをかけるかのように、当麻は衝撃の  
言を口走った。

「そりゃそつさ…何せ俺は、『グロンギの長』だからな。」

こなた

「いやまさか、あの上条君がグロンギの長だったなんて信じられないよ。」

XX

「今回は、その辺のところを更に掘り下げていく予定だよ。」  
シャイアン

「ふむ…何か裏がありそうだな、彼には。」

こなた

「と言うわけで、今回の人物プロフィールは休ませていただきます。」

「

次回、「仮面ライダーアナザーディケイド ～青い瞳の破壊者～」は、

(脳内BGM:『仮面ライダークウガ』より『開幕』)

『我が名は、ダグバ…。』

「今なら使える…あの力が…!」

『もう、お前の時代は終わった!!』』

「その力を使うなら、みんなの居場所を守るために使おうよ。」

TOUR 23

「ダグバ」

上条VSかがみ、今始まる戦いの火花!!

TOUR 23 ダグバ（前書き）

XX

「前回の3つのキーワード!!」

唯

「1つ!学園都市にやって来た私達は、そこでビーファイターと敵対する上条 当麻を見つける!!」

落次郎

「2つ!上条はグロンギの同志を招き寄せ、AD達との激突が始まった!」

はやと

「3つ!全てのグロンギが倒された時、上条は自らがグロンギの長だと宣言した!」

XX

「今回の世界のテーマは『居場所』。」

こなた

「更に今回は、かがみが大変な事に...!!」

XX

「更に更に、上条の身にも異変が...!!と言っ訳で、いってみよー!!」

こなた

「ああ始まるぞますよー！ー！」

唯・落次郎・はやと

「レディ・ゴー！ー！ー！」

## TOUR 23 ダグバ

上条 当麻の、まさかのカミングアウトに全員が戦慄を覚えた。  
…ただ1人、クウガを除いて。

「グロンギの長、だと…!?!?」

「ああ、あいつならあり得る事だ。」

「しつつかし、本当かなあ。もし本当なら、その姿を見てみたいぜ。」

ブレイドの言葉に触発されたのが、ブラック・ビートは一時変身を解除し当麻の姿に戻った。

「…ならば見せてやろう。俺の本気を!?!」

すると、当麻の体から黒い障気が立ち上り、その体を包んでいった。まるで闇の竜巻の様な光景に、全員が石の様に動きを止める。

「…、これが…。」

「そう、当麻の正体だ。」

「一体、何が起こってるの?!当麻の身に…!!」

トライオーが冷や汗を流し、ブルービートがうるたえる中、ADだけは冷静に成り行きを見守っていた。

数十秒後、黒い竜巻が止み何かか姿を現す。

それは、例えるなら白いクウガ。

体からほとばしる、独特の高貴なオーラが場を威圧する。

『我が名は、ダグバ…。』

そう、『クウガの世界』におけるグロンギ族最強の者にして…神。正に史上最悪にして最凶。

それらの言葉が全て当てはまる者、ン・ダグバ・ゼバ。それが当麻の正体なのである。

が、その時であった。

ついさつきまで黙っていたクウガが、ずいとなりに出てきたのである。それについては、シャイアン以下他のライダーも、無理はないと受け止めていた。

「あんたがダグバだったなんて、意外だったわね。」

『意外、か…確かにそうかもな。』

「なら、『あの力』を使っても、文句は言わないでね。」

『ほう、面白い…ならば、見せてもらおうか。その力とやらを！』  
「今なら使える…あの力が…！」

だが、トライオーは嫌な予感がしたのか、クウガを止めに入った。

「かがみ、止めてよ！その力を使ったら、後に戻れなくなるよ…！」

「…でも、目の前にダグバがいるのよ！アメイジングでは、絶対無理よ…！」

そして、クウガが拳を構え念じ始める。

クウガの体からダグバの時と同じ黒い竜巻が発生し、数十秒で竜巻が消え去った。

そこにいたのは…。

「待たせたわね。これが、私の力よ!!」

アメイジングよりも漆黒に近い闇を纏い、禍々しいエッジを体の各所に配した、究極の闇の顕現。

クウガ・アルティメット・フォーム。

が、完全に闇に飲まれている訳でもなく、赤い複眼はそのまま残っている。

「やはりかがみも究極の闇を受け入れていたんだね…。」

「これが、闇…。」

「お、お姉様…怖い!」

「当麻、もう止めて…お願いだから…!」

初めて見る闇の力に、ブルービートは立ち尽くすしかなかった。

いや、ジースタッグやレッドも、クウガから発する闇のオーラにただ震えるしかなく、装甲の内側では冷や汗が止まらなかった。

『では、いくぞ。』

「かかって来なさい!!」

今、究極の殴り合いが始まった。

ダグバの右ストレートがクウガの左をかすめ、クウガの左フックがダグバの顔面を捉え、命中する。

『これが、お前の言う力か…まだ温いな!!』

「何っ!!」

今度はダグバの右ニーキックがクウガの鳩尾に命中し、更に右フックが顔面に命中、間髪入れず左フックも顔面に命中する。

(くっ、倍返しだ!!)

クウガも、一度踏ん張り自然発火による炎を右拳に宿し、ストレートを放つ。

が、それもダグバの全身から放たれた『幻想殺し』により威力が殺され、ただのストレートという形で喉元に命中する。

『まだ温いな…温すぎてあくびが出るぜ!』

「えっ…。」

効かない…究極の闇の力が…?

そこからは、あっという間だった。

ダグバのパンチが雨霰と降ってきて、必要以上のダメージを喰らい、

派手に吹き飛ばされた。

そしてボロ雑巾の様に落下し、地面に叩きつけられたところで変身が解除された。

「かつ…かがみいいいいいっ!!」

「かがみさん!!」

「柊いいいっ!!」

「…かがみ!!」

A D達が倒れたかがみを介抱し、ブルービートも慌ててサポートに入る。

『ふっ。究極の闇だか何だか知らないが、俺と張り合うなら力をつける事だな。』

「くっつ…。」

ダグバはA D以下を蔑む様に言うと、その場から立ち去り、後はただ涼しい風が皆の頬を撫でていた。

結局、騒ぎを聞きつけた警備員達アンチスキルに助けられ、皆は中央研究所に一時退却した。

研究所でシャイアン達は、ブルービート…御坂 美琴に自己紹介を兼ねて事情を説明し、何とか和解した。

「大体の事情はわかったわ。…しかし、当麻の正体がグロンギの長

だったのは、正直意外だった。」

それについては、ジースタッグ…白井 黒子も同感であった。

「お姉様ですら歯が立たなかった当麻が、グロンギの長となると…もう絶望的ですよ。」

「うなだれるのは早いよ、黒子ちゃん。まだ勝負はこれからだし…。」

「

こなたも黒子を励ますが、かえって落ち込むばかりである。

レッドル…インデックスもまた、当麻がない事に加え極度に腹を空かしていたのか、シャイアンが作った大盛チャーハンをやけ食いしていた。

「当麻あ…寂しいよお…。」（モグモグ）

「寂しいのはわかるが、食べるのか話すのか、どちらかにしてくれ。」

「

…うん。（モグモグ）

インデックスは再び食べる方に集中し、数分後には食べ切ってしまった。

インデックス、恐るべし…。」

一方、研究所の外では唯がギターを手に1曲弾いていた。

おそらく、オリジナル唯の真似か、それとも元々センスがあったのか。

それはともかく、流れてくる曲をバックに、かがみは1人月を眺めていた。

今日の月は美しい位の満月で、雲一つかかっていない。

月光の下、かがみは思う。アルティメットで勝てなければ、一体どうしたらいい?…と。

今まで散々苦労してきた会得したアメイジングも、今ならこれで勝てる!と必殺の念で進化したアルティメットも、この世界のダグバには歯が立たない。

いつの間にか、かがみの頬に涙が光っていた。

だが、ダグバの方にも異変はあった。

ダグバ…上条は、自らの根城として使っている、廃墟と化した礼拝堂に戻っていた。

『残った仲間は俺を含めて数十人…安住の地を急いで探さなくては。』

そもそも、この世界のグロンギは絶対数が数百人と圧倒的に少なく、そのため動物や植物の能力を自らの中に取り込み、生き長らえてきた。

しかし、科学の発達により住む場所を追われ、流れ流れてこの地…学園都市に居を構えたのだ。

元々争う事を嫌ってきたこの世界のグロンギは、それこそリント…つまり人間との共生を望んでいたのだが、彼らは共生する事を拒み続け、遂には彼らを追放するためにインセクト・アーマーなる重装

甲の兵器をも導入し、対抗してきたのだ。  
止むなく、グロンギの長であったダグバは上条 当麻を名乗り学園都市に潜入、リントとの共生を夢見て『幻想殺し』を会得、和平を模索してきた。

しかし、彼の知り合い…御坂 美琴・白井 黒子・インデックスがインセクト・アーマーの装着者には選ばれると、彼は態度を変え、グロンギの長として美琴達の前に現れたのだ。  
その幻想…インセクト・アーマーを破壊するために。

『ダグバ、幻想は破壊出来たか？』

突然声をかけられ、振り向くと1人のグロンギが数名の見慣れない異形を連れて現れた。

その者は、狼の姿をし、血のような赤に彩られたン種の補佐官…ガミオ・ゼダである。

『ガミオか、一体どこへ行ってたんだ？探してたぞ。』

『そんな事はいい。リントの装備は破壊出来たか？』

『あと一歩で破壊出来たのだが、邪魔が入ってしまった。』

『そうか…。』

すると、ガミオが片腕をあげ、異形に何かを指示した。  
異形は左右に展開し、挟み撃ちでダグバに殴りかかる。

『!?!?これは何の真似だ!?!』

ダグバも異形にパンチで反撃するが、ガミオの放つ障気に邪魔され、地に伏してしまった。

『もう、お前の時代は終わった!?!』

『終わった？どういう意味だ？！』

ガミオは、ダグバの首元を鷲掴みにすると、軽々と持ち上げ地面に叩きつけた。

『ダグバよ、これからはお前達グロンギではなくアンデッドの時代だ！…俺はアンデッド達から不死の力を分けてもらった。』

『何っ！！』

『そう、これからは俺がアンデッドの長として君臨するのだあ！！』  
何という皮肉だろうか。

ガミオは密かに『オリジン・ブレイドの世界』から来たアンデッドと手を組み、この世界のグロンギ・リントを滅ぼそうとしているのだ。

しかも、ガミオがアンデッドの長になると言う条件付きで。  
現に、ガミオのバックルはグロンギの物からアンデッドの物に変わっており、不死の力を不動の物にしているのだ。

『さあ、新しい長から古き長に命令だ。もう一度リントの装備を破壊し、世界の破壊者も倒すのだあ！！』

「みさきち、かがみは？」

「柵なら、そこにいるぜ。」

その一方で、こなたはみさおにかがみのいる場所を教えてもらい、励ましに来ていた。

「あ、こなた…。」

「かがみ、みんな心配してたよ。早く研究所に…。」

だが、かがみの心の傷は想像以上に深く、ただこなたの顔を見てうつむくばかりであった。

「まだ気にしてるの？さっきの事。」

「……。」

かがみは、無言で頷いた後、こなたに思いの丈をぶつけた。それこそ、ただをこねる子供の様に。

「こなた…私、どうしたらいいのか、わからないの！」

「かがみ…。」

「いくら修行を積んでも、いくら強化しても、結果がダメじゃ何もならない…どうしようもないのよ!…!」

かがみは、こなたに抱きついたまま涙を流す。

プライドが高く、いつもツツコミに徹する、あのががみが泣きついているのだ。

今回の戦いで見せつけられた、相手との力の差。

究極の闇を味方につけても勝てなかった事実。

それらを突きつけられたかがみは、正直プレッシャーに押し潰されていた。

しかし、こなたは優しくかがみに話しかける。  
あたかも、泣き止まない子供をあやすかの様に。

「かがみ、まずは涙を拭いて。…落ち着こうよ。」  
「…うん。」

かがみは、こなたからハンカチを借りて涙を拭き、顔をゆっくりと上げた。

「かがみは何のために、究極の闇を使おうと考えていたの？」  
「…みんなの笑顔を守るため。それしか考えてないわ。」

しかし、こなたは先程の戦いを見て何かを感じたらしい。

「けど、かがみの戦い方を見ると、何となく自分のプライドのために戦っている様にしか見えないんだよ。」

「え…？プライドのため？」  
「うん。確かにアルティメットフォームは最強の力を持っているよ。でもね、ただ自分のために戦うのなら、グロンギと全く変わらな  
いよ。」  
「……………」

こなたの言葉に、かがみは声を詰まらせる。

「その力を使うなら、みんなの居場所を守るために使おうよ。」  
「居場所を守る…？」

「うん。かがみは、つかさの笑顔を見た事はある？」

「そりゃあ双子だもの、当たり前よ。」

「なら、答えはもう出たね。」

ここで、かがみは気づいた。こなたが言った、居場所を守る、という意味を。

人々の笑顔を守る事は、つまりそれを絶やさぬ場所を守るのと同じである、と。

「こなた、ようやくわかったわ。究極の闇をどう使えばいいのかが！！」

こなたは力強く頷き、そつと右手を差し伸べる。

かがみは、こなたの右手をぎゅっと握りしめ、意志の強さを伝える。

「究極の闇を生かすも殺すも、かがみの意志次第だよ。それを忘れないで。」

「うん、ありがとう！！」

と、そこへ美琴が涙を拭いながらこなた達の元にやって来た。どうやら、さっきの会話を聞いていた様だ。

「こなたさん、話は聞きました。私も、力及ばずながら協力します！」

「ありがとう、美琴ちゃん。…上条君が戻れる場所を、みんなの笑顔が集まる場所を、私達で守ろう！！」

「「おー！！」」

こなた達3人は、固い握手でお互いを確かめ合い、夜は更けていった。

翌日、研究所に1通のメールが届いていた。

それは、ダグバ：上条からの果たし状であった。

「あいつは何と言ってきた!?」

いち早くシャイアンが、朝から居合わせていた花のカチューシャを頭に抱くセーラー服の少女：初春 飾利に問いていた。

「あ、はい。『黒い者と美琴よ、朝10時に学園都市の外れにある礼拝堂にて待つ。今度こそ息の根を止めてやる。ダグバ』：これが、ダグバから送られてきたメールの全文です。」

「そうか：あいつも、いよいよ本気で学園都市を取る気だな!!」

決戦の時、来る…!!

TOUR 23 ダグバ（後書き）

こなた

「今回は、『とある魔術の禁書目録』サイドのキャラを簡単に紹介するよ。」

・御坂 美琴

ビーファイター・ブルービートの装着者。

後は原作通りの、レベル5・レールガンの使い手。

・白井 黒子

ビーファイター・ジースタツグの装着者。

後は原作通りの、ジャッジメント風紀委員にして、美琴のストーカー（笑）。

・インデックス

ビーファイター・レッドルの装着者。

後は原作通りの、当麻のパートナーにして大食いクイーン（笑）。

・上条 当麻

ブラック・ビートの装着者であるが、その正体はグロンギの長、ン・ダグバ・ゼバ。

こなた

「今、上条君は大変な目に遭っているけど、大丈夫かな…？」

次回、「仮面ライダーアナザーディケイド（青い瞳の破壊者）」は、

ガラハド

「次回から、息子以外のみんながアナザーワールドで戦う話に突入するぞ!!」

シャッフル

「当然俺もフル活躍!!」

ガラハド

「ひよつとしたら、私もライダーとして戦つかも？」

シャッフル

「更に、ゲストも参戦!!話を盛り上げる!!」

ガラハド

「そして、その記念すべき第1話は、『ミラージユの世界』だ!!」

シャイアン

「カミング・スーン!!」

NOTE 4 ミラージュと量産型と新たなる力(前書き)

シャッフル

「さて、今回からシャイアン以外の皆の戦いを見ていく訳だが、その第1弾がミラージュの世界にいる仮面ライダーカブト・みなみちやん。」

ガラハド

「そして、今回から彼女には新アイテムが追加されるぞ！」

シャッフル

「けどなおやつさん、まさかアレまで渡して、大丈夫なん？」

ガラハド

「大丈夫、大丈夫。改良はしてあるから。∴それと、万一を考えてあの世界の装備も持ってきた、万全だ。」

(アレについてはスピノフ参照)

シャッフル

「今回、俺の出番はないが、みなみちゃんは大活躍だ!!！」

ガラハド

「それではいつてみよー!!！」

#### NOTE 4 ミラージユと量産型と新たなる力

かつて、闇將軍シュバルツと壮絶な戦いを繰り広げた、第2の世界のライダー、ミラージユ。

が、今は別の脅威に直面したのである。

銀の壁から湧いて来る新たな存在、それはワーム。

魔族の脅威から解放されたと思われた矢先に、いきなり現れた更なる脅威。

ミラージユ・シャンゼリオンは、この脅威に立ち向かっていったものの圧倒的な物量に加え、キャスト・オフと言う能力に手こずっていたからだ。

ご存じの通り、ワームはキャスト・オフする事で新しい体になる上、クロック・アップによる加速攻撃も可能。

ミラージユにはクイック・フォームがあるため、ある程度は対処できたが数の暴力となれば話は別である。

しかも、シャンゼリオンはクリスタルボディのため防御は高いが、クロック・アップを連続で使われれば、少ないダメージが積み重なり疲労感が大幅にアップする。

この事態に、仮面ライダーカブトこと岩崎 みなみが来るのは当然の流れであった。

「クロック・アップ。」 『クロック・アップ!』

「ライダー・エンハンス。…そこっ！」

『ライダー・エンハンス!!』

「宮子ちゃん、みなみちゃんってすごいね。」

「ああ、全くだ。」

クロック・アップを使いこなし、ライダー・エンハンスでワームの群れを叩き斬る。

まるで流れ作業が如く素早い行動に、ゆのはもちろん宮子も啞然としていたのだ。

そんな戦いが5日も続いたが、6日目の午前中に事件は起こった。

この日も、ゆの・宮子・みなみの3人は急増したワーム数十体を瞬く間に打ち倒していた。

「これでラストです、知也！」

『ああ、任せろ!』

『ギイイイイイ!!』

最後の1体をミラーージュが片づけた、その時であった。

ブウ…ン。

3人の頭上を何かがよぎった。

それは、体が白く細い姿をし、巨大な羽根を伸ばしたトンボの様な

怪物であった。

その怪物は、カブト達を見つけるやいなや角度を変え、急降下してきた。どうやら、皆を獲物と見なしたらしい。

「体が重くて、よけ切れない！」

『まずいな、さっきの攻撃で力を使ってしまった。急には無理だ！』

とそこへ、シャンゼリオン…宮子が助走をつけてジャンプし、怪物に組み付き地面に引き倒した。

「…うまい！」

カブトが誉める中、シャンゼリオンは間髪入れず、パンチを繰り出し怪物をねじ伏せていくが、いかせん怪物の方が腕力が高いらしく、すぐにはね飛ばしてしまった。

「しまった！！」

だが、そのわずかな時間を無駄にせず、カブトが既にライダー・エンハンスの体制に入る。

「ライダー・エンハンス！」

『ライダー・エンハンス！！』

クナイガン・アックスモードが真紅に輝き、怪物の胸板を斬りつける。

『ギイイイイイ！！』

怪物は悲鳴を上げながら爆発、消滅した。

「…ふう。」

「それにしても、今の怪物は一体何だろうね、知也。」

『ふむ。我らの世界には、ああいった昆虫系の怪物はいないはずだがな。』

「じゃあ、あの怪物は一体どこの世界の奴なんだ？」

3人は変身を解き、取りあえずひだまり荘に引き返す事にした。その道中、みなみが何やら思い出しそうな素振りを見せつつ…。

「レイドラグーン？」

宮子が食い入るように、みなみの顔を見る。

今は午前11時35分、3人はゆのの部屋にあがり、クッキーと紅茶で一服していた。

「…はい、仮面ライダー龍騎の世界の怪物です。しかし、何処がおかしいですね。」

「『おかしいとは、一体？』」

今度は、ゆのの体を借りた知也が質問する。

「通常は、鏡の中の世界…ミラーワールドと呼ばれる所に集団で潜伏しているのですが、単体で現れるのは極めて希です。」

「…なるほどね。」

宮古は、納得するとクッキーを1つほおばり尚もみなみに食いつく。

「で、対処法はあるの？」

「まず、飛行できるライダーを揃える必要があります。…後、ミラージュの跳力はどの位か、わかりますか？」

「『うーん、測った事は無いから大体だが、25mは余裕かな？』」  
「…少々厳しいですが、何とかギリギリまでは大丈夫ですね。」

この世界に空を飛ぶライダーがいない事を知ったみなみは、然るべきレイドラグーンとの乱戦にどう対処すべきかをゆの達と話し合い、またワームとの戦闘を見据え、シャンゼリオンの装甲の高さを生かしたバックアップ策を2人に提案した。

「まあ確かにシャンゼリオンの硬さなら問題はないけど、ただクロック・アップが使われたら持つかどうか…。」

「そっこだよね…。」

沈黙が訪れたゆのの部屋。

ただ、湯を沸かすポットの音だけが室内にこだまする。  
が、しかし。

ドスツッ！！

沈黙を破る音が庭から聞こえた。

「……!?」「」

3人が庭をみると、40代の男が頭から落ちて地面にめり込んでいた。

「むーっ、むーっ!!」

「わあああああ!!な、何あれええええ!!」

が、みなみだけは冷静に2人に話しかける。

そう、彼女がよく知っている『あの男』だからだ。

「あ、ありがとう、みなみちゃん。」

「…それにしても、何故空から?」

「私が銀の壁を通ると、大抵ろくでもない所にたどり着くんだ。全く、体中が痛くてしょうがないよ。」

そう、先程落下してきたのはガラハドだったのだ。

しかも、何やら意味深なアタツシユケースと共に…。

結局、知也の力と宮子のバカ力で大根を引っこ抜く様に助け出され、事なきを得たが。

「で、こちらの方が?」

「はい、シャイアンさんのお父さんです。」

「ども。」

「ええええええ!あのシャイアンさんのオオオオオ!!」

「おーい、そんな大音響で怒鳴らないで!」

ようやく事態が落ち着いたところで、ゆのはガラハドに質問した。

「あ、ところでそこにあるアタツシユケースは何ですか?」

「…これか?これこそ、今回出来上がった新アイテム、ロスト・ドライバー改とグランザムの世界から取り寄せた量産型ウイングルだ!」

ガラハドがアタツシユケースを開けると、そこには真新しいロスト・ドライバーと数本のメモリ、そして深緑色のプレスレットが入っていた。

これこそ、ミラージユの世界に新しくもたらされた力、更にはみなみにも与えられた新たななる可能性。

「…これでようやく、まともに戦えますね。」

「もちろんさ！」

ガラハドも、サムズアップでみなみの質問に答える。

明けて翌日。

この日、ゆの達3人は昨日手に入れたアイテムを手に、ワーム撃退に向かっていた。

ゆのは愛する知也と共に、宮子はシャンバイザーを額にセットしていつでも変身出来る様にしてある。

みなみは、カプトゼクターを装着して変身済みである。

現場にはワームの大群が数十体暴れており、一般人の乗ったバスが巻き込まれていた。

「…まずい、バスが！」

「『大変だ、急がなくては!!』』」

「いくよ、ゆのっち！知也さん！みなみっち！」

3人は各々変身し、ワームを迎え撃つべく走り出す。

カプトはクナイガンをアックスモードに切り替え、シャンゼリオンはシャイニング・セイバーを手にワームを叩き斬る。

ミラージユとは言えば、アサルト・フォームにフォームチェンジして両腕にある黄金の三枚刃を展開、その重量を以てワームを斬り潰していった。

バスを救出した数分後、遂に1体のワームがキャスト・オフした。

「…来た!」

いかついさみに重量感のある装甲、更に色とりどりの配色。

クワガタの名を冠したワームの名は、ギラファワーム。

彼は、すぐさまクロック・アップを使用し、シャンゼリオンの装甲を斬り裂いた。

「うわっ!」

『宮子!』

ミラージユはクイック・フォームに変更しギラファ・ワームに肉薄するが、装甲の硬さに手こずり中々攻め込めない。

しかも最悪な事に、これを合図にミラー・ワールドからレイ・ドラグーンの群れまで現れたのだ。数にして50程ではあるが、真上を飛び回られては邪魔な事この上ない。

「…ゆの先輩、ここは私に任せて、博士のアイテムでレイドラグーンを!」

「みなみっち…わかった、無理はしないで。」

「うん。知也さん、手筈通りに!」

『よし、わかった。後を任せた!みなみ!』

ギラファ・ワームをカプトに任せ、ゆのと宮子は一旦変身を解除し

新たに博士から託されたアイテムを装備した。  
実は、みなみは空が飛べない2人にロストドライバー改とプレスレ  
ットを使ってみるよう頼んでいたのだ。  
ガラハドにしてみれば、テストの対象が2人に増えればデータの確  
保も倍になると喜んで承諾した。

ゆのはロスト・ドライバーを腰に装備し、赤いメモリーを手にする。  
宮子は、プレスレットを左腕に装備しスイッチを押す。

『タジャドル!』

「変身!!! (チェイニング!!!)」

『タジャドル!!!』

2人の変身は完了した。ゆのは、赤い鷹の意匠を持つ頭部に孔雀が  
ごとき胸部、コンドルの様な屈強の脚部を持つオーズ・タジャドル  
コンボに、宮子は黒いスーツに青い装甲、両腕に備わるクローに真  
白き翼を持つ、ウインガルVer.3に姿を変えた。

「...すごい。私も、負けられない。」

すると、カブトは左手をすうっと高く上げ、何かを呼び出した。

「来て、新たな希望!」

時空を超えて飛来したそれは、白く輝く六角形の石に翼が生えた姿  
...そう、グランザムの世界にある石碑そっくりのパーツであった。  
カブトが、そのパーツを左腰につけ軽く叩く。

「ライジング・キャストオフ！」

『ライジング・キャストオフ!!』』

するとどうだろう。カブトの銀色の装甲が金色に輝き、黒いスーツも白に変わっていく。

更に、両肩にガタック・マスクドフォームのバルカンと同型の武器が装着され、両腕には小型のエッジも装着されている。

これぞ、みなみカブトの最強形態・ライジングカブトである。

『チェンジ・ライジング・カブト!!』』

ライジング・カブト（以下Rカブト）は、目前にいるギラファワームに目を向け、一気に駆けだした。

一方、ゆのタジャドルと宮子ウィンガルVer.3は、順調にレイドラグーンを撃ち落としていた。

特にゆのタジャドルの活躍は凄まじく、大量に現れたレイドラグーンの群れも左腕に装備されたタジャスピナーにより火だるまと化し、次々と撃ち落とされていく。

「体が…軽い…。」

『確かに、軽いな。』

タジャドルの軽さと攻撃力の高さに、ゆのと知也は感心しきりであった。

何より、空中戦は初めての2人にとって空を舞うのは何とも心地良かったのか、一種の快感に酔い知れているようにも思える。

一方、宮子ウィンガルVer.3（以下宮子ウィンガル）は対空機関砲「フェザーランチャー」でレイドラグーンを片っ端から撃ち落としていた。

今、宮子が装着しているウィンガルは、平沢刑事が使用したプロトタイプや桜ヶ丘高軽音部が使用した量産試作型とは違い、ハード面の再設計をした事で大幅に火力やジェネレーター出力が向上し、遠距離兵器の使用が可能になったのである。

また、量産試作型ではオプション扱いだった飛行ユニットやフェザークローも正式武装として採用、量産型に反映されている。

そんな強力な力を得た宮子は、レイドラグーンをフェザーランチャーの火力にものを言わせ、バンバン撃墜していく。

「イイイイヤアアツホウウウウー!!」

『『『ギイイイイイー!!』』』

フェザーランチャーを十二分にブン回しての一斉射撃は、新たにミラーワールドから現れたレイドラグーン数十匹を根こそぎ撃ち落とし、瞬く間に殲滅した。

「宮ちゃん、すごいー!!」

『敵に回さなくて良かった…。』

ウィンガルの予想外の活躍に、ゆのも知也もただ感動していた。

さて、RカブトVSギラファ・ワームの激突もクライマックスに突入、戦いは更に激化していく。

ギラファ・ワームのクロック・アップにRカブトも全神経を集中し

で見極め、すかさずバルカンで攻撃する。

足止めを食らい更にクロック・アップを使うも、今度は停止位置を探し当てクナイガン・アックスで斬り払う。

胸板を斬り裂かれ、崩れ落ちるギラファ・ワーム。

『ギイ！！』

「さあ覚悟を決めて……」

Rカブトは、一度カブトゼクターをキャスト・オフ前に戻し、上の3つのスイッチをリズミカルに押す。

『ライジング・ライダー・パワー！！ 1…2…3…』

そして、カブトゼクターをキャスト・オフ状態に戻し、力を解放する。

「ライダー・イレイザー！」

『ライダー・イレイザー！！』

Rカブトの足元に磁場が発生し、両腕に電磁エネルギーが集中する。そして、バルカン部が切り離され体が軽くなり、エッジから新たに刃が伸びる。

電磁エネルギーが十分に極まり、エッジからも余剰エネルギーが噴出し体制を整える。

その瞬間、Rカブトの姿が消え去り電磁の影がギラファ・ワームを斬り裂く。

『ギヤアアアアア！！』

ゴッ！！ドゥウウウウ…ン！！

ギラファ・ワームは、真つ二つに切断され爆発四散した。

戦闘が終了し、2人は地上に降りてくる。

「何だか、本当に鳥になった気分だったよ、みなみちゃん。」

『ふむ。…確かに制空能力は凄まじく高いな。』

「それよりも、このフェザー・ランチャーさえあればワームなんて怖くないよ！」

それぞれの率直な意見を述べ、喜ぶ2人。

(…先輩2人の戦いは、見事でした。)

みなみも、ガラハドから受け取ったアイテムが役に立った事に、心の底から喜んでいた。

「いや、ここまで喜んでもらえるとは研究者冥利に尽きるよ。」

「…ええ、ガラハドさんの研究成果はすごいです。」

みなみの報告に、ガラハドは満面の笑みを浮かべていた。

それもそうであろう、異世界の住人にも評判がよかったのだから。

「…ところで、ライジング・ゼクターも試して見たのですが、調子はすこぶるよかったです。」

「そうか、あれも試したのか。不備もなくスムーズに強化出来て、めでたしめでたし、だな。」

ガラハドは、データをパソコンに入力しながら満面の笑みをみなみに見せていた。  
もちろん、みなみも滅多に見せない柔らかかな笑みをガラハドに見せていた。

明けて翌日。ガラハドが帰った後も、3人は新たな敵を求めてバイクを走らせる。

それがいかなる強敵であろうとも、彼女達には迷いはない。  
何故なら、3人の手には未来を斬り開く力があるから。

NOTE 4 ミラージュと量産型と新たなる力（後書き）

ガラハド

「いや、予想外の能力だったなあ、ライジング・カブト。」  
シャツフル

「あれだけの力だとハイパー・ゼクターは必要ないんじゃないか？」  
ガラハド

「かもな。…しかし油断は禁物だ、それ以上の力を持つ敵が相手だと苦戦は免れまい。」

シャツフル

「でも、大丈夫だとは思うよ、みなみちゃんの事だし。」

ガラハド

「それもそうだな。」

シャツフル

「それと残った2つだけど、宮子の奴やりすぎてね？」

ガラハド

「…正直あれはやりすぎだ。壊れすぎてる。ゆの&知也を見習ってほしかったな。」

シャツフル

「ま、ゆの&知也のコンビネーションも好調だし、滑り出しは順調じゃないツスか？」

ガラハド

「ああ。後は、あの面々がうまく使いこなしてくれれば万々歳だ。」

シャツフル

「さて次回はどこの世界か？」

ガラハド

「乞うご期待!！」

次回、「仮面ライダーアナザーディケイド（青い瞳の破壊者）」は、

（脳内BGM：『仮面ライダークウガ』より『開幕』）

「まずは、先手必勝！！」

「あれは…アンデッド、か？」

「あなたの居場所は、すでにあるじゃない！」

『ダグバの処刑を実行する。』

TOUR 24

「シャイニング・アルティメット」

かがみ、光の進化を遂げる…！！



TOUR 24 シャイニング・アルティメット（前書き）

XX

「前回の3つのキーワード!!」

こなた

「1つ!遂に当麻ガン・ダグバ・ゼバに覚醒、かがみはクウガ・アルティメット・フォームで迎え撃つ!!」

唯

「2つ!しかし、クウガ・アルティメット・フォームはダグバの圧倒的な力の前に敗れてしまった!!」

シャイアン

「3つ!その夜、かがみはこなたに相談した事で、今まで抱えていた思いを全て振り切った!!」

XX

「さて、今回は遂にかがみクウガが最終進化を遂げる!!」

こなた

「更に謎のアンデッドまで登場、何故かどこかで見ただ様な姿で現れる!!」

シャイアン

「さて、ゆくとしよつ。」

XX

「さあ始まるぞますよー!!」

こなた・唯・シャイアン

「レディ・ゴー!!」

こなた

「って、私のセリフ取られたー!! (泣)

TOUR 24 シャイニング・アルティメット

午前5時45分。

かがみと美琴は、シャイアン達に見送られながら研究所を後にした。

「こなた、シャイアンさん、後をお願いね。」

「任せてよ、かがみ。2人の戦いの邪魔はさせないから。」

「心配は無用だ。あいつに自分の全力をぶつければ、自ずと答えは出てくるはず。気を抜くな。」

「インデックス、黒子、私達が必ず当麻の目を覚まさせるから、そちらも頑張つてね。」

「約束だよ、短髪。」

「お姉様、任せて下さいですの。」

ちなみに、短髪とはインデックスが美琴を呼ぶ時のニックネームなのだか、それはともかく。

かがみは美琴をトライチェイサー2000に乗せ、朝もやの街中を駆け抜けていく。

当麻の面影を辿る様に。

午前6時15分、学園都市外れの礼拝堂前。

そこに、当麻は1人待っていた。

彼はすでにブラック・ビートに変身済みであり、スティンガービュートを撫でて獲物を待つ。

『あいつらの事だ、ここをかぎつけてくるのは時間の問題だな。』

それから数分後、かがみと美琴が予想通り礼拝堂に現れた。

「いたわ、しかも当麻1人だけ。護衛のグロンギは連れていない様  
ね。」

「一体何のつもりかは知らないけど、こちらにとっては好都合よ。」  
ブラック・ビートも遠くで2人の到着を確認し、自らががみ達の方  
へ歩み寄っていく。

『…ようやくのお出ましか。待ちかねたぞ。』

「ふん、そちらこそ2対1のハンデで音をあげないでね。」  
すると。

「いくよ、先手必勝!!」

かがみはトライチエイサー2000から降り、腰にアマダムを出現  
させると、走りながら変身しそのままブラック・ビートに組みつい  
た。

しかも、最初からアルティメットで。

『くっ、いきなり黒の力か!』

「ごめんね、いの一番が美琴ちゃんじゃなくて!」

クウガUFは、多少手加減しながらも左フックからの右フックで牽  
制し、攻撃をいなす。

そして、ミドルキックをブラック・ビートの鳩尾に決め、更に引き  
離す。

「ちいつ！やるな！！」

「今よ、美琴ちゃん！」

「うん！…重甲！！」

クウガUFの声に、美琴もブルービートに重甲し加勢する。

「美琴か、変身してるところを見るとモヤモヤは吹っ切れた様だな  
！！」

「当たり前でしょ、いつまでもクヨクヨしてはられないわよ！！」  
「…そうだな。」

マスクの下でニヤリと笑みを浮かべたブラック・ビートは、ステインガービートを展開しクウガUFに投擲、首に絡ませ真上に放り投げる。

が、しかし。

クウガUFは壁の反動を利用して三角蹴りをブラック・ビートの喉元に決め、装甲に大きな傷をつける。

「しまった！…油断したか！！」

「そう何度も同じ手は喰わないわよ！なめないで！！」

その隙を逃さず、ブルービートは研究所にいる初春に連絡をする。

「初春さん、ステインガーブレードを転送して！大至急！」

「はい、わかりました！」

研究所にいる初春は、ノートパソコンのキーを高速で叩き転送装置を起動、ステインガーブレードを転送する。

連絡を入れてから数十秒後、ステインガーブレードはブルービート



「あつ、あれ!!」

「見つけましたの!!…シャイアンさん、遠方100mの地点に敵を見つけましたの!!」

インデックスと共に見つけた黒子は、インカムでシャイアンに連絡を入れ、連絡を受けたシャイアンは黒子に「距離をとって追跡してくれ」と指示を出した。

シャイアンもまた、クロノ・ドライバーを装備して追跡を開始する。

それから数分後、3人はようやく影に追いついたが、3人はその正体に啞然としていた。

何故なら、その姿はあまりにもアンバランスすぎて、何かのギャグかと思うくらいの滑稽な姿だからだ。

それは、頭部が『ブレイドの世界』の怪物・アンデッドの1体、イグルアンデッドの物であり、胸部がピーコックアンデッド、脚部が：おそらくオリジナルであろうコンドルアンデッドと、ほとんど寄せ集めに近い怪物である。

「…これ、何ですか?」

「ぶかつこ〜う。」

「ま、…何と言つべきか。とにかく、いくぞ!!」

シャイアンは、改めてライド・クロニクルからカードを取り出しセツトイン、ADに変身した後アンデッド…タジャドルアンデッドに殴りかかった。

「こつしてはいただけませんの!!…重甲!!」

「あー、待つてよ!!…重甲!!」

2人もジースタッグとレッドルに重甲し、タジャドルアンデッドに殴りかかる。

しかし、タジャドルアンデッドも黙ってはいない。

背部から羽根状のオーラを発動し2人に放つが、ライド・クロニクル・ガンモードを構えたADの砲撃により全て撃ち落とされる。

その隙にジースタッグはテレポーションを用い背後に回った後、インプットマグナムを取り出し横にあるテンキーを入力、レーザーモードに切り替え砲撃する。

ちなみに、このインプットマグナムはテンキーの入力コードにより、レーザーはもちろん、火炎放射・冷凍ビーム・果ては熱湯（！！）まで放てる、万能銃なのである。

『ガアアアアアア！！』

不意を突かれ、前のめりになるタジャドルアンデッド、その機を逃さずカードをセットインするAD。

『アタック・ライド シャイニング・クロー！』

ADの右腕に、水晶が如き美しく鋭い爪が付いた籠手が装備され、タジャドルアンデッドの胸板に叩き込む。

これこそ、ミラージユの世界のヒーロー・シャンゼリオンが使用する水晶の爪である。

「受けてみよっ！！」

『ガアアアアアア！！』

火花を散らし、タジャドルアンデッドが倒れ込む。

そこを狙い、ジースタッグとレッドルは初春に連絡を入れ、新たに武器を転送するよう指示を出す。

「初春、ステインガークロウを転送してですの！」

「こっちもステインガープラスマーを転送して、早く！」

『任せてください！』

初春のキーボードを叩く手がクロック・アップ並に速くなり、さまざまステインガークロウとステインガープラスマーが2人の手に渡り、ADと共に進軍する。

その頃、こなた・みさお・唯の3人も現れた敵に苦笑していた。

「…何あれ。」

「あれは…アンデッド、か？」

「どんだけー。」

3人が呆れたその姿は、頭部がギラファアンデッド、胸部がマントイスアンデッド、脚部が…やはりオリジナルのホッパーアンデッドと、まるで昆虫の寄せ集めの様な姿をしていた。

「ま…まあ、敵には違いないうだねえ。気合いを入れ直していくよ！…トライオー！！」

「オーケー、ちびすけ！…変身！！」

『ターンアップ！！』

「うん、がんばるよ！」

『ジョーカー！』

「変身！！」

『ジョーカー!!』

3人が変身し終え、目の前のアンデッド…ガタキリバアンデッドに向かつていく。

が、敵も去るもの引つかくもの。3人の攻撃をスルリとかわし、逆に爪による斬撃を受けてトライオーが胸部から火花を散らす。

「くっ、思ったよりやるねえ。」

「なら、これでどうよ!?!」

ブレイドがラウズカードを取り出し、ラウズする。

『スラツシュ!』

ブレイラウザーが白熱化し、斬れ味を増したところで必殺の一太刀をガタキリバアンデッドに叩き込む。

「喰らえっ!!」

『ギシャアアアアア!』

ガタキリバアンデッドの肩部にブレイラウザーが命中し、動きが鈍る。

更に剣の舞を見せつつ、ガタキリバアンデッドにダメージを蓄積させるブレイドだが、向こうとて黙ってやられている訳ではない。

ジャンプで上にかわし、すぐにキックを繰り出してブレイドを引き離し、更にジャンプしてジョーカーにも迫る。

「!…しまった!」

「来た!」

が、ジョーカーは落下位置を予測したのか後方に下がり、すぐさま新しいメモリーを手にした。

『ロケットー！』

そして、腰のスロットに装填する。

『ロケット！マキシмум・ドライブー！』

スイッチを押し起動させるや、白煙をあげて空中高く舞い上がり、ガタキリバアンデッド目がけパンチを繰り出す。

「ロケット・バンカー・パンチー！」

ジョーカーの右手が炎に包まれ、勢い任せに上昇し、パンチがガタキリバアンデッドの胸に炸裂した。

『ギヤアアアアアアー！！』

ガタキリバアンデッドはきりもみしながら落下し、道路に叩きつけられる。

「今だ！」

この気を逃さず、トライオーはベルトに右手をかざし、更に変身する。

「アギト・バーニングー！」

すかさずアギト・バーニングへと変身した後。

「『ファイナル・フォーム・ライド ア・ア・ア・アギト!!!』」

そのままファイナル・フォーム・ライドを決行、バーニング・トルネイダーに変形した。

『みさきち、早く乗って!!!手っ取り早く片付けるよ!』

「お、おう。」

最初は戸惑っていたブレイドだったが、意を決してバーニングトルネイダーに乗り込む。

更にジョーカーも乗り込み、高速に近いスピードでガタキリバアンデッドに迫り体当たりを決めた。

ゴウンツ!!!

跳ね飛ばされ、大地に再度叩きつけられるガタキリバアンデッド。

その間にも、ブレイドとジョーカーを乗せたバーニングトルネイダーは体制を立て直し、3人は更にガタキリバアンデッドへと再び迫っていく。

礼拝堂の方では、胸部から火花を散らしながらも戦闘を続けるブラック・ビートと、ブルービート・クウガUFのにらみ合いが続いていた。

そんな中、クウガUFは今まで抱いていた疑問をブラック・ビートにぶつけた。

「…ダグバ、あなたに聞きたい事があるけど。」

『ん？何だ。』

余裕のつもりなのか、斜に構えた風にクウガU.Fの話を書くブラック・ビート。

「あなたに何か夢はあるの？」

『夢？』

そう聞かれ、ブラック・ビートはクウガU.Fに向かい、口を開く。

『ふつ、無くもない。…俺の夢は、一族の皆を安心して暮らせる安住の地へと導き、リント達とお互いに共存する事だ。』

そう言うや、再び乱闘戦に突入する3者。

ブラック・ビートの重い一撃に耐え、スティンガーブレードを振り回すブルービート、右腕に炎を宿しブラック・ビートに迫るクウガU.F、一族の思いを乗せて拳を繰り出すブラック・ビート…。

戦いは15分を過ぎ、いよいよブラック・ビートも活動限界を迎えている。

元々ブラック・ビートは拠点制圧のために造られていたため、活動限界は19分59秒と限られている。

他のインセクト・アーマー…特にブルービートは長期戦闘に適した性能を与えられているのだが、火力の高い装備が使えない欠点を抱えているため、正直なところブラック・ビートには馬力の点では劣っているのだ。

しかし、その分装備品の多さで差を埋めており、実質五分五分といった感じなのである。

『…もうそろそろ活動限界か。時が経つのは早いな。』  
「まあ、私の方はまだ動けるけどね。」  
「私も動けるわよ?」

が、ブラック・ビートはそれも計算に入れているため慌てる様子はなく、むしろ余裕であった。

残り時間、4分30秒…。

ブラック・ビートは間接部から飛び散る火花をものとせず、2人に飛びついていった。

それに真っ先に喰いついたのは、他ならぬクウガUF…かがみ。

『まだまだ…まだ!この程度で倒れては、皆を安住の地に導く事は出来ない!そのためにも、学園都市だけは手に入れなければならないんだ!』

「…あなた、まさか学園都市を手に入れる気なの?」

『ああ、一族のためにな!』

「ふざけないでよ!」

ステインガー・ビュートを振るいクウガUFを追いつめていくが、すでに動きを見切られているのか軽くかわされてしまう。  
と、ここで。

ビーツ、ビーツ!…

急に響くアラート音。どうやら、活動限界らしい。

ブラック・ビートは邪甲を解除し当麻に戻るやダグバにすかさず変身、再びクウガUFに殴りかかった。が、クウガUFも応戦し、一

向に罅が開かない。  
ところが、そんなクウガUFに異変が起こった。

「勝手な事をして、それで一族の皆が納得すると思うの!!」

するとどうだろう、ダグバを殴る度にクウガUFにひびが入り、遂には黒い装甲が爆発するかのように吹き飛び、白金に輝く装甲が現れたのだ。

しかも、ライジング・アルティメットが如き黄金の装甲まで施されている。

クウガ・シャイニング・アルティメット。(以下、クウガSU)

聖なる泉が枯れ、再び泉から湧き出した光の水。

そして、柊かがみ最強の力。

『こ、これは…!!』

「あなたの守りたい者達が安心して住める地も…。」

バキッ!!

クウガSUの重く気合いのこもったパンチがダグバの顔面を捉え、殴りつける。

「そして何より!あなたはまだ気づいていない!!」

更に回し蹴りが鳩尾に決まり、ダグバは遂に崩れ落ちた。

『ぐっはあ…。。』

決着はついた。

クウガS Uの勝利である。

ブルービートも駆け寄り、ダグバを見つめる。

が、ダグバは崩れたまま小声でぼやいた。今の胸の内を。

『…不幸だ。結局、皆を守る事が出来なかった、もう俺の居場所もなく、皆を安住の地に導く夢も叶わなくなった…。』

泣いていたのだ。一族のプライドを賭けて戦い、そして負けた事に……。それを察したのか、クウガS Uはダグバに歩み寄り、彼を力づけた。

「当麻君、何言ってるの？」

『今度は何だ？…どうせ俺なんて、何も出来なかった只のグロンギだ。』

「あなたの居場所は、すでにあるじゃない！！」

『…え？』

クウガS Uは、ダグバの手を取り抱え上げ起こすと、ブルービートの元に連れて行き握手をするように促した。

「当麻、この学園都市があんたの居場所じゃない。グロンギの皆も呼んできなさいよ。歓迎するわ。」

『…美琴。本当にいいのだな？』

「当たり前じゃない、仲間なんだから。…それに、インセクト・アーマーだってみんなを守るために作られたんだから、心配しなくてもよかったのよ。」

美琴の言葉に、ダグバ…当麻は感動した。

最初は、インセクト・アーマーの装着者の話を聞き、一族の危機を感じていた。そのため、研究施設からブラック・ビートを強奪し、一族を守るために邪甲までして戦ったダグバであったが、単なる考えすぎであった事に自らを恥じ、後悔していた。

『すまない、俺が間違っていた様だ。』

「もう気にしないで。」

「ほら、美琴ちゃんと仲直りしてよ。」

そしてお互いは手を取り合い、握手する。

一族の代表と人間の代表が手を握り、和解した瞬間であった。

『ダグバよ、何故リントの戦士と手を取り合う？』

とその時、上空からガミオが腕組みをしながら降りてきた。ガミオの登場に、場は緊張の空気に包まれる。

『我がグロンギの…いや、アンデッドの名において…』

「アンデッド？あいつが!？」

「え？な、何があったの？あいつは一体!？」

『ガミオ、貴様…!!』

戸惑う3人をあざ笑うかのように、ガミオはダグバを指差し宣言する。

『ダグバの処刑を実行する。』

TOUR 24 END

TOUR 25 に続く

TOUR 24 シャイニング・アルティメット（後書き）

こなた

「いやあしかし強かったなー、クウガ・シャイニング・アルティメット。」

XX

「ああ、すごいだろ？」

シャイアン

「あれだけ強ければ、もう大丈夫だろう。」

XX

「これでこなた以外は全員強化完了、つてところかな。」

こなた

「作者さん、私の強化も早めにやってね。」

XX

「大丈夫だあ〜!!！」

次回「仮面ライダーアナザーディケイド 〜青い瞳の破壊者〜」は、  
（脳内BGM：『仮面ライダークウガ』より『開幕』）

「彼の意見、間違っではない。」

「みさきち、今倒したアンデッドは…！」

『デ…ディケイド…!』

「あるんだよ、アンデッドにも弱点が。」

TOUR 25

「仮面ライダーゴズン」

グロンギとリントが交差する時、奇跡は生まれる…!!

XX

「いよいよ第6の世界もクライマックス！しかも、ルウの世界以来の前後半に分けての激闘だ！」

シャイアン

「今回は、私に関するネタバレが後半に用意されているそうだ。」  
こなた

「私も、いろいろ変身して活躍するよ！」

かがみ

「それにしても、この世界のグロンギって平和主義者が多いのね。」  
シャイアン

「ああ。何でも彼らは少数民族で、戦える者は極僅かだそうだ。」  
こなた

「オリジンやリイマジのイメージがあったから、戦いばかりやっているものだと思ったけどね。」

かがみ

「確かにそうね。そんな一族をまとめている当麻君は、やっぱり偉いわ。」

XX

「さて、会話はこの辺にして、そろそろ...。」  
シャイアン

「ああ、そつだな。」

シャイアン

「さあ始まるぞ！」

こなた・かがみ

「レディ・ゴー……！」

こなた

「またセリフを取られたあああああ……！！（泣）」

『俺を処刑、だと…?』

上空から現れたガミオから、いきなり言い渡された、ダグバの処刑勧告。

それは正に、グロンギー族の首長交代劇。

だが、ガミオの場合は単に一族の長に収まるだけではなく、一族の革新も視野に入れている。

すなわち、一族全員のアンデッド化。

死をも克服するアンデッドの能力を一族の皆に移植すれば、種の繁栄も自在のまま。

実は、ガミオ本人は自身がアンデッド化した事で確信を持っていた。この力さえあれば、一族は滅びずにすむ事を。

が、ダグバはあくまでリント…つまり人間との共存を望んでいる。

かつてはガミオもダグバと同じ様に共存を考えていた。

…しかし、アンデッド化した今は共存などどうでもいい。

互いの考えは、結局かみ合わないまま今に至っている。

「処刑つて、あんた正気なの?!」

「当麻は、ようやく皆が暮らせる安住の地を見つけたのよ。なのに、それが気に入らなくて処刑なんて、どういう神経してるのよ!!」

クウガSUとブルービートもダグバを擁護するが、ガミオは元より聞く耳を持っていない。

『安住の地?...フン、下らん。わしが求めるのは、この無敵の力を

皆に与え、しかる後この地を蹂躪しそれを足がかりに世界を手にする！！…完璧なシナリオだと思わないか？」

この話を聞き、クウガSUは呆然としていた。

完全に狂っている、狂気でしかない、と。ダグバに至っては、かつての盟友がここまで堕ちてしまったのか、と嘆かずにはいられなかった。

ここまで来れば、もはや友ではない。ならば、この手で倒すのみ！！

ダグバの胸の内は、すでに決まっていた。

『ガミオ、貴様の思う通りにはさせない！俺達の手で守って見せる！…一族の未来も、美琴達の未来も！！』

『ほう、出来るかな？こんな小娘に負けた分際で。』

「…出来るわよ！当麻なら！！」

2人の会話に、美琴が割って入る。

当麻の…ダグバの夢を叶えるために。

『小娘風情が、しゃらくさい！！』

すると、ガミオが右手で黒い火炎弾を生成、ブルービート達目掛けて放った。

しかし、そこに到達する前に。

ジュウウウウウウ……。。

火炎弾は、ダグバの右手の力により消滅した。

そう、彼はブルービートを守るために幻想殺しを発動させたのだ。

(脳内BGM：『仮面ライダーディケイド』より『パラレルワールド』)

『ダグバ…貴様…!!』

『俺は、もうこれ以上リントや俺達一族が血を流し合い、倒れていくのはごめんだ！ここでお前を倒し、終止符を打つ!!』

『ぬぬぬ…！ダグバめ、リントの情にほだされたのか!!』

ガミオはいきり立ってダグバをなじるが、ダグバにもプライドがある。

舐められる訳にはいかないのだ。

と、そこへ。

「彼の意見、間違っではない。」

4人が左を向くと、ADがタジャドルアンデッドを蹴り飛ばし、ジースタッグとレッドルを率いて現れた。

「当麻！、よかった！間に合って!!」

「お姉様、おけがはありませんの!？」

「黒子、インデックス!…よかった、無事なのね!!」

「今までごめんな、インデックス。」

「ううん、もういいんだよ、当麻。」

レッドルがダグバの元に駆け寄り、手を取り合って再会を喜び、ダグバも今までの過失を謝った。

ジースタッグもブルービートの横に並び、スティングークローを構えてガミオに向き合う。

「かがみ、遂に極めたな。究極の光を。」

「ええ、こなたがいなければ私はずっと迷っていたわ。…でも、今は大丈夫。」

ADもまたクウガSUの横に立ち、クウガSUをほめる。

が、その間にタジャドルアンデッドが起き上がり、体制を立て直していた。

そして、ジースタッグに狙いを絞り、背後から火炎弾を数発生成し放とうとしていた、その時。

『ギヤアアアアアア！！』

何かが横から飛んできて、タジャドルアンデッドに命中し横転した。

『グウエエエエエエ！！』

よく見ると、それはガタキリバアンデッドであった。

「お待たせー！！」

「やっと追いついたぜー！！」

『かがみ、ヤフー！！』

そう、バーニングトルネイダーに乗ってブレイドとジョーカーが飛

来し、クウガSU達と合流したのである。

「…何だ、その巨大なサーフボードは。」

『サーフボードとは失礼な！…これはバーニングトルネイダー、アギトの新たな力だよ！！』

「なるほどな。…こなた、あそこにいる鳥のキメラを任せたい。私は空中にいる諸悪の権化を叩き潰す。」

『鳥のキメラ、ねえ…。うん、私達に任せてよ。』

「では、私達は向こうにいる虫のキメラを倒しますの。」

「黒子、インデックス、油断しないでね！」

「うん！…当麻、負けないで！」

『ああ。任せろ！』

そして、AD達は各々の標的に狙いを定め再び攻撃を開始した。

AD・クウガSU・ダグバはガミオに、TアギトBF・ジョーカー・ブレイドはタジャドルアンデッドに、ブルービート・ジースタッグ・レッドルはガタキリバアンデッドに狙いを絞り、乱戦が展開される。

先程のダメージが癒えていないタジャドルアンデッドに、まずジョーカーがパンチを繰り出し牽制すると、続いてブレイドがブレイラウザーで斬りつけ、そしてトライオーはバーニング・トルネイダーからアギトBFに戻った後、火に強いキバ・バツシャーに切り替わりバツシャーマグナムを乱射し、更にダメージを積み重ねていく。

「さて、仕上げは…。」

「仕上げは私に任せてヨ！前に手に入れた、このラウズカードで決めたいんだ！」

「みさきち…。わかった、仕上げはみさきちに任せるよ！」

ここでブレイドが新しいラウズカードを手に皆に言い、Tキバ・バ

ツシャーは全てをブレイドに託した。

「んじゃ、いつくぜ!」

ブレイドは、左腕に装着されたラウズ・アブソバーにカードを装填し、続いて新たに手に入れたラウズカードをラウズする。

『アブソープ・クイーン!』

『エボリユーション・キング!』

すると、ブレイラウザーからカードが飛び出しブレイドの周りで旋回後、黄金に輝くギルドラウズに変化、ブレイドの体に貼り付くように一体化していき、アンデッド・クレストを形成する。

最後に右手から光が走り、巨大な剣・キングラウザーを生成後変身が完了した。

ブレイド・キングフォーム。

現時点での、みさおブレイド最強形態。

「さあつて、やるか!」

ブレイドKFはキングラウザーを、まるで小枝を軽く振り回す様に構え、タジャドルアンデッドに斬りかかる。

ドカツ!! チュンツ!!

その重い一撃を受け、更にもう一撃加えられ怯むタジャドルアンデッド。

「まだまだあ!」

バチッ！！ゴキイツ！！

更に、右腕のアンデッド・クレスト『ビート』から得た力によるパンチを喰らい、ガタキリバアンデッドは反動で反対側に吹き飛び更によるける。

「…すごい。」

「これが噂のキングフォーム…。いや、噂以上かも。」

ジョーカーとトライオーも、ブレイドKFの戦いぶりに興奮冷め止まず、といった感じで見入っていた。

「さて、トドメといくか！！」

ブレイドKFの各所からギルドラウズカードが飛び出し、それがキングラウザーのスロットルに次々とラウズされてゆく。

『スピード・10・J・Q・K・A！！』

キングラウザーの巨大な刀身が白金の様に輝き、プラズマがバチバチと音を立ててほとばしる。

「いつくズ「ちょっと待った、みさきち！！」「…あーもう、ちびすけ邪魔すんなヨー。」

「どうせやるなら、3人一斉ってのはどう？」

「あ、それいいね。やるやる！」

最後の切り札・ロイヤルストレートフラッシュを放とうとした途端、TアギトBFに止められコケそうになり抗議をしたが、こなたの提

案にジョーカーは喜び、ブレイドKFは少し考えた後、

「3人一斉かア…面白そうだな。」

「よっしゃ、そうと決まれば…!!」

ブレイドKFも賛成したところで、TアギトBFは一旦トライオーに戻り、改めてベルトに手をかざし再変身を開始した。

「いくよ…龍騎…!!」

ブレイドに気を使ったのであろうか、龍騎に変身したトライオーは早速1枚のカードを引き、ドラグバイザーに装填した。

『ストライク・ベント…!!』

ドラグクローが右腕に装着され、昇竜突破の体制を取り時を待つ。一方ジョーカーもオーシャンブルーのガイアメモリーを手にし、ウイパーを鳴らす。

『オーシャン…!!』

そして、スロットルに装填、スイッチを入れる。

『オーシャン！マキシマムドライブ…!!』

ジョーカーが天空に両手を広げると、両手に水分が次々と凝縮され、1つの巨大な水の塊を形作る。

そして、目の前に水球を置き、拳を固めて射撃体制に入る。

「OK、じゃあいくよ…!!発射あああああ…!!」

『ロイヤルストレート・フラッシュュー!!』  
「ビッグバン・アクア・マグナム!!」

まずT龍騎の昇竜突破が頭部に直撃し、続いてジョーカーの一撃により胴体が撃ち抜かれ、トドメにブレイドKFから展開された5枚のオーラ・ラウズ・カードを通った斬撃が炸裂、タジャドルアンデツドは真つ二つになって爆発した。

「やったね!…んじゃみさきち、カードに封印を…。」  
「…いや、しなくてもよさそうだな。」

倒された場所を見ると、タジャドルアンデツドは完全に消滅しており、影すら残っていない。  
つまり…

「え?何も残ってない!？」

「…みさきち、まさか今倒したアンデツドは!」

「あれは間違いなく、トリアルシリーズ…しかも何者かがBOA RDから手に入れたデータを元に造った、新しいトリアルだぜ。」

かつて、オリジン・ブレイドが撃破するのに苦戦した、トリアルシリーズ。

ブレイドKFやワイルドカリス、更にギャレン・レンゲルとの連携がなければ倒すのに時間がかかった、最高最悪の実験体。

その最新型と考えれば、誰かがこなた達の力を試すために送ったと考えても、おかしくないだろう。

「じゃ、一体誰が送ったんだろう?」

「うーん、…心当たりがないなあ。」

さすがにブレイドも腕組みして考え込んでしまったが、

「それよりも、早くシャイアンさんのところに！」

「そうだね、みさきち急ごう！」

「わかったぜ！！」

ジョーカーに促され、3人は急ぎシャイアンの元に向かう。  
少し複雑な謎を残して。

一方、ブルービート達の戦いも、終盤に向かっていった。

ガタキリバアンデッドのジャンプ力の高さには、中々攻撃が当たらなかったブルービート達であったが、ジースタッグ…黒子がテレポーターションを使い、背後へ回ったところでステインガークロウを叩き込み、地面にめり込ませる。

「黒子、ナイス！！」

「じゃ、これで足止めするよ！」

レッドルがステインガープラズマーを起動させ、赤いプラズマ流をガタキリバアンデッドに放つ。

ジースタッグは後方に下がりプラズマ流を回避し、ガタキリバアンデッドにプラズマ流が絡まる様に命中する。

『ギイ！！』

レッドルはガタキリバアンデッドをプラズマごと空中高く放り投げ、そしてそのまま落下してくるところへ。

「喰らいなさい、レイジングスラッシュユ!!!」

テレポーターションを使い、ガタキリバアンデッドの真横に移動したジースタッグのスティンガークローによる必殺技が、横一線に決まる。

「これでラストよ! ビートルスラッシュユ!!!」

更にブルービートがタイミングよくジャンプし、スティンガーブレードをX字に振るいガタキリバアンデッドを斬り裂く。

『ギイイイイイ!!!』

ガタキリバアンデッドは地面に叩きつけられ、大爆発し果てた。

3人は1カ所に集まり、ようやく倒した事を実感する。

「やっと倒せたね、短髪。」

「そうね、インデックス。」

ブルービートが肩で息をすると、ジースタッグが2人をせかす。

「お姉様、急ぎシャイアン様の援護に!」

「そうだったわ、急ぎましょう!」

3人は、当麻やシャイアンを援護すべく走り出した。  
希望の灯を消させないために。

シャイアン・ダグバ・クウガSUとガミオの戦いは膠着状態が長く

続き、決着が付かないままだった。

「ちいいっ!」

『はっ!』

「喰らうがいい!」

バキッ、ザシャアッ!!

『ウオオオ!!』

ダグバのキックとクウガSUのパンチがガミオに炸裂し、ADのライド・クロニクル・ソードが胸板を斬り裂く。

『なかなかやるな、ダグバ。…だがしかし、それもここまでだああああ!!』

すると、ガミオの体中から黒い障気が立ち上り、更に圧縮した暗黒のエネルギーを3人に放つ。

『!ま、間に合わない!!』

「は、速すぎる!!…: きゃあああああ!!…」

だが、その時であった。

バチバチッ!!

何と、ADが2人の前に立ちふさがり、暗黒弾を防いだのだ。

「く、くううううう!!」

『シャイアン?!』

「シャイアンさん!!?」

予想以上の重圧が体中にかかり、そして…

ガカアツ!!

遂に弾き飛ばされ、変身も解除された上、礼拝堂の壁に叩きつけられてしまった。

見ると、体のあちこちに火傷があり、しかもぐったりして動かない。

「!!シャイアンさん!!」

『が、ガミオオオオオ!!』

この様子は、すぐに合流したトライオー達にも衝撃を与え、ブルービート達に至ってはショックで固まってしまった。

「!シャイアンさん!!」

「うそ…?!」

「えええ…。」

「そ、そんな…。」

「シャイアンさん!?!」

「ああ、これは酷いのです！」

が、ブルービート達は気を取り直すと急ぎシャイアンの元に駆けつけ、介抱を開始しつつジースタッグが防衛体制に入り、トライオー達も加わりガードを固める。

「かがみ、遅れてごめん。」

「それはいいわ、とにかくシャイアンさんの方を！」  
「うん！」

一方、

「シャイアンさん、しっかりして下さい！」

「起きてよ、ねえ起きてよ！」

ブルービート達も必死にシャイアンを介抱するが、目を覚ます気配は一向にない。

あれだけの衝撃である、普通の人間ならすでに亡くなっているだろう。

『ククク…、ダグバよ。わしに逆らうと、こういう運命を辿る事になるぞ。素直にわしについて行っていれば、よいものを。』

ガミオの余裕の発言に。

『…ガミオ。』

『ほう、ようやく従う気になったか。それでこそ…。』  
『言いたい事は、それだけかあああああ…!!』

とうとう、ダグバはキレた。

まるで火山の噴火が如く、怒涛のオーラが立ち上がり渦を巻いて吹き上がる。

と、その時であった。

『マスター、怒りに任せるのはやめて下さい。』

ダグバの耳に、何者かが優しく声をかけた。

『!?!? 誰だっ!?!』

ダグバは不思議がつて辺りを見渡すが、辺りにはガミオやクウガ達以外には誰もいない。

すると今度は力強い声が、ダグバの耳に聞こえた。

『マスター、探しましたぞ。』

『一体誰だ、俺に話しかけるのは!?!?!? 出てこい!?!』

すると、ダグバ達とガミオの間に茶色いバツタ型のグロンギと、深緑の同型が現れ、ダグバの前にひざまづいた。

『マスター、今こそ我らの力を使う時。』

『さあ、遠慮なく。』

『ああ... お前達は...!?!』

ダグバは、彼らの出現にある種の感動を覚え、涙ぐんだ。

ダグバの前でひざまづいた2人のバツタ型戦士。彼らは何者なのか？

PART 2に続く…

『じつは…どこだ…？』

今、シャイアンは夢を見ている。

彼が立っているのは、どこかの荒涼とした大地。  
辺りには誰もおらず、しかも風すら吹いていない。

そこへ、何者かが猛スピードで迫ってくるのが見えた。  
まるで兵隊みたいに走ってくるそれは、何とオリジンの世界の怪物  
… オルフエノク・ファンガイア・アンデッドの混成部隊であった。

『こちらに向かって来る…？』

シャイアンはとっさの事態に身構える。  
が、彼らはシャイアンを無視して向こう側へと走り去ってしまった。  
本来なら、シャイアンに向かって来るはずなのだが…。

『何だか変だな。一体奴らはどこへ向かっているんだ？』

そこでシャイアンは、走っていった混成部隊の後を追いかけて、その  
向こうに何があるのか調べるため走り出した。

しばらくして、辺りに他の怪物達の亡骸が散乱する様になり、しかも次々と増えてきているのがわかった。そこでシャイアンは、近くにある亡骸に近寄り、あちこちをくまなく調べ始めた。

「まるで高熱に焼かれたみたいだな。広範囲に渡って焼け焦げている…。」

辺りを見ると、他の怪物達も一様に焼け焦げているのがわかる。

しかも、大半が消し炭にほぼ近く、中には完全に原形が無くなっているのもいた。

これだけ炭化が激しいやられ方をしているのである。

相手は、かなりの火炎の使い手であろう。

『…一体誰が、この様な事を。』

すると今度は、奥の方から爆発音が響き、何体か怪人が火だるまになって落下してきた。

それは先程走り去っていった混成部隊であった。

『…むっ！…！』

シャイアンが右に左に落下物をかわしていくが、たいていの怪人はやはり黒焦げになっており、その焦げた臭いに鼻を覆いたくなる位であった。

落下物が途切れ、シャイアンが遠くを見ると、奥の方から誰かがやって来るのが見えた。

『!?!?! あれは!?!!』

その人物には見覚えがあつた。  
そう、それは。

『デイ、…デイケイド!?!!』

シヤイアンが気を失い倒れている頃、ダグバとガミオの戦いに現れた2人の戦士に皆が注目していた。  
片方は深緑色のバツタ型のグロンギ、もう片方は同型の土色をしたグロンギである。

『ゴ・バダー・バ、ズ・バツィー・バ。…確か、俺達グロンギ一族の最強の戦士にして、一族を守った伝説の兄弟。』

『ま、まさかあの兄弟が現れようとは。これは計算違いだった。』

ダグバもガミオも、伝説の2人の登場に驚きを隠せず、トライオー達に至つてはただ呆然としているしかなかった。

『マスター、今こそ我らが力を合わせる時!』

『さあ、ご決断を!』

当然、ダグバの気持ちは変わらない。

『ああ、力を貸してくれ！そしてリントの戦士達と共に、我らの敵を倒そう！』

『ははっ、マスターの御心のままに…。』

すると、2人の戦士は光の塊に変わり、ダグバの中に取り込まれていった。

ダグバの体が、まるで太陽の様にまばゆく輝き、光が止むとダグバは全く新しい姿に変わっていた。

右のカラーが深緑、左のカラーが土色のツートンカラーのボディに頭部から伸びる白銀のブレードアンテナ、アナザーアギトを思わせるマスクにクウガと同じ黄金のアンクレットが両足に装備され、アークルと同一のベルトが腰に巻かされている。

仮面ライダーゴズン。

ゴ・バダー・バ、ズ・バザー・バ、ン・ダグバ・ゼバの三位一体が生み出した、この世界最強のグロンギの戦士。

『ダグバ、貴様まさか…！！』

『ガミオ、俺達一族を裏切り悪の力と組した罪、許し難し！一族に代わり成敗してくれん！！』

新たな力を得たダグバを見てうるたえるガミオ、一族の未来を背負い、伝説の2人の戦士の力を得て更なる闘士を燃やす仮面ライダーゴズン。

2人の明暗は明らかだった。

「美琴ちゃん、攻め込むなら今だよ!!」

「うん!当麻、待ってて、今援護するからね!!」

クウガSUとブルービートも、ダグバの新たな変身に喜び、くつわを揃えて前進する。

「みさきち、唯ちゃん、私達もいくよ!」

「了解だぜ!!」

「うん、わかった!インデックスちゃん、黒子ちゃん、シャイア  
ンさんをお願い!!」

「わかりましたの!」

「任せてよ!」

こなた達も、後の事を2人に任せ進軍する。

『ガミオ、これが俺達一族とリントの戦士達との結束力だ!!』

まずゴズンがガミオに組みつき、フックを2発顔面に決めニーキツクを鳩尾に命中させる。

更にゴズンが右ストレートを胸元に決めつつ後方にバツクすると、ブルービートがインプット・マグナムの入力コードを素早く入力、レーザーモードで攻撃、胴体に命中する。

『…くくっ!』

続いてジョーカーがガイア・メモリーを取り出し、ウィスパー起動後にスロットへと装填、スイッチを押す。

『ジョーカー・マキシマム・ドライブ!!』

ジョーカー・ライダー・パンチが顔面に決まり、更にトライオーは龍騎からキバ・ガルルフォーム（狼繋がりらしい）に変更、ブレイドKFと共に斬撃を繰り出す。

『…くっ、おのれ!!』

『ガミオ、チエックメイトだ！もう抵抗するのは止める!!』

状況からすれば、確かにガミオにとっては不利である。

相手は5人、こちらは1人で護衛なし。

が、ガミオは諦めなかった。

自身がアンデッド化しているが故に、負ける事がないと確信している為なのだろう。

『黙れ、わしはアンデッドの力を得ているんだ、この程度…!!』

『くっ、何て自信なの!!』

『全くだよ、かがみ。…ところでインデックスちゃん、シャイアンさんはどうなっているの?』

『…まだ目を覚まさないよお。』

『シャイアンさん起きてください、このままだとまずいですの!!』

クウガSUはガミオに毒づき、Tキバ・ガルルはジースタッグ達にシャイアンの様態を聞いていたが、結果はあまりかんばしくなく、今だ目を覚まさない事に焦りを感じていた。

（このままだと、こちらに不利になってくる…どうしよう。）

皆がガミオの対応策に四苦八苦している、その時。

『アタック・ライド スラッシュ！！』

「どっせいいいいいい！！」

『がはうっ！！』

ガミオの後方から銀の壁が現れ、何かが勢いよく走ってきた。そしてそのまま斬撃を決め、皆の前に現れる。

「誰かと思ったら、シャツフルさんじゃありませんか！！」

「よお、待たせたな、青ちよびね。」

『あの…こちらの方は？』

シャツフルのいきなりの登場に、ゴズンは少し唾然としていた。

「俺はシャツフル、仮面ライダーデイスラッシュだ。」

シャツフルは、礼拝堂の壁にもたれかけて気絶しているシャイアンを見て、

「…っと、シャイアンの奴、敵の真ん前で昼寝とはな。」

「何言ってるの！私達をかばって倒れたのよ！」

「えっ！そうだったのか、…すまん。」

デイスラッシュの無礼な行為にクウガSUが叱りつけ、彼は過失を謝った。

だが、不意打ちを喰らってもガミオは今だに生きている。

『おのれ、よくもわしをコケにしてくれたな！』

「吠えてな、その犬コロ。今すぐ黙らせてやるぜ!!」

デイスラッシュはソードライバーのスロットを開き、そこにカードを一枚セツトインする。

『アタック・ライド 音撃棒・烈火!!』

すると、デイスラッシュの腰に赤い鬼の形をした先端を持つ棒が現れ、それを手にすると勢いよく振り下ろし、火炎弾をガミオに放つ。

『ふん、なめるなあっ!!』

無論、ガミオは避ける事なく全て受け止め、逆に暗黒弾を倍にして返す。

「おいおい、そりやないだろ!!」

「シャッフルさん、余計な事をしないでええええ!!」

「アホかあんたはああああ!!」

唯とかがみのツッコミも空しく。

ボツ、ゴオオオオオ…ン。

結局、この攻撃でゴズンとクウガSU以外は全員変身が解けてしまい、大の字に伸びてしまった。

(もう、これまでなの…?)

(ああ、シャイアンさん早く目覚めて、お願い…。)

こなたと美琴が覚悟を決めた、その時だった。

「待て、ガミオ。次は私が相手だ！」

何と、シャイアンが目覚め起き上がったのである。  
しかも、クロノ・ドライバーを手にして。

「…シャイアンさん？」

「もう大丈夫なんですか？」

「心配をかけてすまない。もう大丈夫だ。」

シャイアンはインデックス達にニコリと笑って答え、クロノ・ドライバーを装備しカードを手に変身した。

「いくぞ！！マスカレイド！！」

『マスク・ライド デイクライド！！』

即座にADへ変身し、続いてカードを新たに装填する。

『マスク・ライド ライトニング！！』

すると、ADの頭上から無数の雷が降りかかり、ADの各所に命中するや新たな装甲として装着されていく。

そして現れたのは、鷲をモチーフとした頭部に赤い体、黄金の装甲も目に眩しい雷の戦士。

その名は、仮面ライダーライトニング。

「…うん、はっ！」

「あれって、シャイアンさん…？」

こなたと唯が目覚め起き上がった時、ADが立ち上がっている姿を見て、驚きを隠せなかった。

「シャイアンさんだ！…よかった、一時は死んじゃったと思ったんだよ！」

「シャイアンさん、もう体の方は大丈夫ですか？」

唯の質問に、ADライトニングは口調も穏やかに答える。

「ああ、もう大丈夫だ。心配をかけてすまなかった。」

やっと聞いたシャイアンの言葉に、こなたと唯は安堵し、ホッと胸をなで下ろした。

そして、2人はゆっくりと体を起こし、皆を助けるべく動き出す。

「さあ急いで皆を！」

「うん！」

「いくぞ、ガミオ…！」

その間にも、ADライトニングは高速化したミドルキックや右ストリートでガミオを攻め、攻め入る隙を与えない。

正にその動き、電光石火。

『むっ、くっつ、すばしっこい奴め!!!』  
「貴様に見切れるかな？この高速の一撃を!!!」

ガミオをもきりきり舞いさせるライトニングの攻めは、例えるならクロック・アップしているクウガ・ライジングマイティといった感じか。

ある程度攻め立てたところで、締めにはイキックで顎を蹴り上げ、ガミオを大地に叩きつける。

ADが元に戻り、ガミオを改めて睨みつけていると。

ヴォンツ、ヴォンツ、ヴォンツ!!

ここでライド・クロニクルが開き、新たなカードがADの手に収まった。

1枚はゴズンが描かれたマスク・ライド、もう1枚はグロンギ族の紋章が描かれたファイナル・アタック・ライド、そしてもう1枚はブルービートが描かれたマスク・ライド。

ADは迷わずファイナル・アタック・ライドをセット・インする。

『ファイナル・アタック・ライド ゴ・ゴ・ゴ・ゴズン!!!』

「いくぞ、準備はいいか？」

『…ああ、いつでもOKだ。』

ADとゴズンが空中高くジャンプすると、右手をガミオに向け、何かを念じ始めた。

やがて、ガミオは足元から燃え始め、その炎は全身を包み込んだ。

『ぐっ、わ、わしを燃やす気か!?!』

そのタイミングを図ったのかクウガSUも同時に念じ始め、自然発火能力を繰り出す。

「はああああ…！」

『ぐ、ぐわああああ！貴様も使えたのか、その能力を！！』  
ちから

その様子を見ていたこなた達は、改めてゴズンやクウガの潜在能力の高さに感心していた。

特に、かがみの事をよく知っているこなたは笑顔で3人の勝利を確信していた。

「すごい、これが当麻の潜在能力…。」

「当麻、強い！」

「ガミオが、あつという間に火だるまに…。信じられませんの。」

「ちびすけ、こりや柎には逆らえないな。燃やされるの嫌だし。」

「そりゃそうだよ、みさきち。…あれがかがみの底力だから、ねえ。」

「

「かがみの奴、腕を上げたな。俺も、負けられねえ！！」

各々の思いが交錯する中、滞空していた2人は拳を固め、そこに炎を宿らせガミオ目がけてダイブする。

クウガSUも、拳に光を宿らせガミオに向け突進する。

今、ゴズンとADの2人が放つ大技…デイケイド・ブレイズナックルとクウガSUの光拳…シャイニング・マッシャーが同時に炸裂し

た。

ゴウンッ！！

『ぐわあああああ！！』

ガミオは、3人の拳を受けて吹き飛ばされ、爆発。遂にガミオの討伐に成功した。

「やったな、ダグバ…いや、当麻。」

『ああ、これで一族の面目は保たれた。』

A Dとゴズンは、互いを讃え握手する。

これぞまさに、一族と人間が新たな絆を結んだ瞬間であった。

『…ダグバめ、よくもわしを裏切ったなああああ！！許さん、絶対許さあああああん！！』

一方、敗れたガミオは、大の字になりながらも地団太を踏んで悔しがつっていた。

全てのグロンギをアンデッド化する夢も、ここを足がかりに世界を制覇する夢も。

何もかもが水泡に帰した。  
が、彼はまだ知らない。

ガミオの腰にあるアンデッドバツクルが割れ、そこに文字が記されている事に。

「さあて、覚悟はいい？」

「さあみさきち、今のうちに」

と、そこへ現れたのは、こなたとみさおの2人。  
ただ、みさおの右手にはラウズカードが握られている。

「女よ、わしに何をする気だ？」

「ガミオ、あんたは知らないけどね。」

「？」

「あるんだよ、アンデッドにも弱点が。」

「な、何だと!？」

みさおは、手にしたラウズカードをガミオの胸部にポイツと投げつけ、ニコリと笑った。

ガミオの体は、胸部から徐々にカードの中へ、まるでスポンジが水を吸い込む様に吸収されていく。

「こ、…これは一体?!」

「そ、ラウズカードがアンデッドの弱点なんだよね」

「おおおおお、これがわしの末路なのか!…む、無念。」

ガミオは、遂にラウズカードに全て取り込まれ、みさおの手に収まった。

手に入れたのは、『REVOLUTION』…「革新」と言う名の新たなカード。

「これで、スペードは全て揃ったぜ。」

「よかったね、みさきち。」

「サンキュー、ちびすけ。」

今回、みさおが手に入れた『REVOLUTION』のラウズカード。

これが、後に彼女の力になるうとは、誰が予想していただろうか。

ガミオとの戦いから数日後、傷がすっかり回復したシャイアン達は、次の世界に向かうべく別れの挨拶をしていた。

シャイアンの負っていた火傷は、グロンギに伝わる治療法により全快し今では痕すら残っていない。

こなた達は傷が浅かったため比較的軽い治療で済み、当麻に至ってはアークルに似たベルトの効果により、すでに回復済みである。

「結局、かがみとみさきちはここに残るんだね。」

「ま、グロンギ一族の受け入れ先を当麻君達と相談しなきゃならないから、仕方ないけどね。」

「だからって淋しがるなよ、ちびすけ。」

「それは大丈夫、私だって子供じゃないし。」

「だよなー。」

3人の会話が弾む中、シャイアンは当麻や美琴達と別れの握手していた。

「いよいよお別れ、だな。」

「ああ、次の世界を救わなければならないからな。」  
「シャイアンさん、またいつかまたこの世界に来て下さいね。」  
「もちろんだ。当麻、美琴やインデックス達と仲良く、な。」  
「ああ。俺達も平和のために、全力でがんばるよ。」

と、ここで美琴が素朴な疑問をぶつけてきた。

「最後に1つ質問させて。私達の世界を救ったあなた方は、一体…？」

「通りすがりの仮面ライダーだ。覚えて損はない。」

「ああ、心に刻んでおくよ。」

その後、2人の英雄は最後にガツチリと固い握手を交わし、再会を約束した。

「こなた、唯、いくぞ。」

「あいよ〜。」

「は〜い。」

3人は、現れた銀の壁に向かい、バイクを走らせた。  
再び会えることを胸に秘めながら。

「また会おう、当麻！」

「美琴ちゃん、また会おうね〜！かがみ、みさきち、みんなをお願いね〜！」

「さよ〜なら〜！」

「まかせて、ちびすけ！」

「また会おうね、こなたー!!!」

「また会おうぜ、シャイアン!!!」

「また会いましょう！」

そして、3人は銀の壁に消えていった。

TOUR 25 END

TOUR 26 続く

ガラハド

「今回は、私自らが出向いてのクロノ・ドライバーのオーバーホールの話だ。」

シャツフル

「しかも、あの世界以来の『あの男』が再登場だ!」

ガラハド

「しかし、今回はそれだけが目当てではない。あの唯という少女にも用がある。」

シャツフル

「何の用で?」

ガラハド

「それは、ひ・み・つ」

シャツフル

「あーもう、腹立つ!」

NOTE 5

「海賊とオーバーホールと唯の強化」

ジョーカー、新たなる強化!!



NOTE 5 海賊とオーバーホールと唯の強化（前書き）

ガラハド

「さて今回は、息子のクロノ・ドライバーのオーバーホールと、唯ちゃんの強化アイテムに関しての話をしよう。」

シャツフル

「今回俺は研究所で留守番だが、その分『あの男』が活躍するぞ！」

ガラハド

「『らきすた』アニメ版を見た人には、ピンとくるかも知れない『あの男』だ。」

シャツフル

「では、スタート！！」

## NOTE 5 海賊とオーバーホールと唯の強化

次の世界を目指し、銀の壁をひた走るシャイアン一行。

しばらく走っていると、いきなり頭上が暗くなりエンジン音が甲高く聞こえてきた。

「…あれは？」

「何、あれ。」

「あ、あれって海賊船だよ〜!!」

シャイアン一行が見上げた先にあったのは、船底から甲板まで派手に装飾が施されている巨大な海賊船であった。

高さ20m程まで降りてきたところで船底が開き、中からコンテナがロープに吊られて降りてきた。

コンテナには看板が取り付けられてあり、『アニメイト』と書かれている。

「あれは、店…だな。」

「まさか、あの店は…。」

「?」

空気が読めてない唯を除いて、2人はただ啞然としていた。コンテナの扉が開き、そこから現れたのは。

「見つけたぞ、伝説の少女A!!」

「おーい、息子よ!こっちだ、こっち!」

「やっぱり…。」

「父上…。」

「お〜じさ〜ん、やっほ〜！」

何と、アニメイト店長・兄沢 命斗とシャイアンの父・ガラハドが出迎えたのだ。

しかも、ガラハドに至ってはアニメイト店員の姿で。

「ちょっとおじさん、何やってんの?!」

「父上、どうしてここに?!」

「いやー、すまんすまん。実はクロノ・ドライバーのオーバーホールをするために、彼の船に乗せてもらったら、店長に店を手伝ってくれと頼まれてな。」

「俺は、今猛烈に感動している!あの伝説の少女Aに再び会えたのだからなあ!」

「は、はあ…。」

「…ところで用件は一体?」

店長のあまりの迫力に、冷や汗を流しながらたじろぐシャイアンとこなた。

こなたと唯は、店長の猛烈な勧めで止むなく店内に入り、店のあちこちを見て回っていた。  
すると。

「あつ、泉ちゃん!」

「お姉ちゃん!」

何と、峰岸 あやのと小早川 ゆたかが、店員姿でレジに立っ

ただ。

「あやのさん、ゆーちゃん！何でここに？」

「うん、次の世界に向かっている泉ちゃんを助けるために、博士と一緒に船に乗ったら店長さんに『店員2人が風邪を引いて休んでしまったから、店を手伝ってくれ』って頼まれて。」

「私も、店長さんに頼まれて。」

「そ、そうだったんだ…。」

あやのとゆたかの言葉に、少しだけ店長に同情したこなたであった。

一方、シャイアンは船内のラボに、父ガラハドと陣雷の世界以来久々に顔を見せた帯刀と共にいた。

「さあ、オーバーホールを始めよう。クロノ・ドライバーを台の上に。」

「ああ。」

シャイアンは、言われるがままにクロノ・ドライバーを中央の円筒形の台に乗せ、後ろへと下がっていった。

キイイイイ…ン。

スクヤナーが起動し、光がクロノ・ドライバーを通過する。

モニターに透過したクロノ・ドライバーが映し出され、内部が克明に表示される。

「父上、帯刀。ドライバーに異常は？」

「ふーむ。…大丈夫、今の時点で特に変わった点はないよ。」

帯刀の一言に、ホツとするシャイアン。

がしかし、油断はできない。

まだ細かいところまでは、はっきりとわかっていないからだ。

「よし、もう少し細かくスキャンしてみよう。」

再びスキャナーが起動し、クロノ・ドライバーを照らす。

すると、ガラハドが身を乗り出してモニターを見つめ始めた。

「…父上？」

「一体どうした？」

「ああ、メモリー部の基盤に故障が発生している。すぐにも修理しないと、まずいな。」

「故障？」

ガラハドは、急ぎクロノ・ドライバーを台から降ろすと、隣にある修理専門のラボに持っていき、すぐにオーバーホールを始めた。

マニピレーターが起動し、クロノ・ドライバーのカバーを外す。

現れた精密機器に修理用のアームが伸び、パーツが次々と外されていきスキャナーも同時に稼働、細かいパーツの故障箇所を調べていく。

「…全パーツ異常なし、メモリー部の基盤を交換するだけでオーバーホールは完了だ。」

「よかった、肝心のリード機能が故障してなくて。」

そして古いメモリー部のパーツを新規のパーツに組み替え、横にあるクレインの壺に直結したバックアップ部のシステムを起動させ、過去のデータを新規メモリー部に読み込ませる。

「よし、オーバーホールはこれにて終了だ。」

「ありがとう、父上、帯刀。」

「なに、礼はいいさ。」

「それよりも、試してみてください。塩梅を見てみたい。」

「わかった。」

シャイアンは、クロノ・ドライバーを腰につけライド・クロニクルからカードを出し変身した。

「マスカ・レイド!!」

『マस्क・ライド デイクライド!!』

変身は滞りなく完了し、ADは動きを入念にチェックしていた。

「OK、異常なしだ。」

「よし、変身ついでだ。店長と1戦交えてみるか?」

「…そう言えば、店長もライダーだったな。わかった、やってみよう。」

数分後、海賊船甲板の訓練場に兄沢がパイレーツドライバーを腰につけ現れた。

「遅れてすまない、シャイアン。」

「ああ、待ってたよ。」

「手加減は出来ないぞ、いいな？」  
「ああ、構わないさ。」

ディケイドライダーの派生種たるパイレーツドライバーは、他のライダーにカメンライド出来ないが、その分アタック・ライドは充実しており、単騎でも生還可能なサバイバビリティーを誇っている。

「ではいくぞ、変身！」  
『カメン・ライド パイレーツ!!』

兄沢は右腰にあるライド・パイレーツからカードを取り出し、パイレーツドライバーにセットイン、変身した。

その姿は、まるで海賊の帽子をかぶり、コートを着た仮面ライダーWにも見える。

色は兄沢を意識した赤、ズボン(?)部は黒、ブーツ・手袋は金色と色合いだけを見てもかなり派手である。

「では、テスト開始！」  
「いくぞ！」

『エクストラ・ライド クロム・レイバー!!』

いきなりパイレーツは1枚のカードをセットインし、クロム・レイバーを装備してADに斬りかかる。

「バカな!その武器は!!」  
「この武器が、君専用だと思わないでほしい！」

ADはライド・クロニクル・ソードで何とか受け返し、バックした後カードをライド・クロニクルから取り出しセットインする。

『マスク・ライド ルウ!!』

A Dが眩く輝き、騎士の姿のルウに早変わりし、カードを再度取り出しセフトインする。

『アタック・ライド フラガロック!!』

A Dルウの体から黄金に輝く2本の短剣：フラガロックが飛び出し、A Dルウの周りを高速回転しながら防御する。

「これでどうだ!」

「確かに防御はいい。…しかし!!」

パイレーツはクロム・レイバーを真上に投げると、それに合わせてジャンプし空中でクロム・レイバーを受け止め、下にいるA Dルウに向けてダイブした。

当然フラガロックは真上を防御するべく動き出すが、パイレーツは臆する事無く突入していく。

「…なっ!?!」

「戦いにおいて、この強引さが必要になる時もある!」

パイレーツはフラガロックを強行にすり抜け、クロム・レイバーでA Dルウを斬りつけようとした。

と、A Dルウは右手に持ち替えたブリューナクで防御し左のアップパーで迎撃する。

アップパーが命中しのけぞりながらも、空中できりもみをしながら着地するパイレーツ、体制を整えつつフラガロックを呼び戻し、次の1手を考えるA Dルウ。

「反射神経と勘は鋭いな、シャイアン。だが、力技はどうかかな？」  
「!!!」

パイレーツの次の1手。

それは、彼が次に手にしたカードが語っていた。

『アタック・ライド ゴリバゴーン!!!』

カードをセットインしたパイレーツの両腕に、金属製の巨大な籠手が装備され、急に力が高ぶってくる。

これぞ、シャイアンの知らぬ仮面ライダー…オーズ・サゴーズの主力兵器、ゴリバゴーン。

「な、何だあれは!？」

「これぞ、君の知らないライダーの力だ!」

パイレーツはゴリバゴーンを振り回し、ADルウに迫る。

「いくぞ!」

すると、パイレーツの腕にあったゴリバゴーンが、ロケットパンチの様に切り離され殴りかかってきたのである。

ADルウは一応ブリューナクで応戦するも、ゴリバゴーンの馬力にはかなわず、逆に押されてしまった。

「くっ、手強い…!!!」

さすがに力技では押せないと感じたADが、カードを出そうとしたところで。

「待った！そこまでだ。」

「何故だ、もう少し戦いたかったのに…！」

「店長、これは模擬戦ですよ！もう忘れたのですか！」

「あ、そうだった。…すまない、すっかり我を忘れてしまった。」

変身を解除し、さわやかに握手をして健闘を讃え合う2人。

「シャイアン、なかなかやるじゃないか。」

「店長の力量も、なかなかだった。」

そしてシャイアンは、まだ世の中には自分の知らないライダーや技もあるものだ、と痛感していた。

（自分も、まだまだだな。）

それが、今の彼の正直な感想である。

「あ、そうだ。店長、唯ちゃんをラボまで来るよう呼んできてくれないか？」

「唯？…ああ、伝説の少女Aとは別の少女か。わかった、呼んでくる。」

「彼女が、どうかしたのですか？帯刀。」

「ええ、実は彼女に渡しておきたい物があるのです。」

テスト後、ガラハドは兄沢に唯を呼ぶよう言付けておき、その場にいた全員がラボに移動した。

そして数分後、唯はラボにやって来た。

「あー、私がおか？」

「よく来たね、唯ちゃん。…実は、唯ちゃんが使っているジョーカーメモリーについてなんだけど…。」

「ジョーカーメモリー？」

唯は、懐にあるジョーカーメモリーを取り出し、ガラハドに見せた。すると、ガラハドはメモリーをしげしげと見つめ、そして口を開いた。

「今、唯ちゃんが使っているジョーカーメモリーでは、今後現れる強敵に立ち向かうのは困難だ。」

「…それ、どういう事ですか？」

「そのまま使えばパワー負けしてしまう、って事だな。」

「パワー負け…。」

ガラハドの言葉に、さすがの唯も言葉を失ってしまった。ジョーカーが、負ける…。

確かに、こなたがジョーカーを使っていれば実戦経験が豊富な彼女だけに、特に問題はなかっただろう。

が、使い手が実戦経験の少ない、しかもオリジン唯のコピーたる彼女にとっては死活問題である。

この突きつけられた課題に、唯は少し考え始めてしまった。

「……。」

「まあ唯ちゃん、そんなに思い詰めないで。今、それを解消するアイテムをプレゼントしよう。」

「何だろう？」

「それは一体？」

シャイアンが身を乗り出して注目する中、帯刀が隣のラボから白い布に包まれた物体を持ってやって来た。

「これが、ジョーカー専用のアップロードツール、ジョーカーブースターだ。」

「これが…。」

ガラハドが白い布を取った下には、銀色に輝くボックス型のツールがあった。

これこそ、ジョーカーを強化しスペック上のパワー不足を解消するジョーカーブースターである。

「使用方法は簡単、マキシマム・スロットに直接取りつけるだけでOK。後は、マキシマム・ドライブ同様横のスイッチを押すだけでジョーカーは更に強化される。」

「で、どの様に強化されるんですか？」

唯の問いに、ガラハドは後ろを向きながら、

「それは、自分の目で確かめてくれ。」

「…そうですね。」

唯は、新たに託されたアイテムを感慨深く見つめ、更に自信を高めていた。

一方こなたは、店内での買い物を通り終え、ゆたか達と今後について話し合っていた。

「ゆーちゃん、あやのさん、これからどうする？」

「うーん、このままお姉ちゃん達についていきたいけど…。」

「でも、店長さんの事も気になるし…。」

とそこへ、兄沢とシャイアンがこなたの様子を見に店内に現れていた。

しかも、今の話を聞いていたらしく兄沢は大量に涙を流していた。

「おろろおおおおん（泣）！！」

「店長さん?!」

「伝説の少女Aよ、ちょっと待ってくれ!…せめて、店員2人が戻ってくるまでしばらく彼女達をここに置かせてくれ。頼む!」

兄沢の陳情に、こなたは腕組みしながら、

「うーん。…ゆーちゃん達がよければ別にいいけど、どうする?」

「そうだね…。」

ゆたかは、しばらく考えた後、

「…私は店に残るよ。店長さんの力になりたいし。」

「泉ちゃん、ごめんなさい。私も残るね。」

「うん、わかった。でも、2人共無理はしないでね。」

こなたはゆたか達を兄沢に任せる事にし、そして2人は固い握手を交わした。

「じゃあ店長さん、ゆーちゃんとあやのさんをよろしくね。」

「ああ、任せてくれ。」

「ありがとう、店長さん。」

全てを終えたシャイアン達は、ガラハドや兄沢に別れの握手をして  
いた。

「シャイアン、もし縁があったらまた会おう。」

「ああ、その時はもう1度勝負したいな。」

「よし、今度こそ負けないからな。」

「おじさん、私もがんばるから応援してね。」

「ああ、もちろん。唯ちゃんも、がんばって。」

「うん！！」

「では店長さん、また会おうね。」

「もちろんだ、伝説の少女Aよ。いつでも店を開けて待っているか  
らな。」

そして3人は、横一列に並んで次の世界に向け、再びバイクを走ら  
せた。

「…こなた、あれでいいんだな？」

「うん、あそこの店長さんは頼れる人だから。」

「ま、確かにな。」

それから数分後、兄沢達を乗せた海賊船もまた、銀の壁をくぐり、  
別の世界へと旅立っていった。

(伝説の少女Aよ、また会おう。)

そう、心に誓いながら。

しばらく走らせていると、後方から新たなバイク音が2台分聞こえてきた。

「あのバイク音は？」

「あれは間違いなくマシーン・キバーと凱火のエンジン音。みゆきさんとパティちゃんだ！」

「やった、援軍だよ。」

しばらくして、2人はシャイアン達の元にたどり着く。

しかも、みゆきの場合はバッグに大量の着替えを詰め込んで。

「みゆき、その着替えは何だ？」

「あ、はい。鬼に変身した時、衣服まで燃えてしまうので解除した時の事を考えて、持ち歩いているのです。」

「…何だと!？」

シャイアンは、こなたが響鬼に変身した時、元に戻った際衣服がそのままだったので、炎そのものが1種のオーラみたいなものだと思っていた。

しかし、みゆきの説明により変身時の炎は本物だとわかり、シャイアンは少し驚いた。

「おやあゝ? シャイアンさん、額に冷や汗が浮かんでいるけど、まさかみゆきさんを見て変な事を考えては…?」

「こ、こら、こなた!!! 大人を茶化すな!」

「ま、そんな冗談はさておき。よくここがわかったね、パティちゃん。」

「モチロンデース、シャイアンさんのコトをアニメンチヨウサンからキキマシタ。」

「へえー、店長さんがパティちゃんに。」

意外ないきさつをパティから聞いたあなたは、アニメ店長の行動力に改めて敬意を表した。

「ま、なにはともあれだ。みんな、いくぞー！」

「『『『『<sup>デース</sup>了解！！』』』』」

シャイアン達は再びバイクを動かし、銀の壁をくぐり抜けた。

さあ、次の世界に待ち構えている出来事は…？

NOTE 5 海賊とオーバーホールと唯の強化（後書き）

銀の壁を抜け、一行がたどり着いたところ。

そこは、夜だというのに光り輝く都市が見える丘の上であった。

「ここは、一体？」

「どこでしょう？」

「？」

「ホワイ？」

4人が首をかしげながら都市を見る一方、クレインの壺からクロノ・ドライバーを通じて情報を得たシャイアンが4人に向かって口を開いた。

「…ここは近未来の世界の風都、『ネオ・フウト』だ。」

そしてその頃、ある犯罪組織を追う1人の青年警官が、愛車と共に犯人達を追っていた。

彼の名は、ウラシマ・リュウ。過去の世界から来た青年である。

次回、「仮面ライダーアナザーディケイド」青い瞳の破壊者」  
は、

「皆は早くルードヴィツヒ様のところへ!」

「こうなったら、こっちも切り札を使うぜ!」

「マスカレイド、か…。」

TOUR 26

「仮面ライダーアークスの世界」with未来警察ウラシマン」  
ネクライム・メモリー」

今、白き超人が未来世界に舞う!!

XX

「皆さんお待ちかね！最新作が完成しました！」

シャイアン

「更新が遅すぎる！」

こなた

「一体何があったし。」

XX

「編集や修正に時間を費やしたら、いつの間にか…。」

シャイアン

「まあ、そつ言つ理由なら仕方ないな。」

こなた

「私達が向かう次の世界は、何と未来世界！」

シャイアン

「しかも、作者がどうしてもやりたかったタツノコ系ライダーだそ  
うだ。」

XX

「果たして、未来世界のライダーとはいかなる者なのか？」

こなた

「OPは久々にこれでやってみよう！」

リュウ

「宇宙キター!!」

ソフィア

「歌は気にしないで」

クロード

「さあ、お前の罪を数えろ！（キリッ）」

権藤

「お前ら真面目にやれええええええええええ!!」

シャイアン達が次に訪れた世界：そこは近未来の世界であった。そして、この世界の都市『ネオ・フウト』を見下ろせる丘に来ている。

ちなみに今時刻は午後8時を回っており、こなた達が遠くを見ると夜の街並みが派手に明るく、まるで太陽の様に輝いていた。

更に、ネオ・フウトの象徴とも言える風車群とネオ・フウトタワーはライトアップされており、派手さを強調している。

「ここが、未来の風都：。」

「ああ、しかもここネオ・フウトは、エコが大幅に進んだ環境に優しいモデルタウンとして、世界中に知れ渡っている。」

「へえ〜、すごいね〜。」

「さすが風都、街並みもきれいですね。」

「ナンダカSFのセカイにきたミタイデース！」

とここで、シャイアンは辺りを見回し何かを探し始めた。まるで誰かを探しているかの様に。

「?どしたの?」

「…少し静かに。」

「あ…。」

4人は口をつむって後ろにまわり、シャイアンも草陰から遠くの方を見る。

すると、遠くからサイレン音が響き、パトカーが過ぎ去っていくのを見た。

しかも、そのパトカーは車輪のないエアカーである。

「…やはり、ここは近未来の世界だ。SFノベルの世界そのままだな。」

シャイアンは、本物のエアカーを見て感嘆の声を上げたが、

「しかし知らなかったねー、シャイアンさんがSF好きだったなんて。てつきり、騎士物語とか堅い本ばかり見ているものだと思ってたけど、やはり男なんだねえ。」

「コホン。…ま、それはさておき。急いで、あのパトカーの後を追うぞ。」

こなたに茶化されたシャイアンは、軽くせきをしてごまかし、マシン・ヴァーミリオンに乗り込みパトカーの後を追った。4人もバイクに乗り込み、後を追う。

一方市街地では、黒いラバースーツにバトルプロテクターを着込んだ集団を追う、1台の改造ワーゲン・ビートルがあった。

あちこちに未来のテクロノロジーが盛り込まれたワーゲン・ビートル…マグナビートルに乗り込んでいるのは、ドングリ頭をした色黒肌の青年である。

そう、彼こそこの世界の仮面ライダー・アースことウラシマ・リユウなのだ。

『おい、ステインガー部隊！おとなしく観念しろ！お前達はすでに袋のネズミだ！』

「…ちっ！」

リュウはスピーカーの出力を最大にして降伏を勧告したが、当然ながらステインガー部隊は聞く耳を持たず走り続ける。

ステインガー部隊が所属する、犯罪組織・ネクライム。

彼らは、総統フューラーを頂点に、世界中を恐怖のドン底に叩き落としたこの世界最悪の犯罪組織である。

ネオ・トキオを拠点とした彼らは、誘拐、脅迫、果ては殺人や破壊行為…とにかくやりたい放題にやりまくり、世間を完全に脅かしていたのだ。

しかし、過去の世界からやって来た青年…ウラシマ・リュウにより総統フューラーは倒されネクライムは壊滅し、大幹部・ルードヴィツヒは行方不明となり、一時の平和が訪れていた。

が、ルードヴィツヒはネオ・フウトに姿を現し、かつてガイア・メモリーを販売して富を得た企業…アルバート・コンツェルン本社跡地に本拠地を構え、再び恐怖（ルードヴィツヒ曰く犯罪の美学）をまき散らすべく再び活動を開始した。

そのためにリュウが所属している機動メカ分署・マグナポリス38も、ネクライムがネオ・フウトに現れた情報をキャッチし、わざわざネオ・トキオから出張してきた次第である。

「おい、ここは誰が足止めするんだ？時間稼ぎが出来れば、誰でもいい。」

ステインガー部隊のリーダー、ウルフが仲間に向かって声をかける。

そこに名乗り出たのが、まだ若い20代の男…諜報員のホークであった。

「よし、俺がいくぜ！」

「ホークか。…わかった、後は任せた！」

「皆は早くルードヴィツヒ様のところへ！」

「…すまない、ホーク。」

「あんな奴、やつつけちゃって！」

「…任せた！」

「任せとけて！」

ウルフは、ホークに後を託すと、風のように姿を消した。

同じ仲間のシャーク・キャット・ベアーに励まされ、俄然やる気を見せさせるホーク。

「行ったか…。さて、派手に暴れるとしよう！」

皆が去るのを確認したホークは、バトルプロテクターの左腕部からUSBメモリー型のアイテム…ネクライム・メモリーを取り出すと、スイッチを押しメモリーを起動させた。

『サンダーバード！』

「いくぜ！」

『サンダーバード！！』

そして、ホークはネクライム・メモリーを首にあるコネクターに挿入し、そこからほとばしるエネルギーと共に足元から一陣の旋風を巻き起こす。

体にまとわりつく旋風は、やがてホークの体を別の姿に形作り次第に止んでいった。

その姿は、ハヤブサの頭部に背中に巨大な翼を持ち、羽毛に覆われた体に強靱な爪。

まさに、インド神話のガルダかエジプト神話のホルスを思わせる屈強の怪人、サンダーバードドーパント。

これが、ネクライム・メモリーを使ったホークの力なのである。

『こいつの力で奴をブチのめしてやるぜ!!!』

ギエエエエー!!!

甲高い吠え声を立て、サンダーバードドーパントは天高く飛翔した。

一方、ステインガー部隊を見失ったリュウはマグナビートルから降り、路地という路地を駆け足で探していた。

と、そこへ1台のパトカーが現れ、リュウの近くで止まった。

「おい、リュウ!」

「クロードか、丁度よかったぜ!」

「奴らはどうした?」

「ああ、路地裏に行ったところで見失った!早く追いかけないと、奴らの事だ、何をしでかすか!!!」

「そうだな。よし、急いで追いかけよう!」

ブロンドの髪に整った甘いマスク、スマートな体つきのイケメン刑事:クロード・水沢と合流し追跡を再開するリュウ。  
すると、

「...むっ?!」

「!?!」

遠くから甲高い声が2人の耳に飛び込んできた。

「おいクロード、今の声は…!」

「ああ、間違いない。奴らがネクライム・メモリーを使ったんだ!」  
「こつなつたら、こつちも切り札を使うぜ!」

リュウはマグナビートルに引き返すと、座席からバツクルを持ち出し腰に装着してクロードの元に戻ってきた。

このバツクルは、見た目こそ唯が使用しているロストドライバーに似てはいるが、右の部分だけ別のメモリーが用意されているのか、全く異なる形の小型のスロットが備わっている。

「リュウ、あれを使うんだな!?!」

「ああ、もう四の五の言ってる暇はないからな!クロード、バトルプロテクターの準備だけはしておけよ!何が起こるか、わからないからな!?!」

「言われなくとも!」

クロードもまた、愛車のパトカー…スポイラーに戻るや運転席に座り込み、ステアリング近くにあるスイッチを押しシステムを起動させた。

クロードの肩や足、そして腕に白いプロテクターが装備され、更に胸部アーマーとヘルメットを装備してバトルプロテクターが完成する。

ルーフ部が開き、勢いよく上空に射出され、輝かしい勇姿を見せ大地に着地するクロード。

「リュウ、いつでもいいぜ!」

「OK、じゃあいくとしようか!」

一方、パトカーの後をつけていたシャイアン一行も現場に到着していた。

「あれが未来の警官か…いや〜かつこいいね〜。」

「本当にね〜。」

「アノドングリアタマのポリスマンもナカナカイカシマース!」

「…みんな、しゃべるのもいいが、今は臨戦態勢をとった方がいいのではないのか?」

「そうですね、泉さん。平野さんもパティさんも、準備だけはしておいた方がいいですよ?」

こなた達の会話をさえぎるように、シャイアンとみゆきは3人を諭させる。

ようやく3人が落ち着くと、シャイアンはクロノドライバーを腰に装着して時を待つ。

4人も、各々支度を整えシャイアンと共に時を待つ。

「よっしや、やるか!」

リユウは、懐に手を伸ばし何やら器具を取り出した。

その器具は、やはり唯が使用しているガイアメモリーに似ており、白いボディに赤いアルファベットでAと書かれている。

『アーガス!』

「いくぜ、変身!」

『アーガス!』

リュウがメモリーのスイッチを押し、バツクルにあるスロットルに挿入し力強く押し込め、スロットルを横に倒す。

するとどうだろう、リュウの周りに光が渦巻き、白い素粒子が集結し始め新たな姿を形作り始めた。

やがて、素粒子が定着し光の渦が止むと、リュウはこの世界を守るライダーに変わっていた。

リュウが変身したライダーは、従来のライダーとは異なる特徴を持っている。

体にぴったりフィットし、筋肉の張りもよくわかる写実的な白いボディに、スーツに体の左右に縦に走る黒いライン、バツクル以外はブーツと手袋のみの簡単な装備、マスクは従来のライダーと違う赤いゴーグル型の複眼付き…と、今までのライダーとは全く違うシンプルな形態をしているのだ。

仮面ライダーアークス…それが、この世界を守るライダーの名前である。

『…あいつは！見つけたぜ、アークス！！』

その頃サンダーバードドーパントは、空中からアークスのいる場所を確認し、急降下を開始した。

先制攻撃を仕掛ければ、アークスを一気に仕留められる…そうすれば、後は警察の奴らを叩き潰すのみ！

サンダーバードドーパントは目の前にいるアークスを視覚に捕らえ、更にスピードを上げる。

（今まで俺達ネクライムの憂いだったアーガス…ウラシマ・リュウを倒せば、ルードヴィツヒ様も安心できる。アーガスには悪いが、消えてもらおうか…！）

更に勢いを増し、サンダーバードドーパントは急降下を続けるが。

『…！』

ガゲンツッ…！

サンダーバードドーパントの翼に弾が命中し、撃墜されたのだ。最初は、こちらに気づいたアーガスが狙い撃ちしたのではないか？と思っていたが、目を凝らして遠くを見ると道端に黒い人影がクロスボウ片手に立っているのが見えていた。

「来たぞ、リュウ…！」

「ああ、あの姿からするとホークだな！」

リュウ達も、サンダーバードドーパントの接近に気付き臨戦態勢を整えていたが、突然サンダーバードドーパントが何かに射抜かれ撃墜されたのを見て驚きの声を上げていた。

「何っ…！ホークが撃ち落とされた、だと…？」

「おいリュウ、お前何かしたのか？」

「まさか。俺はまだ何もしてないぜ！」

「じゃあ一体誰が…。」

2人は急に気になりだして、辺りを見回し始めた。

すると、背後に何者かがいるのに気づき振り返るや、そこにいた黒いライダーの姿と数名の人影を確認した。  
そう、黒いライダーの正体はこなたが変身したTクウガ・アメイジングフォームである。

あの後、こなたは遠くから急降下してくるサンダーバードドーパントを視界に捕らえ、トライオーに変身して路地に飛び出した後すかさずクウガ・アメイジングに変身し、足元にあったおもちゃの銃を拾いペガサスボウガンに変え、狙い撃つたのである。

「あんだ達は、誰だ？」

「待って下さい、我々は怪しい者ではありません。…それよりも、この近辺に多数の敵の気配を感じます。」

「何っ！まだいたのか、奴らの手下が！」

「あ、はい。…先程撃ち落とされた鳥型の怪物も、すぐに息を吹き返して来ます。気をつけて下さい！」

リュウとクロードの問いにシャイアンとみゆきが答え、リュウはしばらく考えた後結論を出した。

「わかった。…クロード、ここは彼らの力を借りよう！」

「しかしリュウ、どこの誰だかわからない奴に協力を求めるのは、危険すぎないか？ネクライムの手下という可能性だってある！」

「けど、何も手を打たないよりはましだ！！」

さすがのクロードも苦い顔をして考えたが、敵が迫っている事が事実だとなれば、確かに人手がいるかもしれないと思い、しぶしぶ承諾した。

「むう…、仕方がない。では、周囲から迫り来る敵の撃破と俺達の援護をしてもらえないか？ぶしつけですまないが、よろしく頼む。」  
「任せてください。…こなた・唯・パティは、周囲から来る敵を撃破してくれ。みゆきと私で、彼らの援護に向かう！」  
「…了解！」「」

シャイアンは、すぐにこなた達にアーガスの後方を守るよう指示を出し、みゆきはシャイアンと共にサンダーバードドーパントに向かっていた。

『くそおつ、まさかあんな見ず知らずの奴らに邪魔されようとは。…おいお前等、出番だ！！』

撃墜され深手を負ったサンダーバードドーパントが口笛を吹くと、至る所からホークと同じ姿の戦闘員が多数現れ、そしてネクライム・メモリーを取り出し体にあるコネクターに差ししていく。

『マスカレイド！！』

やがて戦闘員は、黒スーツ姿に肋骨を象った顔つきの仮面をつけたマスカレイドドーパントに変わり、シャイアン達を取り囲んだ。

「マスカレイド、か…。」

「こんなにたくさんいるよ、どうする？」

「コナタ、イツキにヤツツケまショウ！！」

パティの進言に、トクウガ・アメイジングは軽く頷き、2人も変身して迎え撃つ。

「キバット！」

『よっしゃあ、キバっていくぜ！ガブツ！！』  
「ヘンシン！」

『ジヨーカー！』

「変身！」

『ジヨーカー！！』

唯とパティも変身を終え、3人はくつわを揃えてマスカレイドドーパントの大軍に向かっていった。

一方、クロードもマスカレイドドーパントを蹴散らしていったが、幾分数が多く苦戦を強いられていた。

このままでは、マスカレイドドーパントに押し切られるのは時間の問題である。

「いかん、あのままだと…マスカレイド！！」

『マスク・ライド デイクライド！！』

「今、助けに入ります！」

チーン…ポウツ…！

シャイアンとみゆきも、3人に遅れて変身しマスカレイドドーパントをなぎ倒していきながらクロードを援護する。

「大丈夫ですか？」

「ああ、大丈夫だ。何とか奴に喰いつきたいが、この数では…。」

「ここは我らに任せて、あなたは目の前の敵の方を…！」

「すまない、恩に着るぜ…！」

シャイアン達の加勢にアーガスは軽く礼を述べ、クロードも勢いを止める事なく、マスカレイドドーパントを撃破していく。

「リュウ、あまり調子に乗るなよ！」

「ああ、クロードもな！」

クロードに励まされ、アーガスはサンダーバードドーパントに再び肉薄し、パンチやキックで徐々に体力を削っていく。

そして、回し蹴りが決まり後方に吹き飛ばされたサンダードーパントは、だらしなくよろけながらも立ち上がり果敢に向かっていった。更に追い討ちをかけるべくダッシュをかけ、間合いを詰めるアーガスだが。

『くっ、やるな！…だが、これはどうかな？』

「何っ！！」

すると、サンダーバードドーパントの口から高圧の稲妻が放たれた。その稲妻をアーガスが察知し左にかわすと、稲妻は右側の大地に命中しアスファルトをうがった。

その威力は凄まじく、まるで月にあるクレーターのように地面に巨大な穴が開き、土煙がもうもうと舞い上がる。

「な、何て威力だ。」

「確かに威力はすごい。が、当たらなければ大丈夫だ！」

クロードは稲妻の威力にひるんでいたが、アーガスは尚も稲妻を放ち続けるサンダーバードドーパントにジャンプや回避で再び迫り、腹部にフックを1発叩き込む。

「そおいつ!」  
『ぐふっ!?!』

更に、ハイキックをあごに決められ真上に吹き飛ばすサンダーバードドールパント。

追い打ちをかけるべく、アーガスもジャンプしてピタリと捉え、横蹴りを決める。

「これでも喰らえ!」

『がはうっ!…くそっ、まだだ!戦いは、ここからだ!』

派手に吹き飛ばされながらも姿勢を制御し着地するサンダーバードドールパント、構えを解く事無く次の攻撃に備えるアーガス。そう、まだ彼らの戦いは終わらないのだ…。

TOUR 26 END

TOUR 27 続く

TOUR 26 仮面ライダーアークスの世界 〈with未来警察ウラシマン〉

次回「仮面ライダーアナザーディケイド 〈青い瞳の破壊者〉」は、

「何としてもアレを手に入れねば…！」

「次に奴らが狙うのは、ヒジカタ研究所。ここしか考えられません。

」

『ジョーカー・アップグレード！』

「これが、音撃戦士最強の力です！」

TOUR 27

「ヒジカタ研究所防衛戦」

今、切り札と鬼が最強の力の封印を解き放つ…！

XX

「2012年初投稿となる本作、まずは研究所をめぐる攻防を描いた27話からスタート!」

こなた

「また、今回は唯ちゃんのジョーカーとみゆきさんの響鬼がパワーアップ!」

シャイアン

「更に、新しい試みも何個かやるらしい。」

XX

「では、まずこちらから!」

(闇の中、前から猛ダッシュで走る唯、みゆき)

ザンツ!

(2人が足並み揃えて同時に止まり、まず唯が、続いてみゆきが変わ身) 横からライトアップ

唯・みゆき

「「仮面ライダーアナザーディケイド……」」

ドンドンツ! 太鼓の音

(即変身後、決めのポーズ)

ジョーカー・響鬼

「「この後すぐ!」」

アーガスとサンダーバードドーパント、ADチームとマスカレイド軍団の戦いは最終局面に突入していた。

Tクウガ・アメイジングマイティの攻撃によりマスカレイドドーパントの数は徐々に減っていき、キバも対多数迎撃用にバツシャーフオームへと切り替え反撃する。

ジョーカーはブーストを使おうか考えたが、結局は使わないままマスカレイドドーパントにキックやパンチを繰り返していき、ADはライド・クロニクル・ガンモードでマスカレイドドーパントを迎撃し次々とスコアを伸ばしていくが、数が多い上に追加が止めどもなく現れるため、仕方なく新たにカードを出しセフトイン、再変身した。

「数が多すぎるな！ならば…！！！」

『マスク・ライド グランザム！！』

深緑色をたたえたクワガタのライダー・グランザムに変身したADは、新たにカードをセフトインする。

『アタック・ライド スパイラル・デバスター！！』

右手に竜巻が宿り、それをマスカレイドドーパントの群れに叩き込む。

「くくわあああああ！！」「」

瞬間に、マスカレイドドーパントは竜巻の餌食となり壊滅していった。

一方響鬼は、音撃棒・烈火を巧みに操り、ビルに火弾を当てる事なくマスカレイドドーパントを焼き払い、途中で鬼闘術・鬼爪に切り替えながらテンポよく撃破する。

彼らの奮闘に触発されたのか、クロードもマスカレイドドーパントにパンチを繰り出し、数人をまとめて殴り倒していった。

瞬く間にマスカレイドドーパント数人を残して圧倒するAD達、啞然として立ち尽くすサンダーバードドーパント。

『ば、馬鹿な。あれだけいた部下が、たったこれだけに…!』

「残念だったな、ホーク。」

「年貢の納め時だ、覚悟するんだな。」

目の前を見据え睨みを効かすアーガスと、全ての敵をを片付け加勢したADグランザムがサンダーバードドーパントに歩み寄り、距離を縮める。

すると、サンダーバードドーパントは大きく深呼吸しエネルギーを蓄えはじめ、そして最大出力で稲妻を放った。

『おのれ!…:こうなりやヤケだ、こいつを受けてみるおおおおお』

『!』

「!」

ADグランザムは横に飛んで稲妻を回避したが、アーガスは真上に軽く回避し、左のメモリスロットの下部にある小さなアーガスのマスクの形をしたパーツ…:ミッションメモリーを取り外すと、右にある別形状のスロットにミッションメモリーを挿入し押し込めた。

『アーガス・トランス・イグニッション!』

機械音が響くと共に、アーガスの左足に光がほとばしり始め、そしてキックを放つ体制に入り急降下を開始した。左足を軸にして光の渦が巻き起こり、渦はドリルの様に高速回転してサンダーバードドーパントに迫る。

フライング・ドリル：アーガス最強のキック技である。

『し、しまった！！』

サンダーバードドーパントは傷ついている翼を広げ飛び立つ体制をとっていたが、時すでに遅し。

フライング・ドリルはサンダーバードドーパントの胸板に命中し、派手に火花を散らして吹き飛ばす。

そして大地に叩きつけられ爆発、ネクライム・メモリーはホークの体外に吐き出され粉々に砕け散った。

地面に大の字になり、天を仰ぎ見るホーク。

「ちっ、俺の悪運もここまでか…。」

ホークは、軽く舌打ちしてがっくりとうなだれた。

「ホ、ホーク様か！」

「まずいぞ、退却だ！」

サンダーバードドーパントが倒され、残った部下が退却したのを見てトライオー達は深追いするのをやめ、AD達と合流した。

「シャイアンさん、敵が引いていったよ。」

「ああ、ありがとう。…今回は以外と手間取ったな。」

そしてAD達は、アーガスの元に駆け寄り互いの無事を確認した。倒れたホークの方を見るが、奴は完全に気絶していて、ピクリと動かない。

その後、リュウがホークに手錠をかけ、クロードはネオ・フウトの警察署に連絡を入れた。

「これでは尋問は無理だな…。完全に気絶しているし。」

「ああ、そうだな。」

変身を解除したリュウは、クロードと共にホークを見て大きくため息をついた。

本来なら、気絶する前にあれこれ情報を聞き出したかったのだが、ごらんの通りのびていては無理である。

「これが悪人の末路、か…。」

「何だか、可哀想…。」

「仕方ありませんね、これも因果ですから。」

「デモ、ヒトツのアクがキエタコトはジジツデス、ソレをウケトメマシヨウ。」

「で、これからどうするか。おやっさんに聞いてみるか？」

「でもなあ、おやっさんが何と云うか…。」

「なるべく早めに決めてほしいのだが…。」

シャイアンは、リュウ達と今後泊まる場所をどうするか、こなた達を背にして話し合っていた。

響鬼に変身したみゆきが変身を解除しており、その光景をシャイアン達に見せたくないためである。

響鬼に限らず、「鬼」と呼ばれる音撃戦士は、変身解除の方法を間違えると全裸になってしまうため、慎重に変身を解除しなくてはならないのだ。

話し合う事数分。

「もういいよー。」

こなたの声が3人に届き、一斉に振り返るとすでにみゆきはセーラー服に着替えた後であり、シャイアンはホッと胸をなで下ろしていた。

もつとも、リュウとクロードは少し期待していた事もあり、がっかりとうなだれていたが。

「君達が、リュウとクロードを助けた旅人なのかね？…わしの名は権藤 透、危ないところを助けてくれてありがとう。」

「いえ、どういたしまして。私の名はシャイアン・ブルーローズ、彼女達の…まあ、保護者みたいな者です。」

中肉中背、そして白髪 of 男性…権藤 透に握手し、お互いに自己紹介するシャイアン。

結局、彼等から詳しい事を聞きたいリュウの提案により、シャイアン達はマグナポリス38署に一時的だが世話になる事になり、シャイアン達もネオ・フウトを…いや、ともすれば再び世界を脅かすかもしれない敵に戦いを挑むリュウの戦いぶりに共感し、力を貸す事をリュウ達に打ち明けた。

そしてこの後、過去に巡った世界と旅の目的をリュウ達に説明したのだが、彼らは目を点にして聞いていた。

「しかし、平行世界が実際にあるとはな。未だに信じられんよ。」  
「確かにそうですね、おやっさん。で、それを証明する物は？」

シャイアンの話聞き、信じられない顔をする権藤と、話自体に疑問を抱きシャイアンに証拠提出を求めるクロード。

「…その疑問の答えは、ここにありません。」

すると、シャイアンは懐にしまつてあつたライド・クロニクルを取り出し、収納してあるマスク・ライド・カードをリュウ達に見せた。これを見せればわかつてくれるかも知れない、とシャイアンは考えていたのだ。

と、そこへリュウがカードに興味を持ったのか、

「シャイアンさん、ちょっとカードを借りていいか？」

「別にかまいませんが？」

リュウは、カードを手にとると軽く念じ始め、カードの記憶をたどり始めた。

実は、リュウが過去から来た際ウラシマ・エフェクトと呼ばれる効果により超能力を身につけていたのだが、最初のうちは本人にも自覚がなかったのか使う気配が全くなく、結局総統フューラーとの最終決戦時にやっと覚醒、その力でフューラーを倒したのである。

数分後、念じ終えたリュウは権藤警部に笑顔を見せた。

「どうやら何かがわかつたらしい。」

「おやっさん、どうやら彼は嘘はついていないよ。ものすごい力を感ずる。」

「そうか、本当か。」

事の真実を知った権藤は、改めてシャイアンに握手を求め、彼も快く握手に応じた。

「いや、疑って悪かった。こちらからよろしく。」

「いえ、こちらこそ。」

その後、お互いに自己紹介した後リュウ達とシャイアン達はしばしの間会話をしながら息抜きをしていた。

途中でクロードが4人に色目を送っていたが、シャイアンが間に割って入ったため碌に会話も出来ず、がっくりとうなだれていた。

「:or z」

「シャイアンさん、まあここは穏便に。」

「そう言う訳にもいかない。これでも私は騎士の家系、女性を守るものだと教えられているので。」

「こなた、思ったより彼は頭が固いな。」

「融通が効かないのは、今に始まった訳じゃないからねえ。」

更にこの後、こなたの実年齢を聞いてリュウまで落ち込んでしまったのは、言うまでもない。

「どうせ、俺なんて:or z」

「こなたが俺より年上なんて:パーティと同級生なんて:or z」

ちなみに、リュウは16才である事も伝えておこう。

その頃、ネオ・フウト近郊の廃墟と化したオフィス・ビルに、ホークの手下達が引き返して来て、ウルフに報告をしていた。そう、ここがネクライムの現在の本拠地：アルバート・コンツェルン本社跡地である。

「…そうか、ホークがやられたのか。」

「はい、それは壮絶な戦いぶりでした。」

「ホーク…。よし、わかった。この事をルードヴィツヒ様に伝えよう。」

「ありがとうございます、ウルフ様。最後までホーク様の力になれず、無念です…。」

ホークの手下から報告を聞いたウルフは、無念の表情をかみ殺し、ルードヴィツヒが控えている旧社長室へと足を運んだ。

旧社長室のドアをノックし、部屋へと入っていくウルフ。

そして、旧社長室の椅子に腰を下ろしワイングラスを傾けているブロンドの男に声をかけた。

「ルードヴィツヒ様、ホークの部下から報告がありました。…ウラシマ・リュウ…いや、アーガスにやられたたそうです。」

「…ホークが捕まったのか。」

男は、報告を聞くと椅子から立ち上がり夜空を仰いでいた。

そしてワイングラスに注がれていたであろうワインを一気に煽り、ウルフの方を向く。

男はスラッとした背丈のナイスガイで、細身の体にブロンドの髪をアップにまとめた、モデルでも十分に通用するルックスを持っている。

更に、磨き抜かれた白い肌を引き締まった甘いマスクを持っている

が、たった1つだけ違う物がある。  
それは、眼力。

鋭くナイフの様な蒼い目は野心と欲望に燃えており、睨んだだけで心の芯から凍りつきそうな位の破壊力を秘めている。  
彼こそ、アドルフ・フォン・ルドヴィツヒ。フューラー亡き現在のネクライムの総統である。

「やはり、ネクライム・メモリーの完成度はまだ低い様だな。」

「はい：もう少しメモリー自体の完成度が高ければ、ホークは今頃ここに帰ってこれたのですが。」

「ホーク…。」

ウルフの報告に肩を落とすルドヴィツヒ、今にも叫ばんとし、それを押し殺すウルフ。

やるせない空気が、2人のいる空間を包む。

「しかし、朗報もあります。ホークが足止めをしてくれたおかげで、貴重な情報を持ち帰る事が出来ました。」

「…そうか。」

ウルフはルドヴィツヒの近くに歩み寄り、懐にしまっていたUSBメモリーを手渡し後方に下がり、ルドヴィツヒはメモリーをノートパソコンに接続しデータを引き出していった。

検索を何回も重ね、更にデータを解析していく…。

「あつた、これだ！！」

ルドヴィツヒはキーを叩く手を止め、とある情報に目を向けた。  
それは、ネクライム・メモリーに関する情報であつた。

そもそも、ネクライム・メモリーはアルバート・コンツェルンが開発した幻獣型メモリーをネクライムが更に改良の手を加えた物で、元となったメモリーはかなり高度な性能を持ち、次世代型メモリーとして開発が期待されていた。

しかし、『ある事件』が元で開発は頓挫し、アルバート・コンツェルンは風評被害を受け解体してしまったのである。

その『ある事件』とは、別部署の研究所で引き起こされたバイオ・ハザード。

幻獣を生み出すのに欠かせない人工ウィルスが異常発生、所内に蔓延し所員がモンスターに変化してしまったのである。

その圧倒的すぎる力に誰もが驚愕し、絶望の2文字が頭をよぎっていた。

が、当時の所長が万一を考えて開発していたメモリーを使いモンスターを撃破、幸いウィルスの所外流出も起こらず事態は数日で収拾した。

その時所長が使ったのが、現在リュウが所持しているアーガスドライバーとアーガス・メモリーなのである。

「いかがでしょう？ ルードヴィツヒ様。」

「よくやった、ウルフ。これで我らは再び立ち上がる事が出来る！」

「お喜び頂き、恐縮です。」

ウルフが一礼して退室した後、ルードヴィツヒは夜空を眺めながら力なくため息をついていた。

無理もなかった。すでに部下も大半が失われ、ホークも捕まった。

嘆くな、と言えば彼の気は楽になるかもしれないが、今の彼には何

を言っても聞こえていない…否、聞く耳を持つてはいなかった。

「何としてもアレを手に入れねば…！」

ルードヴィツヒは、しばらく夜空を眺めた後旧社長室を後にした。

午後11時35分頃、シャイアンとリュウ達は別室でネクライムへの今後の対策について話し合おうとしていた。

こなた達とは言えば、署内の空き部屋を適当に見つくり、そこに銀の壁から取り出した寝袋を人数分置いて就寝している。さすがのこなたも疲れたのか、ぐっすりと眠っている様だ。

さて、話し合いに入る直前になり、明るい声が室内に飛び込んできた。

「パトロールに行ってきましたあ〜。」

「おつ、ソフィアか。おかえり。」

「あれ？こちらの方は？」

「彼は、我々の協力者だ。まあ、心配しないでくれ。」

パトロールから帰ってきた少女は、背丈がかがみ位はあり、緑のシヨートヘアーにつやのある肌、スマートな体つきを黒のタンクトップとピンクの半ズボンにスカジャンでコーディネートした、まさに健康優良児である。

彼女の名はソフィア・ニーナ・ローズ、マグナポリス署の女性刑事である。

さて、ソフィアを交えたシャイアン達は、まず先程起こった事件についての話を始めた。

「まず最初にネクライムが狙っていたところの地図を見せてくれ、リユウ。」

「ああ。わかってるさ、おやつさん…今回スティングァー部隊が襲ったのは、ネオ・フウトの情報統括センター。しかも、ガイアメモリーの開発に関する情報をセンターの端末から手に入れたらしい。」

リユウは、中央に設置してある大型タッチパネルでネオ・フウトの3Dマップを出し、中央にある建物をタッチし説明する。そんな中、シャイアンはある事を思い出していた。

ここで話を少し前に戻そう。

事件解決後、シャイアンは近くにいたこなたに1つの疑問をぶつけた。「…こなた、ちょっと聞いていいか？」

「ん、どしたの？」

「ガイアメモリーは、こんなに簡単に破壊出来る物なのか？」

実は、シャイアンはガイアメモリーが破壊可能だった事は全く知らず、ずっと壊れない物だと思っていたのだ。

しかし、以前ジョーカーの使い手であったこなたは、あっけらかんと、

「ううん、必殺技クラスの威力でなきゃ破壊出来ないよ。…まあ、耐性はかなりあるから少しの衝撃じゃ破壊出来ないけどね。」

こなたの話の思い出した後、シャイアンは3Dマップを見ながら少しずつ推理し始めた。

まず最初に気になったのは、ガイアメモリー自体耐久性がどの位あ

るかである。

もし、こなたの話が本当なら、メモリーはA DのF A Rでも破壊出来る程の固さしかない。

現にメモリー自体はアーガスの攻撃により粉々になっており、うまくすればこなた達でも破壊可能である。

となれば、向こうも破壊不可能な程頑丈なメモリーを欲するのが当然と言えよう。

リュウ達の会話が進む中、シャイアンは1人マップに目を凝らす。

リュウが現在説明している情報統括センター襲撃事件と3Dマップを照らし合わせれば、ネクライムが次に何をしようとしているのがわかるはず、と。

シャイアンは3Dマップの隅々に目をやり…そして、ある1点に注目した。

そこをクリックし、更に検索すると…。

(待てよ…もし、ここを狙うとしたら、奴らの目的は!…)

ここで、シャイアンは悟った。

ネクライムが次に狙っている物が。

「となると、向こうはガイアメモリーを奪うのが目的だから、メモリー生産量が多い中央ファクトリーを狙うんじゃないの？私は、そう思うけど…」

「…それは違うな。」

「えっ、何で？」

ソフィアの意見に、シャイアンは真つ向から反対の意見を述べる。

「もし仮に別のファクトリーからメモリーを奪取したとしても、それが奴らにとつて役に立つかは、使ってみなければわからない。ならば、どこか別の…そう、研究所の様なところを狙うのが筋でしょう。」

「確かにそうだな。あいつ等なら、襲撃だってやりかねないぜ！」  
「となれば、目的地は…。」

シャイアンがタッチしたのは、ネオ・フウトの南方にある堅牢かつ重厚な、まるで刑務所みたいな場所。

「次に奴らが狙うのはヒジカタ研究所。ここしか考えられません。」  
「確か、ここは…。」

「間違いない、ガイアメモリーを開発している元アルバート・コンツェルンの研究機関だ！まさか、あいつら研究所からガイアメモリーを強奪する気じゃあ…！！！」

「100%ありえますね。…しかも、向こうは破壊不可能かつ使用時即戦力になるメモリーを求めるでしょう。」

「何と言う事だ…！今それに当てはまるのは、あのメモリーぐらいしかないぞ…！！」

「TGメモリー…！！」  
「う、嘘だろ…。あれを使われたら、いくらアーガスの力でもメモリーブレイクは無理だ！」

「だからこそ、です。それを強奪される前に早く手を打ちましょう！」

シャイアンの予測に、クロードはすっかり黙り込んでしまい、リュウ達は愕然としていた。

いつもならブリッ子しながら（死語）おどけるソフィアも、シャイ

アンの予測に言葉を失ってしまった。

権藤の語ったTGメモリーとは、『Wの世界』におけるT2ガイアメモリーと同意の物で、メモリーブレイクしようとしても破壊できない、厄介なメモリーなのである。

しかも今現在それを破壊する方法は皆無に等しく、敵の手に渡れば正に完全無敵の存在にすらなる。

もし、ネクライム・メモリーのベースにそれが使われたら…それは厄介かつ面倒な事になるかも知れない。

そして、少しの間沈黙の世界が訪れる。

しばしの沈黙の後ソフィアは真顔に戻り、リュウに語りかけてきた。

「リュウ、ひよつとしたら神は私達に使いを使わしたのかもしれない。彼の御心に従いましょう。」

「神の使い、か…。ま、間違ってはいないかもな。」

実は、ソフィアはマグナポリスに来る前は教会のシスターをやっていたが、訳あってマグナポリスに入り現在も刑事としてリュウと共に行動している。

ちなみに、彼女もほんのわずかだが予知能力が使える事を付け加えておこう。

「…よし、ならばこちらから手を打とう。我々はこれから研究所へと移動する！ソフィアは研究所に連絡を！」

「わかりました！」

その頃、ルードヴィツヒ達は大型ヘリに数台の球型ロボットを積み

込んでいた。

それに混じって、機材の入ったダンボール箱も2箱分積み込んでいる。

「ウルフ、準備は整ったか？」

「はい、すでに準備は整っています。」

「よし、ではいくぞ！…我らの存亡を賭け、ヒジカタ研究所の強襲作戦を開始する！！」

ルードヴィツヒはウルフ達ステインガー部隊と共にヘリに乗り込み、ヒジカタ研究所を目指して飛び始めた。

TGメモリーを手にするために、ひいては自分達が生き残るために。

ヘリが飛び去った後。

そこに遅れて黒衣の男が銀の壁から現れ、辺りを見渡しニヤリと笑った。

そう、彼らは知らない。

すでに黒衣の男により、彼だけでなくネクライム全員が完全に踊らされている事に。

TOUR 27 - 2に続く

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3420p/>

---

仮面ライダーアナザーディケイド ~ 青い瞳の破壊者 ~

2012年1月4日04時46分発行